
クライズポット -NEPTUNE-

神内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラインズポット - NEPTUNE -

【Nコード】

N1914S

【作者名】

神内

【あらすじ】

中体西用ファンタジー。

「女優志望でありながら傭兵集団に勧誘された天然少女」と「差別民でありながら暗殺業にいそむ少年」の二つの物語。相克して、絡まって、ほぐれて、拡散します。

序

いずこかの海に浮かぶ、まだ名をつけられたことすらないその大陸には、東西南北に四つ大国が散っています。

北は<人造魔境>ガリアラ、南は<完全体制>ロニオヘルト。西は<異教国家>アツバース、そして東は<絶対王制>ローウエン。しかしこれらの国々は、この話では背景に過ぎません。

それらの大国に取り囲まれ常に侵略の影がちらつきつつ、<軍閥>による絶えることない争闘が続く大陸の中央地帯　軍海　。
物語は、秩序も規則も国境すらも存在しない混沌としたこの場所から始まり、この場所で終わります。

ひとりの少女とひとりの少年とひとり道化が主役を張るこの話を、ひとりでも多くの方に楽しんでいただければ、これ以上の喜びはありません。

登場人物・固有名詞紹介（一部挿絵あり）（前書き）

登場人物が多くなってきたため、一部挿絵つきで最低限の登場人物を紹介させていただきます。 は二つ名です。

場合によっては、話が進み次第、随時更新したいと思います。

登場人物・固有名詞紹介（一部挿絵あり）

<地名>

軍海・・・大陸中、四大国に支配されていない中央帯。

黒海原・・・軍海の大部分を占める迷い森

ドビエン又半島・・・軍海中、もともと紛争の過激な場所。雑闘衆の拠点。

ローウエン・・・東の大国。現在はクーデター政権が支配するが、かつては<絶対王政>国。首都はレーンバルグ。

アツバース・・・西の大国。他地域と異なり、ゴルシエ教の信仰が厚い<異教国家>。首都はホラリウス。

ケールマン・・・サリヴァ軍閥の工房都市。七色大会の開催地のひとつ。

バートロア・・・かつてローウエンの支援を受けて半島に建設された国。

<登場人物>

クークス・・・差別民・穢多の少年。エモノは二つの巨剣。サリヴァ軍閥の暗殺者。肉斬連刃。

ミューズ・・・元劇役者の少女。壺使い。四年前以降の記憶をなく

している。

> i 3 1 5 1 5 | 3 9 9 4 <

(絵的に見づらいですが、一応左手の小指は第二関節から上が欠けています。壺の上に添えている感じですよ)

名無し・・・ミューズが森で出会った少年。詳細不明。

> i 3 1 5 1 6 | 3 9 9 4 <

キ・サン・・・傭兵集団「雑闘衆」の頭領。盗人。盗壊士。

ウォルガ・・・雑闘衆の暗殺者。キ・サンの弟。一指系。

サリヴァ・・・東方の大軍閥。

『声』(レイン・ド・ベルジャック)・・・サリヴァ軍閥の宰相。クークスを勧誘した人物。

ヘルガベルト・・・サリヴァ配下の戦士。クークスと共に手紙運びの任を負う。剛岩系。

レーザン・・・暗殺集団「女郎蜘蛛」の創設者。軍海の姫君
軍海の女王

紫皇帝・・・老人。寶葉六十四般を全て会得した賢者。

シャルダン・ファン・・・元雑闘衆のナンバー3。涙石翠鵬。

アリユーナ・ジャルミス1世・・・西の女軍閥。反サリヴァを標榜している。

リエイン・・・西の傭兵集団「馬の牙」の頭領を務める少年。ジャルミスに仕える。

クークスの母・・・クークスの母。極端に目が悪い。

> i 3 1 5 1 7 — 3 9 9 4 <

フェノイア・・・元ローウエン国の王位継承者。ローウエンの首都反乱以来、消息不明。

> i 3 1 5 1 4 — 3 9 9 4 <

カーター・・・ローウエンのクーデターで失脚した国王。故人。

ケーティ・エルメシア・・・クークスと親しくしていた少女。襲撃以来、消息不明。

<その他固有名>

寶業六十四般・・・全ての武芸の基礎・素材となる六十四の手筋。一手で終える技から数手に及ぶものまでである。

内力・・・体内で生成する気により生まれる力。全身をめぐっており、これを用いた気功が内功。

外功・・・体術などを用いた力技。基本的に内功と一緒にあって威力を発揮するといわれる。

点穴・・・内力がめぐる経路に存在する穴。ここを突けば対象を止血させたり、気絶させたりできる。

軍閥・・・軍海を支配する勢力。

穢多・・・工夕。大陸の差別民の呼称。瞳により区別される。

雑闘衆・・・西の傭兵集団。本部は半島の六稜郭処。

ミュージズ(1)(前書き)

ネット小説にしては重い方に分類される小説です。お読みになるときは、少し覚悟をしてください。でも基本的にはエンターテイメント性満載でいききたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

ミュージズ(1)

二つの壺が宙を舞った。観客からおおっ、というどよめきが沸いた。

前につきだした手を続けて横へ。前方へ飛んだ壺は、直後空中で角度を変えてブーメランを思わせる軌跡を描いたかと思うと、直後再び手に収まっていた。ここまで、壺の水は一滴たりともこぼれていない。

息つくひまもなく、そのまま腕を後ろで交差させ、今度は頭上へと壺を放り上げる。ふたたび大きなざわめき。

だが内心でミュージズは舌打ちする。左手から飛ばした壺がやや傾き、いくつか雫が飛散していたのだ。

やばっ！

これはごまかしが利かない。そう判断すると、即座に飛び上がり壺底を一本指で支えるという演技に切り替えつつ、くるくると壺を回しながら体勢を保ったまま着地した。

同時に、先ほどを上回る歓声があふれた。

「見事見事！」

「やるねえ、嬢ちゃん！」

荒い息を整え、観客に向かってぺこりと一礼すると、のろのろと重い足取りで舞台を降り、幕をくぐって裏手へ回り込んだ。

暗幕といっても屋外の舞台なので、日の光によって視界は明瞭だ。劇団の役者の多くが本番を控えてざわめくなか、入ってきたミュージズに目を留めた女優のひとりがふとやってききた。

「あら、雑用ごころうさま」

「どうも、レザロ……さん」

あざけるような物言いに、内心力チンとしつつぞんざいに応じる。「すごいわねエ、あなた。公演前の大道芸って独り舞台じゃない。

団長に感謝しなきゃね」

ムカツ。チヨ一最近入団したくせにもう主役もらったからって調子のるな、でかい声と胸しか取り柄ないじゃないの　とまくしたてたい衝動をこらえながら、いちおうの若輩として礼儀として真顔を保つ。

「別にたいしたことじゃないですよ。ただ筋肉の動きと投げる角度を………」

無駄だと思いつつも、ひとしきり壺操演舞の詳細を語り、

「………ですからレザロさんも、練習すれば簡単にできますよ」

「ふーん」

興味なさげにつぶやいた後、赤毛の女優は虚空を見つめていた焦点を、またこちらに戻した。

「でもサ、壺投げもいいケド、そんなこと女優が身に付けても仕方ないしねエ。まアあなたみたいな芸人はいいんだろうけど」

ムカムカツ。わたしが女優になること目指して劇団に入ったこと知ってるくせに、しゃあしゃあと言ってくる。がんばれわたし、

ここで壺で殴るなんてことしたらまた先週の騒動の二の舞よ。

「それにしても楽ねえ、あなたは。ほら役者つて声と演技のふたつの技量が必要じゃない。その点あなたは演技だけ　それも演技なんて言えないくらいおおざっぱなものだし、いいわア、うらやましい」

ぼん、と払いのけたくなるような仕草で、肩に手が置かれる。

「ま、これからもがんばって前座をもりあげてちょうだい、ミューズちゃん。それじゃ、アタシそろそろスタンバイだから」

なにか言い返す前に、レザロはすたと幕の外へ出てしまった。先ほどまでいたはずの他の役者や小道具係は、準備のため幕の内側から消えていた。

「………ああ、むかつく！」

姿が見えなくなるや、口から叫びがほとばしった。壺を下にたた

きつけ、天幕を支える支柱をスポーンと蹴飛ばす。壺から盛大に飛び散った水が飛び散って、足下を濡らした。

……もう慣れているとはいえ、こんな小さな劇団ですら役者として舞台上がれない現実を突きつけられると、無性に鼓動が激しくなるのが分かった。

田舎の田舎からできてきて女優を目指し、ことごとく大手の歌劇団の採用試験に落ちたあげく、やっとのことで‘軍海’の一地方の小劇団 天幕星座 に入団したのが四年前。その間、彼女を見る周囲の目はまるで変わることがなかった。

それは「どうしておまえ歌劇役者を目指しているんだ？」と問いかける眼差し。それもそのはず、彼女は天性の音痴だったのだ。

その調子つ外れたるや相当なものらしく、自分が端役としてちよろつと歌った舞台において、その収益は九割も落ち込んだとかいなとか そんな噂が団員内でまことしやかに囁かれるほどに、とてつもない歌唱力をもっているらしかった もつとも、これはあとからレザロに嫌みしたらしく聞かされた悪口のひとつなのだが。

当然ながら歌劇役者としては働けず、加えて後先を考えなさすぎる性格もわざわざいしてからかってくる団員とも悶着を起こし、結果として二年前に指名された役回りが、前座請負い。

当初の目標とのあまりといえはあまりの落差に、自己嫌悪するしかなかった。

力ないため息がこぼれた。地面の壺を回収すると、しばらく手になじんだその物体をじつと見つめていた。つるつるとした表面をなでているうちに、興奮していた心臓はゆっくりと落ち着くようだった。

「よっし！ まった明日からがんばるわよー！」

パンパンと両頬をたく乾いた音を、役者登場を迎える大きな拍手が重なるようにして打ち消した。

とにもかくにも、これが現時点における役者見習いミュージズの立

ち位置と言えた。

クークス(1)

むわりとした熱気が額を覆った。

クークスは左手で汗をぬぐうと、べっとりとした血に濡れた右掌をザブンと小川へ突っ込んだ。鮮血がすぐに清流に溶けてゆく。朝からずっと作業をしていたので、火照った体に冷え冷えとしたせせらぎがなんとも言えず心地よい。

「あー、クー君またため息ー。五回目ー」

隣で様子をつかがっていたケーティが、知らぬうちにこぼしていたらしい吐息を見てけらけらと笑った。

「ダメだよ、手ちゃんとあらわないとー」

「わかってる」

ぼそりと言い、手首を掴んでくる少女の指を払いのける。慎重に、赤色が完全に消えるまで両手をこすり合わせていると、

「クー君ガンコー」

その姿を見て、また無邪気な笑みが少女の顔に広がる。相変わらずなにも考えてない風の少女。もつとも、八歳の少女にそれを期待するのは酷というものかもしれない。には取り合わうことなく、すべての血糊をすべて流し終わるとクークスは腰を浮かせた。

「どこ行くの？」

「お前と違って、俺にはやることがあるんだ」

「またバラバラ？」

バラバラ、とは牛馬解体作業を指すだろう。適当にうなずくと、今度はばらばら、ばらばらと叫びながらはしゃぎ始める。それを完全に黙殺し、クークスは木に立てかけていた洗い済みの肉切り包丁二本を取った。握りしめるとずっしりとした重量感が腕に伝わる。刃は木々の梢の間を抜けてくる陽光を浴びて、恐ろしいほどまでにきらめいていた。だがやや刃こぼれがうかがえる。研いでおいたほ

うがよいだろう　　少し前から小川に浸しておいた砥石を引き上げる。

「わあ、みどりいろー！　きれいー」

「危ないぞ」

ぶつきらぼうに告げ、地面に置いた。親指を柄に近い部分に添え、刃を自分の方へと向ける。小指を除く三本を研ぐ箇所当てて、石に刃を触れさせる。前後に動かすこと数度、研ぎ具合は満足行くものだった。

「ね、ね、わたしにもやらせてー」

小指の欠けた左手をぶんぶんと振る少女に一瞥することもなく、包丁と石をずた袋に落とし込み、無言で腰を上げた。

「おうちに帰るの？」

「帰る」

ケーティもまた、ぴよんと立ち上がった。

賤民である彼が従事する皮なめしや屠殺業はひどい悪臭を放つため、家は村の外れ、森のすぐ近くにある。二人が今いる小川からそう離れたところではない。一昨日降った雨でややぬかるんだ大地を踏みながら、あぜ道を進んだ。時々シアのどがった葉が頬をかすめる。

少女がついてくことに顔をしかめつつも、手近な木になっている木の实などをもぎ取りつつ家路を急いだ。

森から抜け出たところにある、わら葺き屋根を備えた住居。

数百年前の遺物と言われても信じてしまいそうなほどそれが、自分と母の暮らす家であった。

森から伸びた細い道はやがて我が家を通り過ぎて、村落の中心部へと続いていく。そちらを見やると、区切られた耕作地と鋤を用担ぐ農奴の姿が目に入る。道沿いにはがっしりとした石造の家屋。はるか丘の上に立つ領主の家など、比べるのも馬鹿らしいほどの格別

の威容を誇るほどの建築物である。

内心にわきたった苛立ちを無表情で糊塗し、クークスは家へ入った。

「おかえり」

自分が丸太から作った椅子に腰かける母は、初老の風貌をこちらに向けた。内装は実に簡素なものだ。中央の暖を取るための炉といくつかの手作り感ある卓や椅子を除けば、あとはなにもない。

「変なやつは来なかつたか？」

一度、穢多であるという理由から村の過激な若者による襲撃を受けて以来、その手の嫌がらせに過敏になっている。母は大丈夫だよ、と言って扉の方へ顔を向けた。昔かかった病のせいとかでほとんど目が見えないため、立て付けの悪い扉と格闘する音に反応したのだろう。

「あら、ケーティちゃん」

「はい！ おばさん、お久しぶりです！」

「久しぶりねえ。クーも寂しがってましたよ」

思わずしかめ面をするクークスの顔を、あどけない瞳がじつとぞき込んでくる。

「ほんとう？」

「そんなわけないだろ」

ぶつきらぼうに感じる顔には、抑えようもない嫌悪がにじみ出ていた。昔は自分たちのような差別民と交流を持つこの少女を案じたこともあったが、今ではどうでもよくなっている。『知ったことか』という気持ちだ。

母とケーティの会話が弾んでいるのをよそに、クークスは二人の脇を抜けて奥の壁に牛刀をかけた。

そのとき、乱暴に扉がたたかれた。

しばしためらった末、そちらへと向かう。この家を訪問する村人は、ケーティを除きまじない。あるとすれば、それは間違いなくろくでもない用事を伴う。かと言って居留守を使えばさらにひどい

ことになるのも目に見えているため、仕方なくクークスは木製の錠を外して扉を半分だけ開いた。

立っていたのは、頭に巻いた紫の頭巾を風にはためかせながら目を見開く、商人風の若い男だった。

「……………なにか？」

「へえ、クークスさんですか！ あっしウォルガといって、旅商人やってるものなんですがね」

旅商人？

クークスは思わず眉をつりあげた。だがそれに気づいた様子もなく、ウォルガは切迫したようすでまくしたてる。

「なんですか、あっしはさっきこちらから出ようとしたんですがね。森を抜けようとしたら真つ赤な雄牛が暴れているんですがね、そいつを殺してもらえませんか。なんせひでえ暴れ牛で、村の人がみいーんな手が出せねえみたいで。あっしがたまたま通りかかったとき、村の隅っこいるクークスという腕の立つ捌き屋を呼んで来い、とまあ、言うなればお使いを命じられて」

思わず渋い顔にならざるえなかった。この手の‘人助け’の依頼を受けたのは初めてではない。たいていは感謝もされず、むしろ早く引つ込めという視線を浴びせられるだけなので、断りたいところだが、やはり、それもできまい。それに赤い牛というのは、よく森の奥で見かけるインフェルノ種の野牛と思われるので、牛馬を相手にしなければいけない並の人間では追いついて回されるだけだ。

「場所はどこです」

「あつちのほうです。分厚くて、ダイヤ形のめずらしい葉っぱをつけた樹木がある、ひらけた場所です……」

それだけ聞けばだいたいの位置はわかる。一度家へ引つ込み、最低限の武器をつかみ取ると、

「二人とも、家にいてくれ」

短く言い残し、軽功を用いてウォルガを置き去りにして走り去った。

ミュージズ(2)

今日も今日で、前座請け負い。壺を回し、投げ、再び手中へと戻す。

傍から見れば淡々とこなしているようでも、実際はかなり気を遣う動作の連続である。少しでも手元が狂えば体勢が崩れる、つまつた水がこぼれる、壺が落ちる。奥歯を噛みしめ、汗を盛大に流しながらどうにか一幕分の長丁場を終えると、あとはもうぐったりとした気分して、なにも考えられないほどに頭が沸き立つのが分かるほど、それは過酷な演舞だった。

最後の一投から着地を終え、ぺこりと頭を下げたときには、呼吸も乱れきっていた。拍手を浴びながら、げっそりとした顔つきで舞台を下りた。

昨日のように嫌みを言われるのは癪だったから、壺の水を地面にこぼすと、裏の天幕をくぐらずに舞台から離れることにした。

今回舞台が置かれているのは、巡業した街の中心からやや外れたところにある広場だ。

現在、大陸には東西南北に四つの大国が存在し、その他の主な中央地域では軍閥の抗争が続いているのだが、この都市はそうした場所に位置するうちのひとつだ。事前に知らされていた話によると、美しい湖面が存在するらしく、密かに命じられた雑用を終えたミュージズはよく見学に訪れていた。

どうせ雑用も任されていないし、また湖でも行こう。そう決めると、壺を持ったまま、人がひしめく通りへと飛び出した。

舞台が置かれているやや小高い場所から下りると、すぐに通りを行く人の活気が聴覚を揺さぶってくる。果物がいっぱいあった力ゴを片手に商人が路を進み、子どもがイヌと戯れるようにして走りすぎていく。

「おっ？」

道沿いにならぶ屋台からただよう香りが、鼻をくすぐった。見ると魚を丸焼きにして口から串を刺した物体が、並べて売られていた。今も屋台のオヤジが、大ぶりの魚にさつと塩を振りかけて、火にあぶっている。

たちまち食欲が強く刺激され、迷わず右折。

「ひとつくださいっ」

少ない給金をはたいて買ったそれを片手に、行儀悪く道中を歩く。まあ、こんなの女優がすることじゃないけど……でもおいしそうだし、いいわよね、と考えつつ湯気の立つ白身にかぶりつく。

うん、おいしい。

続いて二口目をかぶりつくうとした、次の瞬間。不意に風が吹いたかと思うと、

手から魚が消えていた。

「ええっ!?!」

啞然とするしかない。落としたわけではない。しっかりと握っていた。

盗まれた? いやいや、食いかけのものを盗むなどありえるだろうか。だがそんな困惑より強く、彼女は食べ物が『消失した』という、とにかく明確な事実に憤った。

注意深く左見右見しながら、前傾姿勢で歩いていると、

「あっ」

拍子抜けするほどあっさり、怪しい人物が見つかった。

やや離れたところに、背の高い男がひよこひよここと肩を揺らしながら歩いていた。バンダナを巻いた頭が左右に揺れ、口元から魚を貫いていた棒が見え隠れしている。

それだけでは判断ができるわけではないが、男に目を留めたのは、そのバンダナに刻まれた文字のせいだった。

なんせ『盗っ人』という文字が、これでもかとかばかりに布地に刺繍されていたのだ。

「ちょっと、待ちなさいよおおおおおおお！」

確たる証拠もないまま、迷わず走り出す。周りの人間がぎよつとした顔になったが、それ以上に男は彼女のほうを振り返るとたまげたように目を白黒させた。

拍子に、口からぼろりと魚が落ちる。

「あつ

！」

男の叫び声に、ミューズの絶叫が重なった。

とつさに腕を動かし、地面すれすれに壺を滑らせた。群衆の足の合間をぬって投げられた壺の口は、絶妙なタイミングで落下する魚を飲み込んで停止した。男の背の高さが幸いして、落下まで時間があつたからこそできた芸当だった。

「……あつ、やつぱりあんたね！」

魚の無事を確認すべく壺をのぞきこみ、歯形のついた魚を見つけ、噛みつかんばかりの勢いでくつてかかる。バンダナの男は額の部分にもでかかと、「盗っ人」とあるまるで悪びれた様子もなく、立ち尽くしてなにか考えるようなそぶりを見せていたが、突如ぐいつと腕を掴んできた。

とつさのことで混乱し、なにか言うひますら与えられなかった。

男は地面の壺を左手に、ミューズの体を右手に抱えると、信じられないほどの速度で人の流れを横切り、しばらく走った末に都市の端まで至ると、昼間でもなお闇にくるまれる森へと飛びこんだ。

何度も悲鳴をあげかけたが、あまりの恐怖と困惑に喉がつぶれたように働かなかった。

森に入り、速度を落としてさらに進む。人の声が経たれた頃合いになって、ようやく男は立ち止まり、くるりとこちらへ首を回した。あたかも最高級の食材と出会った料理人のように、爛々とその両目は輝いていた。

「魚、悪かつたな娘御！」

なかなか若い態をしているにもかかわらず、時代がかったしゃべり方だった。がははは、と頭を掻き、

「うむ、ちょっと気まぐれでな、盗つ人魂が刺激されたのだ！　が
はは、謝る！　悪かった！　我が輩はキ・サンという！　雑闘衆の
頭領なんかをやっている！　娘御、名は！？」

しかもひどい大声だ。こんな真ん前なのにここまでうるさくしな
くてもいいだろうに。まさかこれだけの大声だから、話を聞かれな
いようにこんなところまでやってきたのだろうか。盗つたことを責
めたり、どうやって盗んだかを尋ねる思いなど一発で吹き飛んでし
まっていた。

「みゆ、ミューズよ。あのね、それはそうとさつき……」
「ぬ！　よく見るとぬし、あの劇の舞台役者か！　なるほどこれは
いい骨格だ！」

骨の造りをほめられても。しかしキ・サンにとってはよほど重要
なことなのか、しげしげと這うように視線が向けられる。

「ふむ、腕の筋肉もある（女優らしくない、と最近気にしているこ
とだ）、だからさきほどのような超技が可能だったのか！　否、そ
れだけではない、投擲の速度、角度、威力、すべて瞬時に判断して
のことか！　素晴らしいではないか！　もったいない、実にもった
いない！　相当な腕前だ！　おぬし、エモノはやはりその壺か！」
突然切り出されてつい頷いてしまうと、キ・サンはぶっと大きく
吹き出した。

「いいぞつ、いかにも雑闘衆にふさわしい！　ちなみに我が輩は盗
つ人だから特定の獲物はないがな！　盗賊じゃないぞ！　盗つ人！
間違えるなよ！」

頭を傾げた。なんだか大変おかしな方向に話が進んでいるような
気がする。だが高速で放たれる男の言葉に、一言差し挟むことすら
かなわない。

キ・サンの輝く目が、ミューズの両眼を正面から捉えた。
その薄い唇が、音を発した。

「ぬし、もしも暇なら　雑闘衆に入団しないか！？」

暇じゃないっつーの。

クークス(2)

叫び声と雄牛の咆哮だけをたよりに足を進める。はっきりした確信はない。だが祈るような気持ちで走っていたクークスの目に、赤き暴牛インフェルノと、逃げ惑う数人の姿が目に入った。

考えるひまはない。左手に牛刀、右手に先切り金槌を握りしめ、冷や汗とともにわき上がる恐怖を振り払うかのように、クークスは大声を上げて突進した。

「うらあああああああああああああ！」

雄牛は反応したかと思うと次の瞬間には方向を変えて、巨体を震わせながらこちらへ向かってきた。

一般的な屠殺では、頸動脈を切るというのが普通だ。これだと素早く殺すことは可能だが、突進する暴れ牛相手にそれは難しい。牛の強襲を身をひねってかわすと、同時に右手を振り上げ、鋭利な槌の先端を脳天に振り下ろした。

鮮血といっしょにほとばしる鳴き声。かまわず速攻で左手を繰り出すと、渾身の力で首筋に牛刀を突き立てた。

「ばっふ、ふ、ふふふ、ふふふふふふもっ、ばふあああああああああああ！」

さらなる咆哮。さきほどと比べものにならないほどに大量の血が噴き出し、牛とクークス両方の全身がしとどに濡れる。だがまだ牛の動きは止まっていない。半切れになったままで、なおも首を激しく振り蹄を持ち上げようとするとその姿は、赤き暴牛の名にふさわしい光景だった。

前蹴りをかまし軽功を用いて牛の背中に飛び乗ると、あとは独壇場だ。角に注意しつつ、抜き取った金槌をもう一度頭蓋に突き刺すと、一瞬動きを停止させ、直後に牛はガクンと足が折れたかのようにその場に倒れ込んだ。

「ふ　　う」

背から下り、額の汗をぬぐう。生の牛との戦闘というのも、本当に久しぶりだった。牛刀と金槌を回収しながら、痛いほど周りの人間から視線が注がれているのに気づく。どうせねぎらいの言葉もあるわけないし、とさっさと退散しようとした、そのとき。

「な、なんで……」

突如、ひとりの中年の男が、唇をわななかせて詰め寄った。

「なんでうちの牛殺した、この穢多公がア　！」

男の顔にはまぎれもなく怒りの色が浮かんでいる。意味をつかめず、ようやく一言。

「だ、だって」

弱々しく反論しようとしたとき、思い切り頬を叩かれた。

「よくも、よくも、このガキ、うちの飼牛殺してくれたな！　誰がテメエみてえな下種に出しゃばれ言うたか！」

頬の熱が消えないうちに今度は、右から腹部への衝撃が襲う。蹴られた、とわかったときには、別の声が飛んでいた。

「とんでもねえガキだ！　とことん性根が腐ってやがる！」

「他人の牛殺すなんざ人間じゃねえよ！　なんだあの残酷な殺し方　！」

「ふざけんな！　テメエの首切つてやるうかあ穢多ア！」

逃げ惑っていた人間が、一転して自分を囲んでいる。その事実を認識しても、飛び交う暴力のなかではなにもできず、ただ乱暴に足蹴にされるしかなかった。

いつしか武器が手からこぼれ落ちていたのにも、クークスは気づかなかった。

そのまま十分近くは殴られ続けたか。意識は、そこで途切れていた。

激しい腹部の痛みを覚えて目が覚めたときには、周囲に血の生臭さだけが漂い、人の気配はなくなっていた。どうやら首は切られていないらしい　そんなことを考えながら朦朧とした意識の中で身

を起こすと、牛の死体もなくなっていた。血の海の真ん中に彼は座っていた。

数瞬、ぼんやりとしていた彼だったが、やがて牛を殺した凶器一本も消えていることに気付いた。

「あつ……」

慌ててあたりを探したが、どこにもない。念を入れて離れた場所まで探しても、影も形もなかった。村人たちが持って行ってしまったらしい。

脱力して、クークスはその場に座り込んだ。

「くそっ」

俺はあの旅商人に頼まれたただけだ。それがどうしてここまで
の扱いを受ける必要があるんだ！

節々の痛みはまだ強く残っており、歩行すらもうずきを覚えた。

左足を引きずる格好でなんとか家の方向へと足を踏み出す。血で濡れた目をこすり、木を支えに歩くこと数分。

家がようやく見えてきた。

が、クークスの視線はその前に立つ少女のほうへと注がれた。少女は落ち着きなさげに手をばたつかせ、必死になにかを探すようにきよるきよると首を動かしている。

こちら姿を見て取ると、ケーティははっとしたように大声を上げた。

「クー君！ 大変なの、おばさんが！」

その言葉に、全身をうごめく痛みが消えた。我も忘れて扉の前に駆けつけると、ケーティが泣きべそをかいたのまま、扉を何度も叩いた。

「クー君が出て行ったあと、変なひとがいっぱい入ってきて！ わたし外に出されて！ それで扉もふさがれて！」

要領を得ないながら言わんとすることを理解し、全身がたちまち総毛立った。扉を何度も蹴りつけるが、びくともしない。牛刀一本あればたたき壊せるだろうが、今はない。

「どつしよつ、おばさんが中で……」

耳を当てると内からかすかに物音がするが、なにが起きているのかまではうかがい知れない。

焦る気持ちにせかさねながら、クークスは強く歯軋りした。

間違いない。ハメられたのだ。あのウォルガと名乗った商人によつて。

村のなかには、自分たちのような差別民へ強い反発を持つ者も多い。そうした輩の襲撃を受けたことは幾度となくあったが、ここまですごい悪質なものは初めてだった。凶器の扱いに慣れた自分を襲えば反撃を受けかねないので、飼い牛を殺させて大義名分をつくり集団暴行、その隙に母が残った家を襲う。

今となつては、あの牛の飼い主が騙そうとした一味なのかは判別できないが、ともかく現在は扉を破ることだ。うちからかぬき錠をかけているだけだろうが、襲撃に備え頑丈にしておいたことが裏目に出ている。

逡巡の末、ふとクークスは家の脇に半ば放置してある道具類を思い出した。あの中になにか、使えるものは……。

斧！

思い当たるや、急いでその場へ向かい、目的の凶太い斧を一本ひき抜く。以前牛馬解体に用いようとして、刃こぼれのひどさとあまりの重量のため放棄したものだつた。

扉の前へ戻ると、ケーティが呆然とするまえで、ためらいなく斧を振り下ろした。

ミューズ(3)

ザットウシユーという一切聞き覚えのない単語を理解する前に、現状の把握が先決だった。

どうしてこうなったんだろう。

分からない。分からないなりに考えてみるが、やはり思考は空転するばかりだ。

うんうん唸っていると、キ・サンはまた大笑した。

「まあしばし考える猶予は与えよう！ 我が輩はあと数日ほどこの付近に滞在しているから、入団の意志があるならば適当に捜してくれ！」

「はあ」

他に答えようがない。

「では、さらば！」

瞬間、風さえ立つことなくキ・サンは消失した。

「雑闘衆………」

しばらくその単語を頭のなかで転がしていたミューズは、キ・サンの顔がふたたび目の前に現れたことに、即座に気付かなかった。

「ん……ぎよええっ！」

乙女にあるまじき大声を発したのも、無理はない。なんせ彼の顔は逆さまだったのだ。上を見やると、足先だけで枝にしがみついてぶらさがっている。

「うむ娘御、いい悲鳴だ！ ではなくて！ ひとつ言い忘れていた、もし入団の意志があるならば、でよい！ ローウェン国の元王位継承者を捜してくれないか!?」

……は？

「その王位継承者の名前はフェノイアという！ 十五年前、部下のクーデターで失脚した第十八代ローウェン国王カーターの息子だ！ 当時一歳のまま行方知れずだから、似顔絵その他はない！ では

再びさらば！」

「あ、ちよつと！」

負けじと大声を出すと、

「なんだ！」

腹筋の要領で身を起こそうとしていたキ・サンは、やはり明朗に叫んだ。

いろいろと言うべきことが頭のなかで錯綜した結果、ようやく発言の機会が得られた彼女が放った言葉は、致命的なものだった。

「待つてよ！ そ、それだけじゃ分からないじゃない！」

つて、バカバカわたし！ なんて引き受ける前提で話しちゃつてるのよ！

だがもう取り返せない。あとは暴力的なほど勢いのあるキ・サンの舌鋒によって、会話の流れは一気に固定された。

「なにがだ！？ なにが分からないのだ！」

「さ、捜す理由とか、見つけ方とか、見つけたあとどうするか、とか」

「理由がなければ捜せないのか!？」

「そうじゃあないけど……えつとつ、つまりね！ わたしが言いたいのは、つまり」

なんでこんな展開になつてることよ、と言いかけて機先を制された。

「見つけ方なんて知らんぞ！ そんなものがわかつたらとっくに見つかつている！ 外見的な特徴も、おおまかな所在地すらわかつていないのだ！ ‘軍海’ のどこかにいる、とずっと言われているのがな！」

‘軍海’ とは、大陸のうち軍閥抗争が行われている地帯の総称のことだ。なるほど、確かに王国から逃げ出した人間の居場所としては、関所による出入国の審査がある四大国より、無秩序な小国郡のほうにいる可能性は高いだろう。

いや、だあかあらあそうじゃなくて！

「万が一見つけても殺すなよ！ 五体満足だ！ 即、手紙などで我が輩に報告すること！ その後の処理はまだ未定だがおそらくローウエン国に引き渡すことになるな！」

「え？」

瞬時に頭が冷静になった。ただし間違った会話の流れのなかで。

「引き渡すつて、それじゃ殺されるんじゃない……」

「そりゃあ賞金首だからな！ だからこそ捜し出すんだらう！ 見つけたものには四千万メルクマルということだからな！」

「……………」

東の大国ローウエンでかつてクーデターがあり、その首謀者がカーター王を殺害し即位したことは、ずっと軍海で生まれ育ったミューズもおぼろげながら知っている。そしてカーターの子息が今も逃亡し続けていることも、聞き及んでいる。

いや、聞き及んではいるし知ってはいるのだが。

「ちなみに他の団員のうち、六割はそちらの捜索に充てている！ 最近なにかと、この付近での王子存在の噂が立っていてな！ ま、噂にすぎぬがな！ むしもその一員として働いてもらおう！ 期待しているぞ壺娘！」

言葉が終わると、既にキ・サンの姿は消えていた。あたりを見回しても影も形も見えない。素早いという次元を通り越して、これでは瞬間移動だ。なあるほど、あれだけ速く移動できれば、魚を盗むなどわけない。

じゃなくてええええええええええ！ もう何度目かの後悔をして、あまりの自己嫌悪にその場へうづくまった。

落ち着け。冷静になるのよ。わたしはただちよっと先のことを考えないことが多いだけで、決してバカなんかじゃないんだからまだ間に合うわ。

「えーと」

よし、今日のことは忘れよう。ぶつぶつとにかく自らに言い聞かせる。

「そうよそもそもわたしは今こんな風だけど将来は絶対女優になつて舞台に上つて歌つて踊つてやるんだから、ワケ分らないそんな集団に入るわけないじゃない。さて、明日の前座の準備！」

とりわけ大きな声を出してキ・サンが置き去りにしていった壺を拾い上げると、ミュージズは慌てて劇団の舞台がある広場のほうへと戻った。

息を弾ませて到着した頃には、日はどっぴりと暮れて空の端に茜色が残るのみだった。

「遅くなりましたあ！」

広場に飛び込んだところで、異変に気付いた。

人がまばら。それはいい。この時間帯だ。とくになにがあるわけでもない空間に、人間はいないのは当然だ。

しかし人間だけでなく舞台のセットすらも消えていた。

「……え？」

背中にうすら寒い予感を覚えながらかかとでターンし、劇団員が宿泊していた宿屋へ。

宿屋に飛びこみ一階の受付で居眠りしていたおかみさんを横目に見つつ、二階へのびる階段を駆け上がったところで、ミュージズは絶句した。廊下にあふれていた、小道具やその他のものが、すべて完膚無きまでに破壊されていたのだ。

そして部屋の扉の前に、いくつか赤黒い斑点。

「どついつこと……」

一番手前、団長夫婦が寝泊まりしていた扉を押した瞬間、猛烈な悪臭が鼻を刺した。同時に、眼前に横たわる光景にミュージズは我知らず、ひっと喉から絞り出すような声を上げていた。

扉を開けたその先 部屋いっぱい飛び散る血痕と、団長夫婦を含めた劇団員たちが全身を鮮血で染めたままバラバラに。

「あ、あああああああああああああああああああああああ
！」

ほとばしる叫び声に、階下が騒がしくなる。しかし周りを見る余裕などあるはずがなかった。ミューズは下から駆け上がってくるおかみさんらの制止を振り切って、一階まで駆け下りると、全力で宿屋から飛び出した。

死んでいた。みんなみんな。嫌みったらしかったレザロは頭を血でびしょ濡れにし、団長は首をもがれ、彼の妻は上半身と下半身が分離していた。

「うぐつ、あ、はあ、はあ……」

息も絶え絶えに近くの茂みをかき分け森に入ったとき、直後ミューズの意識は深淵へと引きずり込まれるように薄れていった。

クークス(3)

目の前の光景に、寸暇言葉を失った。

床に倒れる母、足が折れひっくり返った卓、木片と化した寝台。

そして中央には、数人の男たちが、火の灯された松明とともに立っていた。いずれも覆面をかぶっているが、そのうちのひとりの見覚えある髪型に、我も忘れて体が飛び出していた。

「てめえ！」

紛れもなくウォルガと思われた男は、斧を易々とかわす。直後、足が払われたかと思うと、体勢が崩れる。

と、腹部に衝撃を見舞われた身体は、直後吹き飛ばされていた。

背中をしたたかに打ち付けた痛みで、骨がきしむ。即座に立ち上がろうと腕についても、力がまるで入らない。

「所詮、ガキ」

さきとは打って変わって冷気を帯びた声音が響く。深淵へと再び引きずり込まれかけた意識を、全身の内力を巡らせて呼び覚ます。

クークスが喝を入れて身体を起こすのと一味が松明を放り投げたのは、ほぼ同時だった。

壁や壊れた寝台、床が真緋に染まり出す。

「いやあ！ クー君、クー君！」

目の前に、一瞬だけケーティの銀髪がきらめいた。と、同時に首筋に再び痛みが走る。おそらく脇を通り抜ける際に、首刀をたたき込まれたのだ。耐えきれず、体が前のめりに倒れる。

ケーティの声が遠のいていく。それにつられるかのように爆ぜる炎の音も、一味の足音も、扉が閉じられる音も、ゆっくりと聴覚からそぎ落とされていく。視覚だけは妙に鮮明だ。ちろちろと揺れ動く火焰、それに飲まれていく卓、視界の隅で微動だにもしない母の姿。

母さん！

気力が残っているとは思えなかった。だが足に力をこめて立ち上がり、燃えさかる緋色のうずのなか、横たわる母のもとへと駆け寄った。

「母さん！ おい母さん！」

ゆすると、乾いた唇から小さく吐息が漏れた。安心する間もなくその細身を抱きかかえると、恐怖に引き絞られる肝を奮い立たせ、わき上がる紅蓮と向き合った。

死ぬかもしれない、という思いが頭をよぎり、瞬時に消えた。

気付けばまた生ぬるい外気にさらされていた。

無我夢中で走り回ったあげく行き着いた場所が、牛を殺したあの開けた空間だったのは、皮肉としか思えなかった。

「っ、はっ、はあ」

息を切らしながら、なんとか氣息を落ち着ける。腕の重みを今さらながら感じると、クークスは母の矮小な肢体をそつと地面に横たえた。ひどいやつれ具合ながら、幾度か母は咳き込んで大きく呼吸を再開した。だが瞳はまだ閉じられている。

遠目に、燃えさかる我が家がかすかに見えた。天をつかんとするかのよう立ち上る火焰の一端が、木の上方でちろちろと揺れていた。

生きている。そのことを喜ぶことも、当然できなかった。

「くそ」

再び飛び出す、短い罵倒。そこにはだが、ありつただけの呪詛がこめられていた。

「くそ、くそ、くそ、くそっ！」

草をむしり立ち上がって地団駄を踏み、破れた皮膚から流れる血にも構わず樹皮を殴り続ける。

殺してやりたい。今すぐにも自分たちを八メた一味を、牛刀の餌食としてやりたい。しかし愛用の武器は、現在村人たちの手にしかない。

村人。

「そうだ、ケーティ……！」

慌てて首を振って捜すが、目に映るのはそろそろ夕闇が垂れ込もうかという森の光景。聞こえてくる音は、野鳥の鳴き声と母の呼吸だけ。

おそらく彼女は穢多ではないから、襲撃の危害に遭わないよう男たちによって「保護」されたのだろう。襲撃者たちが村人なら、彼女も村にいる可能性が高いが。

今、村になんて行けない。

クークスは木を背中にして横になる母を眺めた。

悔しさや憤怒以上に、胸に募ったのは無力感だった。

十歳とは言っても、自分は周りの子どもとは違う。差別されながらもそれに耐えるだけの精神力があり、穢多としての職分である牛馬解体を全うするだけの力もある。家族を、唯一の身よりを支えているのは自分だ。そうした誇りは今、完全に地に落ちていた。まるで無力だった。その結果が、遙か木の連なりの向こうで燃え続ける家であり、こうして煤に汚れたまま横たわる母だった。

「くそっ」

瞳に怒りを滲ませながら、呪詛を漏らす。

復讐。

その二文字が、頭に明滅したとき。

『ほう。復讐を望むか、若人よ』

突如脳天を貫くかのように、その声は響いた。警戒心がたちまち身を起こし、噛みつかんばかりに叫ぶ。

「誰だ！」

『静かにしろ。この声はお前にしか聞こえぬが、わめけば母が起きよう。我はお前と話がしたい。それだけだ』

怪しげな声のする方向をさぐるも、判然としない。それは空から、

あるいは左右から、あるいは地の底から響いてくるかのごとき、低く暗い声音だった。かろうじて分かるのは、発声者は男だということ。

「話、だと？」

警戒感を滲ませつつ問い返すクークスに、男の答えが響いた。

『そう、さしあたってはお前とその母を襲撃した一味についての話をな』

ミュージズ(4)

胃がよじれるような感覚とともに、痛みが起こった。

思わず顔をしかめるより早く、ぐう　とお腹がなった。

「・・・・・・・・おなかへつたあ」

失神から覚めてから森をさまよい出し、二日は経っただろうか。どうにも時間感覚が不明瞭だ。

森は舞台があつた村の隣に広がっていたものでかなり小さいと踏んでの突入だったが、歩けど歩けど鬱蒼とした樹木の連なりが途切れる気配はなかつた。

両手に壺を持ち(もはや習慣だ)、よたよた歩き続けた。だが寒期に入りかけ枯れ木が増え始めるこの時期、自然の果実などあまり望めるべくもなかつた。いくつか毒々しい色の果実があつたが、見なかつたことにする。さすがに自ら毒にあたるつもりもない。

「うあああ、なによこの森い、食べ物も・・・・・・・・ないじゃない・・・・・・・・ねむ・・・・・・・・」

足だけを前へ前へと進ませているが、空腹からと疲労からくる眠気は追い払いきれない。

目をこすりつつ、顔をあげると、もう何度目かのガサガサツという茂みが揺れる音が。

思わず身を竦ませる。夜に入ったあたりなので、がんばって目を凝らしてみると、だが、顔を出したのは、もうこれまで何度か見てきた小さな蛇だった。ほつとため息をつきつつ近づき首根っこをつかみ取り、にゆるんにゆるんと頭を持ち上げてくるそれを左の壺へ放り込む。中の光景は見たくないため、最高速で蓋を閉じ直す。

茂みの向こうからオオカミとイヌの中間のような獣が出てきたときには、さすがに考える間もなく逃走したのだが、よくよく考えればあれを頑張つて倒しておけば、肉として食べたかもしれない。そう考えると、今さらながら後悔がつのつてくる。

「ああっ、もう！　なんだってわたしは軽率……でもあれ、倒せたのかなあ」

垂れる舌と口蓋からのぞく牙を思い返し、体が震える。

「うう、こうなったら護身術くらい身に付けておけばよかった……。蛇、食べちゃおうかなあ、でもさすがに不味いわねえ……」

ぶつぶつ独りごちつつ、歩みを再開。どうしよ、どうしよ、とちらちら左手に視線を落としていると、余計唾液があふれてきて、いかんいかん、と目を閉じる。

瞬間、床に転がる死体のからっぽな眼球がこちらをじっと見つめてくる光景が、脳裏をよぎった。

歯をきつく噛みしめ、頭を大きく振った。もう一刹那もアレを思い返したくはなかった。すぐに思考を転換。

「牛でも死んでないかなあ……」
うつろな頭で無茶なうわごとをぶつぶつとこぼしていると、いきなり足の力が抜けた。

倒れる、と思ったときには、乾いた下草が目の前にあった。

軽い音と共に、四肢が地面についたかと思うと、力がみるみる抜けていく。だが壺だけは、まるでくっついたかのように指先から離れることはなかった。

「あら……まさか、これはホントに、やばい……」
「？」

さすがに空腹と疲労が限界まで達していたのだろう。だがあたりを眼球だけで探っても、食べられそうなものはひとつとしてない。試しに雑草をはむっ、とくわえてみると土までまきこんでしまった。

「うへっ、ぺっぺっ」

ああ、お肉！　食べたい！　この場に牛か豚でもいれば、いやこの際人肉でもなんでもいいから食べさせて~~~~~！

空腹による上の空と相まって無茶が最高潮にまで達したとき。
すっ、と月明かりに照らされて、

？ バカだなー、食料も持たずにこの森入るなんて、もしかしてねーちゃん、霞とか食って生きるタイプ？」

言葉は聞き取りにくかったものの、声は少年のようだった。ぎよっとしたが、やがて少年の発言を思い出し少しだけ怒りがわいてくる。‘バカ’ それは音痴とか筋肉少女とかと同じく、これまで何度か言われてきた罵倒だった。

憤然と声のする方へ頭を回す。そこに立っていたのは、面白そうに頬をゆるめた、やはり年若い少年だ。自分より年下かもしれない。そう思うと、さらに理不尽な怒りがわいてくる。

「だ、誰がバカよッ」

「ほら、俺の肉は入ってないけど牛肉のスープ。食う？」

「食う！」

突き出された碗を奪うと、ミューズはがぶりっ、と顔を突っ込んだ。うまいうまい、と喉と口を動かしながら、ふと思念がよぎった。

あれ？ なんかわたし怒っている最中だったような？ それにもっと警戒すべきだったんじゃないの？

たちまち青ざめ、ひあつ、と叫び碗を放りかける。が、時既に遅く、飲み干してしまっていた。だがどうやらスープに毒などが入っていないのは、その後お茶のような代物を差し出されても体調が崩れそうになかったことから、明らかだった。

なんだか気恥ずかしいような恨めしいような気持ちに苛まれながらお茶を飲み終え、ほうと吐息を漏らし、改めて少年を見上げるように観察した。

年齢は自分と同じか、それ以下くらい。口元にはからかうような笑みが刻まれ、目元も愉快そうな色を帯びている。かなり小柄な体型で、自分と並ぶくらいだ。灰白色をした、麻と思しき典型的な庶民の服に身をまとい、靴は黒。少しく身なりはくすんでいるが、むしろ汚れているのは、森のなかを二日以上さまよっていた自分のほうだろう。

衣服を見ると、ついていた泥などは払われているようだった。う

ん、しかもなんか服が新しくなってるような？　まるで他人の服みたいに真っ白。

「あああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

「へ？　どうした？」

「あ、あ、ああ、あ、あ、あ、あああああ、あんだあああああ！？」

今着ているのは、劇団で末端に支給されるよれよれ服などではない。少し上等そうな　絹製とおぼしきつゆったりとした白い衣装だ。「あ、変えといたけど？　服はそっちの床にたんでおいた。だつてすっげー、汚れてるのに寝台に寝かせようと思わないじゃん。いつておくけど下は見えないから安心しろ」

「女の子は上にも大事なものを抱えてるのよ　！？　し、下着まで取ったの！？」

「あほう。そんなことすると、俺変態みたいじゃねえか。第一ねーちゃん、貧しいじゃん。別に見たいとも思わアイタア！」

二重でむかついたから壺を額に投げてやった。

ふつふつと怒りは沸いたが、これ以上自分の命を救ってくれた恩人に暴力を振るうことは良心が許さなかったので、ここで止めておく。

少年は額を押さえながら、ミュージズの壺を拾いあげる。

「あたたたたつ、冗談だつて……凶暴すぎるぜ。ところでねーちゃん、名前は？」

名を述べると、少年はなんとも珍妙そうに、

「ミュージズ？　おいしそうな名前だな。めんどくさいから、ねーちゃんでもいいよな。んじゃ、ねーちゃん。質問するぜ」

「その前にわたしからさせて。……えーと、あなた助けてくれたの？」

まずこれが肝要。少年は壺を寝台に放り投げて笑った。

「そうそう。ときどきいるんだよ。この森、黒海原　って言うん

けど、バカでかい迷い森でさ。入り方間違ったら最悪出られないってのに、食料も持たず抜けようとするやつ。ねーちゃんもその類だろ?」

「ち、ちちち違っわ。いい? 準備は万端だったの。ただ悪い盗賊に襲われてか弱いわたしはなされるがままに蹂躪……」

「はいはいもついいや。嘘つきは大好きだぜ」

げっ、目が半眼だ。疑わしそうに横目でじっと射すくめる。

「なによ、本当よ」

「へーん」いよいよ疑わしげに青年の瞳が横に伸びる。「じゃ、その盗賊の外見は?」

「う……額に布を巻いてたわよ。盗つ人なんて書いてあったわ」

もちろん脳裏によぎっているのは、自分を勧誘した素性の知れない男である。ウソを塗りたくる道具にしていることこつそり詫びつつ、さらにデタラメを繰り返そうとミュージスが息巻いたそのとき、少年の、やけに沈んだ声が響いた。

「その男……名前とか はわかるわけねーよな、さすがに」

「え? えーとねキ・サンとか言ってたかしら」

いったいどうしたのだろう、と思いつつ表情を伺うと、一瞬だけ少年の顔が真剣な色を帯びるのが分かった。

「キ・サン……? 雑闘衆の頭領か? でもあいつの手

口は、襲撃というより隠密行動のソレに近いしなあ、趣旨替えか?」

「ちよつと、どうしたの? 辻褄の合わないところなんてないでしょ?」

「その発言もかなりギリギリだけど……ただ、その盗賊話が本当にしても、だ」

少年は視線をミュージスに戻すと、今度は真つ正面から鋭い眼光を飛ばしてきた。

「正直に教えてもらおう。ねーちゃん、本当に何者だ? なんでそ

の名を知っている？」

クークス(4)

穢多。

それは大陸における、もっとも呪われし民の呼称である。

階級の最下層もしくは階級外に位置づけられるその者と、その他を区別する要素はただひとつ すなわち瞳の色。一般的な黒色とは異なつて生まれ持つ、濁つた灰色の眼こそ穢多としての証だった。

軍海を支配する軍閥の配下には、さらに村ごと、都市ごとにその地域を支配する領主や有力農民が存在するが、彼が把握する記帳にははつきりと穢多であることは記されており、一度特定されると徹底的な差別を受ける。まず職種と居住場所が村や都市で固定され、たいていは村の外れ者扱いとなる。さらにひどい場合には第三者による積極的な迫害 たとえば略奪、放火、集団暴行 などさえ行われる。

しかし軍閥領の境界を越えて、その種の迫害を専門とする集団が存在するとは、さすがに予想外だった。

「衆撃隊？ そいつらが、大陸中の穢多を襲つてるつてののか？」

「隊と言つても見ての通り大人数ではない。四人一組。とある集団の下部組織にあたるらしく、領土の境界など構うことなくあちこちで襲撃を行っている」

「えたいの知れない『声』への不信感などたちまちに霧散し、胸のうちにとまったドロドロとした憤激が、クークスの体を包んでいった。

「怒っているな、若人。当然だ。自分やその同胞が襲われて憤らぬ者などいない。大事な母までも被害を被っているのだからなおさらだろう」

「声」のどこか誘うような調子に、だが動揺していた心が揺り戻された。内心で怒りをたくわえながら、クークスは声に猜疑をちり

ばめて問うた。

「だがあんたは誰だ？ いったい俺になにを望んでいるんだ？」

「我の名などどうでもいい。なにを望むか、だと？ 簡単だ。我らが復讐に協力しよう。代償として、仲間となれ」

「……………どういう意味だ……………？」

警戒感がさらに募るが、『声』の平然とした重々しさは変わらなかった。

「その問いに応じるのも容易だ。この地を領有するサリヴァ公の下部として忠誠を誓い、公のために働くのだ。お前のその牙は、危なっかしいが同時に非常に有望である。我らのために、その牙を研げ」
一瞬意味が分からなかった。だがすぐにこれが危なっかしい取引だと理解すると、死背dんと首筋から汗が噴き出した。

今自分が『会話』している相手が非常に危険な人物であることを、第六感が告げていた。声を強張らせ、なんとか言葉をつくる。

「あんた……………なにか勘違いしてるだろう……………俺はただの捌き屋だ。軍閥のために活躍するなんて……………できない」

「ほう、これは面白いことを言う。突進に臆することなく暴牛の動きを先読みをし、的確に急所へ刃を突き刺すことが、本当に他の穢多に 牛馬解体を請け負う十歳の捌き屋にできることだと思えるか？」

少し愉快そうな『声』に、反駁の言葉はなにひとつ浮かばなかった。この『声』は見抜いているのだろう 自分が牛馬を解体しながら、一心に「解体」を望んでいたまったく別のモノを。

言葉につまっていると、するりとさらに声が差し挟まれる。

「お前も分かっているだろう。お前が本当に解体したかったものはなんだ？ 牛が？ 馬か？ 豚か？ そうではあるまい。お前が心の底から解体を望んでいたのは 穢多として後ろ指をさし、差別の責め苦を味わわせてきた、世界そのものではなかったのか？」

「……………」

『お前が刃を振るう度に噴出させたその憎悪は、お前すらも意識せぬ間にそこまでの人外へと育て上げた。十歳の子どもがここまでの域に達していて、その者を逸材と呼ばずしてなんと呼ぶ』

「……で、でも俺は……」

『その強さを十二分に発揮できれば、衆撃隊を壊滅させるなどたやすい。今現在の時点においてもな。そしてそれを手助けするために、我はこうして話しかけているのだ』

衆撃隊、という単語に再び全身がカッと熱くなるのを感じた。

六歳になるまで 自分たちが差別される人間だとクークスが自覚するまで、ただひとりで息子を守ってきた母の顔が、今自分の腕の中で、病的なほど青白く浮かび上がっていた。

そして耳に貼りついた白い少女の悲鳴。自分たちに見境ないほどに接触を続けた、小指のなき、忌み子の少女。

そつと目をつむると二人の顔が交互に脳裏に走り、気づけばクークスは自らの先行きを決定する言葉を口にした。

「俺はなにをすればいい？ なにをすればやつらを殺すことができる」

まるで予想通りの答えだ、とでもいうように『声』は含み笑いをもらした。

ミューズ(5)

「傭兵集団さ、雑闘衆ってのは」

少年の鋭い眼光に縮こまり、あっさりすべての経緯を話してしまったミューズは、なにか知っている風の彼に改めて雑闘衆のことを尋ねた。

「戦闘力に関しては軍海のなかでも指折りだな、つい最近まではおとなしかつたんだが、今はあちこちの軍閥に雇われてる。」

つまりねーちゃんは見事な剣さばきならぬ壺さばきを認められて、雑闘衆に勧誘されたってわけさ」

ニヤリとする少年を見つめながら、冗談じゃないと唇をとがらせた。

「まさかそれってわたし、入ったことになってるの？」

「頭領直々の勧誘だから、許可‘盗っ’てなくとも強制加入となるかもしれないな。普通の傭兵集団なら、そんなことしないんだけどなー。まあ、キ・サンの今回の人格がそうだったんだろ。そういえば昔会ったときなんか……」

少年は口を閉じ、気が変わったとも言わんばかりに、真剣な眼差しから再びあの飄々とした顔に戻った。

「……で、王子様捜しを依頼された、と」

「されてないわよ。入団してないんだから」

「いやいや。話を聞く限り、そのなんちゃって頭領殿は、もうねーちゃんが入ったと思っ込んで話進めちゃったんだろ？ なら入ったことになってんだろーな、キ・サンの頭のなかじゃ。どっちもバカだ」

「入ってないっ」

「俺に言われても困るっつの」

乾いた笑みを浮かべる少年は、どこか幼さを感じさせた。あどけない表情に、ミューズは凝り固まっていた心がゆっくりとほぐれて

いくような気がした。

「あ、そういえばちゃんとしたお礼まだだったわね。助けてくれてありがとう、危うく飢え死にするとところだったわ。あなたの名前は？」

「名前？」

「ぼかん、とあほ面になった後、あつけらかんとした声が続いた。

「なんだっけ、俺俺言ってるうちに忘れちゃった。ま、呼ぶなら好きに呼んでいーぜ」

「じゃあ、名無し、ね」

「その安直さはどうかと思うけど………つか、名前じゃないよな」

本名を隠したがっているのか、本気で忘却したのかは不明な以上、ミューズとしても追及するつもりはなかったため、適当に口にした呼称だった。

「じゃあ名無し。質問だけどここってあなたの家なのね？」

「おう。ねーちゃんがいた村からはもう相当離れてるけどな」

その返事にほっと安堵のため息をもらした。キ・サンはもう数日はあの村にいてと言っていた。ここが迷い森なら、しばらくは出会うこともないだろう。

「それにしても危険な森に家を構えるなんて、正気じゃないわね」

「ねーちゃんにだけは言われたくないけどさ、それは同意する。実はちよつとワケありだね。黒海原のこの地点は、軍海や四大大国のすべての場所に行きやすいんだよ。中継地点として優れてるってわけ。森で牛を殺したり野草採れば、自給自足できるしな。猛獣も出るけどよ」

「そのワケって？」

「ん………人を捜してたんだ」

ちよつと言いよどみ、なぜか気まずそうに視線をそらす。

「誰！？ 賞金首の王位継承者！？」

「違う。そんなもう死んでるかもしれない人間捜すかよ。夢持ちす

ぎなんだ、軍海の奴らも、ローウエンの親衛隊も。

俺が捜してる女は別人。王子様とは違って顔も名前も分かってる。分からないのは居場所だけだよ」

そう口にした瞬間、名無しの瞳に懐かしさでも思い起こすような色がにじみ出たのをミューズは見逃さなかった。それをさらに見て取ったのか、少年が急いで釈明する。

「あのね、変な想像してもらっちゃ困るけど、そいつは俺となんの関係もないやつで、ただアイツとの義理で捜してるだけだったの」
最後にまた彼はなにか付け加えたが、はっきりと聞き取れなかった。

話は終わりだ、と言わんばかりにミューズの前から碗を回収する名無し。ちよつと不満ながらごちそうさま、と言う。

「ところで家といえば、ねーちゃんは家族とかいないのか？」

「え……」

唐突に言われて、つい記憶の蔵を探ってみる。

「そりゃいたわよ。たぶん」

「……めちゃくちゃ怪しいじゃないか」

「えーと、お姉ちゃんがいつぱい……それから、お母さんも、お父さんは、いなかった、かな？ あんまり覚えてない。あはは、なんでだろ。家っぽい建物でたところだけは、ぼんやり覚えてるんだけどねー。家出てからわたし、女優目指して軍海中歩き回っていたから」

ぱちくりと、茶色の目が瞬いた。だがすぐ陽気な色を帯びる。

「そうかー。なら居場所も分からないよな。ならどうするんだ、これから？」

「泊めてくれるんでしょ？」

「……図々しくて反論する気にもなれない。ま、泊めるのはいいけど、長い滞在はやめた方がいいぜ」

「どうしてよ」

「絶対キ・サンはねーちゃん追ってくる。あいつの走法は神業級だ

から、捜そうと思えば、一日で黒海原の五分の一は捜せると思う。
直に見つかつちまう」

あの盗っ人の素早さは身をもって知っているミューズは、思わず
ぶるっと身震いした。

「い、いやよ捕まるのは。わたしはまた別の劇団に入って、女優に
なるんだから、そんな得体の知れない傭兵集団なんかに入るもんで
すか」

「なら逃げるしかねーな。もっともねーちゃん、その分じゃ軽功は
鍛えてても走法はまるで会得してないっばいからな、逃げられつか
な？」

「ケイコー？ ソウホー？」

「軽功つてのは軽い身のこなしのこと。体内の<内力>を経脈に巡
らせて、高速で疾走したりできる。その具体的な技術が走法で・・・
・・・ねーちゃん、軍海の裏事情に詳しくない？」

「詳しくないっ」

大いばりで断言。ただでさえ国という確固たる枠組みがないも同
然の軍海の、さらに裏の、流血と抗争の世界なんて未来の大女優に
はふさわしくない舞台だわ。

まるで理解できていない風こちらの様子を見て、名無しは下あご
に手を添えた。

「仕方ないなー、こうなったらちよっくら教授するとすっか」

クークス(5)

ウォルガー一味は現在、お前のいた村にほど近い都市ヘガーにある 穴掘る小鳩亭 の一室にいるそうだ。奇襲をかけるなら、次に機会はないと思え。やつらの動きを探るのは、我らにとつても容易なことではないからな。

お前は内功、外功ともによく鍛えられているため万一の失敗もないだろうから、援護はしない。一応、エモノはこれを用意した。かつての牛刀以上の使い勝手は保障しよう。

そんな言葉を残して『声』が闇に溶け消えると同時に、どこからともなくビュツと鋭く空気を断ち切る音がした。

次の瞬間、クークスの隣にあつた木に、二本の巨大な刃物がガシユガシユツと恐ろしい音とともに突き刺さっていた。

それはあまりにも巨大な刃物だった。

刀身だけでもクークスの身長に迫ろうかというその巨大な凶器たちは、片刃のツバ無し剣、さらに言えば鉞のような形態をしていた。むき出しの刃がギラギラと月光に映える。柄は思いの外、短い。

おそろおそろ、クークスは一本に手を取った。万力で握りしめ、樹皮から抜き取ろうと腕に内力を巡らせる。

「はあっ！」

裂帛の気合いとともに引き抜くと、盛大に木っ端が飛びちつて刃が抜けた。たて続けにもう一本も抜くと、改めてその巨大さと重量感を味わうこととなった。

内力を巡らせつづけることにより、ようやく片手で一本持つことが可能だ。馬追いのため走法を身につける必要があつて内力を相当鍛えてきたクークスであっても、気を抜けばふらふらと重みで倒れそうだ。

何度かその場で振るってみて、どうにかその重みに慣れたところ

で、一度クークスは刃物を地面において母を見た。

母は穏やかにまぶたを下ろしたままだった。ひとまずどこか安全な場所へ移さなければならぬ、と考え背中に細い肉体を背負い、両手で二本の柄を掴む。傍から見れば十歳の少年とは思えない所行だが、既に並の武術家以上に体力がある彼にとってはできないことではない。

刃先を引きずるようにして剣を運ぶ。背後から漏れる呼吸は微かなものだが、確かに聞こえる。

守らなければいけない。この人を守るのは、俺しかないんだ。なにがあっても、俺が死のうとも、俺が何者になろうとも。

うまい具合に見つかった森沿いの村の空き家に侵入し、寝台らしき場所に母を横たえた。ここでは自分たちが差別民であることを知るものはいない。しばらくは安寧が得られるかもしれない。

凶器を手にとって、鳥が小さく歌う音色だけが満ちる外へと出る。目の前には不吉な葉ずれを奏でる樹木がいくつも連なっている。暖期に入りかけている空気が、むわっと顔全体に張り付いてくるのを感じた。

「……行くか」

低く短く呟いて、クークスは森とは逆の方向へ疾走を開始した。

ヘガーは内陸部の交易都市として栄えている有名な街だが、行ったことないから場所は分からない。だが刃物の柄に、ご丁寧なことに地図がくくりつけられていたので、凶器の重さで三割減になった速度でも迷うことなくたどり着けた。

やがて見え始めた、いくつもの屋根の連なりや店先にぼつぼつと点る明かりを見つけて、覆面でもすべきだったかな、と思ったが、もとより捨て身だ。どうとでもなれ、という心境だった。

目抜き通りに到着したところで、あたりを見回す。微風でキィキィと揺れていた 穴掘る小鳩亭 の看板はすぐに見つかった。

ここに来て、胸に一抹の不安がわいてきた。

足を止め、宿屋と相對する。この奥に、あの一味がいる。そう考えただけでも突撃したかったが、そこにはやはり恐れがあった。どれだけ『声』の怪しげな言葉に言いくるめられようと、やはり自分は十歳のガキでしかない。片や相手は、おそらく軍海の裏で働く戦士なのだろう。勝てる道理など、傍から見れば万にひとつもない。

それでも クークスは刃物の柄に手をあて、その思念を振り払った。ここまで来れば、引き下がるという選択肢は血の上った頭から完全に消え失せていた。

宿の玄関まで伸びる石畳を、抜き足で進む。宿は二階建てだった。もう夜だから、一階の窓からのぞいたところに見える受付や食堂らしき部分の明かりは落ちていて、人の気配はない。ならば上へ、と隣の屋根へ縁に手をかけ体を持ち上げ、足音を殺して移動する。

窓から様子をつかがおうと目を凝らして。

「なにをしている」

腰に鈍痛が走った。

あまりの不意打ちに、反射的に横へ跳び退り、ひざまづくような体勢になってしまう。無防備な様子に、声の主とおぼしき人物が詰め寄りかけて その跽音が止まった。

「おまえは……」

わずかに驚きが混じる声に、クークスは歯ぎしりをして応えた。間違いない。ウォルガ本人ではないものの、家中を蹂躪していた一味のひとりだ。独特の長いあごひげが風に揺れる。

男はうつすらと目を細めて、冷笑するように唇を動かした。

「へっ、わざわざ生かしてやったのに、かいがいしく殺されに来たかあ穢多公。おや、母親はどうした。焼け死んだのかあ？」

「ッ！」

とにかく一度距離を取ろう、と考えていた頭が再び激しく沸き立った。勢いよく飛び出し、なぎ払うように右手の剣を繰り出す。虚をつかれた男が慌てて身を低くしかわしたときには、既に左手がなめらかに動き、肩口に刃先が深々とめりこんでいた。

「ぎ、ぎゃあああああああああああああ！ あ、ひい

！」

激痛にもたえうつ男に、憐憫の情などわきはしなかった。圧倒的な腕力と非情さを爆発させ、身体にいくつもの切り傷を刻んでいく。ガスツ、ガスツと肉が壊れる音がする度に、闇夜にまぎれて悲鳴と鮮血が噴き出した。

背後で窓が開く音がしたのは、そのときだった。とっさに振り返ると異変をかぎつけたらしい一味の残りが、一斉にクークスへ拳を向けている瞬間だった。

身をひねり、一番手前にいた男の胸を蹴って宙へ跳ぶと、その頭の凶器を振り下ろす。

「二人目」

一撃で致命傷に至ったその男は、頭から剣を生やしたまま倒れ伏す。だがウオルガではない。舌打ちをして空中で身をひねり、脇を抜けるようにして着地しつつ左手一本となった凶器で三人目の横腹をかつさらう。

一人目の死体が屋根の傾斜にしたがって落下するまでの刹那に、さらに二人を片付けた早業を屋根の隅から値踏みするように見つめる影があった。

病的なほどに、という形容が似合いそうなほど痩せた身体、銀色に輝く細い眼、まるで生気を感じさせない顔つき。言うなれば、生きた死人。

ウオルガ！

襲撃の際の覆面はなかった。クークスは降り立つと、即座に足を回して刃物を万力の力で突き出した。

だが既にウオルガは上方へと回避していた。その表情は、先刻と同じく能面のように青白い。動揺も、焦りも、驚きもよぎることは刹那さえなかった。

薄い唇がゆつくりと動く。

「健気。追ってきたか」

「うるさい！ テメエらがあんなことしなけりゃ……！！」
同じく跳躍して追撃を試みるクークス横に、ウォルガの顔があった。完全に自分の行動の一步先を進んでいる。

慌てて腕を動かしかけたとき、首筋の一箇所に針で刺されたような痛みが生じた。とたんに空中で姿勢が前のめりに崩れる。

点穴を突かれた 頭で理解したときには、敵の指先が上腕の二点を突いていた。腕が痺れ、指先から巨大な剣がこぼれ落ちる。腰にも刺激を受け、受け身も取れないまま身体が崩れ落ちる。

「奮闘 　しかし、私には勝てず。所詮ガキ」

異国の商人を騙っていたときは信じられないほど、口調は冷たく変貌していた。そしてなにより、生きてしゃべっている気がまるでしない。

クークスはもう何度目か、背筋が凍った。まるで魂のない人間と対峙しているような、この感覚。

こいつは他のやつとケタが違う。分かっているても、点穴を自力で開こうとなおも抗いつづける。

ウォルガは悠々と、だが寸分のムダもない動きで、剣を屋根から蹴落とした。

「納得、見事な捌き。しかし相手をする暇なし。仲間死亡を頭領へ報告の必要あり」

「……ま、待て！」

背を見せて去りかけた影を呼び止めようと、クークスは必死で叫んだ。ちらり、と視線だけが向けられる。

「おまえらはなぜ穢多を襲うんだ！」

身体が利かないため、這ったまま顔だけを持ち上げてなおも吠え上げた。

「俺たちが差別されてるのは知ってる！ それでも、あちこちで襲撃をくりかえす必要なんてないじゃないか！ おまえらは、どうして、どうして……！！」

ウォルガの答えは、だがやはり、静かどころか空虚な響きを伴っ

ていた。

「愚問。理由など、我らが頭領の命令という一点のみ。あの方は生粋の穢多嫌い。衆撃隊、そのためだけに存在。私の意思など無問題」

今度こそウォルガは顔を前へ戻した。

「別離。再度会うかもしれないな」

言い捨てると、地面に伏した三人の遺体に目をくれることもなく走り去っていった。

残されたクークスは、一切の反論さえ頭に浮かぶことなく、呼吸さえ途切れたかと思うほどの静寂のなかで固まり続けるしかなかった。

ミュージズ(6)

「つまり、体術みたいに体外で内力を使うのがく外功>、傷の治癒とかで、点穴だっけ、それを開いたり閉じたりするため体内で使うのがく内功>ってこと?」

ひととおり終えた名無しの説明を、ミュージズが簡単にまとめてみると、名無しは疲弊したように頷いた。

「そ、そう……はあ、ねーちゃんが一回の説明で理解してくればこんな疲れなかつたんだろーがな……」

「で、ちょー天才たるわたしの場合、内力を自然に作っていたっばい、ってことね」

「訓練した記憶がないってんならな。自然な精製自体はそう珍しいことじゃないぜ。現出する人間はそうはいないけど」

二年間の壺操練習にそんなオマケがついているなんて、なんだかなあと思う。別に軍海の裏世界に入るつもりもないから、役に立たないじゃん。軍海の表で、四大国の住民ほどではないが、流浪しながらも安穩と暮らすつもりなのだ。

と言うと名無しは笑って、

「それならねーちゃん、キ・サンが落としたりした魚を壺投げてとることもできなかつたぜ」

「そ、それは困るわね」

「ただねーちゃんすごいな。壺なんてエモノ使ってる時点で相当変だけど、それをほとんど極めきってるよな。自分じゃ分かってないかもしれないけど、実際めちゃうくちゃ人並み外れたことやってたんだぜ」

「でもわたし、女優になりたいんであつてさ、そんな曲芸師みたいなことできても……」

頭に浮かぶのはいやみつたらしい、赤毛のレザ口である。あの女の澄ました顔を最後に殴れなくて、実に残念だ。

「いや、簡単な走法を覚えたらキ・サンから逃げられる。内力はやっぱり必要だぜ」

「その内力がなければ、勧誘なんてされなかったんだけどね」

「そりゃそーだ。よく気づいたな」

とにかく名無しの言うとおり、ずっとここにとどまっておくわけにもいくまい。逃げたいが、黒海原のだいぶ奥の方に位置するらしいここを勝手に飛び出したら、また迷って今度こそ行き倒れそうだろう。どうしよう、どこか村にでも到着できれば当面は日雇いで生きていけるんだけど、と煩悶していると、名無しがおかしそくにこちらをのぞき込んだ。

「なによ？」

「んー、いやそう張り詰めた顔すんなよ、って思っただけさ。キ・サンの野郎が来るっていつても今日明日の話じゃないだろうし、今晚じっくり考えな。んじゃもう遅いし、おやすみー」

「あ、寝ちゃうの？ うん、おやすみ……って、あんたはどこで寝るのよ」

「あっちに別の寝台がある。そっちで寝るさ」

「へー。家族の？」

何気ない質問だったが、一瞬名無しは答えに詰まったようだった。「育て親がいたんだ。でも、もうここにはいないよ」

軽々に言うなり、名無しはどかっとな寝台に飛び乗った。たちまち細い寝息が聞こえてくる。ミュージスはさすがに申し訳ない気持ちがいっぱいになって、シーツに顔をもぐらせた。

不意に床がきしむ音を拾い、ミュージスは覚醒した。寝ぼけ眼ながらもちらり、と音源のする方へ眼球を動かす。暗闇のなか、ひたひたと歩いていたのは名無しだった。自分の家だから夜中歩いて行けないことはないのだが、彼の腰に細長い剣を収めた鞘が収まっているのを見たミュージスは、ふと興味がわき起こった。

でかけるつもりなのだろうか？ こんな夜中に？ 寝てしまっ

からどれだけ時間が経ったかは知らないが、まだ外は闇に没しているから夜更けが近いわけでもないのに。

名無しは足音を殺して窓辺に寄った。そのままの姿勢で固まっていたから、あら名無し立ったまま寝ちゃったのかしら、などと考えていたとき。いきなり名無しが窓を開けたので、一気に外の物音が鮮明になり、ミュージズの心臓が飛び上がった。どうしたんだろ、と動悸をおさえつつ様子を伺っていると、すうと外から飛びこんでくるものがあつた。

ワシもしくは、タカ。いずれにしても巨大な鳥だ。鳥は滑空しながら、名無しの寝台に止まった。名無しは鳥の足にくくりつけられた紙らしきものを取って、ざっと眺めると満足そうにそれをポケットに入れた。次に寝台の下から巨大な鍵らしきものがついている力ゴを取り出すと（たぶん、鳥かごだ）、ワシ（タカ？）を導き入れた。鳥は暴れたり逆らう様子を微塵も見せず、従順に力ゴへ収まった。

なんだろ、あれ。

好奇心にぼつと火がつく。

続いて名無しは、ごく控えめに足音を立てながら扉へと向かった。こちらに背を向けて家から出たことを確認すると、好奇心がさらにむくむくともたげ、こそこそと寝台から抜け出した。もちろん両手には壺である。

夜の鬼ごっこが始まった。

といつても逃げる者も追う者も走つてすらない。ミュージズは散歩気分だし、名無しも足音こそ殺しているが、気負った風でもなく肩を揺らしている。この時点で、「後から後悔する」タイプのミュージズとしては、不審というより好奇心のほうが強い。後ろからほったたつて驚かせてやろうか、なんてのんきなことを考えていたため、いきなり木の陰から人が登場したのには驚いた。急いで茂みに飛びこんで隠れる。

幸い距離は離れていたもので、気付かれてはいないようだ。名無し

は立ち止まり、その人物と会話を開始。相手の顔は暗すぎて伺えないが、かなり腹の出た　つまりデブちな体型だ。

　ここそと観測を続けていると、いきなり相手が手を振って弁解するような仕草。続いて頭を掻き、後ろを向いてここそと懐をさぐるような行動をし始めた。

ふと、名無しが動いた。

え、ちよつと？

　思ったときには腰から細長い両剣がすらり、と抜かれていた。

　なにしているのよこのバカああああああああああああああああ！
胸底で叫びながら、ミュージズはなりふり構わず飛び出した。

クークス(6)

月日はたちまちに過ぎ、五年が経過した。

昼過ぎ、クークスはすっかり住み慣れた空き家を出た。つい最近十五歳を迎えた身体は、数年前と比べものにならないくらい成熟した肉付きを見せていた。

一歩通りに踏み出した途端、いつもの『声』が響いてきた。

『今日の仕事について復唱しろ』

村の市場は夏のけだるげな時間帯ということもあって、どこことなく活気を欠いている。クークスはそんな街の様子をぼんやり眺めながら、ぼそつと告げた。

「ミルロツケの商人ザンバル。基本的に護衛付きの自宅にこもりきりだが、今夜愛人と密会をする予定であるから、その場所に向かう途中で暗殺」

『結構』

満足そうに『声』は言った。だがふと道を通り過ぎた異国風の商人が目に入ると、あの男を思い出し、それにより意識が五年前に戻されつつあったクークスは、続く問いにも上の空で生返事をするだけだった。

復讐を失敗し、失意のうちに空き家へ戻ったとき、待ち構えていたように『声』は慰めの言葉をかけた。といっても、まるで口調は鋼鉄のようなものだったが。

『気に病む必要はない。襲撃の素人臭さから完全に侮っていたが、まさか一指系のやつがいるとはな。我の手落ちだ。あれでは手も足も出まい』

空き家の粗末な床に横たわる母の顔が発汗していたので、汗を服の袖でぬぐってやりながら、

「ウォルガのことか？」

『軍海でも名の知れた、そして数少ない体術使いだ。所属は雑闘衆という傭兵集団。人差し指一本だけを武器西、点穴を的確に突いてくる。もつとも聞けば、動きを止めるだけで殺すことはほとんどしないらしいが。その場にいれば助力もできたが、声をかけることしかできないからな。残念ながら傍観させてもらった』

先刻の、二手だけ繰り出されたウォルガの絶技がまざまざと頭のなかで再生されていく。あのスピード、精確さ、威力　彼我を隔てる圧倒的な断絶を否が応でも意識したクークスは、気付けば言葉を口にしていた。

「俺はアイツにいつ勝てる？」

『相手が相手だ。その才を以ても、五年、否、十年は要するだろう』
長いのか短いのか、まるでつかめなかった。

『なに、しばらくはサリヴァ公のもとで仕事に励み精進するのだ。お前は使い勝手が良さそうだ。潜入か暗殺か、あるいは正規兵か・・・それはおいおい考えるところとして、しばらくはこの村にとどまれ。ここから東に六里四方まではサリヴァ公の私領だからな、お前の安全は我々が保障しよう』

.....そのまま、しばらく、がだらだらと続き、五年が経過していたのだ。その後暗殺者として拜命を受け、『声』の指示を受けて活動にいそしんだ。

殺害した者は公の地位を脅かす家臣、反逆を企てる民兵の首領、治安を荒らすかぶき者など、百を超える。いずれも牛や豚を殺すように淡々と事務的に、クークスは彼らを両断した。あまりの無感情ぶり、二本の巨大すぎる刃物による殺害方法の荒々しさから、いつしか彼の名は軍海全土にとどろき、裏世界では通り名めいたものまで付けられていた。

肉斬連刃ニクギリレンバ。言い得て妙な二つ名だと、噂を聞く度自嘲気味に笑った。

今日も今日で、人殺しの指令である。もはやなんの感情も抱くことなく、昼間は根暗な少年として村に溶け込み、夜間は修行や任務

にいそしんだ。

一方で暇があれば彼はウォルガについての情報を求めつづけた。五年前の邂逅以来、行方が杳として知れなかったのだ。『声』はそのことに関して干渉しなかったが、かといって積極的に情報を与えることもしなかった。復讐の手助けを申し出たのも自分を勧誘するための契機にしたかったただけだろうし、クークスもその点は承知しているからこそ、敢えてなにも言わず単独でウォルガの居所を探りつづけた。

傭兵集団・雑闘衆についても、情報を集めたがなんせ風聞がたつぷり混じった誇張も多く、確実なことはほとんどつかめなかった。わずかに頭領 すなわちウォルガをして「生粋の穢多嫌い」と言わしめた頭領が、キ・サンという自称盗っ人であることや、現在雑闘衆は西端の軍閥に雇われていることなどだった。

なお、『声』の主についても一言述べておかねばなるまい。名をレイン・ド・ベルジャックという、サリヴァ公の宰相をしている老獪な男（本人談）らしかった。さらに本人曰く、ずっとサリヴァ公の居城にいるらしかったが、クークスはそんなところに立ち入る気もなかったため、今に至ってもサリヴァ及びベルジャックとの面会は叶っていない。

とにもかくにも、これが現時点における暗殺者クークスの立ち位置だった。

出店でいくつか果物を買って家に戻ったクークスは、いつものように寝台で編み物をする母に手早く柿を切って差し出した。あの焼き討ちの後、もともと目が悪かった母は一年前に完全に失明したが、その他の面では健康だった。

「ごめんね、迷惑かけて」

柿をつまんで口に運びながらしおらしそうに謝る母に、クークスはなんと答えられなかった。五年前からずっと感じている負い目が、彼にそうさせていた。

「別にいい。俺はあんたの息子だから、当然だ」

木訥な言葉だったが、母は皺が縦横に走る顔いっぱい笑顔が浮かべた。目の端には、微かに雫がたまっていた。

「今日はどうだったの？ なにか仕事があったかい？」

夜の仕事を十分すぎるほど俸給をもらっているクークスだったが、もちろん暗殺業のことなど話せるはずもない。昼間に賃仕事を探して一日分の生活費を稼いでいる、と家をほとんど出ない母には説明してあった。

「少しあつちのほうで店番をしてきただけだから、大して稼げなかった」

真顔で嘘をつけるようになったのも、つい最近のことだ。一日一日と、戦いに不要な感情が削ぎ落とされている。そんな気がした。母はそう、と寂しそうに頷くと、柿を小さく小さく嚙っては飲み込んでいった。

ここぞなにかひとつ、気の利いたセリフでも言えればいいのだが、あいにく語彙もない。なんとか勇気を振り絞って、口を開きかけて……

「あ、あのさ」

『指令だ。外へ出る』

『声』が割って入った。当然母には聞こえていないが、あまりの唐突さにビクンと肩が跳ね上がってしまった。気配を察した母が、首をかしげる。

「どうしたの、クー」

「別の果物買ってくる」

結局言い残せた言葉はそれだけだった。自分に嫌になりながら、クークスは足早に家の外へ出た。

むんむんとした相変わらぬ熱気にうんざりしながら、どこからともなく頭に届いてくる『声』に向かって言う。

「どうしたんです？」

『指令が変わり、今日の仕事は取消となった。お前には別の任務に

ついでもらつて』

任務変更？　今まで一度もなかった事態に、クークスは人目も忘れて反射的に訊き返していた。

「誰を殺せばいいんですか？」

「いや、暗殺ではない。我の方としても情報がどこまで正確なのか不明なのだが、我らが領地に入ったとなれば、捨て置くわけにもいかないからな』

「なんの話です？」

「なに、たいしたことではない。話だけなら聞いたことがあるだろう。逃亡中ローウェン国の王位継承者のことを。その元王子が、我らがサリヴァ公の統治範囲に入ったという情報が入ってな、至急その者を見つけよ、と命令が回ってきた。お前にはその任についてもらつて』

「人捜し……でもそれは隠密などがやることでは」

「部署を越えてまで探さなければならぬ、ということだ。実はこれに加えてもう一つ任務を行ってもらつて予定でな、さしあたってはこれからはパートナーと二人一組で動いてもらつて』

これがしばらくお前の相棒となる男だ。来い、ヘルガベルト』

マーケットの方向から凶太い影がこちらに歩いてきてるのが見えた。かなり大柄だ。男は啞然とするクークスの前にやってくると何々大笑して、両手にでっかい掌をぼんとのせた。

「がっはっはっは！　これがぬしのいう暗殺者か、ベルジャック！

ガキながらいい面をしているではないか！　我が輩がぬしの相棒となるヘルガベルト・サーラスである！　よろしく頼むぞ！」

ミュージズ(7)

まず反応したのは名無しのほうだった。剣を持ったまま視線をこちらへやっただかと思うと、続いて手を上げて、なかなか様になっている仰天ポーズを取る。飛びかかると、壺のひとつを名無しの頭にすっばりとかぶせた。

『おわぶっ』

そのまま手を握って灌木の密集する茂みへ押し込み、自らも飛びこむ。背後で起こった一瞬のことにまるで気付いていなかったらしい肥満男は、振り返り驚くような喜ぶような表情になったかと思うと、一目散に腹を揺らしながら逃げ去った。

やがて姿が見えなくなると、名無しの頭を飲み込んだ壺を上から押さえていたミュージズは、ふうとため息をついて壺を取ろうとして力をこめた。

………が。

「あれ？」

おかしい。どこか詰まったのかな？

「はは、まさかね。んしょっ、と」

抜けない。

「………」

「………」

壺が小さめだということは分かっていた。でも名無しは小柄だし大丈夫だよな、と考えていたのだが引いても引いてもいつこうに抜けはしない。

「これじゃ上から押さえなくてよかったわね」

「そういう問題じゃないだろ!？」

壺がくぐもった声を発する。正しくは閉じ込められた頭が、だが。

「ちよっと待ってて。今あなたの家から斧持ってきて壊してあげる」

「待つのはねーちゃんの方だ! 俺の頭ごとぶっ壊すつもりか!？」

「っていつかなんでここにいるんだよ!？」

「えっと、あんたが家出て行くのが見えたっていうかー」

「ていうかー、じゃねえ! おかげで仕事はパアだし、俺は命の危機だ! おいマジかよ、なんでこうなるんだ?」

「落ち着いて名無し、あんたらしくもない。はいまず深呼吸」

「できるかあ

!」

いろいろと思案はしたが、壺は顔にとりついたままだった。

引き抜くという行為は、名無しが痛がったりしてどうやっても成功しなかったので、あとは壺を斧なので壊すという案くらいしかなかったが、それでは名無しの命に関わる。名無しのほうは名無しのほうで、

「こんなキュウキュウ詰め頭の頭で知恵なんて出るか」とのこと。

「落ち込まないで。それはそれでかわいいわよ、名無し」

「ねーちゃんがねーちゃんじゃなかったらぶった切ってるところだ・
・・・。だいたいどーして壺かぶせたんだよ?」

「余計な声を出されると困ったからよ」

「口ふさげばいいだろ! ・・・。つとそれより」

一時混乱していたが、名無しはすぐにいつもの余裕ぶつた声に戻った。もつとも幾分聞き取りにくくはなかったが。

申し訳なさもあるが、それいじょうに壺頭がしゃべるという光景の滑稽さが、純粹におかしかった。顔をちらちらあげるたびに、軽く笑いたくなる。こちらの様子を知って、名無しが慥然としたように息を吐く。

「ねーちゃん、なんで邪魔したんだ? そっちのほうがよくぼどシヨックだぜ」

「あつ! そうよ、あんたいったいなにいきなり人を殺そうとしてるのよ! そりゃ止めるっつーの」

「壺かぶせて止めるのはどうかと思うっつーの。あのさ、ねーちゃんマジで勘弁してくれよ。この仕事は失敗できなかったんだぜ」

本気でぶちぶち言っているらしい言い方に、さすがにミューズも遅まきながらなにかとんでもないことをしたんじゃないか、という思いが浮上してくる。

「えっと、あれ、あなたの怨敵とか？ 家族殺された仇とか？」

「違う。……正直に言つと、あのおっさん殺すように頼まれてたんだよ。つまりお仕事さ」

「誰に？ なんのため？」

「知らないさ。俺はただ殺すだけだ」

真剣な色がにじんでいたが、やっぱり壺がしゃべっている風の奇つ怪な図では格好もつかなかった。

「殺すつて、でもどうして」

「知らない。俺はただ依頼されるだけだよ。仕事だからきちんとなさなきゃならなかったのに、こんなことになったし、頭は重くなるし、前は見えないし、散々だ」

一転、落ち込んだような声。顔が見えないが、たぶん眉が八の字に垂れていることだろう。

だがそんなことはどうでもよい。

ミューズは震える体に鞭打つて、こわごわと尋ねた。

「仕事つて、じゃああんたまさか……」

「お察しの通り、本業は暗殺者さ。軍海の裏に通ずる者つてことで、ヨロシクー」

ぎゃぴつ、と。

叫びが口を突いた。話が進むにつれゆっくりと後ろへ退いていた体が、くるりと反転したかと思うと。

脇目もふらずに逃走を開始した。

「さよなら名無し。あんたの思い出は、できる限り高速で忘れることにするわ。だからわたしを追つてこないで！」

「あ？ おいねーちゃん？ なにか勘違いしてないか？ べつにね

ーちゃん狙つたりしてるわけでもないし、だいたい毒にも薬にもならない一般人を殺すなんて依頼、誰がすると思う？」

後ろから曇った声。嘘だ。

「だいたい殺すなら出会い頭にそうしてるし、第一……おい、本当にどこか行っちゃったのか？くそ、見えねえな。おい、おい、だいたいこの森は危険だつて……」

うしろの独白が遠くなっていく。じゃあね、と今度こそ少し名残惜しい気持ちになったが、足は進ませる。

「暗殺者」 その単語が、彼女からもと不足しがちだった冷静な判断というものを、根こそぎ奪っていた。

可能な限り最高速で足を動かす。その走り方が、<疾風千変>と呼ばれる上級の走法であることに、彼女自身は気づいていない。当然だ。それは彼女の体に、彼女が意識しないうちに染みこまされたモノだから。

そして現在、ミューズの意識はひとつの音声で埋め尽くされている。

悲鳴、悲鳴、悲鳴。名も無き少女が、魂の底から放つような叫喚。一瞬だけ垣間見た、軍海の裏の顔。

記憶が断片的な記憶を呼び、歯を食いしばって致命的なところまで記憶の再生が進まないように、強くかぶりを振った。それ以上思い出さずにはいけない。

このまま行けばぶん、わたしは壊れる。

はあはあ、と息を弾ませながらも走りを止めることなく、ただ木の根を踏みしめ草をえぐって、闇雲に走った。

さすがに動悸は乱れていたが、蘇ってきた記憶が圧倒的なまでの不快感を伴っていたものの、断片的でなんの要領もえないイメージ群だったことも幸運だった。動悸が乱れただけで、恐慌をきたすという段階には至らなかった。

ようやく、疲れたという感覚が意識にのぼってくると、おもむろに減速した。

「よし、忘れましょう忘れましょう……」

ぐつと腰をかがめ、ぶんと腕を振り上げる。

「さて明日からまた前座は……ないんだっけ」

せいっぱい明るい声を出したそのとき、あふれんばかりの人の気配に、ミューズの足は自然と止まった。

がさつ、と目の前の茂みが揺れた。

「ま、回り込まれた!？」

慌てて数歩後退。しかし、背後からも葉が揺れる音が。いや、後ろだけではない。左、右、斜め各方位。つまり言ってしまうえば、ミューズは何者かに囲まれていた。

名無し、分身できたんだ　と、一瞬逃げるのも忘れて妙な感心をする彼女の眼前に、緑色の壁が立ち現れた。

「は？ え、ええっ?」

急いで視線を巡らせると、全方向にぬらぬらとした粘着性の壁が六つ、出現している。

無論、ソレは壁などではなかった。

恐々としながら、ぶるぶる震える顔をなんとか上げた先に　巨人が立っていた。

頭からつま先まで、トカゲを思わせるようなダークグリーン。ぴちや、ぴちやと地面に粘液らしきものがしたたっては、触れた草を腐敗させていく。身の丈など、比べるのも馬鹿らしいくらいのこととして巨大だ。顔は半壊したように右側がただれているが、大きく開いた鰐口からはギラギラと歯牙が並んでいる。

「ええ!？　　いつたいその身長でどこに隠れてたんですかあああ!？」

絶叫しながらも、前にいる巨人の両足の隙間から逃走を試みようとしたとき、樹ほどもあろうかという腕を引きつけて、打ち下ろしてきた。とっさに左へ避けた先に、しとどに濡れた別の巨人の足裏が迫る。

潰される　と、覚悟をした彼女の前を。

銀色の閃光が横切った。

次の瞬間、全身がおびただしいほどの緑色の液体を浴びていた。だがそれを浴びていたのは彼女だけではなかった。

「だから言っただろこの森の奥は危険だって。まったく、服がびしょびしょだ」

巨大すぎる刃物を背に携えた暗殺者の少年が、右手の一本で巨人の両足を両断している光景が、目の前にあった。

「名無し、あんた……！」

ミューズが甲高い声で名を呼ぶと、不適で飄々とした返事代わりに名乗り上げが響いた。

「んじゃ、とくとご覧じろ。肉斬連刃の 食肉解体処理を」

かつて雑闘衆頭領より「もっとも暗殺者らしくない暗殺者」と評された少年は、高らかと吠えたと猛然と二本の刃物を振るい始めた。ただし。

「……壺なければもっとかっこいいのに」

「う、うるさいっ！」

頭に壺をかぶったままで。

クークス（7）

ヘルガベルト・サーラスは陽気な男だった。見かけどおり、隆々とした体を駆使した怪力と体術を『声』、つまりベルジャックに見込まれた男らしく、これまで正規兵だったという。

ヘルガベルトはバカでかい声で名乗ると、こちらの名も訊かず話を進めた。

「それにしても王子様捜しと言ってもなあ！　おい、ぬし、聞いておるか！」

「聞いてますよ」

「いったいどう捜せばいいのだろうな！　なにか考えでもあるか！」
「………とりあえずサリヴァ公の領土のなかでも、比較的僻地から当たるとか」

「おう、それはいい！　それはいいぞ！　がはは、賢いなぬし！」
大きく笑うヘルガベルトの隣で、イライラしたようにクークスは唸った。登場して以来、万事この調子だ。馬が合うはずもない。

『二人で王子捜索の任に就いてもらうわけだが』

『声』も『声』で、クークスの内なる当惑も頓着せず話を進めた。

『まあ、もとより大して期待はしてない。なんせ顔も居場所も不特定な人間だ。こんな漠然とした仕事に、お前ら二人を使うのはこれこそ宝の持ち腐れだ。よって二人には平行して、別の任務を行ってもらう』

「うむ！　それはなんだ！」

こちらもこちらの意向などお構いなしに、ヘルガベルトが大きく頷く。

『ローウェンへ行きある男に密書を届けよ。手紙についてはヘルガベルト、貴様に渡しているはずだ』

密書の運送というのは、これまた暗殺者らしくない仕事を押しつけられたものだ。つらつら考えていると、隣で奇声が飛ぶ。

「ぬっ！ おお、これか！？ いつのまにベルトに！？」

つられてそちらへ目をやると、太いベルトに白い手紙が挟まっていた。太い指でつまみ取る。

『渡す相手は、首都のレーンバルグから見てやや西に位置する都市・ゴーラムの 三角盾と四角槍 という宿屋の、二階の右手奥から二つ目の部屋にいる。日時は明日の夕刻、時間はハルレオン教会の鐘が四度なったとき、扉の前でこう言え 』ルアンさん、劇が始まりますよ』と

「劇？」

『意味はない。ただの合い言葉のようなものだ。間違っても早く行きすぎたり、遅れたりはそのな。』

ちなみに逆の側に挟んでいるのは、偽の密書だ。盗もうとする輩が登場するやもしれぬから、そのための用心だ。ゆめゆめ混同するなよ』

「これか！ よし分かった！」

会話が進むのに介入することもできず、呆然と応酬を見守っているうちに『声』がフェイドアウトした。

話が終わったのを見ると、一旦家へ戻り長い仕事が入ったため家を留守にするかもしれない、と母に告げた。これまで何度か家を長く空けたことはあったし、襲撃もないここなら、食料は山ほど買ったためであるため家をでられない母も生きていける。

それでも話しながら、後ろめたさをまざまざと感じていたところで、なんとヘルガベルトがのっそり家内へ入ってきた。

「おう、ここがぬしの家か！ いい家だな！ がはははは、ご母堂、我が輩がクークス君と一緒に仕事する者で……」

髪の毛を引っ張って戯れ言を止めさせる。下手なことしゃべられる前に、思い切り尻を蹴飛ばして屋内へはじき出した。

「まあ、そうなのクー。お世話になります」

ヘルガベルトが外に放り出されたことに気づかず、寝台の上でお辞儀がなされる。

「準備はできているの？」

「うん。する」

手早く荷物をまとめ　　といつてもたいしたものではない、武器や服くらいだ　　母にいろいろと言いつつ残す。

「分かつてると思うけど、なにかあつたら隣の家に助けを呼んでくれ。食べ物はその戸棚に入ってる。来客は無視していい。なるべく早く戻ってくるけど、なにぶん急に入って急に出発しなきゃいけない仕事だから、終わりがいつになるか分からない。その分、前みたいに金はたくさんもらえるとと思うから」

「分かつてるよ。おまえは気にせず働いておいで」

強張った顔に笑顔を浮かべる母に、一瞬なにか熱いものが喉までせり上がってくるのを感じた。なんとか押しとどめ、じゃあ行ってくると短く言い残して家を出た。

「クー」

寝台から、か細い声が飛んだ。クークスはなるべく平静に応じた。「なに？」

どこか思い詰めたような表情を微少に変えるので、絞り出すように母は言った。

「無理しないでね」

「ああ」

できる限り別れは短く、簡潔に。どうせまたここに戻ってくるのだから。どこからか漂ってくる言いしれぬ悪寒を振り払うかのようにな、クークスは軽く頷くと家を後にした。

出たところで、邪険に扱われたにもかかわらず大口開けて笑うヘルガベルトが立っていた。登場したときから、身支度はすっかり終わっている。

「あれが母か！　いい母ではないか！　我が輩の母なんてなあ・・・」

「行きましょう。ローウェンに続くルートは複数ありますが、最短

なら赤の道を辿るといいでしょうね」

言いつつ、さっさと歩き出す。後ろから大きな足音と野太い声が飛んでくる。

「無視か！ 我が輩相手によくやるなあ！ ところでぬし、フェノイア王子の顔を知っているのか！？」

「知らないですよ」

「我が輩もだ！ なんだ、奇遇だな！ ではなくて！ ではどうやって捜すのだ！？」

「知りませんよ。探し方が分かってるなら、とっくに見つかってるはずでしょう」

「む！？ がはは、それはそうだ！ しかし王子様捜してどうする気であろうか、サリヴァ公は！ おおかた人質にでもとってローウエンと交渉し、王子引き渡しを代償にローウエン国の領土を一部割譲してもらおうとか！？」

「知りませんよ」

「俺たちが会う男というのは、いったい何者なのだろうな！ どんなやつなのだろう！？」

「知りませんって。あのですね、俺は……」

ヘルガベルトは、ごしつと顎をしごいて、クークス言葉を無視するように接ぎ穂をつむいだ。

「実は我が輩、ローウエンに行ったことがなくてな！ 現在王政を敷いているのは、誰であったか、確かラムとかハムとか！？」

「……レムという、元黒星大將軍ですよ。国王の信任も厚かったのですが、クーデターを起こして国を乗っ取りました」

仕方なく説明を加えると、ヘルガベルトはむっ！？ と鼻息荒く唸った。

「ひどいやつだなあ、恩を仇で返すとはこのことだ！ よし、ならばいっそうその不埒者を成敗してやらねばならん！」

「目的を変えないでください、おっさん」

「おっさん！？ 我が輩はまだ四十だぞ！」

「おっさんですよ十分。俺たちの目的はあくまで王子捜しと密書を届けること。レムを打倒するなんてそれこそ目的外にもほどがある」「それもそうか！　しかしローウェンに行くのは決まったことだし、ちよつと首都の方で観光してもよからう！　なんせあそこは演劇の都だからな！」

クークスが言い返そうとしたところで、ヘルガベルトは唇をすばめて眉根をぎゅつと寄せた。

「そういえば確か、王子は乳母とともに逃亡したという話ではなかったか！？」

「え……ああ」

どうにもペースを狂わされるな、と思いながら嫌々記憶をほじくり出す。

「そういえば、シラーファという名前の乳母が一緒だったとか。当時王子は一歳だったらしいから、付き人がいてもおかしくないですよ」

そうだよな、そうだよな！　とヘルガベルトは突然興奮して手を叩き始めた。頼む、辞めてくれ。いろいろと痛い。

「なら、いつそ王子よりその乳母を捜す方に専念すればよいではないか！　おお、我ながら名案！　うむ、乳母の顔ならローウェン中に貼ってある手配書にも似顔絵が描かれているだろうし！　それを見物しに行くという意味でも、ローウェンへ行く意義はあるな！」

「いや、でも……王子と行動を共にしている可能性は低いでしょう」

シラーファという人物の性格次第だが、本気で王子を守りたいなら彼女は自害でもするか、そこまでしなくても王子とは別行動を取った方がいい。なんせ似顔絵付きの手配書が回っているだろうから、共にいたらその少年こそ王子という証拠になるからだ。王子ひとりならば、自分から名乗りでもしないかぎり、本人と特定するのはかなり困難だ。

というような趣旨の内容を包括して、それとなく苦言を呈したつ

もりだったが、どうやら巨漢の耳にはまるで届いていなかったらしく、自らの思いつきに満面の笑みを浮かべていた。

「よし、これで行こう！ 我々はローウェンで密書を届け、乳母の似顔絵付き手配書を見て、ついでに名産品の鱒でも食おう！」

「結局それがやりたいだけじゃないですか」

冷静ながら苛立ち混じりな声でクークスが突っ込んだときには、ヘルガベルトはずっと前を進んでいた。ため息を漏らしながら、まあ先輩だしな、と諦めつつその後ろに従った。

ミューズ（8）

壺をかぶったままでも戦えるのかという心配は、なめらかな動きを見てすぐに粉碎された。名無しの迅速さは、壺の重さやそれ以上に障害となりうる視界のなささえ感じさせないほどに流麗だった。

目の前の巨人の胴が断ち切られる。まさしく一刀両断。そのまま勢いを殺すことなく、右へ回り隣の巨人の肢体をなぎ払う。

瞬時に二体。あまりの早業に、目が追いつかない。

「後ろ気をつける！」

突然、声が飛んだ。えっ！？ と思つて振り返ると、巨人の腕が迫ってきていたので、ちょこまかと股をくぐつて逃れる。それにしても物音だけで分かったのか。どんな耳してるんだらう。

「うらあ！」

名無しが跳躍して、左の一本で巨人の頭部をたたき割り、もう一本で隣の肩口に切り込む。だが今度はミューズが叫ぶ番だった。

「危ないっ！」

残り一体となった巨人が、緑色のぬらぬらとした液体をまとう長い腕を名無しに向かつて振るっていたのだ。察していたのだから、振りかぶった姿勢のままでは避けきれず片方の剣で捌く。

「くそっ！ このデカ物……！」

劣勢を見て取ったミューズは、とつさに倒れた巨人の上に飛び乗る。靴が巨人の体液で腐るいやな音が一瞬だけしたので、慌てて隣にあつた木の高枝に飛びつき、そのままするとつぺんまで登った。

眼下では、一度受けに回つた名無しが、徐々に追い込まれていた。巨人の指をすべて切り落としたらしいが、これまで以上に俊敏な動きで巨大な足が迫る。

このままではまずい。左手の大きな壺を、ミューズはぎゅっと握った。

こちらを名無しにかぶせなかったのには理由がある。この中身には、森に迷いこんで以降、ミューズがずっと拾っていた、あるものがいっぱい詰まっていたのだ。

息を吸い込み、舞台でも出したことないほどに大声を発した。

「名無しい、すぐどいて！」

食らえ、蛇投下

ッ！」

蓋をはずし壺を放った途端。 。
うごめく無数の蛇が空中に身を躍らせ、巨人の肩や頭に飛び乗った。察した名無しが、驚いたように跳び退る。

青い鱗を全身に巡らせた蛇たちが、容赦なく巨人の体を蹂躪する。噛みつかれた痛みには耐えかねて、巨人は足を折るとその場に四つん這いから身を反転。しばらくその口からほとばしる絶叫があたりの木々をざわめかせていた。隙を見て名無しがいびつにゆがんだ頭を剣で貫くと、巨人は動きを止めた。

蛇はその表面をうねうねと、なおもうごめいていた。

「あ、あぶなっ！ でも助かったよ」

木から飛び下りると、頭、ではなく壺を掻きながら図太い剣を背中に収めて名無しが言った。

「それにしても壺ってそんな戦い方があったんだな。ふうん、暗器箱か」

「って、前見えてるの、それ」

「そんなはずないだろ。でも視界なんて五感のひとつだ。他の感覚をフルに使えば、いくらでも補える。気になるのは重さだけだ。それでも本当はお前追うため一度家に戻って剣を取って、ついでに覗き穴開けて来ようと思ったんだけど、急いでて忘れたんだ」

「へー、見えてないのにあんな動きできるなんてすごいわね。ところでちよつと声低くなってるない？」

「くぐもってるんだよ。それより褒めてくれるのはありがたいけど、早くどこか別の場所行こう。巨人が分泌している体液のせいで、この付近腐れちまいそうだから。巻き添え食う」

膝の草をはたき落とすと、名無しはミューズの手を取った。

自然と、この少年は暗殺者だという言葉が頭で点滅したが、さっさと歩き出した彼の手を素直に握りかえした。

離れた場所に来ると、名無しは両手を後ろに投げ出して脱力した。

「やれやれ・・・壺をかぶつての戦いなんて、さすがに冷や汗ものだ」

「あ、あの」

「ん？」

「ありがと。たすけてくれて」

勝手に逃げ出して勝手に襲われて助けられて、さすがに申し訳ない。ちよつと助力したくらいでは帳消しされないほどのことをやらせてしまったのだ。自然と謝る姿勢も上目遣いになってしまう。

軽く手が振られた。

「いいよ、別に・・・それで、これからどうするんだ？」

「え、えーと、いろいろ考えたんだけど森を出たらローウエンに行きたいと思ってる。首都のレーンバルグがく演劇と音楽の都って言われてて、王立劇場とかがすつごく豪華なの。役者にとってあこがれの場所だし、そこでどこかの採用試験でも受けることにするわ」

「たくましいな相変わらず・・・でも」

ミューズが顔を伏せて、少し名残惜しそうに言った。

「お前、軍海で暮らすつもりはないか？」

突然、なにを言うんだろう。びっくりして、思わず声を強く上げる。

「あるわけないでしょ、わたしは女優目指してるんだって！ いかは夢の大舞台、演目はくロメロとジュリエッタで、わたしはジュリエッタ。ロメロはえーと・・・」

ちら、と目の前の壺人間に投げかける。言葉を切ると、名無しは首をかしげた。

「なんだ？」

「な、なんでもない！ ロメロは別のすてきな男優！」

「別の？ まあ、いいや。そうか、ならそうだな……ローウエンまで送っていくか」

「え？ いいの？」

「俺も用事があるって話、してたる？ そのおまけだ。お、お前の安全も考えなくちゃならんしな」

なんとも齒切れの悪い口調だったので、さらに尋ねようとしたら、名無しはごまかすように手を振った。

「ほら、そうと決まればローウエン行くぞ」

「あんたはどうするの？ 着いたらいつしよに観光とかできないの？」

「……そうしたくないわけじゃないけど」

声のトーンがやや下がりが、これまで聞いたことがないくらいしおらしくった。しばらく沈黙の末、そつとか細い声が絞り出される。

「俺は軍海に根付いた人間だから、ここから出られないし、それに

この俺が無事関所を抜けられると思うか？」

最後は壺を指さしながら、冗談めかしての発言だった。なるほど、思わない。

「行程は途中の条件にもよるけど、二日あれば着くと思う。とりあえずキ・サンには見つからないようにしないと」

「あ、雑闘衆忘れてた。まあ入国しちゃえばこっちのものよね。よし、そうと決まればとりあえずローウエンへ出発ー！」

ミューズと名無し、ともに向かうは都市・ケールマン。

サリヴァ公領地の最果てに位置し、ローウエンへの中継地点としても機能している「軍海三大工房都市」のひとつだった。

クークス(8)

軍閥配下の暗殺者と正規兵というコンビは、当然軍海で、手配書
が回っているほどの強者たちでもあるのだが、大国の関所を通過
するだけならできないことはなかった。

四大国のうち極東に位置するローウエンに入るための十八本と本
道と、二十六本の脇道にある関所で求められるのは、通行料と、物
品及び人相の検査だけである。人相検査は大陸の四大国 北のガ
リアラ、東のローウエン、西のアツバース、南のロニオヘルト
間のネットワークで回る手配書に基づいて行われ、軍閥間の曖昧模
糊とした‘手配書’が参照にされることはない。つまり四大国のい
ずれかで犯罪が露見していない限り、軍海の間人であるうと入国す
ることは可能である はずなのだ。

「はずなのに、だ」

現在クークスは絶壁にいた。

誇張なく、少しでも崖の隙間に手をかけ損ねると、果てが見られ
ないほどに暗々とした谷底へ真つ逆さまだ。ちらりと下を見たクー
クスは、急いでとげとげしい岩肌が無骨にせり出した崖壁へと向き
直った。

「なんでこんなルートで侵入してるんですか！」

何度か死にかけたことがあるとはいえ、自らこうして死に行っ
たことはない。隣でひよひよいと信じられない速度で登りつつけ
ている大男は、がっはっはとむかつくような調子で大笑いした。巨
体に似合わぬ、恐ろしい軽功だ。

「これが一番安全なのだ！ まずこんなところから侵入するなんて
バカなこと、誰も思わん！」

自分がバカだと明言しているに等しい返答に、ここが死地という
ことを忘れて怒鳴り散らすしかなかった。

「普通に関所を通ればいいでしょうが！ それともあんた、大国で

犯罪でも犯しているのか!？」

「おいおい知らんのか! 我が輩は ガリアラの絶望 とまで呼ばれた犯罪者だぞ! ガリアラのタルイ高原で、ちょっとした乱闘をやらかしてな! 当然、手配書も回っているだろう! というわけでごういうルートを取らざるをえなかったのだ!」

「俺は正規の手順で入国できましたよ!」

「む!? ぬしまさか仲間を見捨てて行くつもりだったとか言うまいな! 最近の若人はとかく心が貧しい! ところでぬしの手配書は回ってないのか!？」

何度目かのため息の後、足場をしっかりと踏みしめて登りつつ、カラカラツと落ちていく小石の音に肝を冷やしながらも、そんなざいに応じる。

「覆面はいつもしてましたからね。大国じゃまず回ってないはずですよ。軍海では盛大に情報が流れているでしょうが」

「我が輩もどこへ行っても肉斬連刃の噂は聞いたぞ! 軍海で戦闘業にいそしむ輩で、ぬしの二つ名を知らぬ者もおるまい! もちろん、我が輩の ガリアラの絶望 もな!」

軍海での‘手配書’とは、もちろん紙に似せ絵が書かれたような丁寧なものではなく、カタチのない軍閥間の情報である。噂、と言ってもいい。四大国のソレに比べると曖昧とされていること限りののだが、なんせ無秩序の世界の、さらにその裏で働く暗殺者や隠密を対象としているので、やむを得ないというものだ。クークス自身、名前こそ広く知られているが、暗殺業ということでは仕事のとときには覆面にくわえ対象に忍び寄り両断して去る、ということだけを繰り返しているの、顔を見られていない自信はある。

五年前、自分の人生をいっぺんに狂わせたあの男を除いて。

「…………おっさん」

「なんだ!? それから我が輩はおっさんではない!」

「一指系って知ってます?」

「ウォルガのことだろう!? それがどうしたのだ!？」

あつさりとヘルガベルトが言ってきたので、クークスは拍子抜けした。

「軍海にいる間ほとんど名前さえ聞かなかったんですが、あいつは強いってか、有名……なんですよ」

「昔は結構な噂を聞いたが、強いらしいな！ 今は名前を聞かん！？　そういえばずっと消息不明だな！　そういえばあれほど強いと噂立っていた男が、憶測はともかく戦闘についての聞かんというのもおかしいものだ！　といつても情報はともかく、軍海で消息がはつきりしてるやつのほうが珍しいだろ！　我らが主だって、そもそも居城にいるという風聞だけが一人歩きしている状態ではないか！」

「それはそうですが……」

軍閥・サリヴァ公　黒海原の中途から東にかけて、軍海でも指折りの領土面積を有する、言わずと知れたクークスらの主人。誰が言い始めたのか知らないが、<軍閥四貴>のひとりにまで数えられるほどの大勢力である。

だが軍海の有力者としての位置を確保できたのも、つい最近のこと。少なくとも、クークスが知る限りそうだ。ここ四、五年ほどの間に、彼は数多くの軍閥に対し屈服、あるいは同盟関係の締結を強いた。

それぞれの軍閥が困窮したときを見計らったの和議の申し出、弱体化の兆しをいち早く察しての思い切った侵攻などなど。その大胆さとの確なタイミングは、まさに神業とも言えた。自らは表舞台に出ることなく、『声』を通じて指示を飛ばす、暗殺者上りの暗躍者。

「我が主は表舞台のどこにもいないのではなく。表舞台のどこにもいる　か」

いつだったか『声』から聞いた一言がクークスの口からこぼれ落ちた。それを耳ざとく聞き取ったのか、また考えに沈もうとしていた意識を、ヘルガベルトの野太い声が引きずり上げた。

「おい、もうすぐ到着だ！」

登り切ったところは、節くれ立った木が異様な暗さを醸し出す山中だった。急勾配にも程があるほどの斜面を得意の走法で駆け下りて、視界が開けた場所に出ると、眼下には集落の屋根がいくつも伺えた。さらにその遙か向こうへ目をやると、巨大都市と思しき風景がおぼろげながら浮かんでいる。

「おおお、すばらしい！ 天は我らに味方したぞ！ こんな辺鄙な場所に家があるとはな！ どうせあっちの都市まで行っていたら日が暮れてしまう！ 少し時間は早いけど、おたくの晩ご飯はなんですか！ というノリでさっそく民家へ突撃しよう！」

「やめてください。ゴーストまで、とは言いませんけど、もう少し進みましょう」

義務的に言いつつも、全身の疲労は相当なものだった。ここは、ヘルガベルトの説明によるとローウエンの南に位置する山脈らしく、首都はさらに北上しなければならぬらしい。こんなバカなルートを選ばなければ、と後悔してもしきれない。体力の無駄遣いとはこのことだ。

「残念ながら、我が輩はもうエネルギー切れだ！ バタン！」

口で擬音を発しながらヘルガベルトは大仰にその場に倒れて見せた。まあ、あれだけの時間、クークス以上のテンポで登っていたので気持ちは分からなくもない。クークスは軽く頭を抱えると、なんとかヘルガベルトを引っ張り起こした集落への道を下りていった。

だが、到着したある集落の状況は異様なものであった。二人とも家が近づいてきたところで、足が止まる。

「む！？ なんだあこれは……！！ 嵐の前の静けさ、つちゆうやつか！？ みんな死に絶えたみたいじゃあないか！」

隣でヘルガベルトが疑問深げに唸るのも分かる。訪れたその集落に家はあれど、往来に人影がまるで見あたらなかったのだ。夕方になりかけた時間帯にしては、不自然この上ない光景だ。クークスはその死に絶えたような村の光景に、首筋が粟立つのがわかった。

「ごめんくださあい！」

などと思考にふけっていると、ヘルガベルトはためらうことなく道の両脇にならぶ家のうち一番近い扉を叩いていた。もう注意する気にもなれず、呆れた顔で後ろに回る。

「なかに人がいる！ 話し声が聞こえているのだ！ しかして、誰も出てこない！ ふうむ、こりやどういうことだ！？」

「さてね……ん？」

何気なく道の先へ視線を送ると、一軒だけ扉がない家があった。

いや、あれほど粗末で手作り感あふれる家を、家と呼んでいいのだろうか。どう見ても貧民街から移転したようにしか思えない住居だ。その軒先にはこれまた貧相な縁台が置かれており、全身の頬肉がそげ落ちたかのような老人が座っていた。夕涼みでもするような格好で、今はこちらをじつと見据えている。クークスがひとり歩み寄ると、老人はカサカサに乾いた唇を薄く開いた。

「お若いの。何故 なにゆえ 死地へ来た。命が惜しければ、疾くと去るがよい」

なんのことが理解できず、クークスが問いかけようとすると、

「ご老体！ それはどういう意味です！？」

いつの間にかやってきていたヘルガベルトが、老人の庵を吹き飛ばさんかのごとき大声で訊いた。老人はもごもごと口先を動かし、不明瞭な発音をした。

「そのままの意味じゃお若いの。疑問の余地などありやせんよ。つい先日までに、この山の麓にあつた集落が、ワシらの集落を残して、すべて赤き悪魔によつて滅ぼされた。それだけのことじゃ」

「集落が！？ それはまさか、赤魔のレーザンの仕業か！？」

いつそうヘルガベルトがあげた大声に対し、老人はガラス玉のような眼球をぎよるぎよるさせて頷いた。その名前に聞き覚えがなかったクークスは、やはり黙ったままでいるしかない。

「そうよ。あのおなごじゃ。今晚か、明日の夜か……いずれ遠くない先に、間違ひなく最後のこの集落の番がくる。話が広ま

つたら、ある者は泣きわめき、ある者は荷物抱えて逃げ出した・・・
・・・だがなんせ他のやつらは口クに食べ物の蓄えもない。村も出られず、ただ死ぬのを待っているのじゃよ。家のなかで、愛する女房や寵児とともに最後のときをおびえながら暮らしておる」

「ではなぜご老体はこうして外へ!？」

「老い先短いジジイに、なにが怖いことがあるものか。若いおなごに殺されるのなら本望じゃて」

老人は骨張った顎を前後に揺らして、ひよっひよっひよと奇妙な笑い声を上げた。数本欠けた歯が覗く。ヘルガベルトはまっことに感服! と怒鳴った。

「ご老体、賢察恐れ入ったぞ! しかあし、寂しいことをおっしゃる! 若いおなごに殺されるよりも、若いおなごと一夜を共にしたほうが、まことに愉快であろう!」

なんか覚えがあるような会話の取り残され方だ、と思いながらもヘルガベルトの言葉に嫌な予感をひしひしと感じざるをえない。

「実は、我が輩とこの隣のクークス君は、その赤き悪魔を倒すためにここへやってきたのです!」

とか思っていたら、やつぱりとんでもないこと言ってくれやがったよこのおっさんは。

こちらが激しく地団駄を踏むのも構わず、ヘルガベルトは熱っぽく頬を真っ赤にして、大げさにも両手を広げた。

「この集落は誠に運がよろしい! あの女に焼かれた村々の惨状は今でもまぶたの裏に焦げ付いております! よし、では今晚にでもやってくる赤き悪魔を、我々が見事に返り討ちにしてしんぜよう!」

ミュージズ(9)

二人がケールマンが目に入ってきたとき、日はまだやや高い位置にあった。

市の関が見えてきたとき、まさか普通に通過するつもりなのだろうかと不安を覚えたが、さすがにそうではなかった。脇道にそれてそれで、人気がなくなったところに来ると、ガツとミュージズの右手を掴んできた。

「登るぞ」

と言っや体が空に浮いた。顔がガクガクと動くなか、視点が上がるのを感じながら必死に前を見ると、壺少年が信じられない身軽さで壁を駆け上がっていった。

「や、やっぱりふほーしんにゅー……」

「この顔で関所抜けられないって」

まあ、それもそつだ。

ケールマンは巨大な街だった。壁のてっぺんから一瞬だけ垣間見るだけで、それはよく分かった。

抱えられた、音もなく着地。

カンカンとあちこちの工房から聞こえてくる、熱した金属を叩く音に耳を傾けながら、大通りをぶらぶらと名無しに従って歩く。工房都市という異名のとおり、ほとんどがいかにも職人住宅と思われるような、無骨で簡素な造りの家が果てまで並んでいた。

少し前を歩く名無しが、ふと思いついたように呟いた。

「ところでどうして走法を会得してるんだ？」

「は？ なんのことよ」

思わず聞き返すと、今度は意外そうに名無しが肩をすばめる番だった。

「走り方がく疾風千変>だったじゃないか。内功も外功も申し分な

かったし、いつたいつ覚えたんだ？ それも劇団で？」

「え？」なにを言ってるのだろう。「さっきまで、わたしソーホー使ってたの！？ し、知らないわよ！ たぶんわたしが天才だから無意識に体が覚えちゃってたのね！」

困惑しつつも威張ると、名無しはそうか、と小さくこぼしてから、また口調を歯切れのいい明朗なソレへと戻した。

「この都市はサリヴァンにとって重要な武器製作都市でもあって、重宝されてるんだ。もっとも公に武器を提供しているのは、秘密裏に依頼を受けた数件の工房だけだな」

「サリヴァンって誰？」

「俺が仕えていた軍閥で……自分の住んでる地域を治めている軍閥の名前くらい覚えてとけよ」

あきれ果てたように頭を振られる。その頭には、深くフードがかぶせられていた。壺全部を隠すことはできないが、少なくとも大半は隠れているので怪しさは半減している。それでも道行く人々がときどきこちらに目をやっては、ひそひそと口元を押さえているが。

「劇団員としてあちこち巡業してきたから、定まった場所に住んでいたわけじゃないのよ」

十三歳の時、女優になろうと決意して軍海のあるところをさまよい歩いた。すべては女優になるために。役者として有名になって、舞台に立つために。そう、そのために、この二年間わたしは生きてきたのだ。

そのため、だけに？

「どうかしたのか？」

目の前にいつのまにか壺のつるつとした表面があったので、思わず飛び上がる。心配そうな声が続く。

「疲れたか？」

「ち、違うわよ、ただちょっと立ちくらみが。それより、あつ」

頭に浮かんだ、彼女の根底を揺さぶるようなひとつの疑問を振り払うかのように話題を変えようとして、視界の端に屋台が映った。

急いで走っていき、二つ焼き魚を買った。またキ・サンが登場しないか、とひやひやしながら名無しのところに戻る。

「って、あんた壺あるから食べられないじゃない！ 食事どうするのよ！ 下から入るかしら」

「バカ……いいよ、あとで食べ方は考える。それよりどうする？ 案外早く着いたけど、ここでもう泊まっていくか？ 正直、疲れてるだろ」

凶星を言い当てられ、うっと言葉に詰まる。事実、慣れない

けれどもなぜか体が覚えていた 走法を使ったためか、足はむくんだようにふくれあがっている。いよいよ筋肉少女というあだ名が板についてきたみたいだ、と悲しくなる。

「う、うーんと。そうしてもらえるとありがたい」
じゃあ宿を取ろうということになった。

……これが難儀した。というか、無理だった。

「なんでひとつも宿屋がないのよ！」

都市を二周した末、ミューズはもうすっかり人通りが減った通りの中心で叫んだ。

「仕方ないだろ、工房都市なんだし。って言ってもまさか、一件もないとはな……」

こちらにも参った、というように呟く名無し。

「そりゃ確かに民家と店と工房だけだったけどさ」

途中、右手に巨大な円形闘技場らしき建物があったけど、あれも宿じゃないだろう。そんなものを造るくらいなら、宿屋のひとつくらい建ててほしいものだ。

「仕方ない。野宿だな」

「なんで都市に来てまで野宿しなくちゃならないのよお！ こうなったら一軒一軒民家と交渉するしかないわ！ 名無し、剣を出して！」

「お前脅す気だな!？」

夕日がだいぶ沈みかけ、山の端まで至ろうかというとき、二人が路上でわあわあと言い合いを続けていた。

そのとき。

「もし」

「「はい？」」

「あの、よかつたらうちにお泊まりになりませんか？」

二人同時に振り向いたその先に、よれたエプロン姿の女がいた。工房で用いていたものだろうか、エプロンはあちこちが汚れて黒ずんでいる。顔を見ると年齢は三十代くらいか。頭に頭巾をかぶり、その下にある顔は垂れ目で、どこか気弱そうな表情が浮かんでいる。「あ、お気持ちはありがたいんですが」

「泊まらせていただきまあす！」

「警戒しろよ！・・・あつ、いえ、すいません、別におたくを怪しいと言ってるわけじゃなくて・・・」

ミュージズの後ろで隠れるようにしていた名無しの失言に、女は苦笑して穏やかに言った。瞳には優しそうな色があふれている。

「いえ結構ですよ。お気持ちは分かります。でも怪しい者じゃありません。お話は聞きました、泊まる場所がないのなら、本当に遠慮なさらず」

「・・・いいんですか？」

前が見えていない名無しも、善人オーラ全開の口調を聞き取ったのだらう、少し疑わしそうな声音ながらも、素直にそう尋ねていた。「ええ、どうぞ。実はこの都市に来られた方をお泊めしたのは、初めてではないんですよ。どうせもうすぐ、どの家も外からのお客さんを泊めることになりましたし」

招き入れられた女の家は簡にして素という感じだった。そのまま樹木から切り出してきたような木製の卓と、その脇に並べられた丸太椅子。左が勝手となっており、火を起こすための火打ち石や刃物が並べられている。

「座ってください。私はアライといいます。今お茶を煎れますね」
にこにこし続けている女に向かって、ようやくミュージズも警戒心らしきものが胸にもたげた。だが名無しが素直に腰を下ろしたので、それに続く。アライはお茶を入れたマグカップを、二つテーブルに並べた。直後、フードをとった名無しの頭を見て、目を白黒させた。

「あ、あの失礼ですが、どうして壺を……?」

「話すとき長くなりますが、簡単に言えば取れなくなっちゃったというわけです。俺のぶんのお茶は気にしないでください。こいつが飲んでくれますから一晩眠らせてもらえればそれだけでありがたい。

明日にはここを出ます」

「いただきます!」

アライはまだぼかんとした顔で見つめてくる。すっかり喉が渴ききつていたミュージズがお茶を一息で飲み干していると、名無しが左右に首を回して口を開いた。

「陶芸家なんですか?」

「分かります? いちおうセンサーシア式の大壺をやっているんですが。扉の反対側が店と工房になって、そこで作ったものを売ったりもしています。」

アライはちらり、と部屋の隅の方から伸びている細く暗い廊下のほうを見やった。おそらくそこに工房があるのだろう。ミュージズもつられてあたりの壁を見渡すと、なるほどいくつかの壺が地面に無造作に積まれている。

「自己紹介がまだでしたね。コイツはミュージズって言います。俺は名前がないから……」

「名無しって呼んでますよ。お好きにどうぞ」

口を差し挟んだので、おそらく名無しは渋い顔をした。その様子をへへ、と笑いながら瞥見する。

「あの、ところでひとつお訊きしたいんですが」
不意に名無しが切り出した。

「さつきこの時期には人を泊めることになる、って言っていました、それが……」

「あ。近々ここで大きな武闘大会があつて、いろんな人が他の地域から人が来るんですよー」

「そつか七色大会……もうそんな時期か」

思い出したように呟かれた言葉に、アライもそちらに目を向けて何度か目を瞬かせた。ミューズが理解できていないのを敏感に察したのだろう。

「七色大会は三年に一度行われる武闘大会です。そう歴史はありませんが」

なるほど、その手の腕自慢大会なら、軍海でも珍しくない。軍閥が運営をする「公式の」大会もあるくらいだ。言うまでもなく使える戦士を発掘して手駒とするためである。だから軍閥運営のものは、ときに激しい妨害工作や八百長まで起こるといふ。

この大会はちよつと特殊なんです、とアライは続けて、

「主催者が軍海内の全工房都市なんです。決闘場所の建物があるのはこのケールマンと、それから中央付近にあるアガベス、そして南に位置するジオルジャーという三つの巨大工房都市で、毎年交代で選ばれます」

名無しが小さく頷いて、説明を継いだ。

「この大会が特殊なのは、工房都市に住まう武器職人の推薦を受けた者だけが出場できる点だ。選手はその職人が作った武器で大会を勝ち進んでいく。勝利条件は相手が降参するか、戦闘不能にすること。つまり殺してもいいってわけだ。」

決闘大会と銘打ってはいるが、半分は職人の宣伝大会ってわけさ。決勝までいった選手が使う武器は、一躍評判が上がるってこと。無論、逆も然りだが」

「そう言われては身も蓋もありませんが、事実ですよー」

「へえ」

分かったような分からないような、とにかく曖昧に頷いた。

「それで優勝賞金は百万メルクマールということにして、共通貨幣ですから四国独自の貨幣に比べて価値は落ちますが、立派な大金ですし。これも魅力ですねー」

「ふーん、ひやくまんね……百万!？」

アリーの言葉に、唐突に腰を浮かせた自分の隣で、名無しの肩がぎくつと言つように跳ね上がった。

クークス(9)

「説明を頼みます」

ぞんざいに尋ねると隣の茂みで、絶対に体全体を隠して切れていないであろう大男は通りに視線をやったまま、

「うむ！ わかりやすく言うのだ、今夜やってくるであろう軍海の姫君を返り討ちにしよう作戦を、我が輩とぬしが実行中ということだ！」

「ゼンツゼン分かりません」

「残念だ！ ぬし、バカだったのか！ まさか軍海の姫君のことも知らないのか!?!」

「有名なんですか？」

「軍海、四大国問わず虐殺と高笑いを繰り返す小悪党でな！ まあなんの因果があつてかは知らぬが、あちこちの集落や村を潰していつておる、いわば愉快犯だ！」

そんな輩を小悪党という一言で片付けるあたり、ヘルガベルトの実力の一端をうかがい知ったような気がした。底知れない男だ。月明かりに照らされて薄く輝くごつい顔が、少し愉快そうにゆがむ。

実際、喜悅しているのだろう。軍海の裏世界に生きる者は、だいたいにおいて戦闘狂ばかりだ。強敵の登場となれば、心躍らぬわけがない。

夜半。夕刻に太陽がうつすらと空に滲んでいた頃でさえあの寒々しさだったのだから、今の空疎さは言うまでもない。あの老人も「わしは寝る、寝台であのおなごを迎えて死ぬわい」と助平丸出しの言葉を残して、家へ引っ込んでいる。

ヘルガベルトはなおも村の通りにじつと興奮混じりの視線を注いでいる。

「どこの軍閥に与しているということもなく、軍海よりどちらかというところアラヤロニオヘルトなんかで悪事を働くことがおおいか

らな！ 知らないのも無理はないかもしれん！」

「姫君っていうくらいだから女ですか」

「目が覚めるような美人らしい！ 会えるのなら、ぜひ遭ってみたいものだな！ ……冗談だ！ がははは、なんだその、お前が言つと冗談とは思えないんだ、つて言いたげな顔は！」

一言一句正しく心中を察されたので、なにも言つこともなく頭を振った。

それにしても説明が正しいとするなら、これから出くわすかもしれない相手は相当に凶悪な輩には間違いなさそうだが。

おっさん独りで間に合いそうなら加勢する必要もないか。

この手のかぶき者はいくらでもいる。軍海に根城を置いていないことが少し特殊だが、いずれにしろ鍛え上げられた戦士にはかなうはずがない。

任務から大幅に外れているため、やる気なさげにぼんやりとそんなことを考えていたが、しかし次のヘルガベルトのセリフがクークスの心を完全に反転させた。

「そういえば、女ばかり集めた戦闘集団〈女郎蜘蛛〉の名は聞いたことがあるだろう！？ それを結成したのもあやつと言われている！ どうもあやつは軍海の女戦士に対して、異常なまでに求心力を發揮していてな！」

「じよろうぐも………？」

クークスの目が突如として見開かれたので、ヘルガベルトは驚いたように眉根をつり上げた。

「なんだ！ どうした！ ぬし、まさか女郎蜘蛛に入ってハーレムに浸りたいとも思っているのか！？」

戯れ言も耳を抜けていく。

女郎蜘蛛。まさかその名にここで出くわすとは思ってもよらず、顔が青くなるのを覚えた。

「あの戦闘集団を創始したのが、レーザン………」

「おう！ そうだ！ あまり知られていないことだがな！」

それを束ねるといふボスと会うことができたなら、もしかしたら、アイツの所在も分かるのか？

混乱する頭をそんな思考がちらりとよぎった瞬間。

「そこにいる殿方たち。出ておいでよ」

怜悯な声が空を裂いた。

はっと顔を上げたその先、とある家の屋根の上で満月を背負うようにして立ち、こちらを見下ろす人影があった。逆光で顔こそうかがい知れないが、女であることは間違いない。

「フン、なにサ。女ひとりをも男二人で闇討ちしようって腹だったのかい？」

いくらか迷った後、なにか言おうと口を開きかけたとき、なんとヘルガベルトはあっさりと茂みから通りへと出て、呵々大笑した。

「がっはっは、これはとんだ御挨拶だ！ 闇討ちは失敗だぞ、肉斬連刃！ ここまで言われた以上、騎士たる者は一対一で戦うしかないな！ よしよし、死ぬ前によく聞くがよい麗しの姫よ、我が名は」

「ハッ、そこにいるのは肉斬連刃だね。これはまたたいそうなお客さんだ。大物じゃないか」

ずっこける音がしたが、気にしない。前に踏み出して、クークスはいつでも剣を抜けるように気を配りつつ、天を仰いだ。

「あんたが赤魔のレーザンか」

「フン、そうだよ。そっちのニイサンはしってるけど、後ろのおじさんは誰だい？」

「ま、待て待てい！ おぬし、我が輩を知らんのか！」

ヘルガベルトが焦ったように割り込んできた。レーザンはその間にも天女を思わせる動きで、ふわりと落下してくる。ヘルガベルトが前に乗り出すと、突然服を抜き出した。仰天する間に上半身を裸にし終わると、なんとも形容しがたいポーズを取り始める。

「見よこの芸術的な筋肉！ たくましい顎！ 厚すぎる胸板！ さて、我が輩は誰だ！」

「知らないよ。どこの誰だって知るモンか」

「な、なんたる無知だ！ おい肉斬連刃、ぬしからもなにか言つてやれ！」

「無知はお前さんたちだよ」

わあわあと喚きだしたヘルガベルトの大声を意に介した様子もなく、レーザンは冷笑するかのごとく言い捨てた。

「この赤魔のレーザンの前に、素顔をさらすなんてサ。まさか無事生きて帰れるとも思ってるのかい？ 笑わせるねエ」

両手にはいつの間にか、二本一対の曲刀が握られている。一方を横に寝かせ、一方は立てて握るその姿は、<葉郷磊落>の構えである。クークスはあまり知識がない型だが、一分の隙もないのは見て取れる。

「だいたいガタイのいいノーキン野郎はかませ犬だって、相場で決まっているんだよ。だからサ そちらの殿方もニイさんも、おとなしくあたしの刀の餌食になりな！」

行動の開始は即座だった。レーザンは右足で踏み切ると、一歩ですべての間合いを詰め二人をいっぺんになぎ払うかのようにして、刀を縦横へ振るっ。

「ぬん！」

しかし 刃は肉を切り刻むことなく止まっていた。ヘルガベルトの両掌のなかで。

「え？」

驚きの声を発したのは、クークスかレーザンか。

見るとヘルガベルトは両足を軽く曲げて、正面から攻撃を受けきっている。刀を握りしめた巨腕がわずか動き、曲刀の刃はその名の通り完全に折り曲がってしまった。

この荒技には仰天するしかない。

「<樹折>！」

ニタリ、と大きな口から笑みがこぼれる。

「知ってるか姫君よ！」

他の二人が固まる中、ヘルガベルトだけは意気揚々と叫んだ。ただし口元を凄惨な笑みに歪めて。

「世間一般に流布するモノガタリとやらのなかじゃあな、先に飛びこんできた方はやられる！ 後手必勝だということを！」

曲刀を握った両手を思い切り引き、目の前の細身がつんのめる。

「<岩砕>！」

咆哮とともに右手が刀から離れ、レーザーの顔面に炸裂していた。曲刀を取り落とし、茂みを抜けながら遙か後方までその身体が吹き飛ぶ。

筋肉だけではない。恐ろしいまでに鍛え上げられた内功があつてこそ、なせるワザだとクークスは直感した。

「こ、この……」

素早く体勢を立て直そうとするが、それすら許さじとでも言うように、ヘルガベルトは丹田に力を込めて内力を巡らせると、全身に当たりをぶちかます。

「<鐵倒>！」

「ゲフ……」

もう一発、逆腕で拳骨をお見舞いすると、さしもの赤魔も抵抗できず身を折って吹き飛ばされる。鼻血をしたたらせながら受け身を取って、どうにか倒れないようにこらえているようだったが、両足はふらふらだ。

口から呪詛の言葉がはき出される。

「フン、こりゃとんだ……隠れ馬じゃないか」

「小娘が我が輩の<剛岩拳>に挑もうなど、それこそ百年早い！
せめて 軍海の女王 とでも呼ばれるくらい歳くって成長したとき
にまたやってこい！ 身の程知らずめ！」

「……あつという間、ですね」

力量差を示す一方的な暴行を目の当たりにし、当初の興奮をそれ

こそあつという間に醒まされたクークスは続けて、どうしますか、どっかの国の警吏にでも突き出すんでかと尋ねた。

「ゆっさゆっさと巨体を揺らしながら去りかけたヘルガベルトは飛び上がる。」

「ぬしは我が輩にもつかまれという気か！ 結局我が輩も犯罪者だ！ どうしても、というならぬしがいけ！」

クークスは後ろで動きもせず、ただ棒立ちするだけのレーザンに視線を送って、肩をすくめた。

「……遠慮しておく。なんか、可哀想すぎるし。おっさんの貫禄勝ちつてところだな。」

それにあんたに、訊きたいことがある」
レーザンがぴくりと肩を震わせた。

クークスの胸の内には、ひとつの少女の名が刻まれている。

五年前のあの日から、決して表には出さなかったものの、ウォルガ以上の執心をもって夜な夜な探し続けた、ひとりの少女の名が。

「あんたが編成した女郎蜘蛛に白い髪した、小指のないガキがいただろう？」

ケーティ・エルメシア。

それが何度も胸中で唱え続けた少女の名前だった。

ミュージズ(10)

「危険ですよ。下手したら大ケガじゃすみません」

アリーの説明にうつ、となりながらも、

「で、でもさ。ちょっとくらい。毎回大会で命を落とすのってひとり二人なんでしょ？ だったら……」

「だめだ。なんでそう軽く考えるんだ。絶対無茶する。だいたい忘れてるかもしれないけど、お前はキ・サンに追われてる身なんだぞ。名無しの断言にげつ、となりながらも、

「そ、それでもまだ先だろっし……」

「お前はあの性格がどれだけ気まぐれか知らないだろ。『がははは！ 約束は破るために、嘘はつくためにある！』とかなんとか言っつて追ってくる。アイツほど無責任なやつはしらないよ」

なんだか昔からの馴染みでもあるかのように語る名無しに対し、不満げにふうと頬をふくらませる。だが正論なのが分かりすぎるほど分かるため反論もできない。

賞金。

黄金に輝くこの言葉に引き寄せられ、早々と(名無しとアリーに向かつて)エントリーを宣言したものの、直後から猛反発にあい、わずか二分で意志は頓挫しそうだった。

「そもそも、どうして女優を目指すヤツが武闘大会で賞金稼ぐ必要があるんだ。金欠か？」

「ローウェンに着いても採用されるまではずっと収入なしよ。それに今の手持ちじゃちょっと……」

服のポケットをごそごそと探ろうとしていた手が、不意に止まった。

「……あ……あ

ッ……」

「な、なんだ？ 急に大声を出してどうした？」

「な、ない！　ない、ない、なあい！　なんで！？　わたしの袋！
お金を入れた袋があああああ！？」

「・・・・・・・・・・そうか、お前の服は俺の家に置いてあったな・・・・・・・・」

「気まずそうに壺を掻く名無しの言葉に、ふと自分の衣類を見下ろした。そうだ、これは名無しに助けてもらったとき、着させてもらった誰かさんの服なのだ。自分ではないから、当然入れていた巾着袋もないのだ。」

「サーツと顔が青ざめるのが分かった。全財産を失ったのだ。」

「なあにしてんよ、人の服を勝手に脱がせて服を放置して、その挙げ句置いてきたですってええ！？　あんたわたしと別れて一度家に戻ったんでしょ！？」

「でも、その、忘れてて・・・・・・・・・・」

「わ・す・れ・て・たあああああああ！？　うあああああん、これでわたしは一文無しよ！　どこかの壺人間のドジのせいで」「おい」「ローウエンについたらわたしは物乞いに早変わりするんだわ」

「おい」「よよよ・・・・・・・・・・、神はなんと無慈悲な。はっ、今、わたしは、もしかして、試されてる？　そうだわ、これは・・・・・・・・・・」

「お　　い、小芝居は止める」

「ん？　なによ。どうしたの、このど腐れ毒され人間。あんたなんかがま口に金玉挟まれて死ねばいいんだわ」

「あー、分かったよ」
見るに見かねたかのごとく、諸手を挙げて名無しは降参のポーズを取った。

「確かに俺が悪かった。服を脱がしたんだから、返さなきゃいけないよな。全く・・・・・・・・・・取ってくればいいんだろ、取ってくればだから大会に出るのは諦める。ついでに逆お駄賃をいくらかやるから、それでローウエンでは食っていけ」

「面倒くさそうに子どもをあやすような口調で、名無しは立ち上がった。しぶしぶと言った足取りのまま、扉へ向かう。」

ミュージズがその後ろで小さくガツポーズをかましていると、

「それにしても服を脱がせたのかよ……」

「ん？ なにか言った？」

「なんでもないよ。それじゃ、行ってくる。一応ここまでヤツは来てないと思うけど、外にはなるべく出るなよ。アライさん、こいつをお願いします。眼を離したらどこに行くか分からないので」

「ひとをイヌみたいに言うな！」

名無しが去ってから急に手持ちぶさたになったので、アライと顔をつきあわせ、しばらくおしゃべりした。

「で！ そこで名無しのぴーんちにわたしがガツーンと蛇の入った壺をぶん投げたってわけ！」

「へえ〜。ミュージズさん、強いんですね。でもだいじょうぶでしょうか名無しさん、そんな危険な森にまた戻るなんて……ふうわあ」

アライの大きなあくび混じりにつられて、ミュージズも大口を開けてしまう。すっかり夢中になっていたが、窓の外ではもうどっぴりと闇が落ちている。卓の上の脂も燭光もそろそろ限界らしい。

「すみませんがそろそろ寝ますね〜。ミュージズさんは寝室を使ってください。わたしは工房の方にある台で寝ます」

「いいよう、わたしが、そっちの台で寝るから……ぐう」

「お客さんですから、おもてなしは、しないと……そっちが、寝室の扉です」

「……ふあい、ありがとー」

のろのろと椅子から立ち上がると、ミュージズは示された部屋に入った。視界に寝心地良さそうにコーディネートされた寝台を発見すると、なにも考えずそこに飛びこんだ。

目が覚めた。

夜だ、と窓から注がれる月の光で判明した。ミュージズはとろんと

した瞳で上半身を起こした。

「…………ふあゝあ、名無しまだ帰ってないのかしら」

女の子らしくない大あくびをかますと、すぐに眠気が引いていった。軽く肩を回し、ふくらはぎを揉んでみる。昔から体力だけは自身があつたが、これも肉力とやらのおかげなのだろうか、移動による疲れやだるさもほとんど残っていないようだ。

一度目が覚めたら寝付けない夕子のミューズは、こうなると再び手持ち無沙汰だ。しばらく窓の外へぼんやりと眼をやっていると、空で煌々と澄んでいる満月から光を浴びた夜の都市の風景というのは、なかなか心動かされるものがあつた。

「散歩でもしよつと」

気楽に呟き、さすがに玄関から出るのはまずいだらうと思つて、引き窓を開けると、ひよいとそこから外に出た。

どちらかといえば大きめの都市であるケールマンも、表に人の気配というものはなかつた。でもいくつかの酒場らしき店からは、まだ喧噪と柔い明かりが漏れてくる。

石畳の目抜き通りを歩き終え、ちょこちょこ脇道にそれつつ、ミューズは考えた。

そういえば名無しに壺をかぶせたのも、こんな夜だつたつけ。ふふ、なつかしい。

こみ上げてくる笑いを小さくこぼす。ああ、そうだった。ずっとあいつの頭が壺になつた姿を見慣れてるが、実際あの下にあるのは、へらへらとはしているものの、小生意気にもキレイな顔立ちなのだ。思い起こすと、不思議と胸が温かくなる。会つたときから、ねーちゃんねーちゃん、ってわたしのことバカにしたように……………。びたり、とミューズの足が止まつた。

ねーちゃん？

不思議となつかしい響きがするのはなぜだろう。考えて、すぐに分かつた。あいつはいつからか、わたしのことを「ねーちゃん」ではなく「お前」と呼んでいるのだ。いつからだっけ……………。ミ

ユーズは口に手を当てる。確か、最後に「ねーちゃん」を聞いたのは。
いつの間にかミューズは都市の外周部にいた。上空には、市壁の向こうから張り出してくる黒海原の木々の枝がうかがえる。

その枝の隙間を、ふと紫色のなにかがよぎった。
と、同時にその声は聞こえた。

「なんじゃい、貧っしい胸じゃの。ワシのほうがあるんじゃないか？」

「ぎゃっ！」

いきなり間近で聞こえた声に、ミューズは肝を潰して飛び上がった。見下ろすと、背後から回された手が胸のうえにあった。その手は鶏ガラのように細い。

「な、なななにすんのよ！」

冷や汗も忘れて足だけを動かして、後ろへ蹴りを飛ばした。しかし手応えはなく、えっ、と思ったときには頬のこけた干物のような老人が目の前に立っていた。好々爺然とした顔にあるカサカサの唇から、ひよっひよっひよ、という奇妙な笑い声が耳に届いた。

「じゃじゃ馬じゃのう、若いの。ジジイに触れられたくらいで」

これにはミューズも怒り心頭だ。

「ムカツ！ 痴漢しといてなに言ってるのよスケベジジイ。っていうかあんた僧侶服を着てるじゃない！ なんて神職者がこんなことしているのよ」

老人が身にまとっていたのは、ただの紫色をしたボロ切れのようだったが、よくよく見ると、僧侶の服であることを示す肩口の白いラインが描かれている。ただ、正装という感じは全くせず、腕の部分と足の部分は大きくたくし上げられている。

「なるほど、目ざといの。若いの、ちよっところちへ来てみい」

また胸を触られる、と警戒するミューズはもちろん近寄ろうとし

ない。

「なあに、触りはせん」

「信じるか！」

張り手でも食らわせてやりたいのはやまやまだが、どうやらこの老人がただの人間ではないとさすがのミューズも察していた。たぶん名無しがいたらとくとくと説明してくれるだろう。

不満をとりあえず抑えてしまうと、続いて先ほど目撃した、背後にいた状態から目の前に現れた老人の尋常ならざる動きが思い起こされ、興味がわいた。

「お爺さん、じゃなかつたスケベジジイ。どうやって今、瞬間移動したの？　もしかして魔法？」

「たわけ。魔法なんぞこの世にあるかい。あんのもの、ワシでなくともちよつと足運びを学べばできる」

「たわけ？」

「バカ、という意味じゃ、たわけ」

ば、バカですってえ……と再び怒りの炎が燃え上がるが、老人は飄々としたままそっぽを向き、

「ま、お前には無理じゃろうがな」

ぷつつん、と頭の奥でなにか大事なものが切れた。

「ムツカー！　なに言ってくれてるのよこのくそジジイ！　いいわよ、やってみせるから、さっさと技を教えなさいよ」

「お前、本当にく迅風くができぬのか？」

初めて老人が、恐ろしく低い声を出した。ミューズは少しびくりとしつつも、威勢良く、

「できないわよっ。あのね、ジンプーだかなんだか知らないけど、名無しにしてもお爺さんにしても、どうせ軍海の裏世界とやらにいる人間だけが知ってるような知識を、常識みたいに言わないでよ」

「ふむ、名無しというと、あの頭が壺になった小僧じゃな」

ここで初めて、ミューズは別の意味でこの老人を警戒した。

どうやら名無しのことを知っているらしい。いや、それどころか

わたしのことも知っている？

「肉斬連刃はなにもお前には教えておらぬのか」

「わたしが頼まなかったのよ。っていうか、ニクギリレンバって名無しのあだ名じゃなかったっけ」

「見間違えるはずのないわい。ワシは眼だけはまだよいからのう。

大剣持ちであのくらいの背丈といえは合致する人間はそうはおるまいて」

ひよっひよとまた不気味に哄笑する。

やっぱり名無しを知ってる、と思いかけたが、そもそも名無しって裏の世界じゃ有名人とか言っただけじゃなかったっけ？ それなら別に怪しいことでもないんじゃないかとさらに自問自答を繰り返す。

珍しく、本当に珍しく思考に埋没しかけたとき。

「おい、バカ」

「バカじゃないわよ、このジジイ！」

「して、お前はバカだから、迅風のひとつもできんというわけじゃない？」

挑発だということすら分からぬミュージズは、頭の片隅に生じた思考をもみ消すと、噛みつかんばかりに力んで叫んだ。

「なに勝手に決めてるのよ。ふん、上等よ。明け方までにお爺さんのそのナンチャラを習得してみせるから。やってみるといいわ！」

売り言葉に買い言葉。言ってしまったから、あつとなったが、もちろん手遅れである

「ほう。では伝授しようかの。猿でも分かる、この足運びを。もしお前が会得できなければ、ワシはまた胸を触らせてもらおうとするわい」

「なに堂々とスケベ宣言してんのよ、このジジイ！……………」
あ、ところでお爺さん。なんて名前なの？ わたしはミュージズって
いうだけだ」

「ワシは、そうじゃの……………紫皇帝、とでも言うておくか」

クークス（10）

クークスがかつて自分の育った村を再び訪れたのは、現在の村に移り住んでから二月後のことだった。

道中、何度引き返そうと思ったか分からなかった。だがどれだけ押し殺そうともずっと胸にひっかかっていたケーティのことを思い、様子だけでも見ようと思ったのだ。もし自分のことを忘れて平穩に暮らしているならそれでいいし、今さら姿をさらそうとも思わなかった。

しかし到着した先に待ち構えていたのは、村人がことごとく惨殺されているという衝撃的な現場だった。

あまりの予想外の光景に、しばし思考が停止した。見知った家屋の大半は焼け落ち、いくつかの焼死体まで見つかる始末だ。

息を呑みながらしばらく惨状を見つめていたが、我に返りケーティの家へ飛びこむと、そちらもそちらで惨憺たる有様だった。家の者は皆、刃物かなにかで殺害されたく、生存者は皆無。殺害後には火を放つたらしい。隣接するように建てられている家が大半だから、風向き次第では一気に燃え広がっただろう。

しかし奇妙なことがあった。どことなく見覚えのあるケーティの両親らしき人物の丸焦げ遺体の他、その家内で死体は見つからなかったのだ。

もちろんそれでケーティが無事、という話にはならない。このことがなにを意味するのかは分からず、クークスは荒れ野と化した村の真ん中で途方に暮れるばかりだった。

ちなみに自分の育った家は、他の家から少し離れた場所にあったため、ほぼ昔のままだったが、正直こちらはどうでもよかった。家の前に立つと、壊れた扉と内部の様々な家具類が目飛びこんでき

だが、さしたる感傷もなかった。

村中をひととおり見渡し、ケーティらしき遺体がないことを確認すると、失意のうちに住処へ戻った。

その数日後、その村を襲った集団の名前を聞いた。

「女郎蜘蛛……。そいつらが俺のいた村を襲ったのか？」

『そうだ。最近我らが領内に姿を現している集団よ。行く先々で集落を襲い、物品の略奪や殺害にいそしんでいるようだ』

軍海でそんな荒くれ集団は決して珍しい存在ではない。むしろありふれているとさえ言っている。だからこそ村や都市や集落は軍閥の庇護下に入り、襲撃の危機から逃れるのだ。

『分かるだろう、肉斬連刃。この者たちをのさばらせておくのは、我が軍閥にとってはなほだ不名誉であるし、なにより存在そのものが害悪だ。既に正規兵による一個隊が討伐のため出陣しているが、なんせ最近出現したばかりで構成員がすべて若い女という以外、ほとんど分かっていない。故に、不確定要素が多すぎる』

若い女、というくだりに思うところがないではなかったが、とりあえず話を進めた。

「それで俺にどうしろと？」
『別に暗殺者であるお前に、討伐隊への参入を要請するわけではない。ただそうした者らについての情報がなにか入れば、すぐに報告してほしい』

その後、女郎蜘蛛がサリヴァ領内で確認されなくなったという話を聞いたつきり、『声』によりその一団に関する情報はもたらされることはなかったが、クークスはひとつの仮説を立てていた。

ミューズは攫われたのではないか　否、嫌な言い方だが、女郎蜘蛛に「助け」られたのかもしれない。彼女の遺体があ村にないのは、風潰しに探し回ったことからほとんど確信をもって断言できる。もちろん焼死体というのは人相の判別が難しいが、ケーティの持つある特徴に当てはまる焼死体はひとつとしてなかったのだ。

だがそう考えてみたところで、居所はまるで分からない。女郎蜘蛛

蜘蛛の動きはサリヴァ領内を出たらあとはほとんど情報として入ってこないし、無用な情報を与えようとしない『声』のスタンスは相変わらずだったため、口惜しかったが搜索は一度中断していた。

……しかし、今は違う。目の前でふらつきつつも立ち続ける赤毛の女は、その女郎蜘蛛を率いているという女傑である。だからこそ、この機会を逃さぬべくクークスは強い口調で問うたのだ。果たしてレーザンの反応は如実に表れた。なおもたたみかけるようにしたが、彼女の方が機先を制した。

「ニイサンは、なにを知ろうとしているんだい」

「銀髪のがきについて。ただそれだけだ。あんたが編成した女郎蜘蛛にいたるだろう?」

「フン、女郎蜘蛛ね」

レーザンは嘲るように流し目を送って、

「そんなものはとっくに解散したよ」

「なにっ!?!」

同時に叫び声をあげたヘルガベルトが、一転納得したように腕を組む。

「そういえばこのところ、噂は聞かなかつたな!」

「驚くことでもないさ。實際姫君なんて呼ばれてても、あたしは実年齢はもっと上だからね。歳なのさ。あの子たちをまとめ上げる自信がもうない」

「やけにぺらぺらとしゃべるな」

「言わなくてもどうせ後ろのおじさんが拷問してしゃべらせるだろう。痛いのは嫌だよ。それにあたしにとっては、もうどうでもいい娘たちだしね」

どうでもいい、と言う割にはレーザンの顔にどこか不安げな面持ちが浮かんでいた。

「だからあたしは知らないよ、そんな子はね」

「嘘だ。解散したのは本当かもしれないけど、確かにいただろう。」

お前のさっきの反応はなんだよ」

「……いたらどうなんだい」

「俺はそいつを捜している。たぶんそのガキは、あんたが襲撃した村で拾ってきたヤツだろう」

簡潔な答えに、さらにレーザーザンが言葉に詰まったような表情になった。だがすぐに吹っ切れたように顔をそむけ、

「そっだよ。確かに、いたね」

「な、名前は！ 所在は！？」

突如態度を豹変させたクークスに、レーザーザンはやや面食らったようだった。

「し、知らないよ。なんだいニイサン、いきなり鼻息荒くして。そればかりは、どんなに拷問されても本当に知らないよ」

それから小さくなにかを付け加えたレーザーザンだが、その独白は考えにふけていたクークスの耳に入ることはなかった。

「……そうか……なら、」

次なる質問を口にしたとき、後ろで沈黙を守っていたヘルガベルトがぬつと顔を突き出してきた。

「おい、ぬし。さっきからなにを」

「ああ、いや　って、おい！」

気が逸れた一瞬について、レーザーザンの細身が後ろへ飛んだ。あっという間にその姿は、闇の向こうへ消えていく。

「ぬつ！？　待てっ、逃げるか！」

ヘルガベルトが一步踏み出すのを、後ろから制する。

「どうせ捕まえる気もないんでしょう。最低限、訊きたいことは訊けましたし、もういいです」

「もういいって、ぬしなあ！？」

「……くそっ、女郎蜘蛛が解散されたっていうのが本当なら、一からやり直しだ！」

地団駄を踏むクークスと、それを不思議そうに見つめるヘルガベルトだけがその場に残された。

「ぬしがなにを捜しているか訊きはしない！　しかし我が輩だけに話してほしい！」

「結局知りたいんじゃないですか」

真顔で肩に手を置いてそんなことを言うので反射的に返してから、クークスはかぶりを振った。

深い宵闇のなか、しばらく二人は沈黙して立ち尽くしていた。ヘルガベルトが妙にそわそわしていたが、視界から消してしばらく物思いにふけた。

大陸で白い髪をした人間は本当に珍しい。さらに彼が知る、彼女のもうひとつの特徴についても尋ねようとしたが、逃げられてしまった。しかもう、これまでの話と頭領直々の情報を重ね合わせれば、ケーティが女郎蜘蛛に入団していたことは間違いない。そう結論づけて問題なさそうだった。

けれど杳として行方が知れない人間を、黒海原で捜し当てることなど、とてもできそうに思えなかった。

ハルレオン教会は、王宮の敷地内にある建築物である。巨大な鐘から響く清涼で甲高い好音は、首都のみならずその近辺の都市にまで鳴り渡るといふ。

これと同じ鐘の音を出す教会は国中に散らばっており、ローウェン国民はこの鐘の音で朝を迎え、昼飯を取り、床に就く。

そのラーン、ローンというワンセットの音が鳴り始めたのが耳に入ってくると、クークスはほっと吐息をついて、尻餅をつきたくなかった。疾風万里の最高速で走り続けたため、足はパンパンにふくれあがっている。隣のヘルガベルトもさすがに額に汗をびっしょりと浮かべているが、顔だけは朗らかだった。

翌日。集落総出での感謝の声を背中で聞きつつ集落を後にした二人は、最高速で走り続け、なんとか指定時刻ギリギリにゴースラムへと到着した。まさに滑り込みである。

「がはははは！ 見たか、聞いたか、敬ったか！ 我が輩の予言は当たったぞ！」

「それより、はやく宿屋を……」

「うむ！ 三角盾と四角槍 だな！」

この無尽蔵なスタミナには、確かに敬意を払いたくなくなった。よろよると足を引きずってヘルガベルトの広い背中についていくうちに、二つ目の鐘が終わる。まずい、と思ったとき突然大男は素っ頓狂な声を上げた。

「や！ 見つけたぞ！ 特攻だ！」

少し離れたところで肩越しから見ると、なるほど確かに三角形の盾と槍を正面から描いたらしき四角形が刻まれた看板が掲げられている店が、金物屋と古物商に挟まれていた。縦に長い、宿屋というにはへんてこな建物だ。

二人が宿屋に入り、上階へ続く階段を上りきったのは、ちょうど四つ目の音が鳴り終えたときだった。

右手、奥から二つ目の扉。前に立つと、ヘルガベルトの拳が、三度扉を忙しげに叩いた。

「ルアンさん、劇に遅れますよ！」

言葉が終わるか終わらないかというところで、いきなり扉が引かれた。

「申し訳ございません。少々取り込んでいまして、部屋に入ってお待ちください」

現れた男は、ごく紳士的な口調で告げて、二人を内へと招き入れた。髪の毛はツンと立ち、なんだか野性的だが、それ以外の所作などは洗練されたもののように思われた。全体的に細身の若者で、両目には朗らかに微笑をたたえていた。

ヘルガベルトがのっしのっしと部屋に入る後ろで、クークスも扉をくぐろうとしたとき。

室内で椅子に手を置いていた男の瞳が、こちらを捉えかと思うと、

刹那、全身に電撃が走ったかのように、体が硬直してしまった。

その薄く笑う顔に、ほんの寸陰ほどではあるが、ハッキリと燃えさかるほどの激烈な嫌悪の色がにじみ出ていたのだ。

ミュージズ（11）

「じゃ、ムラサキさん。さっそくアレを教えてちょうだい」

紫はともかく、いったいどのへんが皇帝なのか、突っ込みも兼ねて説明を求めてもよいところだが、それはさておきミュージズは鼻息荒く尋ね込んだ。なんとしてもこのスケベを見返して、ついでに金玉ひとつ蹴りを食らわせたものだ。

老人は満足そうに頷いた。

「よしよし、そう焦るでない。その前にひとつ聞いておきたいんじやが、嘘偽りなく申せよ。内功・外功については知っておるな？」

「えーと、名無しが言ってたような。確か内力を体内で運用するのが内功で、体外で運用するのが外功？」

まあそれで正解なんじやが、と老人は語尾を継いだ。

「実際頭で分かってても、それだけでは意味がないんじや」

「頭でも分かってないんだけど」

「本当か？」

なんかまた老人が食いついてくる。実際、内力を使うといつてもミュージズはまるで具体的になにをすればいいか、知らないのだ。ただ、

「ただ、体ではなんとなく分かってるっていうか………染みこんでいるっていうか」

「ほうほう。それは興味深い」

小さく独りごちた老人の瞳に、どこか怪しげな色が光ったような気がした。

「ならば改めて説明しようかの。内力はすべての武芸の根っこなるものじや。これが使えんなら話にならん。どれ」

老人は、いつの間にか顔があたりではないか、という距離まで来て（また瞬間移動だ）彼女の腹をぼんと叩いた。

「丹田に力を込めてみい」

言われたとおり、ミューズは顔を赤らめながら力を入れた。

「む、むむつ、むゝむむ」

「ほう。一応、不格好じゃができておる。やはり基礎は覚えておったか。では話に戻ろう。便詰まりのような声はもう止めてよいぞ。

軍海、四大国を問わず、この世で振るわれるすべての武術には型、というものがある。どれだけ自由気ままに拳や刀を繰り出しているように思えても、必ずその使用者の中では打つ順番、タイミング、威力などのルールが細かく存在するものじゃ。〈肉斬殺法〉にしる、〈雁木総雷法〉にしる、〈白蛇男殺剣〉にしる、なにかしらのパターンがある。さらに、今挙げたものは個人がいずれも編み出したものだが、さらに由緒正しいものとなると流派が形成され、その門弟が技を受け継ぐ武術もある」

すぐにでも動き方を教えてくれると思っていたのに面白くもない説明が始まったので、ミューズはじれったくなくなった。

老人はそこで、なぜか少し意外そうに言葉を切った。不思議に思っただけ口を入れる前に、またしゃがれた、しかしよく通る声が響き出す。

「しかし、この世にあるあらゆる武術というのには、さらに大本となる型がある」

「すべての基礎になっている武術ってこと？」

バカにしては分かっているな　と、老人は笑う

「たとえば疾風千変。これは絶対に知っているはずじゃが、これなんぞが、『すべての基礎になっている』という武術のひとつじゃ。

ごく基本的な走法じゃが、これを会得していないとまず他の走法への変化ができません。これ以外にも、壁走りの〈高馬鳳凰〉や、先ほどの迅風もそうじゃ。

これら二十六拳手三十投足八体功　礎となる六十四の技は、〈寶葉六十四般〉と呼ばれておる。ここからどれを応用し、どれを捨て、どれを型どおり取り込むかはそれぞれの流派や各々の武術ごとに異なってくる、というわけじゃ」

「へ、へー」

早くその迅風とやらを教えなさいよ！ ご託はいいから！
と思いつながら、また胸をタツチされるのは嫌なので、口には出
さない。

悶々していると、色ぼけジジイはとんでもない一言を口にした。

「というわけでお前、六十四般をすべてやってみるんじゃ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハイ？」

「まず走法から、いやいや、それはまずいのう。まず手業か。＜指
眼突＞あたりからでどうじゃろうか」「お爺さん」「おう。感謝し
たいのじゃろう。分かるぞ、いくら軍海広しといえども、六十四般
すべてを知る人間などワシの他に四人とおるまい」「ジジイ」「そ
のうちのワシとこうして偶然出会えたのも、なにかの縁じゃ。授け
てしんぜよう」

「話を聞けこのエロジジイ

「！

「ではまずく丹田破騰＞から行くとするか。体功の一番基本だから
な」

柳に風、とは違つのだろつが、まるで意に介した様子もない。と
いつか端からこちらの存在など眼中にないかのごとく、老人は地面
にあぐらをかいた。

「ぐつと力を強く、長く腹にこめる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

逃げようか、素直に従おうか、考えるまでもなくミュージズは渋々、
老人の後ろ脇に腰を下ろしていた。どうせ逃げるまでもなく、捕ま
るのは目に見えている。いくら彼女でも、老人から漂う強者の空気
というのは感じ取っていた。ここは老人の気まま勝手に巻き込ま
れた方が得策だ。

「呼吸を吐きながら経脈を循環する気をイメージするのじゃ・・・・
・・それが、内力じゃ」

まったく乗り気でなかったから、実にいい加減な姿勢のまま、言われたとおりにしていたが、やがて頭のとっぺんがぼうとしてくるのを感じた。

慌てて熱を払いのけるべく頭を振ろうとすると、

「動くな！ 止まれ、動くな。ただ腹に力を込めて、思うだけじゃ。たとえ幻惑が来ても、意識が飛びそうになっても、ギリギリで踏みとどまれ」

簡単に言ってくれるが、まるで体が追いつかない。全身の細胞ひとつひとつが陶酔に包まれていくかのごとく、体の芯が熱くなる。

これは眠りつていうか、これほとんど気絶しかかってない！？ とどこか遠いところで考えているうちに、ぽんと肩がたたかれ、一瞬にして頭の霞が消え去った。

「もうよい。やはり丹田破騰を会得しておらん。よし、次じゃ」
呆気にとられて、ミューズは老人を見上げた。習得していないのを、どこか予定通りとでもいいような言い方だ。

「っていうか習得してないのに、次に行くってどういうことよ。あんたが授けるんじゃないの？」

「あ、あのね。わたしはその迅風つてのだけでいいって……」

「次に<天狼座樹>。これは天をも駆けるという狼が、ひっそりと荒野の戦場から身を隠し、身を休めていたという故事から来たものでな。気力と、ま、気休め程度じゃが内傷・外傷の回復のためにかかせぬ体功じゃ。よし、仰向けに寝る。腕を投げ出し、足を開いて・

・
・
・
・
・

結局、茶番につきあったのが間違いの元だったのだろう。老人の指示のとおり、次々と六十四般に名を連ねる技を実践し、習得してないものに関しては即座に終わり、体が覚えていたものにはできるところまでやらされ 気づけば、太陽が空の隅に顔を出していた。

ここまで十六般。ミュージズの体に染みついていたのは、そのうち五つ。だが正直、そんな事実すら飲み込めないくらい、ミュージズの頭は疲労していた。

息を途切れさせつつミュージズは倒れるようにして、大の字になった。

こ、これ、壺操の練習なんて目じゃないくらい、きつい……
……っていうか、もう、ダメ……。

汗だくになって、全身がぐにやぐにやになったかのごとく脱力したまま、ミュージズはゆっくりと眠りに落ちていった。止める術など、あるはずもなかった。

最後に聞いたのは、険しい顔をしてこちらを見下ろしていた老人が、ゆっくりと去ってゆく足音だった。

クークス(11)

「なにしろ、立て込んでいまして。申し訳ございません」

男はもう一度繰り返して言い、二人を中へと迎え入れた。近くの卓には、酒杯と思しきグラスが載っている。

「カルマル同盟以降あちらもなかなか平和になりましたから、どうにも我々の仕事は減る一方です。あなた方のお手紙が、私にとつて吉報であることを望んでやみません」

あちら、とはどうやら軍海のことらしい。ごくもの柔らかな言い振りとともに、男は立ったまま卓上のグラスを取って、ぐつと軽くあおった。

クークスは先刻、男が垣間見せた射貫くような憎悪の視線をぬぐいきれず、顔を伏せたまま巨漢の隣で立ち尽くしていた。

「ではさっそく拝見させていただきましようか」

「がははは、ちゃんと持っておるぞ！ うむ、これだ！」

ヘルガベルトが懐から手紙を出すと、男は恭しいとまでに思える仕草で受け取る。封を解き、二人が見つめる中、さつと視線を走らせ、

「ふふ」

小さくほほえんだ。

「なるほど、なるほど。やはりそうでしたか……」

ぶつぶつと口元が動くのを、珍しくヘルガベルトは慇懃な表情で見つめていた。クークスも全身がまだ強張っているのを感じつつも、顔を上げて男の様子を注視した。

男の口から独り言めいたものがこぼれる。

「長らく待たされましたが、ようやく手に入るのですね……
・ほう。なるほどなるほど、ベルジャックも相当なことをやるものです」

そこでこちらを見たときの顔は、穏やかなものであった。

なんだろう、逆に薄気味悪い　直感的に、クークスがもやもやとしたものを感じ取ったのと、突然、全身を不安が駆け巡ったのは、ほぼ同時だった。

「<突骨>！」

鼓膜を振るわせる怒声と風圧が耳にあたった。ほとんど無意識に背後へ顔を引いた直後、頭部のあった場所を肘鉄が抜けていた。

一瞬、なにが起こったのか理解できず、無我夢中で身を低くしてかわすと同時に、クークスは左にいた人間の足を思い切り蹴った。だが鋼にでもぶつかったような感触に、逆に痺れが起こる。

この部屋には自分以外に二人の人間がいて、目の前にいる紳士は今薄い笑みを顔に貼り付けたまま、動いてすらいない。とすると、襲ってきた相手は言うまでもなかった。

クークスはそちらに目をやって、叫んだ。

「どっとうつもりだ、おっさん！」

「<打地>！」

答えの代わりに、猛烈な拳がいくつも飛んでくる。がむしゃらに床で身を回転させ、壁際に至るという回避行動を取るも、いくつかもともに食らったため骨がイッてしまったかもしれない。顔を上げると、ところで巨体の突進が迫ってくるのが確認できた。

いつもの朗々とした表情が消え失せているのを見て、クークスは確信し、全身の筋肉を強張らせた。

ヘルガベルトは、なんの冗談でもなく自分を殺そうとしている。軍海での裏切りは、それこそ日常茶飯事といってもよい。事実クークスもカンタベリ城襲撃の際に、二十人もの兵に裏切られるという修羅場を味わっている。だが今目の前にいる大男にくらべたら、あのときの恐ろしさなど屁のようなものだ。

巨大な拳が眼前に迫る。クークスは刹那の思案の末に、軽功を用いて後ろの壁へ飛んだ。そのまま猛ダッシュで壁面走行し、ヘルガ

ベルトの背後へ回り込む。二本の剣は既に抜かれている。二人の間にめがけて降り立つと、次の瞬間には一本は紳士風の男の、もう一方は反撃しようと顧みていたヘルガベルトの頸部にぴたりと当てていた。

「二人とも動くな」

厳しい声を飛ばす。

「おっさん、ワケを」

「むん！」

ヘルガベルトが即座に動き、剣を払った。だが先読みしていたクークスの方が早い。

再び飛来する拳固。クークスは紳士へと突きつけていた剣を引くと同時に、二人の間から高速で横へ抜けた。

拳を作ったままの二本の太い双手が、鈍い音とともに床へ落ちていた。

無理に壁を走り、さらに二人の狭間から抜ける際に瞬間的とはいえ多大な負荷をかけたか、足が八つ裂きになったかと思うほどの痛みが走った。無論、耐えきれはるはずもなく、顔を大きくしかめるが、両腕を切り離されてもなお鬼神のごとき表情を浮かべるヘルガベルトに対し、剣だけは油断を見せることなく構える。

ヘルガベルトの絶叫が、あたりに迸った。

「な、ななななにをしている！ お前もやれ！ やるんだ！ 密書にそう記してあったろうがあああああああああああああああああああああ
あああああ！」

おそらく真ん中に立つの男に向けたのであろうそれを振りまきながら、なおも捨て身で突撃してきたが、クークスは本当に今度こそなんの感慨もなく、猪首を切り落とした。

たちまち視界が赤で塗りつぶされた。大量の血を噴き出しながら、ヘルガベルトの身体は崩れ落ち、首がやや後ろに落下した。

「おっさん、あんたのキャラには油断させられたよ」

吐き捨て、なおも突っ立ったままの男のほうへ向き直る。無論、剣先は男の方を指している。

「で？ あんたも俺を狙っているのか？」

男は微笑をそのままに、手に持った密書を前へ掲げた。

「どうやらそのようです。ここには『なお、前述の事情のためヘルガベルトと協力して穢多を始末しろ。穢多嫌いのお前なら逡巡もなかるう』としたためられておりますから」

驚きはなかった。ヘルガベルトが自分を襲ったのが独断ならまだしも、密書に記してあったと言うことは『声』　ベルジャックの指示を除いて他に可能性はないからだ。

だが、クークスは、男の別の言葉に眼を丸くしていた。

穢多嫌い？

男は平然とした顔のまま、ズボンのポケットに手を突っ込むと、一枚の真つ赤な布を取り出した。

額に当て、後ろでキュツとしばったバンダナには、大きく「盗つ人」と記されていた。

「肉斬連刃殿。私は不肖ながら多くの方のソレを頂いて参りましたが、どれだけ自分が変わろうともひとつだけポリシーがあるので」
男のごく静かな声音が、流々と耳を抜けていく。

「それは、私がどんなに穢多嫌いで、かつて私憤にまかせて弟を使い、大陸中の穢多を抹殺し続けたとは申しても、利害関係のほうを重視するということです。使える人材を好悪で生かしたり殺したりするなど、論外です。軍海ではそのひとりで戦局が変わる。私の雑闘衆には、私が嫌いで嫌いでたまらない、優秀な人材はごまんといます。

こう考えると、これはベルジャックの失策ですね。アレのほうだけを重視して、あなたが邪魔となるから殺すなど、申し訳ありませんが愚の骨頂としか思えません。あの御仁に、どちらも手に入れる、という発想はなかったのでしょうか。

それでは、犬死にしたこの方の『モノ』でも頂きましょう。部屋に入って来る前、窓からずっと観察していましたが、なかなかうまく盗みきれると思います」

意味不明な言葉を呟く男に対し、クークスは途切れ途切れに言った。

「お、お前、大泥棒の……」

「いいえ。私は盗っ人です」

きっぱりと言い放ち、男は頭部が切り離された無残な格好で倒れ伏すヘルガベルトに歩み寄った。体を屈めると、髪の毛をつっつかんでしげしげとヘルガベルトの顔を眺める。

「なるほど、このような骨格なのですか。顎や舌の使い方は……」

「お、おい。なにしてるんだ、あんた」

つい先ほどまで命を狙われていたことも忘却して、クークスは狼狽まじりに問う。

「説明したとおりですよ。こちらの方の『ソレ』を頂こうと思っっている次第です。本当はあなたから盗もうとも考えておりましたが、成りすますならこちらの御仁のほうが油断を誘いやすく適切でしょう」

男は一度立ち上がる。呆然とした表情を浮かべるクークスの方は向かず、ただ「笑顔」のまま床の遺体を睨めつけて、

「ご存知ですか？ この御仁がなんと君に言っているから知りませんが、この方の本業は『声』の私的な兵でしてね。実際、かなりの凄腕です。あなたもこの御仁の戦闘をご覧になりましたか？ 体術だけでここまでの域に達するというのは、それはそれは並々ならぬ鍛錬の成果でしょう。」

しかしそれほどの強さを有するこの御仁の通り名について 聞き覚えはありましたか？」

「……本人から聞いたよ。 剛岩系 とか ガリアラの絶望 とか」

「ふうむ！なるほど、悪くないな！先ほどまでの『モノ』もまあ悪くはなかったのだが、むしろ警戒を誘いそうだけだったからなあ！これだといかにも間抜けそうな人間ではないか！盗んだだけはあった！」

満足そうに立ち上がり、声を張り上げるキ・サン。

盗めぬものはなにもなく、有形無形、そして人格すらも盗み出す、稀代の盗っ人。

怖い。

本性も、素性も、思考すらも読めぬこの男が、そこはかとなく恐ろしかった。ウォルガと対峙したときでも、恐怖を感じることはなかった。だがこの男は違う。無条件に、人間という人間すべてを密かなる内に恐怖の谷へ突き落とすだけの、静かなまがまがしさがあつた。もはやウォルガの居場所を尋ねることなど、頭から消え失せている。

「お前は……誰だよ」

「なあにを言つとるんだぬしはあ！キ・サンと言つておるだろ！む、貴様もしやバカか！残念だ！ふむ、このようなモノになつてしまつた以上、我が輩の体中の血が我が輩に静止を許さぬ！がははは！ではさらばだ肉斬連刃よ！縁があつたらまた会おう！我が輩はこれから一仕事あるものでなあ！

おう、そうだ！ひとつ大事なことを言い忘れていた！これではなんのためにぬしを襲わなかつたか分からん！」

キ・サンの顔がくるり、と大きな動作でこちらを向いた。

「ぬし、もしも暇なら 雑闘衆に入団しないか!？」

うなずき返すことも、首を振ることもできず、クークスは固まっていた。窓の近くから悠然とそれを眺めていたキ・サンは、また大きく歯を見せ、

「がははは、急には言わぬ！まあ少し考えてみてくれ！また

数日後、ぬしがどこにいようと駆けつけよう！ では、今度こそさ
らばー！」

キ・サンはさっと窓枠に飛び乗ると、呵々大笑したかと思いきや、
その姿は掻き消えていた。

体を巡る震えが止まったのは、それから数刻後のことだった。

ミューズ（12）

翌朝、食卓でスープを飲みながらぼんやりと椅子に座っていると、アライが朗らかに声をかけてきた。

「ミューズさん、寝不足ですか？」

「うん、寝不足っていうか、なんていうか……」

昨晚、眼が覚めたミューズは、半分とろけたみたいな頭で自分の部屋へ戻り、体に残存していた疲れを解消しようとした。だがアライによって直後に扉がノックされたため、仕方なくけだるげな体に鞭打つてよろける足取りのまま卓につき、現在アライお手製の朝食を食しているというわけだ。

意識がふらふらとしたまま、とろんとした眼をあちらこちらに回す。

「あれ、名無しは？ まだ帰ってきてないの？」

「いるぞ」

「わひゃっ！ きゅ、急に後ろに立たないでよ！」

お返しに指先で小突こうとすると、名無しが大仰に跳び退った。

あまりといえばあまりの回避行動に、ミューズは息をのむ。

「ちよつと、どうしたのよ」

「お、お前こそどうしたんだよ。今、俺の眼球を狙ってたたる……」

言われて、ミューズは確かに自分の伸ばした指先が、名無しのちよつと壺の、さらに右目がある位置に伸びていることに気づいた。

「でもあんた、壺をかぶってるから刺さらないじゃん」

「冗談めかして言いつつも、心が冷たい手に撫でられるような心地になる。六十四般のひとつ、指眼突を自分はまたも無意識に使っていたのだ。彼女が知らぬ間に会得していたと判明した、五つのうちのひとつである。」

「ううん、違うわ。あのジジイがこの技をやらせなければ、」

その技を使える」ということを知ることはなく、故にわたしはこの技を使えないままだったはず……ああ、ややこしい！

名無しに謝るとともに、昨晚のことを話すべきか逡巡していると名無しはさっさと自分の椅子に座ったが、食事をとらないのは相変わらずだった。

「ほれ、服と袋」

思い出したように放ってくるそれらを受け止めながら、ミューズは上の空で考えつづける。頭がもやもやとしているはずなのに、思惟だけはなんだかクリアだ。

どうしてわたしの体に、あんなに技が染みついていたのだろうか。

十六個試した時点で、既に五つが習得済み。そんなことであるのだろうか。壺操演舞のオマケという解釈もさすがに苦しすぎる。

指先だけでスプーンをつまんだまま、虚空を見つめながら記憶をたどる。

ええと、覚えていたのは疾風千変、指眼突……と。

<三叉落>、<天狼孤崖>、<葉郷磊落>だっけ。

いずれも紫皇帝が少し型を見せただけで、体が勝手に動いたものである。おそらく自分が覚えている技というのは、これだけにとどまらないだろう。

ミューズは思わずぶるつと体を震わせた。拍子にスプーンが冷たい音を立てて床に落下した。名無しとアライが二人して顔と壺を見合わせたことにも、気づいていない。

身体中を、悪寒めいたものが駆け抜けている。まるで自分が自分でなくなったようだ。あるいは、その技を会得していたときの自分というのが、まるで自分の鏡写しのようだ。

いつ、わたしはその技を会得したのだろう。さらに記憶の蔵をほじくりかえしてみるとはつきりと記憶がつながっているのは、女優を目指すため、軍海中の劇団を訪れていた頃から。それ以前のこと、ほとんど紗のかかった記憶しか存在しない。

名無しから家族のことを訊かれ、記憶を探るということをし始めたころから、ゆっくりと堅牢な檻が溶けて、徐々に内に眠る記憶が抜け出している。それは絶対に、蓋を開けてはならないものだと、わたしは本能で知っている。

だが一方で、明らかにその記憶に自分は惹かれている。

そう意識した途端　水泡のごとく、一挙に記憶の断片が浮かび上がった。

たくさん姉／姉妹はいない

お父さんはいない／笑うお父さん

ひとりの母／ひとりの母

燃える家々／燃える家々

たちまち悲痛な気分になって、胸を押さえる。発汗しているのが分かる。呼吸が苦しい。昨晚から妙に不安定だった気持ちと体が、一気に揺さぶられる感覚。

記憶が鮮明になりかけるのに歯止めをかけるように、ミュージックはきつくきつく唇をかみしめた。苦しげに吐息をこぼす。名無しが心配そうに椅子を引いて立ち上がった。

「おい、ホントに大丈夫か？」

「平気、大丈夫だから」

早口に告げるも、もう限界だった。押し寄せてくる記憶の断片たちに耐えきれず、ミュージックはいきなり立ち上がると表へ続く扉へと走った。

「ごめん、外に出てくる」

かろうじて言い置けたのはその一言だけだった。外へ飛び出して、なにをするというわけでもなかった。ただ名無しに異変をさとられたくないという一心だった。

通りを横切り、呼吸を弾ませたまま適当な酒場に入った。奥の席につくと、蜂蜜酒を注文した。

とろりとした生暖かい液体を口に含むと記憶の氾濫は収まったものの、当分誰かと話す心境にはなれなかった。ただ今は、思い出すまいと強く念じることしか、ミュージズにはできなかった。

そのとき、すぐ後を追うようにして酒場の扉が開く音がした。そちらの方に胡乱げな視線を飛ばして、ミュージズは息が詰まった。

名無しが、壺頭のことなど頓着せず、堂々と入店してきたのだ。少しあたりを見やって、ミュージズを発見すると、こちらへ一直線に向かってくるので、思わず小さく含み笑いしてしまう。

名無し、それ絶対に見えてるでしょ。

名無しは隣に腰を下ろすと、酒は注文せずただオモシロイ頭をじろじろと注視する周りの視線から逃れるように、ミュージズの方を向いた。

「どうしたんだ？ なにか なにか、あつたんだ？」

真剣な声色に気圧され、カウンターへ目を落とす。

酔いに背中を押され、ミュージズはぼつりと呟いた。

「……知りたくないものって、知っちゃダメだよ」

口を開きかける名無しを遮ってグラスを置き、続ける。

「思い出すことを拒んでいるってことは、それは知っちゃいけないことよね。ううん、知っちゃいけないことだって分かっている。分かってるんだけど………なんでだろ、思い出したいんだ……」

わたしの過去を。そこに、大事なものが眠っている気がするから。

とくん、と小さな心臓の鼓動を意識する。わたしは間違いなく、今ここにいる。でも、それ以前のわたしというも、確かにかつて存在したのだ。

ミュージズの口から、気づけばぼろりとある一言がこぼれ落ちていた。

「ねえ名無し。あんた、わたしのことをなにか知ってるでしょ？」

「……………どうしてそう思うんだ」

知っているとも。覚えていなくても、体に染みこんでいるその声、その激烈な感情を無理矢理殺したような声を、わたしはたぶん、遠い遠い昔に聞いたことがある。埋もれた記憶が、呼応するように胎動するのが分かる。

ああ　なんてわたしはバカなんだろう。分かりきっていたことだった。頭で忘れても、体が覚えている。

森で巨人に助けられたときから抱いていた、どこか引っかかるような感覚の正体が、今なら分かる。

わたしは絶対に　あんたを知っている。

でも思い出したいくない記憶の奥底に、ソレは眠っている。冷え冷えとした怖気を伴うことになっても、わたしは知りたい　あんたのことを、もつと、もつと。

「な、ななし。あの、さ、わたし……………」

「……………昔あるところに、男の子が住んでいた」
あえぐようなミューズの言葉を、今度は名無しが遮る番だった。

ただ先ほどまではらんでいた語調の厳しさは、そこにはない。

名無しは少しミューズから体を遠ざけると、カウンターに手を置いて頭を支えた。

その口から、ぼそぼそと言葉が発されていった。

「男の子は愛想がよくなかった。男の子はいつも差別や嫌がらせをされていたから、そのせいで性格が暗くなっただんだろうし、そもそも少し素直じゃないやつだった」

「……………」

ミューズの動きが止まる。名無しの口調は、どこか思いをはせるかのごとく穏やかだった。

そんな声差しが紡いでいく物語に、いつしかミューズは聞き入っていた。

「あるとき男の子は森で仕事をしていた。なんの仕事かは分からない

いけど、とにかくひどくつらい。仕事、をしていた」

「つらいじごと」

「そうだ。作業にちょっと躓いたとき、顔を上げた男の子はふと、近くに女の子が立ってこちらを見ていることに気づいた。初めは無視して、仕事を続けた。女の子はただ立って、少年の動作を見つめていた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それで？」

「長い間、動こうともしなかったから、うんざりして男の子はその女の子にちよつと的外れなことを言ったんだ。お前も僕を虐めに来たのか、とつと消えろつて」

「・・・・・・・・うん」

「言われた女の子はちよつと不思議そうな顔をして・・・・・・・・自分の掌を突き出した」

ミューズは思わず自らの両掌に目を落とした。

視線の先にあるのは、特になんの変哲もない掌だ　左小指が欠損しているという事実を除いて。

ミューズは知っていた。どれだけ記憶にもやがかかっていようと、理屈ではなく知っていたのだ。この欠落は、生まれたときから体に刻み込まれたものである、と。

不意に視界が霞んだ。無意識のうちに生まれた涙は、双眸から頬を伝ってカウンターに落下していた。

名無しの発する一語一語が、ゆっくりと彼女の凍った心胆を温めていく。

「男の子はその意味を知っていた。ときどき生まれる体の部位が欠損した人間は、総じて忌み子として疎まれる存在だって。それにも関わらず女の子は言ったんだ。おとーさんも、おかーさんも大好きだ、と」

名無しの唇から、吐息とともに言葉が漏れた。

「最初は可哀想だと思った。女の子は明らかに事情が分かっている、でも男

の子の考えはすぐ変わった。そして思った。羨ましい………
ってね。

この世の汚いものを知らず、こんなに純真に生きている………
・その笑顔はとても顔を背けたいくらいにまぶしかった。そして思
ったんだ、こいつとなら、友だちになれるかもしれない、この少女
となら、敵意をむき出しにすることもなく話せるかもしれないって」
名無しの顔が、まだこちらを正面から見据えてきた。

目からしたたる熱いものを、ミューズはこらえることなどできな
かった。

少年の、その遠い昔に聞いた覚えが確かにある声が、そつと耳に
届いた。

「けどさ………やっぱり俺も、すぐには自分の心に素直にな
れなかった………いや、正直ずつとなれなかったな。ひとり
で一匹狼みたく母親を守つていくと思つていたから。でもそいつと
別れてようやく自分の気持ちに気づいたんだ。

だからさ………お前は俺を助けてくれたんだ。覚えてない
ならそれでもいい。でも確かにお前は俺を救つたんだ。あのときお
前がいなければ、愛せる人間がいなくて、きつと今も荒んだ心のま
ま、最悪な人生を送っていたと思う」

「うん………うん………」

涙と嗚咽で最後まで言葉が続くことはなかった。目尻にたまつた
雫はゆつくりと頬を伝つてカウンターに落下した。

どこまで曖昧模糊として、どこまでもぼかさされていたが、その名
無しの言葉にわたしはなにかを感じていた。これまで冷えた心の芯
をゆつくりと溶かしていくようなぬくもりを、わたしは確かに感じ
た。それだけで幸せだった。満足だった。これ以上、具体的なこと
はなにひとつ思い出せなくてもよいと、そう思えるほどに。

「ありがとう………」

それだけ小さく言い切ると、ミューズはカウンターに突つ伏した。
とめどもなく流れる涙は、尽きることなく彼女の袖を濡らしていっ

た。

ミューズ(12) (後書き)

微妙に訂正しました。誤字と、誤解を招きそうな表現が見受けられたので。

クークス（12）

寒気が収まり、キ・サンの出た窓からクークスもまた宿屋を飛び出したが、しばらくは心臓の鼓動が収まらなかった。なんせ自分は現在、立ち位置としては軍閥配下の暗殺者から、そのお尋ね者にまで成り下がった存在だろうから、外に出た途端に命を狙われても不思議でない。いくら百戦錬磨の彼とはいえ、そのような極限状況は、ヘルガベルトを相手取ったとき以上に命の危機なのは相違ない。

『声』が裏でヘルガベルトに与えていた以上、ベルジャックは必ず自分を殺そうとしてくるはずだ。自分が死んでいないことを既に『声』が悟っているということは十分に考えられる。

クークスはこれから訪れる多難と足の故障に辟易しつつも、ひとまず首都の方へ向かうことにした。

軍海の手練れの者を相手取るとなると、「大都市のような人の多いところで命を狙うような愚か者はいない」という、戦闘の常識など無意味に近い。彼らほどの人間となると、殺気はおろか気配すらも完全に消して背後から忍び寄り、暗器を刺し、次の瞬間に姿をくらます、ということくらいやってのける。とにかく人外の集まりだから、真に恐れるべきは、通り名さえ知れていない、文字どおり空気のごとき人間。影も、形も、噂さえも存在しない、無の世界に生きる暗殺者。ヘルガベルト・サーラスは、その意味でそちら側の世界に位置する人間だろう。二つ名は名乗る。しかし対象は的確に殺すため、その二つ名は広まらない。まあ、自ら名乗る時点で少々そうした人外の人後に落ちるかもしれぬが、それでもクークスごとき一介の暗殺者が彼を殺しえたのは、やつの焦燥と刹那のスキ、そしてレーザン相手にわずかでも剛岩拳を披露してしまったことといえるだろう。

あのときなにげなく分析していたのが功を奏したな。

六十四般のうち、クークスが見た限りでも三つの技が取り込まれて、一手一手が繰り出されていた。<樹折>から<鐵倒>に至るまでの流れは、六十四般のうち<打戊飛宴>の一手を分解して、さらにそこへ<三叉落>の最後の二手の動きを加えるという、点穴やスキを作ったのカウンターなどといった小手先の技術ではなく、正面からの力に偏った組み合わせがなされている。単純に物理的な力で押す技としていくつか候補があがったが、案の定クークスを襲った<突骨>やく打地もその系列に属するものだった。ならば、少し冷静に考えれば、おおざっぱな手の把握は不可能ではなかったのだ。

『声』がどこまで、自分の肉斬殺法　もつともこれは、クークスが自分で呼称しているものではなく、肉斬連刃という二つ名とともに他人が勝手に呼んでいる名だが　を解析しているのか、クークスは知らない。もし解析が完了しているのなら、さらに六十四般からいくつか技を分岐させて、新たな手を形成する必要があるだろう。だがあの『声』は常時自分に語りかけたわけていたわけではないし、そもそもアレは音声だけをやりとりする技術(？)らしい、といつだったか聞いた記憶がある。そう心配する必要もないかもしれない。

だが。
それにしたところで、つい昨日までサリヴァ公配下としての暗殺者だった自分が、一転して軍閥配下の戦士をすべて敵に回すことになるとは　いくら軍海とはいえ、そうあることではあるまい。

というより、裏切られて生き残った人間がいらないだけ、か。人外を相手取って、確かに逃げ切るのはきついよな。

いくら二つ名が通るほど凄腕で知られたクークスであっても、『声』がなにかの理由であっさり切り捨てたのは、不思議なことではない。

ただ、その「なにかの理由」については、皆目見当もつかないんだが……。

自分で言うのもおかしいものだが、クークスの暗殺者としての働

きぶりは決して悪くはなかったし、むしろ『声』の要求に関して言えば、ほぼ忠実に満たしてきたはずだ。それなのに、なぜ？

クークスは小さく吐息をこぼして思考を打ち切ると、あたりに気を配った。

クークスの巨大なエモノは、もちろん人の多い場所で用いるには適していない。それでも彼が人口の集中する首都へと向かうのには理由があった。

暗殺者として致命的な事実であったから『声』には告げていなかったことだが、彼はどうやら鳥目になりつつあるらしかった。すなわち、夜になると暗さでよく目が利かないのだ。もちろんそこまでひどいものではなかったが、とにかく現状は少しでも灯りのもる主街部へと行き、視界を保つことが優先だったのだ。

もしかしたら病気かな。母さんも失明してたし。

などと思案を巡らせつつ、いよいよ首都へと突入する。と、そこでクークスは改めて『

声』から、ローウェンを逃げ出した王子の搜索を、任務として与えられていたことを思い出した。どうもこれ自体、偽の任務であった可能性が高いが。

現在、玉座を占めるのは反乱軍の先頭に立ったレムという元将軍だ。未曾有の出来事ということで、しばらく七年近い混乱や元国王への思慕を宿した国民らによる一揆も立ち上がったらしいが、ことごとくつぶしたと聞いている。

しかしカーター元国王の宗教政策で弾圧されていた宗派の人間たちは、現在の王政を歓迎しているというし、現在ローウェン国は一応の安定を見せているとはいえ、恐怖政治に怯える輩とそうでない輩で抗争が小さな起きたりもしているらしい。

「そういえば、軍海の方でも混乱に乗じて、領土拡大を見せようとする軍閥が増えたな。おかげでしばらくは全面戦争状態だったっけ」暗殺者となって、しばしば駆り出されたのでよく覚えている。

そもそもローウェンが半ば内紛状態となったことで、ローウェン

に近かったケールマンという工房都市での武器製作が激増したことが原因だったか。増産・改良された武器の一部はもちろん都市を直轄下におくサリヴァ公の軍へも供給されたので、他の弱小軍閥三つが同盟を結んで戦争を仕掛けてきたのだ。

それからローウェンと軍海全土は、争いが絶えることなく続いた。だがローウェンの動乱が次第に収まってきたのを受けて軍海の方でも実質的な停戦協定であるカルマル同盟が成立して、仮初めだが平穩は戻った。大小の抗争の末に、軍閥のほとんどは弱体化した。一大勢力にのし上がったサリヴァ軍閥を除き。

あれから、もう何年経っただろう。自分は戦争期間と、その後、どれだけの人間を葬り去ってきただろう。

思いを断ち切るようにふと視線をあげると、首都を象徴する白い王宮の尖塔が、遠目に映った。一瞬、どこかで見たことのあるような風景だと感じたが、すぐに意識は王宮を取り囲む壁の周りにつめく大規模な商人隊へと引き寄せられた。

「……あ。いいこと思いついた」

幕間1、(前書き)

今回は、文章の性格と読みにくさということも考えて、かなり短めにしてみました。

分類としては、ノベルゲーム風にTIP(笑)形式です。なんちゃってTIPs。反則、手抜きと言われても仕方ないと思いますが、本当に一度こつこつというふうな情報提示はやってみたかったです。

続きは活動報告に書きます。

幕間 1

- とある手記 -

きょう、家をでることになるだろうと、言われました。

なんのことが、ぼくはわからなかった。ぼくは、ただおかあさんにいきなり、そう言われたのです。

ぼくの家は、のっぽな建物でした。とても高いのです。ぼくはそのてっぺんに住んでいました。お母さんといっしょに住んでいました。

おかあさんが家をでる、といったとき、やっぱりおかあさんの顔はともつかれているように見えました。いつものことだったので、それでもきょうはいちだんとやつれているみたいでした。

「どうして家をでるの？」

と聞くと、おかあさんはだまって首をよこにふりました。もうしゃべりたくもないくらい、つかれていたのです。ぼくはおかあさんのために、それいじょう聞きませんでした。

ただおかあさんがぼくの名前をそつとつぶやいて、しんぱいはしなくていい、守ってあげるから、といいました。

ぼくは守るってなにかだろう、と思いました。ぼくを守ってくれるのは、あの強そうな女のひとなのではないか、と思っていました。

でもそれよりもおかあさんがそう言ってくれたのがうれしくて、ぼくは少しだけわらいました。

おかあさんは少しだけ目が悪かったのです。だからいつも暗いへやのなかで、ぼくを探すのにちよつとだけとまどっていました。それでもぼくを見つけると、ときどきてまねきして、ぼくが行くと、ぎゅっと抱きしめてくれたりしました。おかあさんの体はとても温

かかったので、ぼくはこんな風にされるととてもおちつきました。

おかあさんが家をでる、といつてから少したったとき、ぼくが不安そうにしていると、おかあさんは急に立ち上がりました。

「にげましよう」

とおかあさんは言いました。ぼくはわけもわからず、お母さんの手にひかれてのっばなたてもものを出ることになりました。

へやのとびらは、ぼくが外にでていいときだけしか開いていませんが、きょうはなぜか開いていました。

(中略)

森にはいろいろとしたところで、建物のてっぺんが少し見えたことに、気づきました。高いかべが見えて、そのおくではもくもくと黒いけむりが上がっています。けれども、建物のてっぺんのほうで、なにかがゆれています。よく見ると、むらさき色をした旗でした。ぼくは、おかしいなあ、あんなもの今までなかったのに、と思いました。

おかあさんのほうを見ると、おかあさんの目は真っ赤にじゅうけつしていました。それから両目をおさえて、苦しそうにしているの
で、ぼくはあわてておかあさんに近づきました。

「だいじょうぶだよ、ただちよつと見えにくくなっただけ」

ぼくにはだいじょうぶだと思えませんでした。おかあさんはもつと目がわるくなってしまったのです。もしかしたらシツメイする
ことだつてあるのかもしれない。おかあさんのなみだが少しあかく、とてもこわかったです。

おかあさんとぼくは、そのあとさらにあるきました。おかあさんはぼくに、むらさき色の長い布をわたしました。それをかぶつてい
れば、行きだおれても、運よくたすけてもらえるかもしれない、と言われました。ぼくとおかあさんはおそろいで頭にまきました。

おかあさんといっしょに外に出るのははじめてでしたが、ぼくはとても心ぼそく、あの強いおねえさんがいたらなあ、と思いました。とてもあつい日でした。夜になってもずっとあついままで、ぼくとおかあさんは何度もたおれかけました。頭の布のせいだ、と思ってはずそうとすると止められました。

「しゃびの人は、貧しいものにはナサケブカイから、もしかしたらわたしたとであつても、助けてくれるかもしれない」

よくわかりませんが、ぼくはお母さんのしんけんな顔を見て、うなずきました。

それからさらにぼくたちは歩いて（以下略）

ミューズ(13)

「ねえ、最初に森でわたしが会った人って誰なの？」

泣きはらした顔を見られるのはなんとなくばつが悪かったが、酒場からの帰り道、ミューズはつれだって家へ戻る名無しのほうを見て尋ねた。

「……あー、気づいてた？」

名無しのほうが今度はばつが悪そうにする番だった。

「うん、ずっと気がつかなかったけど、さっき分かった。わたしが森で会った人と、壺をかぶったあんたは別人だって。声はよく似てるし、服はいつしょ、背丈も同じくらいだけど　そうでしょ？」

「よく気がついたな。一応外見だけはできるかぎり似せたつもりなんだけど」

「正直、よくよく思い出してみると、全然違うのよねー。まずあなたの口調が全然違うってこと。巨人に襲われたドタバタとかですつと気に留めてなかったけど、正直、最初の人　名無し1号とあなたの口調、初めは似てたけど、段々別物になっていったわ」

「まあ、確かに最初からあいつの口まねをするのは抵抗があったからなあ」

名無しは天を仰ぎ見て、「あのおちゃらけ具合には正直、ついて行けないから」

ミューズはその様子をみてほほえみながら、

「次に、わたしへの呼び方がねーちゃんからお前に変わってること」

「あの野郎……なんていう呼び方してたんだ……」

「三つ目、1号が森で誰かを殺そうとしたとき、持ってたエモノがあんたの持つてる大剣じゃなくて、細い剣　レイピアって言うんだっけ？　それだった。武器って普通、そこそこ変えたりしないでしょ？」

「そうだな。確かに『あいつ』の武器はレイピアだ」

「顔だけはごまかせないから、かぶった壺をそのまま譲り受けた！
というわけで、1号とあんたは別人！ たぶん入れ替わったのは、
わたしがあんたの元から逃げた、家で！ めでたくあんたは名無し
2号と相成ったのでしたー！ やー！」

本当は 壺をかぶったあんたにはどこか、親近感みたいなもの
を感じたけど、1号には感じなかったつても、あるんだけど。

それだけは口に出さず、胸にしまっておくのがよいだろう。

「正解だよ。お前は少しバ・・・注意力が抜けてるから、し
ばらくはばれないと思ってただけだな」

こちらはこちらで、少し戸惑っているらしいが諦めたように名無
しが言う。

「あんたバカつて言いかけたでしょ！ っていうか、成りすますな
ら口まねくらいしてきなさいよね！ 真面目に騙す気あるの!？」

「本音を言ってしまうと、あつたような、なかつたような・・・
・そもそも俺と『あいつ』は性格からして正反対だから、そう簡単
にはいかないんだよな。それは分かるだろ。実際、俺はお前以外だ
つたら、こんなに無駄話もしないよ。それに、お前の去った方に向
かつたら、さつそく巨人に襲われていたし・・・いろいろと
心の準備が足りなかつたんだ」

「なあーによそのいいわけ！ へん、じゃああんた、結局壺は取れ
るんじゃない。あつ、さてはあんた、わたしがずっと食事のことに
か心配してあげてたのに断って、本当はこつそり飲み食いしてたの
ね!？」

「あ、えーと、うーむ」

ギクリとでもいうようにそっぽ向く名無しに対し、ミューズは激
昂した もちろん、大笑いしながら。

「うーむ、じゃないわよ！ だいたい壺が取れるなら、早く取つち
やいなさいよ。2号の顔を早く拝みたいし、あんたと1号のことも
知りたいしっ」

「……それはダメだ」

急に名無しの声がしおれたので、ミューズは思わず口に出かけていた次なる舌鋒を引つ込めた。

「悪い……でもダメなんだ。『あいつ』のことも俺のことも、どうして入れ替わろうとしたのかも、まだ話せないし……なにより、顔だけは見せられない。だって……」

顔を見ると、わたしは全てを思い出すだろうから。嫌なことも、忘れ去りたいこと。

そう心のなかで、ミューズは途切れた言葉を継ぎ足した。継ぎ足して、再び華やぐような笑みを顔に浮かべる。

「分かった分かった！ とにかく2号は1号と違っただけ確認できればよし！ それより早く家に帰りましょう。アライさんも心配してるだろうし」

言って、笑って、なんとなく思った。この人の隣でなら、自分は壊れることなく進んでいける。平穩に生きている、と。

……それはあたかも、これまで壊れ続けた者しか抱けぬかのような感慨だったのだが。幸か不幸かその事実気づくことなく。

ミューズは先頭を切ってアライの家へと伸びる通りを前進していた。

夜になり、そろそろ町中がどこか活気に満ちてきたのが分かりつつも。大会の参加者や観戦者が集まり始めたのだろう、ミューズの心はまさに明鏡止水のごとくだった。

アライにはさすがに悪いと思って寝台を譲り、自らは卓に付随した椅子を並べてそこに横になった。名無しは床にそのまま眠るらしい、床に腰を下ろしたまま不気味な頭を窓の方へ向けていた。

「あんだ、昨晚はどうしたの？」

最後まで申し訳なさそうにしていたアライが部屋に入るのを見送ってミューズが訊くと、名無しはなんともなさそうに肩をすくめた。

「途中で起きたまま仮眠を取ったな。それだけ」

「ちよつと今の矛盾は看過できないんですけど!？」

目を開けたまま眠ったとか!？　っていつか、結局壺をかぶって見えてるの!？

「意識の疲労回復のためだけに木の幹にもたれかかって、肉体は起こしてたつて感じ。それくらいしなきゃ、黒海原じゃ休息は取れないからな」

これには呆気にとられるしかない。ミュージズは嘆息して、ごろんと椅子の上に横になると、

「あんた、それで体は持つの？」

「大丈夫だろう。一度は三日間、不眠不休で戦ったくらいだし、体力には自信がある」

「いくらなんでも死ぬでしょ!？」

「さすがにあのときはやばかったよ。正直、最後の方は闘争本能に突き動かされていたつて感じだから、ロクに憶えてもないがな」

「ぶ、物騒ね。あんた、そんな修羅場をくぐつてきてたんだ」

「軍海の裏に住まう輩で、修羅場くぐつていないやつはいないよ。

それを言うなら、お前のほうこそ大変だろ、いきなり裏世界にまきこまれて。まあ、それもこれもローウェンに行くまでの辛抱だ。今日は今日でいろいろとあつたけど、明日にでも出発するか？」

「ん……あのさ、ローウェンつて、ここからすぐなんだよね」

「まあ、すぐつていつても、半日くらいはかかるがな。

「あのね、本音を言えば、もうちよつとここにいたいな……つて思わなくはないんだけど、ダメ？」

おそるおそるといった心境で切れ切れに述べる。名無しの反応が一瞬遅れたが、すぐにぶつと吹き出すような音がこぼれた。

「な、なによ!？」

「いや、あんなにローウェンに行って女優になるつて言つてたのに、つて思つて」

奥底にあった、衝動とさえ呼べる女優志願への思いが、彼と旅を始めて以来薄れていたことは、内心ミューズも感じていたことだった。まるでその衝動を埋める別の充足が訪れたかのように、と勘ぐるのはあまりに野暮だろうか。

ただあまりに事実をぐさつと言われたため、なにか言い返そうとミューズが頭を巡らせているうちに、名無しが言葉を継いだ。

「けど俺としては賛成だな。七色大会がある時期に来たことはないから、観光してもおもしろそうだし、なによりお前ともう少しだけいられるってことは、素直に嬉しい。ああそうだ、いっそのこと大会が終わるまでここにいろか」

キ・サンに追われているんだぞ、とあれほど警告を発したのはどこの誰だろう。初めて見る、どこか楽しそうな名無しの姿に、ミューズは思わず苦笑してしまった。

壺頭に手を回して名無しも寝そべる。壺面を通しての声が妙に耳にくすぐつたい。

月影が窓から差し込み、二人の間にやわらかな光を届けていた。上向きからごろん、と横を向いて名無しを背にした。

「ねえ、いつかその顔……見せてね」

ぼつりと呟いたが、反応がない。むっ？

「寝ちゃった？ うーん、一方的に喋っておいてデリカシーないわね……ふあ、それじゃわたしも寝よつと。おやすみ、名無し」

昨日の疲れが完璧には取れていなかったこともあり、ミューズのまぶたもまた、すぐに重くなってくる。数回小さく呼吸をしたところで、意識が深淵に落ちていく、その間に。

「ああ、きつとな」

そんな言葉が聞こえた気がして、ミューズはそつと口元に微笑みを滲ませた。

だが、眠りは長くは続かなかった。

ミューズ(13) (後書き)

活動報告には別のことを記すため、ここに今話のことを書きます。とりあえず前回に引き続き(?)、「答え合わせ」……といつか「事実確認」といったほうが適切でしょうが、そういう話でもはや謎でもなかった、というのが皆さんの感想でしょう(おかしい、この謎はメインの謎になるはずだったのに)。ミューズが指摘した三つ(四つ)のヒント以外にもいくつかありますので、暇な方は探してみてください。

クークス（13）

クークスの考えは、軍海を横断する大規模な商人隊にまぎれて、サリヴァ公が主に支配する東方から、西方へと移動しようということだった。

大国を起点として国外へ出発する商隊は、必要性さえ認められれば国により護衛がつけられる。荒くれ者の巣窟たる軍海を通るわけだから当然だ。

現在、四大国は東西南北に存在し、その中央が軍海というのが大まかな区切りであるため、他の大国と交易しようとも、少なからず軍海や黒海原へ足を踏み入れなければならないのだ。

護衛がつけられるほどの商隊に共通していることは、いずれも大規模であるということだ。大人数の隊の全構成員が、互いの顔をきっちり把握していることはまずない。いろいろな商會が合同で送り込むものであるし、今回のように大陸を横断して西の果てまで行くともなれば、道中および到着先で一儲けしようと、多くの末節の商人が個人的に参加することもあるからだ。

ということ、荷車申請や積み荷をしていなくても、百人近いこの部隊に紛れ込むことには、非常に容易い。

それはいいんだが。

ここで、クークスはようやくクリアになってきた頭で、ずっと引っかかっていたことを思い直してみた。

『声』が自分を「なんらかの理由」で殺そうとする。そこまではいい。そして今、最初の殺害人であるヘルガベルトノキ・サンという二人の魔の手からは、幸運も重なって逃れることができた。

だが策士も兼ねる男が、策謀の初段階が失敗したことを想定していないはずがない。レイン・ド・ベルジャックという男なら、なおさらだ。どんな障害が入っても、必ず策を達成するため、二の手三の手というのを用意しておくはず。

ではこの場合、ヘルガベルトとキ・サンによる殺害を初手としたら、それが失敗した以上、次に『声』がなにをするかといえは考えるまでもない。所在が丸わかりである、クークスの母を人質に取ることである。

このことを、ただ自分に『声』によって伝達すればよいだけだ。母が実際に人質に取られているための証拠を示して 声を出させたり。あの『声』はやるうと思えば他人の声も送信可能だと、以前ベルジャックは言っていた、この母を助けたくば、その場で自害しろ」とでも言えば、逆らえるはずもない。そのくらい、ヘルガベルトが殺されキ・サンが去った段階である男ならとつくにやっている。

長年仕えてきた身として、そこがはなはだ疑問だった。

可能性からすれば母さんが人質に取れないっていうこと・・・
・・・まさかもう死。。

いや、それはない。自分を殺す前に、母を殺すメリットがない。落ち着け。視界を狭めるな。身内のことでも、今の俺は肉斬連刃としてここに在る以上、冷静に振る舞わなければいけない。そう、冷静に、ではなく冷静に。

今できることは、一刻も早く母の元へ帰ることだ。だがサリヴァ軍閥領に単体で入り、村に行つて母を助けて共に逃げるなどできるわけがない。だがこの商隊は、通る予定のルートを聞く限りでは、途中で抜けて村まで向かうことは簡単にできそうだった。

だから、これが最善なんだ。

クークスは強く、どこか祈るようにそう言い聞かせた。

「おめえ新入りか？」

なにげなく商人隊にまぎれこみ、荷物積みなどをやっている、そんな定番のセリフを受け、クークスは笑みを作った。

「はい」「生まれは？」「ハードランドです」「おう、首都の西か。ええところだな」

などという中身の無い会話していると、直に出立。黒海原で唯一、商道としてかつて整備されたらしき、細い道をずらずらと縦に並んで馬や荷車が通り過ぎていく。

ちなみにこの部隊は、どうやら宗教色が強いらしく、相当数が頭に紫の頭巾をかぶっていた。これがクークスにはありがたかった。シャビ教徒は大抵、信徒用の頭巾というのをいくつも持っているものだ。これをかぶることで、少しは人外のやつらの目をごまかせるかもしれない。そう思い、後ろにいた黒髪の長い少女に借り受けた少女は少し手際が悪そうに懐からもそもそと取り出して渡してくれた。ありがたくちようだいし、頭に巻き、余った尺の分は側頭に垂らしておく。

国がつけた護衛は、前方に四名、中間に四名、後方に四名という配置だった。いずれもローウエンの紋章がついた長槍で武装している。クークスはほとんど末尾に近いところにいたが、なるほど少し伺う限り、なかなかの手練れのようにだった。

「最初に到着する都市はどこでしたっけ」

と、クークスはさっそく先ほど頭巾をもらった少女へ訊いてみた。少女はひどく狼狽して、しばらくどもつたのち、

「ほ、ほ、ローエン……だと、思うけど……」

ローエン？ てつきりケールマンあたりで鉄鉱石なんかをさばくつもりかと思っただが、どうやら今回の部隊は小都市にも手を出すらしい。相当巨大な規模だ。

「ごご、ごめん、もしかしたら違つかも……あの、ちよちよっと訊いてくる」

「ありがとう」

少女が走り出そうとするのを制して、しばしクークスは黙考した。この商人隊が、ローウエンから西のアツバースとの東のローウエンという二国間の共同出資によるものと聞いていたから、間違いない。目的地はアツバースだろう。ならばそのへんで反サリヴァを標榜している軍閥は、ジャルミス一世などがいたか。その庇護に入れられ

ば……………。

「あ、あああの」

「ああ……………ん？」

いきなり少女が声をかけてきたので、クークスは無意識に手で払うような仕草をして、それからはっとして顔を上げた。

「あの、今、聞いてきた……………えっと、最初はホーエン、次にケールマンで、その次にゴルドハンス……………」

少女がぼそぼそと、しかし次々と都市の名前を挙げていくのを、クークスはやや呆気に取りられて見つめていた。全部で二十近い都市の名前を、よくもまあ、順番通りに憶えられるものだ。しかし後半になると、西の方の都市だからだろう、知らない名前がほとんどだった。

「分かった。ありがとう。えーと」

クークスはここで、頭巾をもらい、情報までくれた少女のことについてなにひとつ知らないことに気づいた。

「名前は？」

「は、ははハルカ……………えと、あなたの、お名前を聞かせてもらって、いいかな……………」

「俺はク……………ク……………」

「？ ……く……………なの？」

「え？ あ、おう。クークだ。よろしく」

どこの鳩の鳴き声だバカ野郎、と内心自分を呪いながら、笑顔で返す。演技は得意だったはずだが、まさか偽名を求められただけで戸惑うとは。っていうか仕事で結構、いろいろ偽名を使ってたんだけどな。なんだっけ、確かワンワンとかだったか？ どこの犬の鳴き声だバカ野郎。

自分のネーミングセンスに少し疑義を抱き始めたので、いそいで思考を切り替える。とりあえず、とばかりに何気なく右手を差し出し握手を求めると、

パンツ、

という大きな音とともに払われていた。

クークスが驚いてまじまじと相手を凝視する中で、みるみるハルカの顔面は紅潮していった。うめくように言葉が飛び出る。

「あっ、あああ、ご、ごめんなさいっ。そそ、そうやって五本の指をそろえて出されると、わ、わわたし払っちゃうクセがあつて……」

「そのクセは直した方がいいかもな」

適当なことを口走りながら、頭になにか引つかかるものを感じる。なんだっけ、今のはどこかで……。

そうだ。今の払い技は六十四般のひとつ、＜柳風里＞だ。見た目は風があたる柳のごとくどこか覇気のない手払いだが、払われると武器ひとつを取り落とすくらい威力は強い。相手を油断させて使う技だから、ごつい男よりも若い女などが用いるに適した基本技だから、少なくとも、裏世界に属している（もしくは、していた）らしいことだけは察しがつくが。

「わ、わわっ。すいません、呼ばれてます。まま、またあとでっ」

「へ？ あ、うん」

自分の貧弱な語彙に呆れつつ、前方の商人から名を呼ばれたらしいハル力がぱたぱたと頭巾をはためかせながら走っていくのを、クークスはぼんやり見送った。

ミュージズ(14) (前書き)

申し訳ありません、ミュージズ(14)の後半部分を、大幅に変更させていただきました。よって今回の第三十一話の投稿は二日遅れることとなります・・・。。。。本当にごめんなさい。
あとがきに続きます。

ミューズ(14)

カンカン、となにかを軽く叩く音で覚醒した。

なんだか最近夜がうるさいなあ、と朦朧とした意識で考えながら、むくりと体を起こして窓を見やると、ガラスの向こうには藍色の世界が広がっていた。まだ夜明けまで少しあるようだ。

しかしそんな観察よりも、一羽の巨大なトリが翼を半分突き出して滞空していたのに、ミューズは呆気に取られた。先ほどの音は、窓をくちばしで突いたものだろう。

「わ、ワシ(もしくはタカ)！？」

「違う。あれはギルクアッシュだ。黒いタカがいるわけないだろう」「あ、名無し」

先に起きていたのであろう名無しはどこか緊張したように、急ぎ足で窓辺に寄った。窓を引いてやると、すうと音もなくギルクアッシュがこちらへ滑り降りてくる。

卓に舞い降りたトリの足の足に触れていた名無しの後ろから、ミューズもおそろおそろのぞき込む。なるほど、よく考えれば黒いタカ(もしくはワシ)はいないわ。

「このトリってやっぱり・・・手紙の伝達用の？」

「ああ。俺や1号がどこにいても飛んでくる利口なやつだぞ。もっとも、飼っているのは俺じゃなくて1号だが」

言いながら、刺々しい爪をそなえた細い足に括りつけられている紙片をはずしとる。

ぴよっと首をさらに突き出して、肩越しからのぞき込もうとする
と、

「あ・・・えと・・・」

申し訳なさそうにする声とともに壺頭がこちらを向いたので、珍しく彼が言わんとすることを察したミューズはひょいと頭を引っ込めた。

「ごめん、わたしが見るものじゃなかったね」
「すまん」

また変なところで気を遣わせたなあ、もう十分に気遣わせてしまっているのに……と反省じみた感想がむくむく頭にもたげていたとき、突如名無しの口からはっと大きな吐息が漏れた。

「どうしたの？」

怪訝そうな問いかけに、名無しは一瞬躊躇ったように口調を落として、

「……………1号がやばいらしい」

「え！？ どういうことよ！」

思いがけず身を乗り出したミューズの目に、赤黒く塗りたくられた先ほどの紙が眼に入った。文字らしきものは書かれていない。

「血だ おそらく……あいつの。もう乾いている。ピヨピヨを見る限り、相当遠くから飛んできたらしいな」

「ピヨピヨ？」

名無しの顔は卓で頭を低くしているギルクアッシュの方を向いていた。

「トリの名前だよ。俺がつけた」

「……………あんたネーミングセンス、ないの？」

「う、うるさい。哀れむように言うなよ。それはともかく、ほら明らかに疲れているだろ」

確かに。大きな羽をすっかり収めて三本指の足を少し折り、頭を前に突き出したままトリは目を閉じていた。眠っているのだ。

こわごわと顔を近づけたミューズは、ふと羽の側面から羽毛がむしれている箇所を発見した。触れてみると、生暖かいその部分はべつとりと濡れている。

「名無し、これって……………」

「ん？ これは なるほど、矢がかすめたんだろ。この前会ったときには、こんな風にケガをしてはいなかった。そうか、ピヨピヨを撃ったヤツがいるのか」

撃った相手に心当たりでもあるのか、と訊こうとしたとき、名無し
の口から独り言がこぼれ出る。

「しかし紙に血しかついてないってことは……居場所を血
文字で書く余裕がなかったのか？ とすればかなりやばいな」

「別の人がなにかの理由で飛ばしたってことは？」

「それはない。ピヨピヨはあいつの言うことしか聞かない。三年も
つきあっても、まだ俺には完全にはなついていないくらいだ」

1号の性格から見ると、どうやら飼い主とは似ても似つかない偏
屈のようだ。

そのとき名無しが驚くべきことを呟いた。

「まあ……居場所ならだいたい推定がつくんだが」

「え、どうして推定できるの？」

ミューズがキョトンとすると、名無しは少しばかり腕を組んで黙
考を始めた。たぶん自分に言うべきか否かを考え中なのだ。慌てて
ミューズは手を振った。

「あ、いいわよ。無理に言わなくて。で、それってどこなの？」

「……おそらく大陸の西にある雑闘衆の本拠地。まあ、ピ
ヨピヨを飛ばせばおそらくまた1号のいる方へ飛んでいってくれる
はずだし、おそらくあいつもそれを期待して飛ばしたんだろう」

なるほど。詳しいことは不明ながら、1号もかなりワケありの存
在のようだ。

と、そこでミューズはなにか頭に引つかかるものがあつたのだが、
名無し口から放たれたの次の言葉が彼女の思案をあつという間に霧
散させた。

「こうなったら、悪いがしばらくお別れだ。今からローウエンの手
前にある安全地帯まで送っていくから、そこからはひとりで首都へ
行ってくれ」

ばつさりとなにかを吹っ切るような強い語調で言って、名無しが
早々に出発準備を始めたので、反射的にミューズは叫び返した。

「ちょ、ちょっと、あんた！ なにひとりで行くとしてっているのよ

！ わたしを送るために正反対の方へ行ったら時間切れでしょ。
わたしも1号を助けにいくわよ」

名無しの動作が止まる。続いて、堅くきっぱりとした声質が耳を突いた。

「危険だ。お前にそこまで無茶はさせられない。向こうにはキ・サンがいる可能性が高いんだぞ」

「へたれ、なに言ってるのよ今さら！ ふん、キ・サンなんて、こっちから出向いて入団拒否の意志をはっきり示してやるわよ！ そもそも」

「ダメだ！」

クークスの壺顔がいつのまにか目の前にあったことに、ミューズは驚いた。その奥から放たれる言葉は微かに震え、それ以上に真剣さを帯びている。

「お前は早くローウェンへ行ってくれ。1号を助きたいなら、なおさら今の俺を 肉斬連刃を、迷わせないでくれ」

名無しの態度は昨晩までの冗談を口にしていたときから、大きく豹変していた。戦場を目の前にした兵士特有の真剣味と、それを上回るほどの緊張感が、その一語一語にちりばめられている。ミューズは息を詰めた。

「どうしたのよ、いつたい……」

「どうもしない。本当に危ないんだ。お前の命まで危険にさらすわけにはいかない」

「そ、そりゃわたしはあんたほど強くないし、っていつか戦士なんかじゃないけど、その、1号には世話になったんだし、ここで助けないでいつお礼を……」

だが続きの言を、たまりかねたように名無しはぱつさり切り捨てた。こちらが思わず一歩引いてしまっただけ顔顔をさらに近づけたかと思うと、暗く低い音が流れ出る。

「いいか、一度しか言わないからよく聞け。今から俺が行く場所は地獄だ。お前を探している男が首領を務める傭兵部隊の本拠地で、

それをさっ引いても ドビエソヌの惨状は知っているだろ」

思いがけず登場したその単語に、ミューズの目が見開かれた。名無しの声が続く。

「俺は強くない。あの場所じゃ、自分の身を守るだけで精一杯だ。お前まで守ることなんてできないんだよ。だから……お別れだ」

瞬間、体がカツと熱くなるのを覚えた。この少年の述べているのは嘘偽りなく案じの言葉なのだと思えば飲み込めても、沸き立つ感情は抑えきれなかった。

気づけば口は勝手に動き、弱々しい言葉が漏れ出していた。

「や、やだよ……せっかく会えたの別れるなんて……」

「また会える。お前が首都に行ってくれば、きつと1号と一緒に戻ってくる。だから、今はお別れだ」

「そうじゃない。私が言いたいのはそんなことじゃないんだ……」

ミューズは一度呼吸を吸いこむと、瞳を閉じた。暗闇の中、慎重に言葉を選び出す。

「地獄でも煉獄でも、あんたと絶対に別れない。あんたが死ぬかもしれないんなら、なおさらここで離れたくない」

名無しが口をつぐむ気配が感じられた。瞳を開き、少しだけ射すくめるようにミューズは壺頭を見つめ返した。

「わたしはまだ、あんたのことを思い出せない。それなのに今あんたが死んじゃったら、たぶん……わたしはまたあんたを忘れちゃう。だからあんたを助けて。わたしも手伝えることはあるでしょ……? だからさ……」

「ないよ」

信じられぬほど冷え冷えとした言葉が、ミューズの心へ氷片のごとく突き刺さった。

「お前がいても、半島じゃ足手まといだ。俺を殺したくなければつ

いてこないでくれ」

最高度にまで冷やされた言葉の裏に隠された熱っぽい苦悩を、ミューズはもちろん悟っていた。この少年だつてこんなことを口にしたくはないのだ。分かっている。分かっているけれど。

名無しは既に彼女の前から消えていた。最小限の荷物である二本の巨大な剣を床から拾い上げ背中へと吊す。次いで卓上のギルクアツシユを両手で持つ。トリはそれでも懇々と眠っているようだった。ミューズは一連の動作を、目で追うことしかできない。

「アライさんには悪いけど、起こしてから事情を告げている暇はない。行こう」

「・・・分かった」

言い返すことなどありはしなかった。こくりと力なく頷くと、ミューズは名無しの後ろについて外へ出た。

街を出ると、そこからひたすらに生い茂った木々の合間を駆け抜けた。名無しもミューズも、一言もしゃべることはなかった。

不意に視界が開けた。目の前に広がっていたのは、膝ほどの高さまで伸びた草がいつぱいに広がる草原と、その中央を突き抜ける赤土の道だった。

「<赤の道>。ここを辿れば、ローウエンの関所に直、たどり着く。そこから首都への生き方は分かるな？」

ミューズは無言のまま首肯した。名無しの姿を見まいと、視線を地面に落とし続ける。

「絶対に戻ってくる。だから・・・頼むぞ」

その言葉を言い残した直後、名無しの気配は後ろから消えていた。ガサツ、と葉を揺らす音がしたのを聞き届けると、ぎこちなく後ろへ首を回した。

見慣れた壺頭はもうそこにはなく、ごつごつとした幹が乱立する木々の群れが広がっているだけだった。夜明けをまだ迎えていない、藍色の空間を舞う風にそそのかされた草と木々の葉が揺れる音だけ

ミューズ(14) (後書き)

予定ではすぐに半島へ二人が向かう予定でした。しかし、安易すぎはしないか、とずっと考え続けており、結果このようなカタチになりました。読了なさった方は、誠に申し訳ありませんでした……
・プロットの吟味は、してもしすぎることはありませんね……
・少し活動報告へ続きます。

以前のプロットととの折衝点は見つけましたから、謎解きの部分は変わりません。ただ少しばかり軌道を変更したために、ストックがそう多くありません。投稿が遅れないよう、精一杯頑張りますので、見守っていただけるとありがたいです。

クークス（14）

黄昏時から出立した商隊だが、もちろん今現在、夜を迎えつつあった。

軍海の夜は恐ろしい。それでも夕方から夜にかけて動くということとは、この商隊が宗教色が強いことの表れだろう。敬虔なシャビ教徒の多くは商業にいそしむ。それは、「自分たちの運命とは天命であり、故に不可避である」という思想に基づき、逆説的に「だからこそ自分の天職に励めば、やがて救いの対象となる確信を得られる」として、職に就いた結果の蓄財を奨励するためだ。

さらに彼らは極度に禁欲的であるため、昼間は自らのための活動を行わず、常に無償の奉仕活動を行うことが求められる。だから彼らの商業に関する活動は、必然夕刻から翌朝までに行われる。各国ではシャビ教徒が集まった区域があり、夜市としてのマーケットが成立するほどだ。

というわけで、この宗教色が強い商隊もおおよそそのような運命説に基づいて編成されたものだと思われる。ローウエンでも王国へのクーデターの後、シャビ教徒が公認されるようになったため、夜の盗賊に備えて護衛もたっぷりつけられている。

そんな隊のなかで、ハルカは少し変わった女の子だった。

いつも誰とも話さず黙々と歩き続けたかと思うと、次の瞬間顔を赤らめて、かすれた声で一生懸命にクークスへまくしたててきたり、主にシャビ教徒の僧の人格的な立派さや敬虔さについて、かと思うと商業の話をしようとすれば、しどろもどろになって、最近の売れ筋すら知らない有様だった。

そんなハルカは、ごによごによとクークスのことを尋ねたりもしてきた。

「く、クークーは、い、いつから入信しているの？」

「母親がもともと洗礼を受けてて。生まれたときからだよ」

いよいよサリヴァ軍閥領に位置する都市・ケールマンが近づきつつあったので、クークスの緊張は並大抵ではなかったが、平静を装っていいかげんな返事をした。ちなみに肉斬連刃と代名詞である二本の大剣は、目立たぬようさりげなくクークスが後ろにつく荷車の中へ突っ込んである。いざとなれば、すぐに引き抜いて戦闘へ向かえるようにするためだ。

「ハルカはどうなんだ？」

「わ、わたしも、ずっと信者だよ」

「へえ。でもそれは本当だとしても、その様子じゃ生粋の商人つてわけじゃなさそうだな」

「ふ、ふえ？ ああはは、なななにを言ってるの。わたたたしのお父さんが商人でででで」

「どもりすぎだ。嘘だろ」

呆れて突っ込むと、ふぎゃん、と言っつてしょぼんとなるハルカ。頭巾がちよつと揺れる。

「う、うん。実は……誰にも言わないでね。く、クークーだから言うんだよ。べ、べべ別に本当は言いたいわけじゃないんだけど」

「じゃあ聞かない」

「あ、ああえと、えと、やっぱり言いたいです。はい」

「正直でよろしい。で？ やっぱりワケありか？」

「だ、誰にも言わない、でね？」

どこかひるんだような声のまま、上目遣いにこちらを見てくる。

クークスは軽く頷いた。

「じ、実はわたし、追われているんだよ」

「誰に？」

「お……おじい……さん」

「お祖父さん？ お前の？」

「う、ううん。ただのお爺さん。みみ見知らぬ、え、と見知らぬとつか、見知った」

「？ よく分からないな。どうして追われているんだ？ 商人になる前はなにをしていた？」

「そそそれは言えないんだなっ」

「どうしてそこで胸を張るんだ。そうか、なら聞かないよ。まあ、これだけ大規模な商隊ともなれば、そんなやつがいるのは毎度のことだけど……」

しかし自分から尋ねておいてなんだが、この娘、警戒心というのがないのか。いくらなんでも、会って一日と経たず自分のことをここまで突っ込んで話すなんて、非常識というより……うーん、なんだろう。顔が少し赤いのも気にかかる。

「あ、あのね、これはクークーだけに言っただからね。ぜ、ぜぜっ絶対に他の人には言わないでね。約束だよっ」

払い技のことを訊こうと思ったが、そもそもあれが武芸の一手であるとは知っている時点で、クークスが軍海の裏世界の人間だと知れてしまうので、口をつむぐ。というか、ほとんど条件反射で繰り出されたあれを見る限り、どうも考えて出したというより体に染みこんでいる風だ。かなり戦闘訓練を受けていたのだろうか。

森を貫く道は、いよいよ木々の枝々が張り出してきて、険しさがいつそう増していた。いちおう軍海の正式な「商道」なのだが、ここらへんが未整備なのは仕方ないか。荷車の車輪がときどき道の凹凸に引っかかって、ガタンと大きく揺れる。

まだ先は長く、立ち寄る都市こそ多いものの、恐ろしいまでに厳しい職業倫理を持つシャビ教徒は、夜も寝ることより商業にいそむむことを重視する。商隊は深夜、都市に到着すると短い睡眠をとって、また明け方に出発する。ただし昼間は、その都市で奉仕活動などを行う一派と、それ以外にまた横断を続ける一派に別れ、その次の都市で合流したり、となかなか忙しい。どうにか後者に紛れ込まなければ。

軍海では、軍閥は商隊や商業活動を従事する人間に手を出さない、という暗黙の了解がある。もちろん軍閥支配の外にはみ出した荒く

れ者は多数存在するわけだが、少なくとも自分の領土にある都市にも商品をもたらす商隊を敢えて害する必要もないし、むしろ攻撃なんぞしたら、自分の領に都市が入らなくなるという事態にもなるからだ。

「でも、なんか安心できないな」

「な、なななにやにが？」

「どうしてそこで囓むのかを教えてください。いや、なんでもないよ。ところで、ケールマンにはあとどれくらいだ？」

「さ、さあ。もも、もうすぐだと思うよ」

「……落ち着け。大丈夫だ。ベルジャックが仮に俺がここにいると勘繰っても、強権を発動して商隊そのものを止めることはしない。まず俺が商隊のどこにいるかを特定しなければならぬ。顔を隠すための頭巾をもらっておいてよかった、と本当に思った。さすがにこれだけの大集団ともなれば、そうそう特定は容易でないだろう。」

だが万が一特定された場合に備えて、周囲に気を配らなきゃな……」

「今はさ、しよ、商隊の人たちが灯りをいっぱい持つてるからとつても明るいけどさ」

隣でぽつりとハル力が言ったので、クークスの意識は現実を引き戻された。

「軍海の夜って普段は、く、暗いよね。とつても。ででも、星明かりがあるから、じ、実はこ、怖くなかったり。そ、それと……く……く……く……く……く……く……く……く……く……く……」

「なんか最後はおかしい気がするけど……そっか、星か」
仰ぎ見ると、葉が怪しくざわめく梢の隙間から、星屑の夜空が目に見え、飛びこんでくる。ああ、確かに。節くれ立った木が伸び立っているが、確かに星は見える。

そういえば、昔住んでいた村でも、ときどき母さんの悪い目

にお星様の銀色の光を浴びせたら治るんじゃないか、とか思ってたよ
く一緒に見に行っちゃった。

5歳くらいのおきだからずいぶん昔のことだが、クークスは、母
に見せてあげるといふ名目だったのに、自分だけがとてもはしゃい
でいたことを鮮明に覚えている。記憶が蘇ったことで少し口元がほ
ころんでしまうくらい、懐かしくほのかに暖かみを帯びる思い出だ。
「母さん」

自然と、その単語がこぼれ落ちた。と、同時にどうしようもない
ほど切ない気持ちで、胸を強く締めつけてくる。

動揺を悟られまいとクークスは顔を伏せた。

「んん？ クークー、なななにか言った？」

「いや、なにも」

本当に、早く。一瞬でも早く、あの人のところに戻りたいと、ク
ークスは思わずにはいられなかった。母はまだ、俺が遠いところで
出稼ぎにいったかと思っていてくれるだろうか。俺が昔のままの俺だ
と、信じてくれているだろうか。

ぶわっ、とひととき強く吹いた夜風が、葉と下草と垂れる頭巾を
攫っていった。

クークス(14)(後書き)

次回は なんちゃってTipsその2になる予定です。

幕間 2 / (前書き)

やはりとても短いです。

幕間 2

- とある日記 -

(丁寧な文字ながら、書かれている紙の状態は荒れている。皺が走り、紙質はあまりよくない。使用されている暦は四大国のいずれのものでもなく、大陸の中心部のごく狭い範囲で用いられているものであると推察される)

チェルフの14日

あの子が愛しい。格別に。

そのことに、うすうす気づいてはいました。しかしどうしてもそのことを表に出せましよう！ 私は所詮、まがい物だから誰に対して、ひとえに平等に接しなくてはならないのです。

しかし……たとえ我が身が朽ち果てても、という使い古した言い回しでさえ、決して物足りない。朽ち果てようと、朽ち果てまいと、あの子を守ってあげたいという欲求は日に日に高まっていくのです。

他の子どもたちについても、もちろん私は愛しています。ですが、私はときどき、何の前触れもなくあの子を抱きしめたくなる。そんな衝動が、一日に何度も訪れるのです。あの頬、あの笑み、あの細い腕！ すべてが愛しいのです！

嗚呼、しかし私にあの子を愛する権利など、あるはずもないのです。それでもあの子は私に対していつもほほえみかけてくれる。それだけで！ 胸が詰まりそうになってしまっ！

ドオヴォス神よ、お尋ねします。私にあの子を愛する資格があるのでしょうか。あの子が知ることのないもう一つの鬼としての顔を持つ私に 本当の母親ですらない私に、あの純粹無垢な童を慈しむことができるのでしょうか。

チェルフの33日

あの子が出て行った。

頭が真っ白になった。次第に知らせが入る。私はしかし、呆然として微塵も思考を働かせることができない。

あの子がいない、あの子がいない……………。

ミヤ克蘭の2日

ごめんなさい、子どもたち。私はあなたたちを捨てます。ごめんなさい、ごめんなさい。私はあの子を探します。

……………
……………

(ここから数ヶ月、月日が空いている)

ゴドフリーの13日

嗚呼、ドオヴォスよ！ 感謝します。あの子を見つけることができました！ あの子は無事でした。母としてはこれほど嬉しいことはありません。

ゴドフリーの16日

なんとということでしょう。あの子は差別を受けていた。生まれついた時から刻まれる呪いを消すことはできないとはいえ、なんと非情なことでしょう。私はここから、見守ることしかできない。なにか、なにかあの子の幸せを崩すことなく、救い出すことはできないのでしょうか。

ゴドフリーの17日

どうしよう、どうしよう……………一晩中、卓に向かって頭をかきむしる。考えはまるで出ない。どうにか、どうにかして、あの子を救い出さねばいけないのに。

いや、違う。私はただあの子との再会を望んでいるだけだ。私が救いたいのはあの子ではないのだ。あの子への飢餓感にも似た渴望を埋めんとする、この私だ！ 嗚呼、ドオヴオスよ！ 私の罪深さをお赦してください！

(さらに日付は飛ぶ)

ジャックルの4日

あの子を売ると言った！ ふざけるな！ あの夫婦は性根から腐っている！ 私があの子をなんとかしなければ……守れるのは私しかいないんだ。

殺さなければ……殺すしかない。

(ここで紙片は尽きている)

幕間 2 / (後書き)

これで大なり小なり、ほとんどの要素はそろいましたことを、報告しておきます。

ミュージズ(15)(前書き)

軌道変更後の第一回目なので、少し短くしました。

埋めようもない空虚な穴を胸に抱いたまま、ミューズはしばらく半立ちの姿勢を保っていた。が、やがて緩慢な動きで立ち上がると、死人を思わせる足取りでローウエンへと続く道を歩み始めた。

「名無しの……ばか」

悔しさの奔流があふれ出て、再び涙が目のにじみそうになる。ぐつとこらえ、赤い泥と足の指先を注視し続ける。そうだ、この道を辿れば、わたしはもう安全なんだ、危険もないんだ、あんなになりたかった女優への道がまた開かれるんだ。自分を励ますことが浮かんでは消えていった。

赤の道はローウエンへと伸びる代表的な本道であり、ほぼ一直線に進めば関所に突き当たる。そこで種々の検査を経た後に、ローウエンへの入国は許可される。いつそそこで弾かれて入国不可となったら、どれだけいいだろう……。とぼんやりそんなことを思っていた、そのとき。

ザザザツと幾重もの草々をかき分けるような音が耳を突いた。のろのろと左右の草原へ目を配る。と、右手に視線を這わせたときだった。紫色の矮躯がこちらへ向かって全力疾走してくるのではない。ギョツと目を丸くし、衝突を避けるべく急いで後ろへ跳び退ると、老人が道へ足を踏み入れたのは、ほぼ同時だった。

「こりゃ参ったもんじゃア、あの女狐めがなかなかやりある……。ん？ なんじゃい、こりゃア。お前、なにをしておる、こんなところで」

ミューズは驚くまいことか。くだんの紫皇帝、その人であったのだから。

「あ、あなたこそなにしているのよ……。って、ケガしているじゃない！」

腕にしたたる鮮血を認めミューズが喚くも、老人は涼しげな顔で、

「なんじゃい、こんなもの。なんでもありやアせんわい。ちよつと切っただけじゃ。これの百倍くらいあの女狐は負つておるぞ……」

「もつとも、わしの体を傷つけたやつは五年ぶりじゃがのう」
最後の方は独白らしかったが、ミューズがなにか言いかけるよりもはやく彼女の陰鬱とした表情に目を留めたらしい老人は、声を張り上げた。

「師匠が目の前におるというのに、なんじゃいその面は！ もつと笑え！ 死ぬときも笑う、これが我が一門の教えじゃぞ！」
「う……わ、笑えないよ……」

むなし言葉を返したミューズの頭に、ふとひとつの単語がよぎった。

「師匠」。

そうだ、もしかしたら……。

「なんじゃ、なにかわけがあるなら話してみい。お前はまだわしの敵ではないぞイ？」

草が腕にあたるチクチクとした感覚に悩まされつつ、ミューズはひとしきり説明を終えていた。聞き手の老人は現在、驚いたことに無数の草の上に胡座をかくという離れ業をやつてのけていた。老人曰く、「内力を積みばこのくらいわけないわイ」とのこと。

半分空中浮遊に近いことをやっている老人は、話が終わるとふうむと鼻をならし、

「なるほどなア。そりや肉斬連刃の気持ちも分かるわイ。お前を守りながら半島を下るのは、あやつにはかなり荷が重はずじゃろう」
「で、でも。あんな言い方……」

「そこはそこ、あやつなりにお前のためを思ったと考えるんじゃ。あやつはそう器用なやつでもなかるう。」

それで、お前はなにをしたいんじゃ」

問われ、ミューズは右手の拳を強く握った。訊かれる前から答えは決まっていた。決まっただけでもなお、躊躇する自分の心が恨め

しかつたが、一度頷くと、老人の瞳を見据えてミューズは言った。

「六十四般のうち、わたしが憶えている手をすべて教えて」

「………ほう？」

「わたしの体にどうしてその武術が身についているかは知らない。知りたくもない。でも、わたしだって武術を思い出せば、名無しを追いかけられる。あいつの足手まといにならずに済む」

老人の顔を伺い見ると、なぜか皺が縦横無尽に走ったその小顔に、ひどく悩ましげな色を浮かべていた。どこか哀れむような、それでいてややもすれば嫌悪感がしみ出してくるような　そんな色を。

老人の乾いた唇が、二三度、もごもごと動いた。

「教えることはよい。わしとて、この仕事を途中で放り出そうとも思わん　しかし………」

「ならいいわ。早く、わたしを強くして　ううん、強いわたしを思い出させて」

「困ったのウ」

てらいなく相好を崩す老人の瞳は、しかし笑ってはいなかった。

「昨晚あの女狐にあつたかと思つたら、次はこうなるとは………」

・ふむウ、よかろう。少々流れは気にくわないが、しばらく師匠としてお前を強化してやる」

それに続き、ごく小さな声で呟きがこぼれたが、そちらを聞き取ることはミューズにはできなかった。

紫皇帝は僧服を翻すと、草から飛び降りて仁王立ちになった。

「ではお前のすべきことを伝えよう。まず六十四般のうち、残りをすべて一つずつ、丁寧にやるのじゃ。やり方は以前と同じ。わしが技名とともに、体の詳細な動きを教えるから、それだけで体が動くか否かを確かめる。それを繰り返すのじゃ」

「分かつたわ」

ミューズもまた、老人から少し離れて立つ。と、紫皇帝はひよい

と草むらのほうに飛びこんだ。

そのままスイスイと進み始めたので、ミューズは慌てて後を追った。しばらく腰近くまで伸びる草の間を進むと、やがて草が途切れる場所があった。そこだけが、円形状に草がなぎ倒されてしまっている。屈んでみてみると、葉は根本からバツサリと切られていた。それにしてもどうしてこんなに　と思っていたが、敢えて尋ねることもしなかった。今、わたしがしなければいけないのは、自己の強化だ。名無しの隣にいても耐えられるだけのわたしを思い出すことだ。

円の中央部分に立った老人の口から、ひときわよく響く声が發された。

「第十七手　＜妃乱玉明＞」

頭が、即座に反応し、老人に対してその動きを再現していた。右足から踏み切り、相手の虚を突いたところで引き絞った左の指先で首の＜情意穴＞を狙う技だった。左手を手首ごと掴むと同時に拳を飛ばすという応手に対しては、右掌を地面についてこれをかわし、同時に左足を空へ思い切り振り上げた。

さすがに、紫皇帝の動きは俊敏だった。鬼気迫る勢いの蹴りを易々と回避すると、手首から手を離して三步だけ、ゆっくりと下がって見せた。

「これでは詳細な説明は不要なようじゃの」

老人の両目が怪しく光った気もしなくはなかったが、猛り始めた頭はそんな些末なことを瞬時に忘れ去り、ただ獣のように次の指示を待っていた。

クークス（15）

ケールマンに到着したとき、すっかり時間は夜半に入っていた。商隊の部隊長らしき人物が、積み出す荷物をおろす指示を飛ばしている。クークスもいくつか積み荷を下ろしては同じシヤビ教徒が営業している夜市へと、商品を移し運んだりとしばらく大忙しだったが、やはり一抹の不安は漂い続けていた。

やはり夜市だけあって人はそう多くないが、こんなときでもやっている酒場は多く、そうした酔っぱらいが千鳥足で訪れては、冷やかし半分でマーケットをそぞろ歩きしていた。商隊が照らし出す炎と酒場から漏れる暖かな橙色の灯りとが、闇夜をぼんやりと照らしている。おかげで、クークスの夜目をなんとか利いていた。

「えーと、これはヒツグ商会の黒胡椒だから……あそこか」

ぶつぶつと呟きながら、鍛え上げた筋肉で荷箱をひよいひよいと運搬していくクークス。おおよそやるべき事は分かっている。転売のための納品を終え、自分がついている荷車の積み荷がほとんど空になったのを確認する。

「こればかりは単純作業だから、頭を使わなくていいから楽だな」荷車に腰を下ろして夜市を眺める。視線の先では、商人と使いつ走りたちが忙しそうに飛び回っていた。大抵のものはこの横断が初めてというわけではないので、テキパキと己の仕事をこなしていくが、唯一、黒髪の少女だけは何度も怒鳴られながら、あちこちへと足を動かしていた。

「おい、ハルカ！ ジャンファルの女将さんへの豆はまだか！」「はひい！ すいません！」「塩の瓶がいくつか抜けてるぞ！ 補給しろ！」「ははははいつ、ただいまあ！」「ハルカあ！ 早く茶葉もってこい！」「すすすみませーん！」

……ハルカの話によれば、彼女を追う「おじいさん」と

やらの眼をくらすために、念を入れて出発の四日前から小さな商會に正式に入ったらしく、やはり経験の面では圧倒的に不足しているようだった。なんども納品場所を間違えたり、売り交渉の場所に間違つて飛びこんだりと、散々のようだった。

「……手伝ってくるか」

どうにもあの少女は見捨てておけない。というか、見捨てたら同じ荷車担当の自分にもとばかりが来るかも知れない。せめて、彼女が受け持つ商品を搬入し終わるのを手助けするくらいはやるべきだろう。

とか思っていると、ずてん！ とハルカが荷物ごと転倒していた。見るに見かねて歩み寄ると、クークスは無造作に荷物を担ぎ上げた。「すすすすごい、クークー、ち、力持ち！ えーと、じゃあわたしは……こつちの小さい方をも、も持っていいかな？」

「なんで確認するんだよ。さつさと終わらせよう」
「う、うおん」

奇妙な声とともに首をいっばいに首肯させて、ハルカは積み荷を抱きかかえた。

ほとんど荷物もさばけたかな、と思いながら自分が積まれていた荷物が空になったを見届けると、入れ違いにそこへケールマンから出立する商人の積まれていく。その様子を傍らで眺めつつ、小箱を持つて行ったハルカが戻ってくるのを待ち続けた。

「く、くくクークー」

しかし戻ってきたハルカはやややつれた表情を浮かべていた。頭の頭巾が少し外れかかっている。

「え、えええと、あそこの馬車の中に積まれているもの、見た？」

馬車は大きな商會しか保有できないため数が少なく、どの馬車かを特定するのは難しくない。ワケが分からぬままハルカの指し示す方向を見ると、左右前後を粗布に覆われた四輪馬車が鎮座している。御者台で番をする商人がひとり。傍らに立っている兵士は護衛だろ

う、彼の持つ火の影がちらちらと、白い布に影を投げている。

「見てないけど、なんだ？ あれも下ろさなきゃいけないものか？」
「かかか、かも。もしヒーゴトンの豆だったら、わ、わわわたしの受け持ちだ。ごめん、見てくる」

小さな木箱を地面に置いたハルカは頭巾を翻して走りかけた、が。
「いや、その必要はないよ。あれは干物だ」
「へ」

ハルカが口を開け放った顔をこちらへ向ける前に、クークスは己の言葉に絶句していた。

どうして分かった？

つい先刻、自分は見ていないといったのに、なぜ自分は中にあるものを口走ったのだろう。しかも当て推量でもない。確かにあそこに詰められているのは魚介類だと。それも干物だとはつきり確信があった。

二人してぼかんとしていたが、不意に原因に思い至り、再度クークスは眼を大きく見開いた。

視えたんだ。

そう、確かに「視」えた。粗布に遮られた空間の木箱と、そこに詰められた干物の類を。ホントに刹那だが、確かにそれらは視界に映ったのだ。

「あつ、ほほんとーだ！ 干物だよこれ！」

「バツカヤロウ、いちいち蓋を開けるな小娘え！ 箱の横に刻んであるだろーが！」

「あへえ、ごめんなささああい！」

御者台から飛ぶ罵倒も耳に届かない。

なぜ視えたのか？ いくつも疑問符が頭を舞ったが、当然答えはなかった。ただ突発的に、彼も意識しないうちに「視えた」だけなのだから。

深呼吸をしてもう一度、こめかみの血管が切れんばかりに目を凝らす、もう布の向こうの空間を垣間見ることはできなかった。

「くー、クークー……顔、ここに怖いよ。黒海原の青鬼さんも真つ青だよ？」

いつの間にかハルカが目玉を動かしながら、心ここにあらずといった顔を間近から注視してくる。

「気のせい……じゃない、よな……」

全身が凍えるのが感じられる。たちまち自分が立つ地面がどろどろに溶けて、全身が冷たい泥の中に飲み込まれていくような焦燥。なんだ、なにが起こった。

焦燥の原因に思い当たり、クークスは息をのんだ。今まで視線をそらしていたハルカの顔へ、ゆっくりと焦点を合わせていく。

視点の先にあるものを夢想しながら、クークスは喉を鳴らした。

いつの間にか冷え切った汗玉が首筋にいくつも浮いていた。

「く、クークー？ どうしたの、汗びっしょりだけど……」

視たくないという思う心こそ、裏返しだった。状態を案じて手を伸ばしてくる、少女の顔を、真正面から見据え。

「う　うあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

喉も裂けよとばかりの絶叫に続いて、クークスはあらん限りの力で目の前のソレを突き飛ばした。

突き飛ばして、気づいた。

「あ……」

戻っている。いつものハルカの姿に。だが脳裏に、その映像はハッキリと焼き付いていた。

こちらへ伸びてくる手は赤く、しかし白い筋が何本も入っている。顔面も幾筋に線が刻まれた赤色で、視線を落としたその下にあるふくらみは、無数の血管が這った白色で、乳首だけは赤い。乳房から下りた白い筋は谷間で二つに分かれ、腹を下り股関節まで伸びている。さらにその途中で、幾筋も内側へ白い筋は派生していた。

だがそんなイメージは問題ではない。あろうことか、その『筋肉をむき出しにした人間』は、動いていたのだ。当然だ、今、目の前にいるのはハルカというひとりの少女なのだから。分かっているも、内臓で逆流が起きたかのごとく嘔吐感がこみ上げてくる。

何度も死体は見てきた。主に自分が解体した肉片たちだ。だがごく普通に駆動して、心配げな顔をする死体など、お目にかかれるはずがない。

尻餅をついたまま、荒い息をはき続けるクークスをハルカが見上げていた。紫色の頭巾が頭髪を覆い、丸い眼は萎縮したように丸くなっている。だが、その裏にある人体の構成を脳に思い浮かべるだけで、たちまちクークスの気分は荒んでくる。

「い、いや。ご、ごめん……」

頭はすでに混乱の極みに達していた。それでもなんとか笑顔を作ると、ミューズを助け上げるべく手を伸ばした。

握るハルカの指先から自然と眼が逸れてしまったことは、言うまでもなかった。

ミューズ(16)

「第六十三手、<柳風里>」

差し出されたシワシワの手を、瞬時に横へ払う。また手の甲にある<五釈穴>を突くことで、大抵の人間は腕に強い痺れを感じて工モノを取り落とす。たった一手ながら、一見力がこもっていないものの強烈な払い手である。

「第六十四手<風羽交直>」

「……ん、それは、分からないわ」

げっそりとやつれた顔でミューズは言うと、その場にぺたりと座り込んだ。朝はとうに明け、太陽も中天を過ぎて西に沈みかかっている。もう半日、食事も摂らず技を繰り返して続いていた。彼女の集中力は自分でも信じられないくらいに高まっていったが、いよいよすべての手が終了するとさすがに脱力しきってしまった。ドクドクと脈打つ鼓動と全身の火照りを感じながら、ミューズは熱くなった頭で考えた。

二十三手……これで、あいつを追いかける。

ふと老人を見上げると、そこにあつたのは実に険しい顔であった。どこか思い詰めているように瞳を濁らせ、じっとこちらに視線を注いでくる。

「ど、どうしたのよ?」

「うむ……」

紫皇帝は顔を曇らせたまま、むっつりと口をつぐんだ。両目はミューズを捉えているようであり、どこか別のなにかを見ているような気がする。

「……わしのこれまでの行いは、誤謬じゃったのか……」

「……否、そんなはずは……」

「??」

小さく独りごちた言葉が聞こえたが、疑問はひとまず先送りして

ミューズは汗をぬぐい、よろよると立ち上がった。

「ムラサキさん、これからわたしはどうすればいいと思う？」

「技を習得したら………実戦が使わねば意味がなかるウ………」

ほそぼそと返ってくる言葉に、なるほどと頷く。先ほどまでは紫皇帝が無条件に初手を食らってくれるという練習であり、案山子を相手にしているのも同然だった。

「でもねえ、実戦なんていったいどうやって………」

「それはそこ、ホレ………格好の舞台が、あるわイ」

「ん………あ、大会ね！」

叫び、ミューズは遙か後方に位置するであろう都市ケールマンの方へ首を回した。七色大会への出場には戦士本人に加え武器制作者が必要と言っていたが、エモノとして壺を用いるならば、陶芸職人であるアライに頼んで問題あるまい。

確か大会は明後日のはず。ならばその日までにミューズができることは、どのようにして記憶していた二十三手をエモノである壺と組み合わせるかである。

「まだ先は長いわね。こんなことしていたら、名無しがもう帰って来ちゃうんじゃないかしら」

「………ドビエン又までの道のりは長いぞ。それに雑闘衆の本拠地は半島の末端にあるから、半島に入っても下るまでが大変じや」

紫皇帝には、名無しがドビエン又半島へと自分を置いて向かったことしか説明していなかった。暗い顔をしたまま紫皇帝は唇だけと細かく震わせる。

「無害なのか、有害なのか………問題はそこじゃ。過つなよ」

「だからなにがよ」

「なんでもありやアせん、小娘。それより出場するなら、さっさと手続きをしてこい」

「でもやり方を知らないんだけど。まさか名前を書かなきゃいけない

かったり？」

「たわけ、軍海の荒くれに識字が期待されるはずなかるウ。ただ色のそろった腕章を二つもらいにいくだけじゃ。色は、赤、青、黒、白、黄、緑、紫のうちのどれかじゃったか？」

「腕章つて、もらつてどうするの？」

「出場者と制作者が腕章を巻いて、当日に闘技場へ向かえばよい。運営側は用意していた腕章がなくなった時点で参加を締め切ればいいだけじゃから、楽なモンじゃ。いかにも軍海らしい、大雑把な方法じゃろ」

大雑把というよりいい加減なだけな気もするが、まあ運営側や観客としても四大国が開催するような格式張ったものより、強い者同士との戦闘を見たいだけだろうから、問題がないといえはないのかもしれないが。

「もう二日前じゃから、だいぶケールマンの方も人の入りが激しくなってきたじゃろう。さつさと行かねば、今日中にも枠が無くなってしまうぞい」

「事を急ぐのね。分かったわ、また戻ってくるから！」

一言そう言い残すと、ミューズは足にぐつと力を込めて地面を蹴った。疾風千変を用いて高速で森を駆け抜ける。それでもだいたい距離はあつたから、到着したときには日は沈みきってしまった。いた。

紫皇帝の言つたとおり、ケールマンの通りを歩く人間の数は、昨日の比ではなかった。酒場や民家、鍛冶屋　およそ観光風情など感じられない場所にいくつも人ばかりができている。さらには露店も顔を出しており、威勢のいい呼び込みの声があちこちらから聞かれる。街全体が活気づいているようだった。

ふと、通りを進んでいると長屋らしき建物の裏から長蛇の列がはみ出しているのに気づき、ぎょつとした。のぞき込んでみると、列の先、闘技場の真ん前に天幕と思しきものが建てられていることに気づいた。

参加者の列だ……。

ゴクリ、と唾を飲み下す。一目でただの破落戸と分かるものから、一筋ではいきそうにない者まで、多様な人間までが列を成している。「強そう」

武芸の基礎の基礎である六十四般のうち、いくつか習得しただけじゃ、やっぱり勝てないんじゃない？ という降ってわいた疑念を、かぶりを振って払い落として、ミューズはアリの店のほうへときびすを返した。

朝、なにも告げずに出て行ったことを丁寧に詫びた後、その際の事情をごくかいつまんで説明すると、アリイはかわいらしい悲鳴をあげて驚愕した。

「え〜！？ 名無しさんがいなくなって、ミューズさんが大会に出るう！？」

あまりの驚きで、危うく手に持った壺を落としかけている。

「朝起きたら急にいなくなっているから、心配したんですが……
・・・そういうことだったんですかあ。それにしてもミューズさんを危ないから置いていくって、勝手なんだが優しいんだが分からないですね」

「その両方よ、たぶん。ま、その話は置いて、大会の件は……
・・・どう？ 出て欲しいんだけど、無理には……」

「制作者側として出るのには問題在りません。でも……」
遠慮がちに見上げてくる視線にこめられたものを感じ取って、ミューズは機先を制した。

「危険なのは分かってる。でも……名無しが向かったところは、七色大会なんて眼じゃないくらいに危険な所だから、このくらいは乗り切らなきゃ、一生足手まといなの」

むしろこれから臨む大会を生ぬるい、とさえも思うくらいではなければいつまでも追いつけまい。ミューズが拳を握って密かに覚悟を決めていると、アリイはふと真顔になって、

「ミューズさん、本当に名無しさんのことが好きなんですネ」

「……自分であんまり意識してなかったけど……
そうかも」

きつと少し前に言われたならば、きつと全力で否定していたであろうセリフだったが、ミューズは正直に小さく頷いた。顔が少し火照るのが分かる。

アリイはにつこりと大きく微笑むと、一度大きく首を縦に振った。「分かりました。そこまで覚悟があるなら、一緒に頑張りましょう」

その後、延々と続く列に二人で並んで参加申請を済ませた　と　いつても、赤の腕輪を受け取っただけだ。

再び二日後には店を再訪するとを言い残して、ミューズはまたケールマンを後にして紫皇帝の元へと駆け戻った。

クークス（16）

目覚めたときからの頭痛が、足を進める度に激しさを増していくようだった。顔をしかめ、前髪をやけっぱち気味に掻きむしる。

「だ、大丈夫かな、クークー？」

ハルカがひよこんと顔を出してくるのも、もう何回目だろうか。声を発するのも億劫で、クークスは無造作に頷いた。

ケールマンを出立して、半日が経過した。あれ以来、おかしなものを『視』てしまうことはなかったが、いつまた隣の少女が自分の視界の中で筋肉だけ、骨だけ、血管だけの人間になるのかと気が気でない。突発的に訪れる変化を、どうしようもなかった。

いや、突発的なのは、語弊があるか……。だつてあのとき。

まあ、それはともかく。

なぜ対象を透かし視ることができたのか、答えを持ち合わせていない以上、考えても仕方ない。クークスがブツブツと独り言を言っているのを、ハルカが不安げに見守り続ける。気持ちは分かる。なんせハルカを力一杯突き飛ばしたときの自分の表情というのは、鬼の形相に近かっただろうから。さすがにあんな怖い顔だけは、もうするまいとクークスは曇り顔を消して薄く笑んだ。嘘の笑みでも、なんでもよかった。

笑うと、少しだけ気分が軽くなったような気がして、おかしい。

「わわわ、笑ったあ……。よかった、クークー、顔がずっと暗いから……。」

「それはお前のせいだ」

「ぬあんでゆえすとう？」

「お前の態度がおかしかったからさ」

「っ、つつつついつて、ひ、ひどいクークー。べ、別にクークーの心配してたわけじゃないんだからねっ」

「よし。じゃあ俺もお前を心配しない。だから木の根に躓きそうならんて忠告もしない」

「え？ のわあ！」

数歩前を歩きながら顔だけをこちらに向けていたミュージズが慌てて眼を下にやったときには、すでに足が張り出した根っこにとられすくわれていた。

分かっていたことだったので、素早く両手で後ろから支えて引き戻してやった。ハルカはしばらくきよとんとした顔つきで、こちらを見つめていた。が、やがて羞恥で顔が真っ赤に染まり、それから口がぱくぱくと音を求めて開閉を始めた。

「……見ていて純粹にオモシロイ人間がいるとは思いませんでした。今度こそ、ひとしきりクークスは腹を抱えて、本気で笑った。」

「うあー……ひどかったりするクークー……」

こけてもいないのに、頭巾を両手で押さえるハルカの眼が少し涙に滲んでいる。やべ、さすがに少し無遠慮だったか、と思って素直に詫びようとしたところで。

ふと、うなじにチリチリとする感触が生まれた。

誰かに見られている？ そう思ったとき、首が自然と右手に広がる広大な森へと向いていた。やや離れた太い幹の木々の陰誰か、いる？

さらに眼を凝らしかけて、クークスは反射的に身を引いていた。

一瞬、なにが起こったのか分からなかったが、無意識のうちに自分が木を透かし見ようとしていたことに気づく。首筋からぶわり、と気持ち悪い汗が生まれる。

「ど、どうしたの？」

「ん……」

ほとんど戦場で鍛え上げられた野生動物並みの勘だけに拠っているため、何者かがいるということを言うべきか迷われた。そうするうちにも、徐々にその大木は光景から離れていく。横目で最後まで

捉え続けたが、とうとう確証は掴めなかった。

木が見えなくなるのを見届けてから、何者かを考えてみたが、あそこに人がいたとするならそれはハルカか自分を狙っている者だろうということも明白だ。ハルカを追っている「おじーさん」とやらかもしれないが、可能性としてはここがサリヴァ軍閥領であることを考えれば、人外の連中かもしれない。

いずれにしてもハルカに言っただけは下手に刺激するだけだ、と思いクークスは黙りを決め込むことにした。

「ちよつと野ウサギがいたんだ」

だからこういうことにした。

「う、さぎ？」

「そう。ピヨコンって耳を立ててさ、かわいかったよ。ハルカにも見せたかったな」

軽くからかう調子で告げて、ハルカの顔を何気なく見て、息が止まった。

その顔から、表情が消えていたのだ。

眼球はただ丸い玉のように、一切の光を失い。唇はただの棒のように、引き結ばれ。頬はただの肉であるように、だらりと落ちて。

ただ人形のごとく、という比喻がそのままではまりそうなほど、一瞬で彼女の顔面からは生気がそげ落ちていた。

「ウサギさんは、嫌いなんだよ」

「そ、そうなのか。なら別に残念じゃないな」

「かわいいウサギさんは」語尾に堅い声がかぶせられる。「みんな殺しちゃったから。わたしが、みんなバラバラにしたの。首を引きちぎって、体のふわふわした皮を全部剥ぐの。それはとてもツルンとしているの。背中の方はまだ赤いけど、お腹の方はちよつと黒っぽくて張り出して、たぶたぶしているの。骨がつつすらと浮かんでいるの。お腹も切っちゃう。長い前足の先っぽは切り落とすの。内臓を全部取り出して、血を抜くの。ウサギさんは白くなるの」

「な、なに言っただ。実はウサギなんて嘘で……」

「取った内臓はみんな食べるの。お肉は捌いたわたしが食べるの。でもそれは始まり。その後は、ただみんなで捕まえたウサギさんをわたしが『壊して』いくの。ただ壊すの。首をもぎ取るの。目玉を潰すの。耳を引き抜くの。足を折って、お腹を最初から開くの。いっぱい殺すの。いっぱい殺すの」

虚ろな　どこまでも虚ろな言葉。ただ物理的な空洞のように、それはクークス胸に飛びこんでくる。ハルカは今、まっすぐ前を向いているが、その瞳は虚空に合っていて、微動だにしない。

「殺したくないのに。殺せって言われたから　嫌いなものを、すべて好きになれ、って言われたから、わたしは大好きだったウサギさんを壊し続けて、嫌いになったの」

風がずきんをさらって、抜けた。

ガタガタと、無数の荷車や馬車があぜ道を進む音だけが、二人の間に舞い降りた。

「だから……」

空っぽの言葉がさらに紡がれようとしたので、さすがにクークスも無理矢理割って入ろうとした。

その瞬間。

それまでたとえ声が死のうと表情が消えようと、前へと動いていた二本の足が、ふと止まった。視線が虚空に張りついたらまま、一点を凝視している。訝しんだクークスがそちらの方へ目線を向けると、奇妙なものが目に飛びこんできた。

右手の樹木　道にたっぷりと枝をせり出した樹木の幹の部分に、紫色の四角い布が鋭い杭のようなものによって突き刺さっていたのだ。

「なんだあれ……」

言いかけて、再度クークスは絶句することになった。

隣に立つ少女の顔に、感情が戻っていたのだ。ただし顔面は先刻

以上に蒼白となり、細い両足が小刻みに震えていた。瞳孔が見開かれ、その両手がクークスの腕をギュツと掴んでくる。

驚いたが、それ以上に顔に浮かぶ怖気の色を見て衝撃を受けたクークスは、なにも言えなかった。

そのまま二人は足を止めるわけにもいかなかったので、クークスはいつまで動こうとしないハルカに手を貸して一緒に歩くことにした。彼が肩に回した腕の内側で、少女の体はまだおこりのようにうち震えていた。

ミューズ（17）

草が円状になぎ払われた空間に戻ってくると、紫皇帝は真ん中であぐらを掻いたまま、必死な顔でなにかを思い詰めたように腕を組んでうなづいていた。

「間違っておったのか……誤謬じゃったのか……」
「なにしてるのよ」
「む、小娘か」

虚空をひと睨みして、横目でこちらに視線を寄越す。

「なんでもないわい。それより、エントリーは完了したか」
「ええ。なんとか滑り込みセーフ」

それはよかった、と半ばどうでも良さげにいつて、老人はあぐらを解いて立ち上がった。こうして見ると、どちらかといえば小柄なミューズより、さらに一回りくらいの背丈だ。だがそこから繰り出される武術の腕前については、身を以て知っている。

改めて、この小男について自分がなんの知識も持ち合わせていないことを思い知った。名無しに訊いていれば、なにか分かったのかもしれないが……。わき起こった好奇心に駆られて、ミューズは尋ねた。

「ねえ、お爺さんと名無しって、どっちが強いの？」

「たわけ。肉切連刃ごときに屈するわしなものか。あんな小童、十手以内に倒せるわい」

投げやりに言い捨てる紫皇帝。これには自分から尋ねておいてなんだか、少々むっとした。名無しの強さを眼前で目撃した自分からすれば、あの少年の強さは疑いようがないからだ。

「じゃー、今のわたしと名無しのコンビなら？」
「虎にネズミが助力したからといってなんになる」
へこんだ。

と、とにかく自分はまだ力不足　さらに二日と大会日程中に精

進するしかないのだ。そうでもしないと、これから名無しの隣にずっといられないから。ローウェンでの役者志望という夢ももうどこかへ吹き飛び、ミューズはそんなことを考えてひとり奮起した。

「なにを力んだる小娘。ま、これからが本当の勝負じゃからな、勢い込んでケガなどするではないぞ」

老人は言つて、ミューズに数歩近づいてきた。

「お前、エモノは？」

「これ」

後ろに背負っていた包みから、アライに新しくもらった壺をひとつ取り出し、もうひとつを老人との訓練中、隅に追いやっていた荷物の中から引つ張りだしてドン、と目の前に突き出した。

寸暇、老人の目が丸くするが、すぐに呵々大笑した。

「そうか、そうか！ 壺がエモノとはな！ こりゃ愉快じゃア！ たわけめ！」

さすがにミューズが不機嫌そうなジト目になっていることに気がつき、ゴホンと咳払いをして笑いを止める紫皇帝。

「しかし……壺、というのはこれまた面妖じゃ。さて、武器としての性能はいかほどか見せてもらうとするかの」

老人は服をはためかせて両手を広げた。

「壺でどれだけやれるか、全力で襲ってこい」

「よし！」

ミューズは疾風千変で踏み込み、先の細くなったアライお手製の壺による妃乱玉明を繰り出した。

老人は一步も動くことなく、身をありえない角度で後ろに追つて、突きをかわした。標的を失って空を貫いた壺の口先が、直後に捕まれる。

「ダメじゃ」

「は？」

「どうもいかん。お前、今踏み込むときになにをした？ 疾風千変で踏み込まなかったか？ ありゃア、走法じゃ、踏み込み技ではな

い。もつと別の さしあたつて<天狼不破>あたりで瞬発的に動
け。あれの足の動きは覚えておるか？」

「う、うん」

なるほど、と頭の帳面に書き記したところで、老人は壺をつか
だまま、体を起こし、続いて驚くべきことを言った。

「とうより、そもそも実戦では二十三般をそのまま素直に使つて
もまず意味がない」

「うええ!？」

これまでの苦勞を思い出して、たちまちミューズは肝が冷えた。

「お前、なにを聞いておつたんじゃ。あくまで六十四般はある武術
を形成するための土台 否、素材にすぎぬ。そのまま使つてもほ
とんどのは、できるできないは別として型だけは知っておるから
まず先が読まれる。だからこそ、そこから自分の流派の改変が必要
なのじゃろつが」

「う、そ、そんな・・・」

そんなのことなら早くそつちの改変した方を教えてよ、お爺さん
の流派とかつてやつでいいからさ、と言いかけたが。

「まあ、わしのように六十四般のすべてを極めきつておるなら、
話は別じゃがの」

「つていうことは、お爺さんまさか・・・」

「わしはどの流派にも属さぬし、新しい流派を作ろうとも思わん」

老人の手が壺から離れていく。そのまま風ではためく自らの僧服
を押さえながら、老人はややもすれば独白のように告げた。

「ひとつの型を覚えるのに膨大な労力が必要、だからそのなかから
有望そうなものだけを取り込んで武術を作るという気持ちは分かる
が、所詮は複製。結局な、原点を極めきつた至純の境地こそが、最
強というものなのじゃ」

「は、はあ・・・」

つて、そんなことどうでもいいんですけどー!? お爺さん哲学
はいいからさ! そりゃあんたは最強で、なんちゃって皇帝かもし

れないけど、わたしはそんなに全部覚える余裕なんてないんだし！
だがそう告げる老人の顔は、自信に溢れているわけでもうそぶいて
いるわけでもなく、ただしんみり、という単語がぴったりきそうな
ほどに哀しげだった。

「さて、わしがなにが言いたいか、分かるか小娘」

あ、顔がいつものスケベに戻った。

「さ、さあ」

「さあ、じゃアないわい。つまりお前が二十三般を覚えているとい
うことは、裏を返せばそれを基にした、なんらかの武術を会得して
いた可能性が高い、ということじゃ」

あ。

そうか、当たり前の帰結だ。彼以外の人間にとって、六十四の手
は素材にすぎない、とさきほど言っていたのだ。ならばそれは一体
なんなのか。ミューズは頭を抱えて、必死に自分の奥底にあるもの
を探り始めた。

心臓が早鐘を打ち、血流が熱くなる。思い出したくない、という
記憶もまきこんで思い出してしまうだろうが今は四の五の言ってい
る場合ではない。

気づけば老人の眼球が目の前にあつた。じつとこちらを、興味深
げに見つめている。だがもはや彼女の意識からは、周りの風景や五
感すらもそげ落ちていた。

思い出せ、思い出せ、思い出せ。わたしの体に染みついている、
その武術は、なんだ、なんだ、なんだ！

ソレは、その武術とは。

「ハクダ」

突然首筋を衝撃が襲い、視界が暗転したのはまさにそのときだっ
た。

同時に、ミューズの意識は一瞬で飛んだ。

クークス（17）

ゴルドハンスに到着するまで、ハルカは生ける死人のような態だった。クークスが肩を貸してやらねば一步も前に進もうとしない。顔面は寒波にさらされているかのごとく真っ青で、血の気が引いていた。

初めは事情を伺おうと思っていたクークスだったが、あまりの様子のため大いに躊躇われた。むやみに刺激しても不都合なことになりかねないため、なんとか気を引きそうなオモシロイ話を立て続けにまくしたててみたが、とんと反応がない。諦めてクークスは荷車に離されまいと、やや急ぎ足で街まで歩き通した。

東方有数の大都市であるゴルドハンスは、サリヴァ軍閥領でも最大の物資の集積地だった。当然ここには長居することになるが、この街こそがクークスにとって最大の山とさえ言えた。ここさえ無事に乗り切れば、あとは次のハツベルへ目指す途中で商隊から抜け出して、やや北にある村へと全速力で向かえばいいのだ。村まで行くルートを除けば、やはりこの街を無事に通過できるか否かは非常に大きかった。

到着すると、さっそく積み荷を運搬することになったが、ハルカの状態がいつこうに改善しなかったため、クークスはハルカのいる商会から派遣された人間に、自分が二人分働くからハルカを荷物番にするよう頼んだ。初めは少し渋っていたが、なんとか了承が取れたのでテキパキと積み荷を運び出す。一刻も早く作業を終えてここを出たいという思いが強いクークスは、他の商員が眼を丸くするほどの手際によさで仕事をこなしていった。

あらかた自分の運び出す荷物がなくなると、他の人間の運搬も手伝ったが、それでもゴルドハンスにある教会の音がちょうど一日の半分を告げても作業は終わらなかった。

移動と激務の連続でさすがに疲れが出てきたため、休憩を取ろうとクークスは空になった荷車にずっと同じ姿勢で座っていたらしいハルカの横へと、腰を下ろした。

「荷物はやっておいたから安心しろ。気分がすぐれないなら、街を出るまでここにいればいい」

できるだけ明るい語調で告げると、一度緩慢な仕草で首が縦に振られる。横に垂れた頭巾のせいで、表情はうかがい知れない。

「食うか？」

「ごそごそと取り出した昼食代わりの干物を、自らくわえて残りの一枚をハルカに渡す。細い指先でつまむと、ハルカはゆっくり顔の方へ運んだ。

クークスは正面の森へと目をやった。今のところ気になる葉や、草の不自然な動きはない。市街を回っている間も尾行者などがいないことは確認済みだ。ここまでくると、クークスはひとつの確信に行き当たらずにはいらなかった。

現在、どうやら自分は『声』ベルジャックに狙われてはいないらしい、と。

ゴールドハンスやケールマンという、横断商隊ならまず間違いなく通過する都市に隠密ひとり置いていた気配がないことから、それは分かる。とするとあのとき木の陰にいたあの人物はハルカを狙っていたということになる。もちろん、他にまぎれた輩を狙っている人間の可能性もなくはないが。

すると当然、さらなる疑問がわくわけだがひとまずクークスはこれを先送りにして、おもむろに口を開いた。

「ハルカ、気づいているとは思うけど」

「.....」

干物を運ぶ手がびたりと止まると、促すように顎が引かれた。「さつき、お前を狙っているやつがいたかもしれないんだ。詳しく知らないけど、あの紫色の布と関係があるんだろ？」

沈黙。続いて、ゆっくりと持ち上げられたハルカの顔には、ほの

かに寂しげな表情が張りついていた。口元には幽かな笑みが刻まれている。

「う、うん。たぶん」

諦観めいた空気すら漂わせる彼女にやや面食らいながらも、クークスは続けた。

「お前を追っているお爺さんって、正体は分かっているのか？ 見知らぬ、とか見知ったとか言ってたよな……」

丸い目がつらそうに細められ、ハルカの顔は軽く横へ振られた。地面についた足が、こつんと小石を蹴る。石の行方を見守るように、ハルカはうつむいた。

「……そうか」

嘘なのか本当なのか、ハッキリと判別できなかったものの、クークスは敢えて深入りしなかった。

ならば紫布が意味するところだけでも問うてみるか、いや刺激しそうなことは控えた方が…….と思考を整理していたクークスの意識に、突如、思いがけず明朗なハルカの声が届いた。

「あ、あのー！」

「ん？」

「く、くくくくクークー。し、しし質問だよ。べ、別に答えて欲しいってわけじゃあないんだけど…….その、一目惚れって…….したことある？」

語尾の方はほとんど消えかけていたが、あまりといえばあまりに脈絡のない質問に、クークスは戸惑った。のぞき込んでくるハルカの顔はいつの間にか、真っ赤になっている。

「さあ。ない、と思うけど」

あの白い少女については、一目惚れというより後目惚れであるから違っただろう。ハルカの顔に一瞬、なにか言いようのない感情が走ったような気がした。かと思うと、顔をまた前へ向けてしばらくじつとうつむいていた。その表情は伺えなかったが、すぐに頭部は持ち上げられた。

その頬が嬉しそうにゆるんでいるのに、ますますクークスは戸惑った。双眸は、内側からわき上がるなにかをこらえるかのようになり、キユウと細められている。でも顔は朱を散らしたままだ。

「大丈夫か？ 熱でもあるんじゃない」

心配になつて問いかけると、突然ハル力がぷつと吹き出した。我慢できない、というように天を向いて鈴のような声を鳴らして笑い出す。いつそうわけがわからず呆気に取られていると、ようやく笑いを引つ込めたハル力は、口元をなおも袖で押さえたままにんまりとこちらを向いた。

「に、鈍いつ」

「へ？」

「クークー、ぜぜぜぜえつたいに鈍いつて言われたこと、あ、あるよね」

「そうかな・・・勘はいいほうだと思つけど」

とりあえず真面目にそう告げると、ハル力はばたばたと手を振つてさらに大笑いを始めた。

「あ、あははは、はははあははははははっ！ おおおおおおおつ、おつかしい！」

彼女は本当に、心の底から可笑しそうに笑っていた。

涙を振りまいて、手を振って、足をばたつかせて　ともすればどこか壊れてしまったのでは、と危惧したくなるくらいにそれは弾けた笑い方だった。

「あ、ああ　うん。そうだよ、や、やややっぱり、そうだね」

目尻にたまつた雫を指で払うと、唐突に笑い声を消してハル力は神妙な顔で呟いた。

「そ、そういうのがクークーらしさだよねっ」

「はあ・・・」

曖昧に答えると、ハル力は急に立ち上がった。

「体はもういいのか？」

「煩いは治つたよ。元気も出た、うづうづうづうづうん！」

ぴょーんと両手を天に突き出して伸びをする傍らで、クークスも干物を咀嚼し終え腰を上げた。どうもよく飲み込めないが、またいつものように戻ったのは確かなようだった。

「荷物運びもで、できるから大丈夫っ。べ、別にクークーのためじやなくて」「商会のためだな。よし。ならあつちの小箱類を頼めるか？」

「う、うひい！？ け、結構あるね！ 了解！」

元気よく、威勢よく。少女はクークスが指し示した荷車の方へと歩いて行った。

遅すぎる後悔かもしれないが、ここで自分が気づくべきだったのだらう。

しがらみから解きはなたれ吹っ切れたように振る舞っている姿を目視した人間として、彼女が内に抱えたナニかの正体について察することはできなくとも、その豹変振りについて、もっと深く考えていれば、彼女の末路は変わらなくても、それを彩ることくらいはできたかもしれないのだから。

ミューズ（18）

「んにゅ．．．．．」

生暖かい風を感じて覚醒したミューズの前に、ぼろぼろに伸びていたはずの草がほとんど刈り取られている光景があった。まだ夜明けにはやや早いか、というくらいの時間帯であることは、煌めく月華から察せられた。

どうやら自分は倒れているらしい、と自覚し、反射的に上半身を起こしたところで、妙なものが目についた。地面に、赤い斑点がいくつも落ちていたのだ。指でなぞってみると、まだ乾いていない。

「血．．．．．？」

「これ、いつまでボウとしておる」

「お爺さん．．．．．あれ、わたし．．．．．」

「急にぶつ倒れたんじゃ、覚えとらんのか？」

そう言われれば、そんな気もするから厄介だ。確か気絶する直前までなにか老人と会話をしていた気がするのだが　首をひねると、頸部に痛みが走った。

バツ、と後ろを振り返るが、もちろんそこには誰の影もない。気絶した、というよりさせられた、と思っただのだが．．．．．？老人がなにも言わないあたり、やはり勘違いなのだろうか。

だが没入しかけるミューズの思考を、老人の囁れ声がかき消した。「これこれ、早ウ立て。お前の戦闘は欠点だらけじゃと言っただけじゃぞ。急がねば、力がつけられず肉斬連刃にも追いつけん！」

元気いっぱいなの、なにかが吹っ切れた感じすら漂う言い振りに、ミューズは少し目を丸くした。なにが老人の態度をこう明るくしたのだろう。だがとりあえず疑問を脇にのけて、ミューズは地面に落ちていた壺を拾い上げた。今は名無しを追うことが、なによりも鮮血だった。

二十三手に壺二つを組み合わせた訓練が再開されたが、ずっと脳

裏には先ほどからの疑問がもやもやと漂っていた。しばらくすると、ミューズはおもむろにタンマをかけた。

「ねえ　確か倒れる前、わたしが覚えているかもしれない武芸を思い出そうとしてなかった？」

「それを思い出す必要なんざありやアセン」

さつさと話題を流そうとするかのように、老人は軽く手を振った。「お前は二十三手に、新たに壺を組み合わせているからのウ。そんなヤツがこれまでの武芸を思い出しても仕方なかるうし、むしろ弊害にしかならん。むしろ二十三手と二壺に基づいて、あたらしい動きを作ったほうがよっぽどいいわイ」

なるほど、道理ではありそうだが　老人の言い方になおも疑問を抱きかけたミューズに対して、突如として紫皇帝による突進が始まった。右拳を体に引きつけ、視認も不可能な速度で足を動かしてくる。とつさに広口壺で応戦しつつ、左手で逆さに握った陶磁器花瓶の開口部で、相手の点穴を突こうとする。

「胸が開いておるッ！」

二発目の拳をかるうじて捌いたかと思うと、右手を突き出してため、中央ががら空きだった。軽い拳固が胸骨を打ち、小柄なミューズの四肢は宙に浮いた。内力を巡らせ衝撃と痛みを殺すが、容赦なく追撃。

ミューズは空中で体を捻って、攻撃を回避すると同時に地面へ着地するや、広口壺をブンツと老人の顔面めがけて思い切り放った。

寸暇遅れで地面に足をつけた老人が、パンツと下へたたき落としたのが一瞬の間だった。そのときには既に間合いを詰めていたミューズの指先が、指眼突を繰り出していたのだ。老人の顔に、初めて明白な動揺が走る。だがさすがに、判断が早かった。速度もそうない突きを掴み、花瓶による連撃も片手で捌いてしまふ。結果、頸をめがけて飛んでいた花瓶の口縁部も、ガツチリと握られた。

「……まあまあじゃの」

壺と指を捕らえていた老人の力がふと抜けた。急の脱力に、ミュー

「ズは危うく尻餅をつきかけながらも姿勢を保ち、落ちた広口壺の方を回収した。」

「初めよりはるかに判断が早くなっておるし、壺の使い方もそこそこ慣れたようじゃな」

老人は二つの壺に視線を注ぎながら、

「見る限り、壺のエモノとしての用途は三つある。打撃、切断、そして暗器箱じゃ」

切断？　と思いがけない言葉に眼を白黒させるミューズを尻目に、さらに話は進む。

「やはり衝撃という点から見れば有効なのは、暗器箱じゃろう。これには独特のモーションが必要で名、暗器を出すには、やはりタイミングを作らねばならなくての……」

と、暗器をぶちまける寸隙をいかにして作るか、という講義に入つたため、質問し損ねたミューズだったが、三つの手を用いて相手の動きを誘導し、隙を生むという一式を教えられ感歎せざるをえなかった。さすがにこういう組み合わせの妙技は、自分では思いつかないモノだ。

「ではやってみるとするかの」

ひととおりの手ほどきが終わると、ミューズは<白狐百蓮>、<九馬崩楽>、<仁王山>の三手による一式を実戦へと移った。

やがて夜が明け、朝になり。短い休息を思い出したように挟みつつ、昼近くまで練習をしたミューズは、三手一式を習得することに成功した。実際に礫を入れ、不意を突いて壺の蓋を取り投げつけると、技を伝授した紫皇帝自身すらもすべてを完璧にかわしきることは不可能だった。内容物をさらに小生物、水、針などと変えていけばさらに殺傷能力は変わってくるだろう。

一心不乱に訓練に取り組むミューズを眺めて、老人は愉快そうに笑った。

「お前は愚鈍かもしれんが、頑張るヤツじゃ。偉い子じゃ」

子どもをあやすがごとき口調だったのが癪に障らなくもなかったが、汗だくで頭が熱くなつたミューズはとりあえず聞き流した。その言葉を合図とするかのように、その場にへなへなと座り込んだ。自分の体力と意志力がこれほどのものだとは思っていなかった。

名無しを追いかけるといふ目標がなければ、絶対に途中で挫けていただろう。あらためて自分の中の彼の大きさを実感しつつ、ミューズは荒く弾む息を必死に整えた。

呼吸と鼓動が落ち着いてくると、ミューズはふと、前々から気になつてゐることを尋ねた。

「ねえ……ここらへんの原っぱの草つて、結構あちこちなぎ払われるみたいだけど、お爺さんがやったの？」

紫皇帝は神妙な顔になつて、それを否定した。さらに追及するも、適当にあしらわれたので不満だったが、それ以上に今は体が睡眠を欲していた。ゴロンと、切り払われた場所のひとつに横になると、あつという間に深い眠りに落ちた。

目が覚めると夕刻だったので、ミューズはうんと伸びを一回。再び壺を手に取り、他の二十三手の反復と差異付けを徹底して行った。老人の指示で、繰り出すタイミングや高さ、速度などに緩急をつけていく。

やがて時は過ぎ、夜空で星々が瞬き始め、さらにその夜陰も空の端から顔を出す一条の光線によつて隅へと追いやられ始めた頃。

ミューズは最後の一手　柳風里から始まる一連の攻撃を見事に成功させていた。老人が防ぐ一歩先をことごとく攻めることを可能とした、完成度の高い代物であつた。

「まア、ひととおりはこれで良かるウ」

紫皇帝が最後の一手を確認し終えると、深く頷いて言った。

「付け焼き刃にしてはよくやった方じゃ、お前は」

今度は初めて本心から発せられたと思しき老人の賞賛を、ミューズは汗まみれの顔に笑顔を浮かべて受け取った。初めて出会つたときから、ずっと硬質な響きを感じ取られた言葉に、今は温かみのよ

うなものを感じることができ、素直に嬉しかったのだ。

「二十三世に対する応手と、それに対するカウンターについてはできる限り教えたが、正直、いくらでも穴はあるじゃろう。わしも全能ではないからの」

老人の細い指が、ミューズを指す。その顔は完爾と微笑んでいた。「じゃが、お前はその穴を、その意志力でもって埋めるじゃろう。

お前が肉斬連刃を思う気持ちほど、強いものを懸けて大会に臨む者はおるまい。だから、勝機はある」

「うん」

ミューズもまた、壺を両手に持った手を体の前で合わせて、ペコリと頭を下げた。

「今まで教えてくれてありがとう、見知らぬお爺さん」

「ふむ……否、礼を言うのはわしの方じゃな」

眼を細め、懐かしいものに見とれるような表情で、老人は言った。「お前らはわしを目覚めさせてくれた、わしの過ちを正してくれたのじゃから」

視線は、ミューズを見つめていると同時にどこか別のものを見ているようだった。なんとも曖昧だが、ミューズには、確かにそう感じられた。

「よく分からないけど、ならおあいこね！」

「用心することじゃ。今までのわしとは違って、相手は本気でお前を負傷させようとしてくる。最後の最後で味わう、その鬼気迫る敵の感覚だけはせめて克服せねば。半島へは赴けぬからな」

全身から尽きかけた体力が戻ってくるようだった。内力を全身に巡らせつつ、高まってくる緊張を、むしろ心地よいとさえ思いながら、ミューズは壺についた泥を払った。

「行け。わしも別の場所から見ている。武運を祈っておるぞ」

「了解！ よーし、いざ七色大会い！」

ミューズの出場当日の朝は、かくして過ぎ去った。遙かローウェ

ンの教会が鳴らす鐘が朝の訪れを告げると同時に、ミュージズはひとつ大きな深呼吸をして気持ち落ち着けると、ぐつと腰を屈め、次の瞬間には旋風だけを残して、一気に草原を駆け抜けた。

クークス(18)(前書き)

投稿が三時間ほど遅れたこと、お詫び申し上げます。

クークス（18）

ゴルドハンスの出立は、結局翌日にまで回されることとなった。クークスとしては是が非でも到着と同日に出たかったのだが、さすがに大都市だけであつて今度は積み出しの作業が一段落したときには、すでに黄昏時となつていた。さらにこれから積み込みがあることを考えると、夜の休息を入れ早朝での出立というのがベストだという話になつたのだ。

商隊に参加している者たちは、さすがに横断慣れしているだけあつて、体力的だけ見れば軍海の猛者にも引けを取らないものがあるが、どうやら今回の積み出し・積み込みは平常時以上のものがあったらしく、みなへとへとな表情になつて最後の積み込み作業を始めていた。

本当は自分が狙われていない、という確信を持った以上、すぐにも大都市を飛び出して村を目指したいクークスではあるが、ふたつの理由からそうはしなかつた。ひとつは、その確信がやはり過信であることを恐れたため。もうひとつは、ハルカへの気がかりがあつたことだ。あの、どうにも不安定で本性をさらけ出しているように、どうにも奥底が読めない彼女と、別れることに抵抗があつたためだ。ゴルドハンスを出た後なら、いくらでもふんぎりをつけられるだろうが、この都市を出るまではいろいろと言ひ訳をつけて彼女を置いていくことを拒むしている自分がいたのだ。

たぶん、もつと別の場所で出会えてれば　と思わなくもなかつたが。それはともかく。

クークスは途中で見失つたハルカを探しつつ、商会へと積み込み用の荷物を取りに向かつていた。太陽が、最後のあがきとも言つように山間から世界を茜色へ染め上げる光線を放っている。何気なく、遠くへ視線を走らせたクークスの目に、ハルカの横顔が映つたのはそのときだった。声をかけようとしたところで、建物の陰に入

ってしまった。

「あつちに商会なんてあつたか……?」

というか、そっちは都市の外周部だから、ほとんど森に向かつているようなものだ。そこまで考えて、なぜか言い知れぬ思いがこみあげてきたクークスは、足を急がせて彼女の後を追ひ、石畳や家の壁から伸びる、長く伸びた影を踏みつつ建物の角を曲がった。

そこで目撃したものを、クークスは一生忘れはしないだろう。

本当に、すぐそこに。角を曲がって、すぐ目の前　否、足下に、彼女がいた。

だが　捨てられたという表現がぴったりきそうなほどに、ハルカの体は腰から不自然な角度でねじ曲がっていた。足が折られ、右腕は完全にもぎ取られている。つい先ほどまで光が宿っていた両眼からは、いつさいの生気がそげ落ち、じっと虚空を見上げているようだった。

凄惨さも、ここまでくれば滑稽だった。まるでできの悪い演出家を作ったような素人臭さまで感じ取ったほどだ。

「なん……だ……これ……」

言葉を失ったのも一瞬だった。

ハルカの口元が、ほんのわずかに、動いたことに気づいたクークスは反射的に身を屈めた。

「……く……く……」

聞き取ることすら困難なほどか細い声音だった。

「大丈夫か!?　しゃべるな、今　」

さらにクークスは言葉に詰まることとなった。この少女を助けることなど、できるはずもないのは、ハルカの姿を見れば一目瞭然なのだ。

「……で、がみ……入ってる……ここ……」

無事な左腕の指先がが、ぶるぶると震えながらもゆっくりと持ち

上がり、彼女の脇に落ちる小さな袋を示した。

「手紙って」

なにを言うべきか分からぬまま、言葉を紡ごうとしたが、再びハルカの青い唇が動いた。

「……………ほんとうの、なまえ……………おし……………えて……………あなたの……………ほんとうの、な……………まえ……………」

何度目かの衝撃がクークスを襲った。だが唇を強く噛むと、クークスは囁くような声でその問いに応じた。

「クークス……………クークーじゃない……………俺の本当の名前は、クークスだ」

「……………なんだ……………あんまり、変わら……………ない、ね……………」

今にも溶け消えそうな笑みが、刹那顔いっぱいによぎったかと思うと、ハルカはゆっくりとその眼を閉じていた。ほど時を同じくして、左手が地面に落ちた。

なにが起きたのか、なにをすべきなのか把握もままならず混乱が頭を埋め尽くしかけた、刹那。

ガサツ　と、葉の揺れ動く音がした。

頭が理解する前に、体が突進を始めていた。人影を、視界の端で捉えたのだ。

荒れた草地を走り抜け、森へ飛びこみ、左へ旋回する。と、そこにあつたのは、思いがけず短身で、紫の僧服をまとった後ろ姿だった。頭巾だけが存在しないが、その姿はシャビ教の僧そのものだ。

だが、その肩口に飛んだ赤い飛沫を認めるや、クークスは後先考えず体術を繰り出していた。武器がなくとも、鍛え上げた肉体が繰り出す純粋な体術の威力は鋭いものだった。俊敏な動きで、次々と肉斬り殺法の大本となる手を放つ。

しかし前方を見ていたはずの老人の動きは、予想を裏切るものだった。まったく振り返ることもせず、綽々とかわされる拳、蹴り、

木の枝による突き技。すべての回避が、常識を越えた速度と正確性を有していた。サリヴァ配下の人外ですら、ここまで人の枠からはみ出してはいまい。

「……やれやれ」

老人のぼそつとしたため息に、クークスは動きが鈍った。どこかで聞き覚えるのある声のような気がしたのだ。その寸隙を見逃すはずもなく、老人の点穴技が三つ、いっぺんに入っていた。だがありえない。その技は自分の真後ろから放たれたのだ。そう意識したときには、力の抜けた体が落ちていた。

「子犬一匹片付けたあとに虎が来るとはのウ。しかし本物じゃったか、肉斬連刃。どうもお前の情報はほとんどないも同然じゃからのウ、弟子のやつからのアレも信用ならぬし」

とんでもないことを告げるしわがれ声が、やがて軽い笑いに変わった。

「ひよつひよつ、まアこういうお遊戯も悪くないなア。わしとしても評判のお前とはやってみたかったところじゃ この間、初めて会ったときから、ずっとそう思っておった。おう、そういえば一緒におった巨大な男はどうした？」

巨大な男と聞いて、思い当たるのはひとりしかいなかった。だが声を発そうとすると、舌が強張ったように動かない。

「そうか、喋れぬのか。わしア、＜四天破座＞くらい自力で解けると思っただのじゃがなア」

クークスは全身に内力を巡らせてその束縛から解きはなされた。どの点穴を押さえられたかは分かっていたが、六十四般のひとつであるこの技がここまで強力なものだと思っていなかったのだ。

即座に身を離し、老人と距離を取ってから、クークスはエモノがないことを舌打ちした。いや、愛刀があつたとしても、この力量差は埋められまい。まるであのときの夜と同じように。

見ると、老人の胸にも真っ赤な鮮血が散っていた。ギリ、と歯をかみしめるが、老人の型破りな迅風に勝てるほどの足運びができる

とは思えない。

そのとき、クークスは天啓を浴びたように、その二つ名を思い出した。六十四般をここまで極めている人間であり、かつ老人ともなれば、もう思い当たるのはひとつしかない。

だが、ありえない。あれは生ける伝説だ。第一線から退いたのは、もう五十年前のことのはずだ。風聞でしか聞くことはなかったし、大陸のどこかに存命中という曖昧極まりない情報しか流布していなかった人間。

「紫皇帝……………まさか……………」

「如何にも」

老人が、微笑んだままゆっくりと首肯した。

「肉斬連刃、お前の高名についてはよく聞いておるぞイ。だがちと、今回ばかりは出しゃばりがすぎるといふものじゃ。手出しは無用じゃ、お前がわしに勝てる道理は塵一片も存在せんからの」

ヒヤリと、冷たいものが首筋を這った。動揺を見破ったように、老人はひよっひよっひよ　と笑った。それは、赤魔のレーザーを迎え撃った村で出会った老人から発された笑声と、まったく同じものであった。

「まア、あの娘については確かにわしが手を下したが、あの娘らの外道振りについては、お前も知っておるじゃろう。わしとしては、なにゆえお前がああ娘と共にいたのかが分からぬのだが」

そこで言葉を切り、未だ動けぬクークスを一瞥して、老人は軽功で樹木の枝へと飛び乗った。

「それを知っても、野暮なのかもしれぬなア」

そう言い残したときには、もうその矮躯は消えていた。後には痕跡すら残さぬ、見事な走法だった。

だがクークスはともその技を感歎する気にはなれなかった。ただ己の首筋に手を当て、どうやら俺は生きているらしい　と、冷たい意識のなかで、そのことだけを考えていた。

幕間3、(前書き)

なんちゃってTips第三弾です。

幕間3

- とある日記 -

ハンベルナの7日

あの子がいなくなってから、ずっとひとりだ。文字を書くのは少々不自由だが、とにかくこの手記だけがわたしの意識を平静に保ってくれる。まずは気持ちを落ち着けよう。借りたペンを片手に、紙に文字を綴っていく。

外での戦乱の音は、日増しに激しくなっているようだがあの人によればこれが平常らしく、戦争時にはこれと比較ならないほど激烈極まらないそうだ。

あの子の所在は、現在まるで分かっていない。初めの方は情報がいくつか入ってもらったが、次第にあの人は情報を与えなくなった。わたしにとって、不要どころか弊害になると思ったのだろう。

確かにそれは正しい。ただ、わたしは怖かった。騙されているのではないか、あの子は今もう、死んでいるのではないかと。何度も気が狂いそうになる。だが信じるしかない。今ほどわたしは自分の力が恨めしかったことはない。なんてことはない、わたしの源にあるこの力でさえまだ完全ではないから、今の状況を改善するのにまるで役立ちはしなかったのだ。

結局、わたしは踊らされていただけなのかもしれない。あの子を手玉に取られて、あの人から掌の上でもてあそばれていたただけなのだ。何度それを打開しようとしたか分からない。しかしそのたびにことごとく先手を打たれてきた。

こんな力など、役に立ちはしなかった。

ハンベルナの9日

辺りが騒音に満ちている。絶えず人の声、不穏な打撃音、阿鼻叫喚などが耳に届き始める。

そんな音声の波に包まれながら、小さく開いた窓の方へ顔を向けているときだった。

あの子がいた。

気づけば視界があの子を捉えていた。とつさに手を伸ばしかけて、わたしの指先は虚空をつまんだ。もちろんわたしの届くところに、あの子はいないのだ。その現実を、改めて知らされたような気がした。

とある一室で、ガタイのいい男があの子を襲い、あの子が斬り返して殺害するという一連の映像だった。

……事態を飲み込んだときには、自然と口が動いて隊列にいた男を呼び止めた。手遅れになってはいけない、今を逃してなるものか、という焦燥しか私にはなかった。

すぐにあの人が見え、私の告げた条件を思案し始めた。そして数刻後、苦渋の声音で条件を呑むことを約束した。

ハンベルナの12日

戦火のとどろきは、止むどころか日増しに厚みが増していくようだった。どんな微細な音でもかなりのところまで入ってくる私にとっては、なかなか耐えきれない。

母として、あの子と共に過ごした日々にはんやりと思いを馳せては、何度もよみがえってくる郷愁に、ときどき目から雫をこぼした人知れず涙をぬぐっていたとき、車が止まった。どうやら目的地に到着したらしい。私は車から降ろされ、すぐにどこかの一室へ監禁された。私が持っていた小さな巾着袋だけが手渡されると、すぐに足音に続き扉が閉ざされる音がして、あとは無音状態となった。

暗く、物音ひとつない部屋の中で、私は椅子に座っていた。目の

前には書き物机がある。この帳面とペン、あの子がずいぶんと昔に作ってくれた黒い鳥の折り紙、そして　黒羽の刻印されたペンダント。

……私はそれを、きつく握りしめた。

なぜこんなものを持つているのだろう。ずいぶん前に、捨ててしまおうと誓っていたはずなのに。まさか、まだ未練があるのか？

馬鹿な、そんなはずはない。かぶりを振って、考えを必死に打ち消す。

たぶんこれは贖罪だ。あの人を見捨てた咎に対する罰なのだ。そう言い聞かせながらも、私の心の中はこれを打ち砕きたいという思いと、大切に守り続けたいという思いでぐちゃぐちゃになった。

ハンベルナの13日

あらかじめここへ来るための目的を教えられていたから、今日が初めての‘仕事’になることは、だいたい予想がついていた。

私の部屋がある建物とは別の棟にあるという部屋。そこ一日中、さらに狭い密室で、見知らぬ男と二人きりになった。私が命じられたままに仕事をし続け、男がそれを書き取った。少しでもウソ偽りを述べれば条件が反故されてしまうため、いくつかの断片をありのまま、正直に語った。

終わると、さすがにぐったりとしてもものも考えられなかった。一度死んだように部屋で眠り、目が覚めて今、この日記を書いている。どうにかして、あの子の無事を確認しなければいっこうに落ち着けない心をなんとか静めるため、私はペンを走らせる。初めは徐々に文字を書いたものだから慣れなかったが、徐々に思い出してくると早く書けるようになったのが、少しだけだが、嬉しかった。

そういえば、‘仕事’中に一度だけあの子が見えたが、どうやら黒海原と思しき森林地帯にいるようだった。だが見えたのは本当に一瞬だけで、その表情すらも明瞭ではなかったため大いに傷嘆した。

面会を兼ねた仕事だった。七大公という人たちを目の前にして、私はまた、いくつかのことを述べた。どれもこれも他愛のないことだった。見えたモノ、見えなかったモノ。いろいろと、天候の話から、戦功の話まで。だが、少なくともそれらは真実だった。

‘仕事’を終えた後、部屋にやたら大声の人間が入ってきた。どこかで聞き覚えがあるような気がしたが、思い出せなかった。男は一定の音量を保ったまま、独特のイントネーションで、自分がこの頭領であること、私が「囚われの身」であること、あの人へと提示した条件を自分も引き継ぐことを、饒舌に語った。最後の項目だけに熱心に耳を傾け、後は半ば聞き流すようにして椅子に座っていた。話し終わると、こちらの返事も待たず男は去っていった。

その後、さらに別の人間が入ってきた。女だ。七大公のひとり、アルファリシュという女だった。男とも思えるような堅い語調で、他愛のない雑談をした後、アルファリシュは丁寧に会えて光栄だった、というような言葉を残して部屋を出た。

……どうにも今日会った人間の声は、どこか聞き覚えがあるような気がしてならなかった。

ミュージズ(19)

盛大な歓声が、すでに鼓膜とミュージズの心を大いに奮い立たせていた。

「す、すごい人ね……」

「そう、ですね……何度か見ているとはいえ、やっぱり、圧倒されます……内側に入ったら、ましてやです」

二の腕に巻かれた赤い腕章を落ち着かなそうに触れながら、こちらにも興奮した態でアライが呟いた。ミュージズの腕にも装着されているこの腕章は、紫皇帝が述べたように全部で六色。二人は現在、闘技場内にある控え室におり、あたりを見回すと赤色腕章をつけた人間がわんさか集っている。見るからに屈強そうなものから、なんているの？ と言いたくなるくらい痩せこけた男まで、一癖も二癖もありそうな輩ばかりだ。ざっと見ただけでも、二十人はいるだろう。単純にこれが六倍で、百二十人……うむむ、とミュージズは今さらに底知れぬ不安を感じ始めていた。

実は大会は既に開始していた。運営側が勝手に割り振って、同色枠での予選から始まり、そこで一色のブロックにつき五人まで残す。現在、黒ブロックが終了し、白色同士でのつぶし合いが技場では行われている。本当は見ようと思えば、群がるギャラリーの隙間を縫って控え室から覗けないことはないのだが、余計に気落ちしそうなので、止めておく。

「ミュージズさん、なんだか元氣ないですよ！ ファイトっ！」

「いや、う、うーむ……」

ガッツポーズを作るアライを尻目に、ミュージズはうなだれた。名無しぐらいの人間だったら、こんなプレッシャーなんて気にも懸けないんだろうが……いや、そんなこと気にしてもなあ……

「おい、爺さん」

野卑な声がいくつか聞こえた。顔を上げると、巨大な斧を背負った巨大な男が、控え室入り口の方を見て仁王立ちになっている。

「オメエよう、腕章もつけてないでどうしてここに来てんだ？ あア？」

なるほど、闖入者とそれに絡む男の図、ということなのだろう。

ひとりで合点がいつていると、巨漢はさらに恫喝するように吠えた。

「おい、コラ。オメエ、無視すんじゃ」

「うるさいのウ、蛮人。お前なんぞに用はないぞ」

え？

声の主は、聞き間違いなく紫皇帝だった。巨体に隠れて見えなかったが、たぶん褐色の筋肉の向こう側には煙たそうな顔をした老人の顔があるのだろう。だが自分を軽視するような反応に、男は力チンと来たらしい。右手を斧の柄にかけて、威嚇するように一歩踏み出した。

「おおオ！？ オメエ、この俺様をなんだと思ってるんだ？ 断崖斧 って名前は聞いたことあるだろ！？」

辞退を注視していた他の選手と職人の何人かが、ひそひそと話し始める。どうやら有名な二つ名らしい。男は周りの反応に満足したように、一瞬頷くと、

「コラ、あんまり舐めた口を利くと」

「おお、おったおった。そこか」

いきり立つ男の股をするりとくぐって シュールな光景だ

老人は平然とこちらを認めて歩いてきた。

「お、お知り合い、なんですか？」

アライイが男のほうをちらちらと見やりつつ、困惑して問う。

「うん、ちよっとの間だけ武芸を教えてもらったの。えっと、なに
か用？」

「ひとつ言い忘れておった。あのな」

「おいおいおいおいおいおいおい！ オメエ、何様だあ
！ この断崖斧を無視するとはいい度胸じゃあねえか！ オメエ、

これ食らってみるかあ！？ ああ！？」

男はガタイに似合わぬ素早い動きで斧を引き抜くと、紫皇帝の頭めがけて巨大な斧が降り下ろした。もちろん寸止めするつもりなのだろうが、とっさにアライが絶叫していた。

「 危ないっ！ 」

「 あ。大丈夫、大丈夫 」

老人の実力を知るミューズが、涼しげに応じる言葉が終わらぬうち。

男の体が後ろへつんのめっていた。当然、斧もそちらへと倒れていく。

あまりの早業に、昔ならなにが起きたのか分からなかっただろうが、今なら視認できる。老人がすばやく巨体の腹部にあるく林窟穴を突いていたのだ。本当は上半身の動きを止めるだけの技だが、突いた勢いが強すぎて転倒してしまっているのだ。

アライがいつそう理解しがたそうな顔をしていたので、説明してやろうと思ったが、老人が後ろの異変など気づいていないかのように、話しかけてきた。

「 先ほど、ちよつと青色を調べてきたのじゃが、気になるやつがおつての 」

「 気になるやつ？ 」

「 うむ、それがの・・・ 」

と、いきなり怒声が響いた。

「 おらああああ、オメエ舐めてんじゃげぶっ！ 」

復活した男の脇腹に、今度は神速の足蹴りが飛びこんでいた。今度は大きく後ろへ吹っ飛ぶ巨軀。

「 …… 見間違いかもしれんが、青のグループに、赤ら顔をした若い男がおる。髪の色もやや赤っぽいやつじゃ 」

「 ふんふん、それが？ 」

「 そやつは 黒骨 という、ここ最近あちこちの扮装に首を突っ込んでおるなかなかの手練れでな。もし予選を突破し、青グループで

った。

「オメエ、さつきの爺さんの仲間だよなあ……へっへっへ、こりゃ楽しみだ」

「げー、なによあの露骨な悪役台詞。なんかすごいむかつく。」

と緊張を反発に変えながらも、アライを従えてミューズは闘技場へ出た。絶えず響いていた歓声が、選手と武器制作者の入場で一際高まった。

まず武器制作者が、闘技場の隅に立ち、そこからやや中央寄りにして戦士が立つ。ミューズがぎこちない動作で、指定された立ち位置に至ると、少し離れた正面には男が斧を抜いて立っている。

「で、でかい……」

目前で見ると、存在感が二倍増しである。斧だけで自分と同じくらいの背丈があるのではないか。

「西・ダルホール武具店。東・アライ陶芸店」

立会人らしき男が、二人の対決者を推薦した店の名を大声で告げると、どよめいていた観客の音が、さらに数倍の音量となった。その気持ちは分かる、なんせ壺なのだ。他の人間が剣や斧、杖などを用いるなかで究極の変わり種としか言いようがあるまい。控え室でも好奇とあざけりの視線は感じていたが、よもやこれが武器そのものだと思っっている人間はいなかったはずだ。

「ダルホール武具店推薦、ジャッカル！ アライ陶芸店推薦、ミューズ！ 前へ！」

一歩、踏み出す。二歩、三歩。ガチャリ、と男が斧を動かす。ミューズは、そんな大物に比べて遙かに小さな二つの壺を、両手でしっかりと握った。

額や掌から冷えた汗が生まれる。緊張を飲み下すように、ミューズは大きく喉を鳴らした。

「決闘、開始！」

立会人の声と重なるようにして、闘技場を取り囲むようにしている客席から大きな声が上がった。

「おいおい、壺なんかでどうするつもりだい！ 頭からかぶりでもするの？」

観客がどつと沸いた。口笛や嘲笑まで聞こえてくる。アライがずっと後ろの席から、申し訳なさそうにミュージズを見てくるのが分かった。

だがこの一言で、ミュージズは開き直った。えへん、とことさら胸を大きく張り、壺をぴしつと構えてみせる。紫皇帝と編み出した、六十四般のひとつく建里八方をベースとしつつも、素早さという観点から天狼不破が繰り出せるように足の形をやや変更させた構えだ。

大丈夫だ。恥ずかしい戦いはしないから。

内息を落ち着かせ、丹田の気を整える。この時点でミュージズが具体的な勝ち方を意識していたわけではなかった。だが、彼女には漠然としたひとつの勝算を得ていた。ミュージズはない胸を張ったまま、堂々とした声で言った。

「わたしは斧の戦いを知っている！ でもあんたは壺での戦い方を知らないわ！」

観客の顔が、一樣に変化する。ある者は目を？き、ある者は呆れたようにそっぽむく。目の前にいる対戦者である男は、まず驚愕の、続いてニヤリと下卑た笑みを口に刻んだ。

「そうか。ならオメエ、これ食らってみるか？」

男は自らの怪力を誇示するつもりなのか、斧をやや前方の空へぶんとつと放り投げた。おおつ、と観衆が沸く。それが地面に落下しきる直前、男は走法<秘央疾海>の構えを取ったかと思うと、次の瞬間エモノへと駆け出す。地面に触れる寸前であった斧を絶妙なタイミングでつかみ取ると、そのまま疾走と勢いを殺すことなく、間合いを一拳に詰めてくる。

男の派手な 否、ムダすぎるパフォーマンスからの突進。ミュ

ーズは正面からそれを見ながらも、微動だにしなかった。傍から見れば、怖じ気づいたと思うまい。

そのとき、ゴカーツンというどこか抜けたような衝撃音がした。ざわめいていた観客たちの声が、たちまちすうと引いていく。いつの間にか、男が地面に倒れ伏している光景が、目に入ったからだろう。ひそひそと声が漏れる。

「なんだ？」「どうした？」「血い出てやがんど、あんちゃん」「頭から血が……」

男は白目を？いて気を失っているようだった。無論、戦闘不能のためミューズの勝利となる。

だが彼らは勝敗などより、なにが起こったのか 少女がなにをしたのか、それとも男が誤って足を滑らせただけなのか、把握しかねていた。しかしミューズは一歩たりとも動いていない。それなのに、なにができたというのだろう。

そのとき、また客のひとりがミューズの腕を指さした。

「ああつ、壺だ！」

一斉に無数の眼差しがミューズの腕に注がれた。

同時に、一重の歓声が起こった。

ミューズの片手から、壺が消えていたのだ。花瓶ではない方の、大きな広口壺が現在地面にいる男からやや離れた位置に、ちよこんと落ちていたのだ。

ミューズは不敵に笑みを作った。

「ね、言ったとおりでしょ。あんたは壺の戦い方を知らないって！あんたがわけのわからないパフォーマンスしてるうちに壺をブーメランみたいに投げて、戻ってきたのを頭にクリーンヒットさせるなんて、ワケないんだから！」

劇団時代に何度もやった動きを、失敗するはずもなかった。六十四般のひとつも用いぬいまま、奇抜な方法で男を戦闘不能に陥れた

少女に対して、一瞬、観衆の声がぴたりと消えた。

だが次の瞬間、どつと闘技場全体を揺るがさんばかりの歓呼の
声が沸いた。

「壺流！ 壺流！ 壺流！ 壺流！ 壺流！」

立会人がミューズの勝利を告げると、後ろから駆け寄ってきたア
リイが目をまん丸くしたまま呟くように言った。

「す、すごいです……壺で本当に戦えるなんて……」

「

やはり半信半疑だったか。だが仕方ないと思う。自分だって、こ
まで壺を投擲した際の速度が上がっていようとは思っていなかった
だから、うまくいくかどうか不明だったのだし。

内力を沈めながら、ミューズは微笑んでブイサインを作ってみせ
た。

「まずは一勝！」

アリイもまた、安堵の吐息とともに大きく笑った。

観衆のどよめきは、彼女が控え室に戻ってから収まることはな
かった。

クークス（19）

クークスが戻った頃には、既にハルカの死体には大勢の人間が集っていた。だが好奇心と小さな悲鳴を発し続ける彼らに一瞥もくれることなく、クークスはハルカの傍らに落ちた腰袋をつかみ取ると、他の人間の眼差しを痛いほど感じながらも、路地を後にした。

もう芝居は止めだ。クークスは頭巾をはずし、乱暴に懐へしまい込んだ。その顔は、悲壮とも、憤激とも、虚無とも形容されるような色に沈んでいた。

事実 胸のうちに渦巻く感情は、そのどれとも名付けがたいようなどろどろとしたものだった。重い足取りでどこを指すわけでもなく右折し、目抜き通りの端まで歩くと、適当に目に入った酒場に入った。

柔らかい光に満ちた空間を突っ切り、一番奥の席へ。酒を頼み、手渡されたグラスを卓に置くと、クークスはのろのろとした動作でハルカの示した袋を開いた。少し黄ばんだ用紙を認めると、指先で引き抜いた。二枚重ねのそれを開くと、思いがけず整った字面が並んでいた。

『クークーへ（本名が分からないから、これで通すね）。

なんでこんな手紙を書いたかっていうと、その、口で伝えられる自信がないからで、あの、わたしって喋るのがうまくないから・・・
・・・ああ、もう。ダメだね、これじゃ喋ってるのと変わらないなあ。

少し頭を整理しました。前の文章は破ろうと思ったけど、紙の先つちよがギザギザになるから止めます。

まずわたしは、ひとつあなたに嘘をつきました。そのことを謝っ

ておきます。ごめんなさい。

わたしがこの商隊に忍び込んだ理由は、実はなにもないんです。本当に、なにもないんです。じゃあお爺さんに追われているのが嘘かっていうと、これも本当なんです。でも逃げるために、この商隊に忍び込んだわけではないんです。だってその人から逃げられるはずがないっていうのは、分かっていたから。

その人が何者か、ということは書きません。ただわたしがここであなたに読んでほしいのは、わたし自身のことです。わたしが何者で、どうしてここにいて、どうして追われているのか。それだけをここに記します。

わたしに本名はありません。ハルカ、という名前は孤児だった拾ってくれたお母さんにつけてもらった名前です。もう拾われたときのことは全然覚えてないけど、どこかの家に連れて行かれて、そこにはちっちゃい女の子からお姉さんっぽい人までいっぱいいたことは記憶しています。みんなお母さんを慕っていました。私たちはお母さんからたくさんのお母さんを見ました。文字の読み方、書き方、自炊の方法、子どものあやし方、食べられる木の実を見分ける方法でも一番わたしの体に染みついたのは、やっぱり人の殺し方でした。

たぶんここまで書けば、あなたならこの女の子たちの正体は分かるよね。

お母さんがどうして、わたしたち孤児を集めてあちこちを襲撃したり、人を暗殺したりしていたのかは分かりません。今でも本当に分からない（本当について、いっぱい使ってるね。読みにくいかな）。ただお母さんはいつもわたしたちを‘仕事’に送り出すとき、心配そうな顔もしていたけど、それ以上に厳しそうな顔をしていました。お母さんは普段は優しくかったけど、戦うときだけは一切妥協をしませんでした。そんなことしたら、わたしたちが死んじゃうって分かっていたから。そうそう、それからいつもお母さんは、男はみんな

敵だつて言っていました。女を奴隷みたいに扱うことしかしない鬼畜だつて、わたしもずつとそう思っていました。

話がそれたけど、わたしも八歳くらいからいろんなところで、人を殺していきました。あの頃は本当になにも考えていなかったし、今でも正直人を殺すことが悪いことだとは思いません。思えないんです。教えられたく白蛇女嬭拳>っていうものを使いながら（軍海の他の人はこれ、く白蛇男殺拳>とかいうけど、これ聞くたびにお母さんとかお姉ちゃんは怒ってたなあ。馬鹿にするなって）、いっぱい人を殺しました。途中までは数えていたのですが、罪悪感っていうものがなくなつてからは数えるのを止めました。

話は一年くらい前にさかのぼります。その頃になると、わたしはかなり集団の中で上のほうにいました（ユン、ハルカ、ピアノっていうく三鬼女>は聞いたことない？）。ある日、女の子が新しく襲撃に駆り出されることになりました。その子には、たぶん他のみんながいい感情を抱いていなかったと思う。理由は簡単で、お母さんが一番鼻負してかわいがつてる……少なくとも、周りからはそう見られていたのです。それにその子は少し知恵遅れっぽかつたし、ひとりだけ小指がなかつたから、そんな忌み子をどうしてつてみんな思っていたんでしょう。

わたしはどうかつていうと、正直なにも思わなかつたなあ。ユン姉なんかは、いつも愚痴つていたけどわたしは聞き流していたし。でも今思えばそれは単に、感情が壊死していただけだったのかもしれない。

お母さんも、みんながその子に反発しているつうすうす感じていたんだと思います。初めての実戦で、わたしが付き添いとしてついていくよう言われました。命じられたことはすごく簡単で、ある村で子どもが虐待を受けているから、その親を殺して子ども（女の子だよ、もちろん）を連れてくるようにつて話でした。わたしがその補助をするになつたのです。

でも村に着いたら、急にその子は物怖じし始めました。たぶん自分がこれからやることは分かっていたんだけど、心がいざとなったら疎んじちゃったのだと思います。人を殺す、とか語ってるうちは、人は殺せないっていうのは、あなたなら分かるでしょう。でもあの頃のわたしはただただ焦れたかったです。

その子はとうとう決心がつかず、しまいには逃げだそうとしたんです。だからわたしは怒って、その子を掴んで屋内に飛びこみました。目の前には対象となる両親がいます。でもその子は必死で逃げようとした。だからカツとなって、私は手を出してしまいました

その両親の方に、だけど。どうしてこの子はこんなに愚鈍なんだろう、っていらだたく思いながら、わたしは両親の首をへし折りました。二人とも、自分が殺されたってことすら気づかないで逝っちゃったと思います。

でも結論から言えば、その子には手を払われて逃げられました。詳細は省きますが、隣で寝ていたらしい女の子（虐待されていた子です）が、起きてお母さんとお父さんの亡骸に泣きすがり出したのです。その光景に一瞬目を奪われているうちに、窓から逃げられました。

本当に、本当に速かった。どうしてあんなに覚えが悪い娘が、あそこまで疾く走れるんだろって、今でも不思議です。とにかく目を離れた際に、あつという間に姿が掻き消えたのです。

私がどれだけ慌てたかは分かります。すぐに<家>に戻って報告すると、他のお姉さんたちは猛烈に怒って、追いかけて連れ戻そうと言いました。お母さんは曖昧に頷きましたが、顔は呆然としたまま固まっています。

四日後、お母さんも消えました。わたしたち女郎蜘蛛を解散するという一言と、謝罪の言葉を延々と綴った書き置きを残して。

お母さんが消えてから、わたしたちはごく自然に分裂しました。

気づいたらひとり消え、ふたり消え……ある人はお母さんを捜しに、ある人は自分の別の居場所を探しに、ある人は逃げた女の子を捜しに……。特にユン姉は他の娘と徒党を組んで、逃げたその子を追いかけてきました。あの子はお母さんに次いで、力も人を引きつける魅力もあつたから、すぐに賛同者が多く出たようです。

わたしの場合は、単独で<家>を出て、軍海中を歩き回りました。別になにをしようと思ったわけでもありません。一度は身売り小屋に入って、ここに書くのも憚られるようなことをして、その日その日を食いつなぎました。ただそこでの経験が、男の触れあつた初めての経験であり、二度と触れたくもないと思つた瞬間でした。

ビアンが殺害されたのが、ちょうど解散して半年後くらいでした。死体を発見したのはわたしです。近くには傷つけられた紫色の布が落ちていました。彼女の殺され方は、ちょっと言いようがないくらいにひどいものでした。

かつての仲間が殺されているという話が、それを皮切りに次々と耳に届き始めました。殺害しているのは、どうやら『とんでもなく強い紫の死神だ』ということも。この時点で、私は自分の運命を諦めました。素直に『とんでもなく強い紫の死神』という存在を受け入れたのです。これまでたくさん罪のない人を殺してきたのですから、いつたい殺されることに誰が文句を言えるのでしょうか。

でも死ぬ前に、わたしはどうしてもひとつだけやりたいことがあります。お母さんは男はみな鬼畜だ、と言いました。私も身売り小屋で働いて以来、確かにそんな感触がありました。

それでもわたしは、この教えにだけは背きたかつた……。つまるどころ、私は恋というものをしてみたかつたのです。

それがこの商隊に私が加わつた理由です。クークーが言ったように、私は生粋の商人ではありません。ローウエンで商隊に忍び込むうとするあなたの姿を見たとき、どうしようもなく全身が言うこと

を聞かなくなってしまうたのです。雷に打たれたような衝撃でした。気がつけば、ふらふらと私は商隊に加わっていました。あなたを一目見たときから、私はもう抜け出せませんでした。そして決めたのです。私の最期はこの人に看取ってもらおう。恋をしながら死のうって。

途中から、やっぱり整理がつかず長々と書いてしまいましたが、書きたいことは書けたような気がします。あなたがこの手紙を読むのがいつなのかは分かりません。もしかしたら一生目に触れないままかもしれない。それでもどこかで、あなたに届いていると信じて筆を置きます。

窓の外では、夜が明けようとしています』

ミューズ(20)

アリイお手製の弁当を食べた後、午後にも一試合あったが、それもミューズは順当に勝ちを収めた。どうやら壺ブーメランを恐れたらしく、絶えず空中や背後に目をやったりしていたので、正面から壺をかぶせて、慌てたスキに武器を奪ったのだ。壺、という得たいの知れなさすぎるエモノに対し、他の対戦者が動揺しているということがよく分かった一戦だった。

またこの勝利により、ミューズは赤ブロックでの五強となり、次の本戦へ駒を進めることが決定したことになる。たった二度の戦いは、ミューズにとってはあまりにあっさりしたものとしか感じられなかったことが、逆に密かな自信となっていた。

それを見抜いたわけでもないだろうが、試合後にひよこひよこことやってきた紫皇帝は渋面になって、

「予選まで勝ち残った連中は、初見も多いから一概には言えんが、やはりなかなかの手練れじゃ。壺による攻撃パターンはかなりのところまで解析されるぞい。まあ逆に言えば、今日あまり手数を見せなかったのは正解だったのかもしれないのウ……」

「その、えつと黒骨さんは？」

「やつなら勝ち残っておるぞ。青の中でも群を抜いて強い。さすがに勇名が轟くだけあるのウ」

だが、と老人はミューズの顔を見据えた。

「今のお前はなかなか未知数な存在じゃからの、他のやつらもオモシロイように警戒しておる。あとはどれだけハツタリを貫けるか、じゃ」

「ハツタリって、実力じゃ勝てないみたいじゃん」

「なんの。この世で自信とハツタリは若造の特権じゃ。恐ろしいことを恐ろしいと思わなければ、迷いはない。今、大会の流れはお前の背を押している。明日も勢いをそがずに行け。怯えそうになつた

ら、肉斬連刃のことを真剣に思い出してみる。

ではな」

そこまで言って、紫皇帝の姿はやはりあっという間に掻き消えた。直後に後ろからぱたぱたと足音が聞こえてきた。

「ここにいたんですか。やりましたね、ミュージズさん。明日はよいよ本戦ですよっ」

振り返ると、なぜかアリーの顔は満足そうにやつれていた。いったいなにがあったのだろう。問うと、

「闘技場を後にしてから、ずっと何人かの選手やお客さんに壺を売ってくれて言われてて……なんせ、急ですから、お店の方に来てくださって言いました」

「それなら早く家に戻らなきゃね」

言って、二人は歩き出した。

アリーのとても大きいとは言えない陶芸店の前は、想像を絶する混みようだった。ざっと二十人はいるのではないか。いくつか見た顔もあるが、おそらく彼らは戦士として出場している人間なのだろう、とミュージズはあたりをつけた。

あ、とそこでミュージズはこの大会の陥穽に気づいた。大会に参加している武器制作者が、ケールマンで武具を販売している場合、店に行けば同じ道具が売ってあるためいくらでも事前研究ができる……なるほど、紫皇帝が言っていた攻撃パターンの解析というのは、こういうことなのか。

うむむ、とミュージズは殺到する群衆を見て頭を抱えた。武器販促のための舞台という大会の性格上、まさか売るなとも言いにくい。と、足を思わず止めてしまったミュージズの顔に浮かぶ苦悩に気づいたのだらう、アリーはほんとミュージズの肩を叩いた。

「大丈夫です、ミュージズさんが使っているものだけは棚から外しておきますから」

この言葉には、ミュージズも感謝感激である。手を合わせて合掌。

「ありがと……ごめんね、たぶん一番売れる品だと思うの

に」

「いえいえ、よく似た色合いと形状でまったく重さや空洞の位置が違ふものをいっばい売りさばきますので」

キラーンと輝くアライの目。

ぬ、抜け目ない。

まあそこはそれ、千載一遇の機会を逃したくない商人魂に火がついているのだろう。

というわけで、二人は一度群衆をかき分けて扉をくぐると、ミューズが使っている二種類は陳列棚からすべてはずし　　といつても、アライ陶芸店の大部分は工房で占められており、販売区画はごく狭かったためそう難儀しなかったが　　、ミューズは一度懐かしい勝手や丸太椅子、卓などが置かれている居間へと入って身を潜めた。細く開いた扉から、アライが表の扉を開けて客を招き入れるのを見ながら、うとうととミューズは眠りこけていた。

「ふ、う………なんとか終わりました」

と、どれだけ時間が経った頃だろう。扉が開けられる音に続き、アライが店のほうからやってきた。椅子に腰掛けて疲れ切ったようにため息をつくその顔は、盛大にやけている。

「ミューズさんのおかげで店の商品はバカ売れですよ。閉店まで満員でした………」

目が覚めたばかりのミューズは、二三度首を振って、

「今、夜中？」

「はい。帰ってきて結構時間も経つてま………つてミューズさん、寝ちゃダメですよ！　せめて何か食べて明日に備えなきゃ！」

慌てて台所でなにか冷菜を作り出すアライを見送りながら、ミューズは生あくびをひとつ、再び生暖かい眠りの泥に沈んでいった。

翌朝の闘技場は、昨日以上の盛況といつてもよかった。戦いに負けた人間が観客に回ったり、遅れて他の都市からやってきた人間が増えているからだ。

ミューズとアライはやはり選手控え所でぺちやくちやおしゃべりに興じていた。緊張は確かにあったが、それ以上に他に人間の視線が痛いほど突き刺さってくるのが反転して快感にちかいものとなっていた。

二日目の本戦の仕組みは一日目と違い、ちよつと複雑だった。まず六色×五人の合計三十人を、一度色を問わずに無作為に五人ずつ六組抽出する。その中で、残りの大会期間中たつぷりと総当たり戦を行うのだ。

「ここらへんは試合を自然な形でずると引き延ばして販促したっていう、都市の運営側の意図が丸見えですね」

とはアライの言である。まったくである。

最後に各組から上位一位が最終戦と呼ばれるトーナメントに進むわけだが、当然ながら六人でトーナメントはできない。そこで行われるのが、敗者復活戦である。同時進行で残った二十四名をトーナメント形式で戦わせ、上位二名を最終戦のリストに名を連ねさせる。かくして実施される、八名の戦士＋武器制作者による最終決戦は、三年に一度という希少性もあって、各工房都市で最大の観光目玉となるのだ。

「……うー、本戦の仕組みの方は分かったような分からないような、けど……ここまでくると、なんだか客寄せイベントって感じね」

「客寄せですよ、本音は。だけどそれだけじゃやっていけないから、三大工房都市が結託して戦闘大会ってことにしているんですから。それに武器の宣伝もできるとなれば、それはそれは利益は図り知れません」

うしつとガッツポーズを作るアライ。控え室は、一気に人数が減って今では腕章の色がぐちゃぐちゃに混ざり合っている。

でも、実戦っていう意味じゃあ、まだ本格的な戦いはしていないから、少しでも長引いたほうがいいのか。

そんなことを考えているうちに、名前を呼ばれてミューズは釈然

としない気持ちのまま闘技場へと足を進めた。途端に、脳みそが強張ったような感覚に襲われる。アライが後ろからついてくる足音だけは、なんとか聞き取れた。

「東・ミンドルド鍛冶屋。西・アライ陶芸店」

対戦者もちょうど反対側の出口から、自分の推薦者である人間を後ろに従えてきた。しかし相手の表情を見て、ミューズは息をのんだ。

まず腕へ視線をやる。腕章は黒。よってこの時点で、黒骨氏でないことは断定できる。真にミューズを動揺させた原因は、男の顔がとても生きているとは思えないほどに、蒼白だったことだ。ギョロリとした銀の眼は、しかし焦点を結ぶこともなく、それどころか動く気配すら見せず空を向いている。細い足もよたよた、と力なく前へ進んでいる。

後ろに居座る鍛冶屋の人間も、全身が灰色のフードに覆われていて顔がうかがえず、奇妙なことこの上ない。一応腕章の部分だけが覗けるように、フードが切り取られているから尚更、なんというか、気味が悪い。指定の椅子に座る仕草から当て推量するに、女だろう。「エモノは……」

呟きに、立会人の対戦開始の声が重なった。

「ミンドルド鍛冶屋推薦・アグロワ！ アライ陶芸店推薦・ミューズ！ 決闘開始！」

その声が終わるか終わらぬかというとき、アグロワの両手が動いた。その掌に握られたものを見て、ミューズはどこか引っかかりを覚えた。

曲刀、というヤツだろう。やや刃こぼれが見受けられるが、刀身も立派なものだ。しかし、なにか引っかかる。違和感というより、これは……。

ダメダメ、今は戦いに集中しゅうち……。

「え？」

その死人めいた顔が、自分の眼前にあったことに、ミューズは

反応すらできなかつた。

次の瞬間には、体が宙に浮いていた。なにが起きたのか、考える暇もなく、続いて第二の蹴りが腹部を襲った。

剣ではなく、体術。この盛大なフェイントに為す術がなかつた。

「ひぎツ………がふツ　！」

うめき声も、鼓膜を突き抜けてくる拳の連打による衝撃がかき消した。ミューズはあつという間に六発の蹴りを全身に浴び、再び爆音とともに地面へ墜落した。

向こうで着地音が微かにしたが、あまりの痛みでほとんど聞き取れない。

うそ、なにこれ………！！

意識が霞んでいくのが分かる。一発が冗談みたいに重いだけでなく、加速度も半端ではない。口が血の臭いと味でいっぱいになる。

それをぺつと吐き捨てて、ミューズは弱音を追い払い毅然と顔を上げた。

知ったことか。わたしは戦うんだ。

砂埃が舞うなか、あたりに沈黙が下りる。観客が少しざわめくが、おそらく大抵の人間は先の攻撃で二人の力量差を見て取っていたのだろう、あまり騒ぎもなかつた。優勝候補とも言えるほどの力を見せつけた男のほうに観客たちの注意は行っているようだ。

ミューズは尻の砂を払って立ち上がると、あちこちに痛みを抱えたまま壺を持ち直す。建里八方から重心をずらし、即座に天狼不破へとモーシオンを移した。敵との距離を詰める。そのまま白狐百蓮から九馬崩落への連続技へとつなげる。

たちまち十数手が繰り出されたが、すべてを完璧にアグロワは躲ききった。だがここまでは計算通りだ。最後の一手を右へ回避した瞬間、左手の壺を力任せに、至近距離からぶん投げる。飛来する壺をはたき落とす、その一瞬を狙って、伸びた二本の指がアグロワの右目を狙う　！

だが、アグロワは不動だった。否、ただしくは、壺をはたき落と

クークス(20)

手紙を丁寧に折りたたむと、無造作に二枚とも懐に入れた。酒を半分以上残したまま、勘定を払って店を出た。あたりは日が落ちて、目抜き通りではそうでもなかったが、都市の外周へと向かうにつれて視界が暗幕に覆われていった。荷車に忍ばせていた二本の愛刀を回収しながら、知ったことかとクークスは歯がみした。

ハルカの死について、自分に非があるとは思わない。そもそも彼女は初めから助けを求めてはいなかった。彼女はただ自分に気づいてほしかっただけなのだろう、彼女の胸に灯った淡くて春霞のように儂い恋心を。そして見事に自分はそんなことをつゆも悟れず、むざむざと彼女を孤独な死へと追いやってしまったのだ。

ここまで自分の感情が整理できないことははじめてだった。今の自分は、根暗なクークスでもなければ非情な肉斬連刃でもなかった。ただただ少女を捉えきれなかった無力な一少年として、自分は存在していた。波打つように感情が高まっては、無力感によって片隅へ追いやられた。彼女の死を回避すべくなにをすべきだったのか、最適な解を求めることが到底できなかった。

混乱の原因はハルカの死だけではない。彼女の手記に書かれていた、女郎蜘蛛を解散へと導いた少女。彼女の存在が重く胸に引っかかっていた。少女がケーティであることはほぼ間違いない。だが正直、今はその手がかりの重要性を認識しながらも、一方で『それがどうした』という思いに支配されていた。

もうそんなことどうでもいいじゃないか。どうしたって俺があいつを捜す必要があるんだ。常識的に考えて紫皇帝という怪物が、女郎蜘蛛の残党を。なんらかの理由で。狩っているというのなら、俺になにができる？ どう考えてもあいつは殺されているに決まっている。ろくに戦闘訓練もしておらず、前線に立つ前に離脱したケーティに生き伸びられる道理がない。

森に分け入っても、クークスはうつむいたまま歩を運んだ。どうせ顔を上げてもほとんど見えるものはない。本当は今すぐにでも母のいる村へ走りたかったが、体がひどく重かった。どうしようもなく陰鬱な空気な体を縛っていた。

それでもおもむろに立ち止まり、精神を鞭打つため二、三度頭を弱々しく振った。

「今は母さんだ」

浮かない顔つきだったがそれでも幾分しつかりした声で呟き、クークスは疾走を開始した。走りだすと巨大な風圧が顔を襲い、しばしの間だけ思考が消えた。

遠目にほんのりと民家の明かりが目に入ったのは、しばらくしてからのことだった。だいたい勘と記憶だけを使って走ったためちゃんとたどり着くか不安だったが、距離を置いて並ぶ家の中に懐かしい我が家を発見し、クークスはいっそう足運びを速めた。

ごく小さな民家群と商店だけがある簡素な村だ。我が家の前に立つと、こみ上げてくる感慨を抑えきれず唇がわなわなと震えた。火の明かりも落ちていいるし、母さんも眠っているだろう、と扉に手をかけ静かに引いた。そのとき異変に気づき、クークスは敷居で足を止めた。真っ暗で中が見えない。それはいい。だがどことなく人のいる気配、というか空気がなく、なんだかとても寒々としたような。

首筋に悪寒が巡り、クークスは懐から取り出した火打ち石を取り出して、近くの木から取った太い枝に火を点した。急ごしらえの松明を掲げて、一步踏み込む。

やや回復した視界の向こうに広がる光景を見て、クークスは愕然とした。

家の中に母の姿はなかった。見覚えのある寝台、木製の家具に調理器具はそのままである。だがそれらの使用主だけはどれだけ目を凝らしても存在しなかった。

虚ろな目は、それでも動揺の色をたたえない。上等だ。なら、こちらの広口壺に詰められた暗器を見てもその顔が保てるか、見せてもらおう。

右手の花瓶を指技<紅獅乱>で飛ばす。当然、これは首を動かさね、かすりもしない。だがこれはこれでいい。

その間に丸壺を引きつけ、押し出して顔面へ叩きつけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

叩き つけなかった。初めて、動揺がアグロワの瞳に揺らいだ。丸壺を空いた左手へと弾いたのだ。その先に待つ痛みを思いながらも、ミューズはそれを、左手で受け止めた。もちろん、完全に掴めない。だが回避しようとのけぞった敵の顔面へ、勢いに任せて掌で壺をぶつけることは可能だ。

しかも内容物が、緩く閉めた蓋を飛ばして噴出したら、なおさらダメージは倍増だ。

「食らえ！ 対名無し救助用蛇爆弾・改

！」

黒い群れが一齐に壺から飛び出した。牙をむき、後ろへ飛びかけていたアグロワの顔面や首に数匹の大蛇が貼りつく。捕獲した種も名無しを助けたときとちが、毒蛇だ・・・・・・・・ただし、軽度の麻痺毒だが。

後ろへ飛んだアグロワの足がもつれた刹那、ガッコーンと聞き覚えのある音が闘技場に響いた。後ろから長い滞空時間を経て戻ってきた花瓶の先端が、投擲の勢いをそのままアグロワの後頭部に直撃したのだ。

痛みに、こらえていた涙がふき出していた。それでも命中した花瓶を回収し、最後の力を振り絞って落ちかけた広口壺を右手へ押しやった。

右手に収まった花瓶と壺を握りしめ、さらなる追撃を試みようとして踏み込んだ矢先、しかし思いもよらぬ映像が目飛びこんできた。

アグロワの全身を這い回っていた巨大な蛇が、ボタバタと落下していたのだ。

唾然としつつ視線をずらすと、あるうことが全身から湯気を立てるアグロワの姿がそこにはあった。

「うそ」

悲痛に叫び声を上げるしかなかった。内息から生み出した異常なまでに強力な内力を、体中から発露している。理屈は分かっても、信じられなかった。アグロワは空いた片手の二本指で、己の体の点穴を次々と押さえていった。不要な内息の循環を止めることで、毒が回るのを防いだのだろう。

直後、なんのこともなさそうに、アグロワは死んだような顔をこちらに向けて、疾走の構えを取った。その姿を見て、ミューズは確信しつつ歯がみした。

レベルが違いすぎる。

激痛のせいで何度も意識が飛びかけているミューズにとって、その痛みを倍加させる荒技は、最初にして最後にして思いつく限り最大の連鎖攻撃だったのだ。蛇の毒によってすべてを終わらせるはずが、これを無効化にされては万策尽きたと言っても過言ではなかった。

ここでこれ以上負傷をしては、半島で厄介なことになるのは目に見えている。こうして攻撃が止んだ一瞬でそう判断したミューズは、大きく頷くと片手を挙げた。

「負けました。降参します」

できる限りはつきりと述べると、これまで息を呑んでいた観衆たちざわめき始めた。

「勝負あり！ この勝負、アグロワの勝」

「ミューズさん！」

制作者の控える席へ振り返ったとき、立会人の勝利者宣言とアリの叫び声が重なった。へ？ と思って立会人の方を見た瞬間、アグロワの眼球がそこにあった。

「このっ！」

拳が飛ぶ。かろうじて身を引いてかわすも、今度は反対側の曲刀

がミューズの左腕をえぐっていた。ザク、ザクと続けて肉が裂かれていく。悶絶する間もなく、もう片手が壺を払い落とすと同時に、ミューズの左指をぎゅうつと掴んでいた。

「お、おい！ お前、なにをしてい………」

立会人の声に、ミューズの絶叫が被さった。

「ひいひいひいひいひいひい！ や、やめ………離………いぎゃあああああ！」

痛みにも悶絶するも、足を動かし全力で相手の股間へ蹴りをぶつけた。青白い顔が大きくゆがむも、指を離さない。それどころか血まみれの左腕からを刀を引き抜くと、光る剣先をミューズの心臓にぴたりと当てた。

ぶるり、と体が知らぬ間に震えた。殺される、と初めてはつきりと死の予感があった。手を伸ばすまでもなくそれが目の前にあったことに、ミューズは改めて気づかされた。

アグロワの青く細い唇が、微かに音を成した。

「殺害。あの人のために、刀の錆となり死ね」

つつ、と刀が衣服を破った。

死ぬ。

ひやりとした感触が肌に直接当たる。

死ぬ！ 嫌、死にたくない！

ゆっくりと先端が食い込んでくる。

こんなところで、死んでたまるか！

肌を破り、細い一筋の血液が伝う。

ぐっ、とさらに奥深く肉がえぐられる、寸前。

頭が、途方もない空白に染められた。

無意識に手が伸び、右手で刀身を無造作に掴んでいた。裂かれた掌の肌から血が幾筋も落ちる。

「小娘。手を離」

言葉が終わらぬうちに、勝手に動いた右足が落下した二つの壺を蹴り上げ、それらをアグロワの側頭にぶつけていた。一瞬相手の力がゆるんだ、と思ったときに花瓶と壺をつかみ取って、左指と身体を後ろに退いた。どこか遠くで激痛が迸った。しかしまるで意識の外のことだ。直後、まるで肉体を知り尽くしたかのごとく全身の筋肉が無駄なく稼働し、今度はこちらが一步で相手の懐へと飛びこむ番だった。

「は、は、はあああああああああああああああああああ！」
片手で壺をたたき込む速度が、自分でも驚くほどに増していた。今度こそ、アグロワの顔に明確が驚愕がにじみ出ていた。刀を存分に動かし、壺による打撃を防いでいく。二人の高速、否、神速ともいうべき応酬は二十手にも及んだ。

不意に、アグロワの体勢がよろけた。地面の凹凸に足を取られたのだろ。好機を逃さぬべく、ありつたけの力をこめてラツシユをかけた。ここからの数手は、ミュージズにとって未知の一式だった。少なくとも、今は思い出せないどこか老人によって教授された組み合わせではない。それでもごく自然に、ミュージズは特徴的な打撃技を次々と繰り出していた。

顔面から腹部まで、容赦なく猛打を浴びせる。腕が痺れ、感覚がなくなつてもなお、壺による打撃は止まらなかつた。

ねじれた理性が、そつと囁いた。

殴るだけじゃやはり限界がある。

殴打などでは、敵は止まらない。

完全に息の根を止めなければならぬ。

それにはやはり殴るのではなく、斬ること！

判断がつくや、後ろへ跳び退る。

顔に凄惨さをたたえたまま、花瓶を上へ放つた。落ちてきたそれに壺を思い切りぶつける。粉々に砕け散った花瓶の破片が、盛大に

飛散してミューズの顔にも降り注ぎ、頬をかすめて　そのうちの一片を口でくわえ取ると、血走らせた目で相手ののだ笛を見据え、駆けだした。

狙うは首。口の破片を、横から滑るような速度で相手の首元へ突き出し　。

「やめい。そこまでじゃ」

慇懃な声が、背後から響き渡った。

たちまち、体が雷撃でも浴びたように硬直した。視界が色を取り戻す。

「お、じい、さん・・・」

紫皇帝の顔は暗く陰っていた。どこか憂いを含んだ表情のまま、

「そちらの男、止まれ。今わしは、ここからでもお前を殺せるぞ」
警告するように告げながら、ミューズに近づいてくる。アグロワが自分の後ろでなにをしようとしていたのかは知らない。そんなことはどうでもよかった。

ただただ、今は怖かった　狂気に犯された自分が、なにをしかけていたのかを理解して。

「お、おおお、お爺さん、わたし・・・」

震える声も、うまく聞き取れなかった。ミューズは脱力すると、倒れるように老人の腕の中に飛びこんだ。思い出したいくない。思い出したいくない。でも、体に染みこんだそれを、どうしてもぬぐい落とすことはできない。

老人の穏やかながらも、険しさと厳しさを陰鬱に含んだ独白が降ってきた。

「やはり、ダメか・・・」

クークス(21)

母が消えた理由は皆目掴めないが、ベルジャックがそこに絡んでいることは、まず間違いなかった。

そう結論づけるや、クークスは丘を発った。暖期から徐々に鋭い冷気が大陸全土を覆い始める寒期へと移り変わるまでに、クークスはサリヴァ軍閥領の端から端へと駆けずり回った。自分が知る限りの機密基地などのすべてを回り、自分が一度命を狙われていたことすらも忘れて、がむしゃらに母の居場所を探し続けた。

……だがムダだった。クークスは確かに暗殺者としてサリヴァ公の配下にいたが、自分が特別な立場であることは心得ていた。母という裏世界にまるで関与しない人間と同棲することは、通常の軍閥配下の兵ならあり得ぬことだ。だがサリヴァ公は「いや、声」はそれを許し、逆に自分を村の家に拠点を置かせることで、サリヴァ公にとっての要所をほとんど自分に伝えなかったのだ。だからサリヴァの根城も不明だったし、当然その他の戦士が潜んでいるという建物も知らないのだ。初めから「声」が自分を殺すためにそこまで考えていたのだろう。

そもそも都市や村があるあたりなら、まだ直轄の都市や農村があるから軍閥領同士の境界というのも明確だが、人が住めぬほどのそれこそ黒海原の奥地などなら、どこからどこまでが軍閥領の境目なのか不明瞭なのだ。気がつけば隣の軍閥領に入っていた、ということが何度もあれば、母ひとりを探し出すことはどれほど不可能に近いか、頭に値が回ったクークスでも理解できた。

それを悟った瞬間、体から熱と力が抜け落ち。
クークスは単独で母を捜すのを諦めた。

例えば、母さんが領内にいたかどうか、いや生きているかわらないかすら、わからなかったのにな……あのときは。

窓の向こうで、色が抜け落ちつつある木の葉が枝の揺れとともに、かさかさと乾いた音を立てていた。すっかり季節は暖期から寒期へと移行していた。

虚ろな表情で外を見やっていたクークスを、扉の開く音に続いて呼ぶ声がした。

「浮かぬ貌をしていますなあ」

微かに眼球を動かす。

「……ああ」

にこにこ笑顔を浮かべたまま、歩み寄ってくるのはやや小太りの女性だった。銀髪が混じった頭は、齢が少なくとも五十に達しているであろうことを物語っている。そのまま窓辺でたたずむクークスの隣に來ると、手に持っていた赤ワインの入った細い壺を手渡した。

「飲みなんせ。まあ、そう抜けた貌するもんやなかよ」

「わざわざどうも。今日の収穫は？」

「まあまあ。せっかちな人やなあ、まだ探し始めて三日目っていうのに。今のところ六人散らせてますけど、まだまるで音沙汰なしやお兄さん、わかかって訊くのはあまりいい趣味とは言えまへんよう」
「応じず、酒をあおる。」

「……感謝してますよ、アリユーナさん。わざわざ六人も出してもらって」

「なんの。ホントはもう少し出そうと思っただんですがねえ、うちの宰相がまだ兄さんのことを警戒しているみたいでな」

自嘲気味にクークスは口元を歪めた。

「仕方ないです。宰相という人間はまずすべての人間を信じないことから始まりますからね」

「言つと、軍閥アリユーナ・ジャルミスは肉付きのよい白い頬をキユツと持ち上げ、完爾と微笑んだ。」

「夫が用心深いのは、私がこんな大層な地位に就く前からのことですよ。まったくあの人は、表では戦えないというのに、裏でいろいろ

るところねくり回すことだけは性に合つとるんだとか」

ころころと笑う彼女の姿は、どう見ても西方でも有数の勢力を従える軍閥とは思えぬくらい穏やかなものだった。だが、東方にはサリヴァという群を抜いた一派が存在する一方、未だに小軍閥の割拠が続き、他を威圧するほどの勢力が登場していない西方において、その最大派閥に一番なりうる軍閥　それが、軍閥アリユーナ・ジヤルミス1世だった。

初めて謁見したときには、この老婆が名高い軍閥本人であると知らされ、仰天したものだ。

「兄さんがサリヴァさんところの間者や、つて言つても、これだけ情報をもらつてるから。信じなけりゃ罰当たりや、つて言つたんやけどなあ」

「……戦争の準備は進んでいるんですか？」

「そんなもん、五年くらい前からやつてますよ。ただやつぱり、なかなか相手はガードが堅い。兄さんも要所は知らなくても、戦闘の構成員やこれまでの任務こと教えてくれたやろ。それでかなりはつきりした面もあるけど、やつぱりまだまだやなあ。あっちの戦力が明瞭にならんかぎり、戦は起こせん」

彼が彼女と組んだのは、彼女が正式に反サリヴァを表明している、おそらく唯一の西方軍閥だからである。

母を独力で捜すことを断念した後、ともかく誰かの庇護に入ろうと西まで走ったクークスは、この一帯を治める巨大な軍閥をのこを想起した。運よくクークスを間者かなにかと勘違いして襲つてきた隠密のひとりを押き伏せ、アリユーナへの取り次ぎを強引に強要させた。ここらへんは相手が喉から手が出るほど欲しいであろう情報をちらつかせつつ、多少のハツタリも利かせた結果だろう。

その後、紆余曲折の末居城で運よく謁見が叶ったクークスは、即座に取引を持ちかけた。自分が知る限りのサリヴァについての情報は伝える。だからとある人を、あんたの有する隠密などを動員して大陸中を探し回ってくれないか、と。その場にいた宰相や護衛兵ら

はこの、取りようによっては挑発的かつ危険な申し出に非難の声を上げた。それが当然だ。肉斬連刃といえはサリヴァの手駒であることは、軍海周知の事実だからである。だからこそ間者ではないかと警戒されても仕方なかった。

しかしこの気のいい女軍閥は、しばらく黙考の末にクークスが書き記したいくつかの報告に目を通すと、満足そうに頷いて、彼を自分の領へと迎え入れたのだ。そうとう価値のあるものから、どうでもいいものまで些末な事柄も漏らすことなく書き記したた密書であったため、正直信頼を十全に得られるとは考えていなかったのだが……。

「でも俺が伝えた情報 たとえばこれまで遂行した任務なんてどこまで役に立つ情報なんです？」

アリユーナは壺を手から受け取ると、勢いよく酒を飲み下し、

「一番貴重な情報やねえ。兄さんは手駒として任務の目的なんて知らずに遂行していたんだろうけど、当時のサリヴァのヒンデンブルグのいざこざを知っていれば、カンタベリー城で兄さんが裏切られた理由だってよく私には分かるよ」

「へえ……」

「ここらへんはさすがに支配者側の発言である。肝っ玉が据わっている言い振りだ。ちなみにヒンデンブルグとは、サリヴァに滅ぼされた今は無き弱小軍閥である。」

「戦争がまだだとすると、では俺の出番はなし、ですね」

「うんにゃ、そうでもないんやな。それが」

「え？」

「西方にとって一番厄介な場所だ。それはどこやか分かるかいな？いきなり問いかけられ、やや呆気に取られつつ、

「それは……半島でしょう。ドビエンヌで数年もの間低強度紛争が続いているからこそ、いっこうに西方は安定しない」

「そつや。まあ簡単に言うとな、兄さんには半島に行ってもらおうと思ってる」

「は？」

さすがに驚いた。ここまで軽いノリで「半島へ行け」というのは、それこそ笑顔で「死ぬ」と言っているのと大差ない。さらに問いが重ねられる。

「半島がなぜ軍閥がいつまでも争い続けているか、分かるか？」

「それは……西のアツバースと南のロニオヘルトが同時に介入しようとして、さらに現地勢力が穴だらけのダルファ協定によって抵抗するという、三すくみ状態になっているから……」

「模範的な答えやな。そうや、そのとおりや。だからあそこはいつ、どんな対戦の火種になるか分からん。ああいう争いが続く場所は、確かにアツバースに近い私の軍閥などには有利や。でもな、このまま私の工房都市からアツバースに武器を供給して、ぬくぬくと資金を貯めるつもりは、私にはないんやで」

ギラリ、と温和な顔の両眼が光る。

「では俺になにをしると？」

「うん、せっかくの情報源や、死に行かせるような真似はさせん。第一、兄さんはまだ半島に行ったことがないやろ？ そんなひよっ

こには、半島入りはさせるのはどうか、と旦那も言ってるなあ」

「じゃ、じゃあ」

「まあまあ焦らない焦らない」

アリューナはほとんど空になった壺を返すと、ほほえみを絶やすことなく扉へと向かった。

「しばらくはまた、腰抜け宰相さんと話す必要がありそうやから、一概には言えんけどなあ。近々、兄さんには半島へ赴いてもらうと思う。だからしばらくはここで閉じこもってくれなせ」

肥えた体を揺らして、扉を抜ける。アリューナは最後にひらひらと手を振って、扉を閉じた。

ミューズ（22）

「壺のことはどうでもいいですから、ミューズさんはまず腕のケガを治してくださいっ」

本戦を棄権して、ほとんど生氣が抜け落ちたまま、アライと紫皇帝に付き添われて家に戻ったミューズが、掠れた声で壺を割ったことを詫びると、アライは毅然と言い返して寢室を飛び出した。

成り行きでここまで付き合った老人も、ミューズの腕を取ると、点穴をいくつか突いて止血をした。出血と疲れから相当消耗しているミューズの体を寝台に座らせる。

「あぐらをかいて内功を巡らせる」

懐から取り出した紫の布を巧みに腕に巻き付けてくる。ややきついくらいだったが、朦朧とした意識からそんな感覚もすぐに去ってしまった。

「腕を下げたまま、呼吸を整える。その姿勢で動くな」

厳しげな口調で言いつつ、左手の指に添え木を当てる。すべての指があらぬ方向にねじれている現状、気休めにもならないだろう。

「薬じゃ。含め」

締め丸薬が口に入れられた。飲み下すと、一気にさわやかな空気が薫りが全身をめぐった。

しばらく内功を巡らせていると、汗が垂れてきた。ああこれで寢床を汚しちゃうな、などと頭のとっぺんの上で思った。さらに経つと視野が狭まり始めるが、他の感覚は異様なまでに研ぎ澄まされていくのが分かった。

あのときも、そんな感じだった。アグロワに反撃する間、彼女を頭にあつた灼熱感が意識を胡乱の彼方へと追いやり、彼女の意思などが介在する余地は少しもなかったのだ。

あの暴走に、身をゆだねようという気持ちすら失われていた。とにかく目の前にあるソレを破壊することしか、頭になかった。体が

微かに震えた。急いで氣息を安定させるも、体の芯に根づいた寒気はいつこうに拭いきれなかった。

気づくと、紫皇帝が部屋から消えていた。あれ？ と姿勢を崩さぬまま思っている、入れ替わりにアライが入室し、かいがいしく首や肩にしたたる汗をふいてくれた。

「治るんですか」

見ると、アライの視線が血まみれの左腕に注がれてい。もっとも、グロテスクな形状をした先端の指に目がいった瞬間、険しそうに目が細められたが。

「ミューズはうつすらと微笑み、

「かなり時間はかかるでしょうけど、治るんでしょ……痛いのには痛いけど」

「そうですか」

不安を隠しきれない様子で手を動かすアライ。人の好い彼女のことだから、どこかで大会の負傷の責任があるのではないかと苦惱しているのかもしれない。

「壺を割ってごめんね」

囁くようにまた謝ると、アライは壺なんてどうでもいいです、と言った。

「また私が作りますから、いくつでも。だから気にしないでください。それより、けがを、早く治して……名無しさんのところに……」

震えた声に、嗚咽が重なったかと思うと、アライの両眼にいつばい雫がたまっていた。ぼたぼたと寝台に落ちては、汗とともに寝床を濡らしていく。

「殺されなくて……本当に、よかったです……」

大丈夫よ、安心して。と軽々しく返せなかった。昔なら二言目にはそんな安請け合いをしていたかもしれないが、自分の『大丈夫ではない』姿を見せてしまった今、そんなことは口が裂けても言えな

った。だから代わりの言葉を懸命に探した。考えて、迷って、思慮の末に、ミューズは口を開いた。

「ありがとう。もう危険なことはいらない。約束する」
短いながらもありったけの本心を込めた言葉に、アリの顔がゆっくりと和らいだ。

アリが出て行って、またずっと発汗したまま内力を巡らせていたミューズは、さすがに手持ちぶさたになり、窓の方へとあくらの向きを変えた。

都市のやや裏道にあたるこの場所から望める通りには、静かな喧噪に満ちあふれていた。大会中ということもあり、人通りはひっきりなしだったが、目抜き通りほどの盛況さもない。なにげなく通行人を観察し続けているミューズの目は、突然ひとりの少年に奪われた。

たちまち正体に思い至り、愕然とする。

うそ！ でも、そんなはずない！

少年の姿はもう窓には映っていないかった。

思うより早く、体が動いていた。突然の行動に内力が激しく逆流して胸に強い圧迫感を感じたが、知ったことが。窓から飛び出し、急いで少年の後を追った。

見つけた。すぐそこに、彼はいた。足音に気づいて顧みたその顔にも、ミューズと同様に驚愕の色を浮かべていた。

「1号！ なにしてんのよ、こんなところで！」

叫び声に周りの幾人が驚いて振り向く。ミューズは少年の服を掴んで道の隅っこへと引きずって行った。

改めて呼吸を整え、間近で観察する。すつと通った鼻に、その下にある薄い唇。涼やかな瞳はどこかあどけない光が感じられ、全体としてどこかおちゃらけたような顔立ちであるが、同時に端正な風貌。

「ねーちゃん！ やっぱここだったかー！」

ミューズを黒海原で助けた張本人　名無し1号もまた声を上げてミューズの肩をつかんだ。

ひっかかりの正体は、腰につり下げられた細剣レイピアだった。見覚えのある紋章の刻まれたそれを見て、この少年の正体に気づいたのだ。当然、頭はパニックだった。半島にいるのではなかったのか、あの鳥はだれが飛ばしたのか、名無しとどういう関係なのか、などいろいろ尋ねたいことが頭を回っていたミューズは、精悍な顔つきに正面から見据えられ、わけもなく鼓動が早くなるのを感じた。

うわ、案外1号ってカッコイイ……じゃなくて！

「大会で壺を振り回して　断崖斧　を負かしたやつがいるって噂を聞いたから、軽い気持ちで大会だけのぞいていこうと思ったんだけどさ」。その様子じゃ別人だってバレてるみたいだな」

1号は肩をすくめて、相変わらずの軽い口調で言った。

「えっと、どういうこと？　あんた、半島にいるって話じゃなかったの？」

「半島ってドビエヌのことかい？　誰があんなところに好きこのんで行くかってーの」

「だから連れ去られたって……雑闘衆に……」

「はあん？　と眉を器用につり上げた。ミューズは急いでギルクアツシユことピヨピヨが来たこと、その赤い手紙を見て名無しが1号を助けに行ったことと告げた。

直後、1号の口からどこか皮肉気味な独り言がこぼれた。

「ちつくしよう。アイツ、おびき出されやがったな」

はっとした。アイツ、とは名無しのことに間違いあるまい。

「おびき出されたってどういうこと!？」

続けて我を忘れて畳みかけようとするミューズをひとまずなだめると、1号はバリバリと頭を搔いてあー、くそ、とぼやいた。

「こりゃ行くしかないよなー、あの根暗な坊やを助けに」

言っなり、体半分を森の方向へと回す。

行かせてたまるか、とミューズはその首根っこを掴んだ。

「ねえ、説明してよ。なにがどうなってるの？ 名無しは無事なの？ 騙されたの？」

ほとんど泣き声混じりの言葉に虚と突かれたらしかった。1号はしばらく口を閉じたかと思うと、視線を空でさまよわせた後、ぽんと頭に手を置いて言った。

「だいじょーぶだ。ねーちゃんが心配することはなにもねーよ」

ウソだ。

直感的に、そう悟っていた。

「腕もケガしてるみたいだし、ねーちゃんはここにいて……」

「

嫌よ」

「い、いや。それに半島は危ないって……」

「嫌よ。絶対に嫌。わたしも行く。今度こそ、置いてけぼりはごめんよ」

ミュージズの決然とした言いぶりに、1号は目を見開いた。

「本当のことを教えて。名無しはなにがあったの？ アイツは、騙されたの？」

躊躇っている風の1号へ、ミュージズは一步踏み込んでさらに続ける。

「お願い。あなたの正体とか、名無しの正体なんてどうでもいい。名無しは無事なの？ いったいどこにいるの？」

「……たぶん、まだ無事だ。場所はおそらく 半島の門か……アイツのことだからもう入ってしまったるか」

『まだ』。

そのごく短い言葉に、ミュージズの頭は落雷でも浴びたような衝撃を受けた。

「そんなに危険なの？」

観念したように腰に手を当てた1号は、しばらく考え込む素振りを見せた。

「アイツから説明はされてねーのか？ 半島はとんでもない地獄だ

ぜ。だからたぶん、ねーちゃんを無理してでも行かせなかった。違うか？」

「うん、そう言った。わたしは……足手まといだって」「まー、こりやまた一番つらいこと選んじやってな、アイツも」乾いた笑いをこぼし、

「でもさ、少なくともそれはアイツなりの不器用な優しさってやつだ。軍海のやつらは肉斬連刃を非情な解体者だって言うし、アイツ自身も仕事るときはそう振る舞っちゃーいるが、実際そうやって自分と肉斬連刃ってことを区切らなけりゃ、人も殺せないような優しいやつだぜ」

飄々と慰めの言葉らしきものを口にする1号に対し、ミューズは頷いた。

「名無しはいつも優しかった。それは、よく分かる。だから追いかけたいの。足手まといっていうなら、それだけわたしが強くなればいいだけでしょ？ 今、わたしは『そういう自分』を思い出せた」それは自分でも悪寒がするくらい、なにより制御できないくらい危なっかしいものだけど　と心の中で呟き。

「わたしは名無しを追いかけたい。今度こそ、あんたひとりだけじゃ行かせたくないの」

二、三度、薄い唇が開かれては閉じられた。なにか音を探すように、そのままどこか虚空を見つめていた瞳が、やがてミューズの視線を交わった。

「オレにとつてもねーちゃんは少なからず知った仲だ。だから本音を言えば、行かせたくない」

「……」
「でもよ、個人的には、ねーちゃんのそんな顔はもつと見たくねー。そんな　死んだようにしよぼくれた顔はな」

につ、と1号の顔に大きな笑みが広がった。

「しかたねー。こうなったらオレがアイツに殺される覚悟で、半島に道案内すっか！」

その笑顔につられるようにして、ミュージズも顔がぱつと華やぐのが分かった。

「ありがとっ。じゃ、さっそくだけど、あの鳥の手紙のことを説明して」

「あのピヨピヨがにせもの

！？」

「わぁ、うるさいうるさい。ねーちゃん、もつと静かに驚いてくれ。周りが見てるっての。まぁ、その可能性が一番高いってことだよ。オレとアイツが離れているときは必ずギルクアッシュを介して連絡を取り合ったから、騙されても仕方ないけど」

「あれ？ あの鳥はピヨピヨって名前じゃないの？」

「そこだけは意見の相違があるんだよ」

「個人的にはやっぱりピヨピヨは……じゃなくて！ じゃああのソックリさんはいったいどこの誰なのよ」

「いるんだよ。雑闘衆にひとり、とんでもねー獣使いが。ひとりでギルクアッシュ級の希少種を何匹も持つてるような輩が。まったくオレがああ鳥を捕まえるのにどれだけ時間がかかったと思ってるんだい」

「じゃなくて！ そんなことはどうでもいいでしょ。なに、じゃ名無しはその動物使いさんに誘われて半島に？」

頭が軽く横に振られる。

「いや。たぶんおびき寄せたのは雑闘衆 ひいてはキ・サンだろうな。だけど妙だな。ひとつだけ気になるのは、ねーちゃんたちに届いた手紙ってことだよな」

あぁ、とミュージズは思い出す。

「血でべつとりと塗られたあれね」

「本当に血か？」

「え？」

「その手紙、っていうのさえ呼べないその代物についていたのは、本当にオレの血か？ そんなわけないよな。オレは今もこーしてぴ

んぴんしてるわけだし。さすがのオレでも出血したら気づくぞ」

「う、うん。でも名無しはあんたの血だって言ってたわよ」

「その手紙は今どこに？」

ちよつと考え、名無しが懐にしまっていたことを思い出す。

「なるほどなー、そうなるかと確かめようもないが、だ。察するに、手紙もどきを見て保留付きで断言したる？　そこだよな」

1号はピンと指を立てて、

「いいか。オレとアイツで緊急用の手紙暗号なんて取り決めちゃいねーよ。そんなことしても無意味だし、オレたちはそんな仲じゃない。だいたいそんな出血で紙を全面的に真っ赤にするなんて、無意味かつ自滅もいいたコだろ。それくらいなら血文字で『助けて』でも書くぞ」

確かに道理だ。あの、そう小さくはない紙の面積を血ですべて塗りたくるなんて、言われてみれば無意味極まりない。

「じゃ、どうして名無しは……」

「あんまり言いたくねーが、たぶんアイツはウソをついたな。おそらくアイツだけに読み取れるようななんらかのカタチで、あの手紙にはメッセージが書かれていたんだろー。そしてオレの予想が正しけりゃ、たぶんそれは……」

「ちよ、ちよつと待つてよ！」

あえぐようにミューズは1号の言葉を遮って、手を振った。ウソ？　名無しがわたしに？

それは必要なウソだったのだろう　でも、でも！

自分がなにに対しいら立っているのか分からなかった。必死で言い返そうとしても、頭が言が生まれない。

1号は言葉につまったミューズを瞥見すると、

「アイツはウソつく振りにはうまいんだが、ウソの内容がうまくねーからな。少し考えればおかしいよーなウソついちまったんだろーが……敵さんがギルクアッシュそっくりの鳥を使ったってことは、オレからの手紙を装ったままウソの内容を記したって考えるの

が筋か」

「ちなみにあんた、ピヨピヨは今どこに？」

「おー、あそこだ」

ふと斜め後ろを仰ぐと、通りの外れにある建物のでっぺんに止まる怪鳥が、じつとこちらを見つめていた。

「町中じゃ距離を離したりして飛ばせてる。賢いやツだからなー、オレにしか懐かぬー。そこを敵さんはついたんだろーが」

「じゃ、羽の傷は……矢で撃たれたみたいなのに、羽毛がむしり取られてたのは……？」

「うん？ そんなことになってのか？ たぶんそこにやあ、ギルクアッシュと唯一の違う点があったんだろ。特徴的な斑文なり、傷なりが。だからそこだけ削った。なにか反論は？」

「じゃ、じゃあ！ どうしてウソなんて！」

「知らねーな。そればかりは、アイツに聞いてみなくちゃ分からない。ただ推測する限り言えることは、アイツは手紙が届いたとき隣にいたねーちゃんになんらかの言い訳をする必要があったってこと、なにか隠されたメッセージがあったってこと、そしておそらくは半島に向かったこと、そして最後にどうしてもねーちゃんを連れて行きたくなかったってこと」

1号は言葉を句切ると、ミューズの方に横目で目線を送った。

「アイツの名誉のために言うておくが、アイツがここまでしたのはねーちゃんのためだけ。本当のことを言いたくもなかったのもあるだろーし、そこにあるのは個人的な理由を知られたくないって話もあるだろ。でも一番大きいのは、どうにかしてねーちゃんをコトに巻き込みたくなかったことだ。やろうと思えば、なんでもない振りをして、ねーちゃんをほったらかしてさっさと出て行けばよかったのに、わざわざ中途半端なウソつきやがって、まあ優しいのか不器用なのかねー」

「……ありがと1号。そこまででいいよ。行くう」

沈み、それでもはつきりとしたミューズの声に、1号はきよとん

とした後、目を丸くした。

「行くつて、半島にか？ でもまだねーちゃん、準備が……」

「準備なんてすぐ終わる。だから早く、すぐに追いつこう。あのバカに」

そう大バカだ。

本当のことを言ってくれていたとしても、結局事態は変わっていないだろう。それでもなぜか心の中は本当のことを告げて欲しかったような気がしたのだ。

なんだかひどく、胸が苦しくなってしまった。それでもギュツと拳を握つて、

「会ったら出会い頭にあの壺頭、ぶん殴つてやるんだから」

精一杯笑顔を作つて宣言すると、1号もまたニヤリと笑った。

「そりゃいや。オレもそろそろあの朴念仁ぶりをどうにかしてやりたいと思つてたところだ。親友と女房の一発があれば、目も覚めるだろー」

のほほんとしてんでもないことを言うので、さきほどの苦悶もどこへやらミューズは真っ赤になって手を振った。

「な、ななななななに言ってるのよ。によによによん、女房つて1号……」

「あー、それからもうひとつ」

苦笑を浮かべたまま狼狽する姿を眺めていた1号が、軽く手をあげた。腰に手を当てて、むっと言い返す。

「なによ」

「さすがに、1号つて呼ばれ方はきつい。名前を教えるからよー、そつちで呼んでくれ」

「名前つて、名無し1号、名前あつたんだ」

「あるよ。普段は絶対に名乗らないけど、必要なときだけに使う名前があるんだ」

一息置いて、1号は言った。

「ソヴェエール。そう呼んでくれ」

「長いわ。嫌よ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんとなく貴族っぽいイメージが嫌いだという理由だけで、むげに断るミューズであった。

ミュージズ(22) (後書き)

一日遅れになってしまい、申し訳ありませんでした。

長い、かつここが一番のプロット変更後の大きな変更点だったので、かなり悩んだ箇所です。続きは活動報告で。

クークス(22)

「初めまして。お目にかかれて光栄です肉斬連刃」

最大限に感情を削ぎ落とした挨拶に面食らいながらも、クークスはなんとか喉を鳴らして応じた。

「よろしく。えーとく馬の牙の頭領の……」

「名前はありません。お好きにどうぞ」

「……じゃあニヤーにや……いや、なんでもない。じゃあ、えーと……」

「私はリエインと呼んだ。く馬の牙の拠点はうちのリエインにありますからなあ」

「それじゃリエインで……?」

「構いません。お好きに」

一切綺麗な表情を崩さないまま、青年は言葉を繰り返した。クークスは二人の脇に立つアリューナに説明を求めるように目配せした。西方で最近名を挙げてきたという傭兵集団く馬の牙。その頭領という男が、実はこんなに若い男などと夢にも思わなかったクークスは、どうにも接し方が分からなかった。なんせ年齢が自分より二つは下に思われたからだ。青年というより少年か。

「リエインのトコは規模こそ極小やけどなあ、ひとりひとりなは中々に上玉がそろつとるんやで。なあ、リエイン」

「お褒めにあずかり光栄です」

雇い主に対し、軽い会釈をするリエイン。それを見てほほ、と笑うアリューナ。どうにも調子が狂わされる。

「ま、ほんならここで握手でもしときましょか。これから二人で仲良く半島に行くわけやし。ほら手え出してえな」

言われて、互いに視線を交える。すつと白い手が先に差し出されたので、慌てて握り返すも、握手というものをしたことがないクークスにとって、それはどのくらい長い間、どのくらいの強さで握っ

ておかなければならないものなのか、見当もつかない。

それは相手もどうやら同じらしかった。ごく当たり障りのない強さで掴んだかと思うと、どちらも手を引き抜こうとしない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

居心地悪いことこの上ない。結局、硬直の末、先に手を無理に引き抜いたのはクークスの方だった。リエインの方がまるで動く気配がなかったのだ。

「長い握手でしたなあ」
「違うだろ。」

「では、これから二人で協力して半島へ行ってもらうわけやけど、あとのことは全部リエインに指示出しとるからなあ、安心してや。

ほんならこれで。私は公務がありますんでなあ。あのダメな宰相さんをどうにかしてきますわ」

言い残すとアリユーナはさっさと衛兵の守る居城というか古城の門をくぐり、中へ引っ込んでいった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もちろんこの男が、これまで母を捜していたく馬の牙の六人の、しかも頂点であることは分かっている。さらにこの男が半島の中央地帯において母と特徴のよく似た女性を見かけた、という情報をたぐってきたことについては、感歎すべきことだ。少なくとも可能性だけでも今は喉から手が出るほど欲しく、本人確認のためならどこにでも飛んでいくつもりだったが、なんせ母の素性を明かせないため、必死で頭を絞って目立つ特徴を考えたのだが、結局年齢が五十代近いやせた女、両頬に少し大きめの火傷の跡がある、ことしか伝えられなかったのだ。これだけで七日も経たずに特徴に合致する女を発見したという事実には、目を見張るしかない。

よって、この男にも相応の謝意を見せるのが道理なのだろうけれど。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しゃべらない。もしかすると向こうも同じことを考えているのかもしれない。それでも、この沈黙はなんだ。歩けよ。俺は半島までの行き方なんて知らないぞ、と半ば八つ当たりまがいのことすら考え出したクークスと、まだ正面から向かい合うリエイン。とにかくなにか言おうと、言葉を発しかけたとき、

「肉斬連刃」

ここで機先を制された。静かに薄い唇が開かれる。

「半島入りの経験は？」

「ないよ。俺はずっと東方にいたから。君は？」

「一度あります」

あつさりと、とんでもない言葉を聞いたような気がする。文字どおり、驚愕すべきセリフだ。泡を食って尋ね返す。

「長城越えはどうしたんだ？　半島の門　には、とてつもない長さ　と高さの長城があるんだろ？」

「長城経路では無理です。陸ではなく、海の経由で行きました」

「え！？」素で驚いた。「海経路って、それこそダメなんじゃ……」

遠路航海技術は、それこそ大国ですら有していない。近々ローウエーンが開発するとかしないとかという憶測は立っているが、そもそもそんなものがあれば大陸横断による商隊などしなくても、船による交易が可能となっているはずだ。

「……半島の　上辺から逆侵入するのは不可能だし、かといって近い浜は半島の兵によおって全部押さえられてるだろ。第一、海経路は大国に入らなきゃいけないし……」

「海の民としての彼らは確かに脅威です。しかし浜辺には長城はない。事実、これまで侵入した間者については、ほとんどが海を渡っています。自分も含めて。大国へ入るのはそう難しくないし、海に出れば監視の目はかいくぐれます」

なるほど、一概に無謀とも言えぬわけだ……やはり西方についての知識が乏しい自分の意見はどこか頼りない。クークスは

仕方なく口をつぐみ、リエインに従うようにして後を追った。彼がどこに行こうとしているのかは、知るよしもなかった。

ドビエン又半島における三すくみは、大国と半島勢力の対立単純な構図ではない。ここに、さらに同時進行で内部紛争が起こっているから手に負えないのだ。半島は現在、入り口に当たる半島の門に長城を張り巡らせているのだ。当然文物の交流は、築造以来極端に減ったし、半島の内部情勢が詳しく分からないのもそのためである。それでも半島に利権を狙う大国や、一部の軍閥はいくらかの間者を放っているが、無事に還った者はそう多くないと聞く。

故に、半島の惨状は知れても、具体的な紛争の全貌はまるで掴めず、半島を形容する言葉は実に漠然としたそれこそ大国‘地獄’やら、あの世に近い場所’などと呼称しか伝えられなくなった。しかし半島閉鎖という事態に反発する内部勢力もいることは確からしく、それらを大国が婉曲的に支援するという泥沼の様相を成しているとも耳にする。

そもそも門の前にロニオヘルトとアツバースの国境が存在する、というあたり、泥沼化の要因は知れようというものだ。長く犬猿の仲にいるこの二大国が協力すれば、あるいはさつさと破れるのかも知れないが、二国は先の軍閥内の大戦においても、混乱に乗じて互いの領土の一部を奪おうと手ぐすねを引いていたほどだ。

たぶん半島が再び開放されても、代理戦争によって蹂躪されるんだろう。そう思うと、半島側が必死なものも分かるというものだ。

そこまで概略的な解説をざっと頭の中に流し、クークスは自分が潜入先の情報についてほとんど無知に近いことを自覚した。これまではどうしようもなかったが、今隣には生きた情報源がいるのだ。訊かぬワケにはいくまい。

「半島の状況は今、どうなっているんだ？」

「私が行ったのがちょうど半年前。そのときから今に至るまで、表だつての大国の侵攻はありませんから、主に内部紛争が活発となっ

ています。

まず南方のハルグルベスはチヨールラム・ファと同盟を結んでいました。自領の武器庫の襲撃に端を発した、ドルグアンの侵攻を恐れ、ハルグルベスの方が提携を求めたのです。ドルグアンには大国軍が一度攻め入ってますから、その傷を癒すまでもなく侵攻するといふのはあり得ないのですが、おそらく偽の情報でも流れたのでしよう。武器庫襲撃は別の勢力が起こしたものと考えられます。

同盟の結果ハルグルベスとチヨールラム・ファ及び半島の北でチヨールラム・ファ軍の殲滅を測っていた軍閥アーラーの目論見は崩れて、力の均衡が成立しました。さらに雑闘衆が………

「待て、待て！」

怒濤の固有名詞群と勢力関係を頭にたたき込み続けていたクークスは、最後の単語が登場するや色めき立った。

「雑闘衆！？　なんでその名前がここで出るんだ！？」

リエインは目を細めて、

「ご存じないのですか。雑闘衆の本拠地は半島の中央部に存在するのですよ」

「………マジかよ」

キ・サンの『勧誘』の言葉を思い出し、クークスは絶句するしかなかった。

クークス(22) (後書き)

投稿が遅れてすみません！

目下、7月は本業が多忙のため、一ヶ月間投稿を控えさせていただきます。次の投稿予定は8/1を予定しております。

幕間4

とある手紙（ローウェン王立文書館より）

ガルダーダ月33日

同志トゥラーヴェエ！

君の手紙は読ませてもらった。人事について少し考える必要がありそうだ。まず君が既に後任を求めているという事態について、やはり嘆かずにはいられないが、一方でそれは仕方ないことなのだろう。どうやらそちらの鉱水は君の病にあまりいい効果をもたらしていないようだ。

だが後任として、末尾に息子の名前を早々と挙げているのは、やはり笑いだらう。この問題は君のところだけでなく、こちらの本国にとっても大切な問題だから、後任の件については慎重になる必要がある。

君が候補に挙げているいくつかのうち、シャルダンには、少なくとも頭領としての器はなく、権威も持ち得ていないだらう。もちろん 涙石翠鵬 と呼ばれる彼女の勇名については聞き及んでいるが、彼女はあまりに粗暴で、その欠点は七大公のひとりとしては十分我慢できるものであっても、頭領の職務にあたっては我慢できないものである。

他の人物もおおかた似たり寄ったりだ。たいていは器がない。私の意見としては、やはり君の父親をもう一度そちらへ呼び戻すことができれば、と考えている。七大公はなんとやっている？ そちらの意見も聞いてみたい。どうかこの手紙を七大公に読んで、彼らの意見と合わせて返事が欲しい。おそらく彼らも私に賛同してくれるものと思う。

握手しよう。

カ

ウニッツ

追伸：君の現地での布教活動がうまくいっていることを祈っている。

ハンベルナ月4日

トゥラーヴェエからカウニッツへ

後任の件についてはたいへん、頭を悩ませているところです。こちらの紛争も日に日に勢いを増しており、我々の力だけで国を守るのも限界があります。できるかぎり速やかに、私の後任を決定したいと思います。

アリューシヤを呼び戻すことは私も考えましたが、まるで行方が知れません。いくら探し手は送っていますが、雲をつかむような話であり、またただでさえ減ってきている戦力を、そちらにつき込むのは有効でないと考えます。しかし見る限りどうやら父はこちらつまり半島にはいないようです。

つきましては、父は後任の枠からはずしたいと考えます。七大公についても、私と同意見です。

返事を待っています。

トゥラ

ーヴェエ

ハンベルナ月10日

同志トゥラーヴェエ！

そちらの事情はいささか以上に大変なようだ。ずいぶんと周辺の勢力の侵攻に悩まされているらしい。一度ファルをこちらへ招聘しようとも考えたが、やはり君主不在では‘国’はさらに乱れ、君たちの仕事は増すだけだろうと、思いとどまった。

人事の件だが、後任についてはフィーカビーを推したい。知って

の通り、彼は‘国’では有能な政治家だし、求心力というものも見受けられる。唯一懸念されることは、彼の実力がはなはだ心もとないということであるが、それについては七大公と聖徒の力でいくらかでも補ってくれるものと考ええる。

本国の状況は良好だ。息子のカーターは30になった。そろそろ私も引退して、王位を譲るときなのかもしれない。息子はいろいろな意味で非凡だ。なにより成熟しているのがはっきりと分かる。ときどき親である私が怖くなるくらいだ。

そちらへの援助はできる限り早く行いたいと思う。おそらくケールマンからグインタブラン經由で武器を供給できるはずだから、それまでどうか耐え忍んでくれ。ジャルミス側がうまく根回ししてくれるとよいのだが。

握手しよう。

ニッツ

カウ

ハンベルナ月30日

ファルー‘国’王、およびトゥラーヴェエ雑踏衆頭領宛

この手紙をもって、穢れた民の住みし貴‘国’および組織に対し、ローウェンは今後いつさいの支援および内政への干渉を行うことをしない。また、少なからずそちらへ残っているローウェン兵を速やかに撤退させる旨をここに記す。

ローウェン国

王カーター

ミューズ(23)

「じゃ、準備してくる。待ってて」

名無しをその場に残して窓から家に戻り、服を整えると唯一の荷物とっていい布袋をひつつかんで腰に挟み込んだ。部屋の扉をおそるおそる、といった風に扉を押し外に出ると、椅子に座ってこちらを顧みるアリーの姿が目に入った。

「ミューズさん。指は……」

「うん、だいじょーぶ。痛みはもうだいぶおさまったわ」

ほっと安堵するアリーの顔は、直前までなんと言い訳しようか迷っていたミューズに、真実を告げる決心をもたらした。

「だから、っていうわけじゃないんだけど、ちょっと出かけてくる。アイツを連れ戻しに」

「アイツって、な、名無しさんのことですか？」

「うん」

「出かけるって……でも、もう危険なことはしないんですよ……」

返事になにかを如実に察したのだろう、やや震える声で問われた。「……ごめんなさい、すぐに言葉を撤回するような真似しちゃって。でも、やっぱり危険だって分かっても、あいつを追いかけたいの。だから、ええと、ごめんなさい」

最後がうまくまとまらず、ぺこりと頭を下げる。アリーの固い声が響いた。

「場所は、どこに？」

「……ドビエン又っていう半島」

顔を上げた先にあったアリーの表情が、数瞬強張った。視線が空を泳ぐその顔は、明らかに不安と躊躇いが募っているのが分かる。

「……ミューズさんが本当に望んでいることだったら、わたしは止められません……けど、あの……これだ

けしか言えないのが口惜しいですが」

真つ直ぐな眼差しが、胸を射た。

「死なないでください。必ずお二人でここに戻ってくるって、約束してください」

目の奥から熱いものがこみ上げてくるのが分かった。ぎゅっと目をつむると、胸が氷の切片で裂かれたような、こらえようもない切なさがつずき始める。

どうにか落涙をおさえると、もう一度頷いた。

「ありがとう。絶対に約束する。二人で、ううん、三人で必ず戻ってくるから」

「三人？」

「あ、ううん。なんでもない。えっと、ところでアライさん。紫色の服を着たお爺さんがどこに行つたか知らない？」

先刻から部屋を出て以来、紫皇帝の姿を目にしないことを不思議に思い尋ねたのだが、アライはきよとんと、

「……いいえ、見ていませんが。あの、あのお方はいったい誰なんです？」

「ん、怪しい人じゃないんだけどね、少し稽古つけてもらってたっていうか」

そこで1号をしばらく外に待たせていることにはたと思い至り、ミューズは再度大きく頭を垂れた。

「それじゃ、行ってきます！」

「待つてください」

扉に向かいかけるのを制し、アライは一度工房の方へ向かった。戻ってきたとき、壺が両手にふたつ握られていた。

「よかつたら使ってください」

先ほどからどうにも手が軽いと思っていたら、そう言えば二つとも壺を破損していたのだ。自分の迂闊さに照れ笑いを浮かべつつ、ありがたく巾着袋を腰につけて広口壺の中に細長い花瓶を入れて、右手で二つとも持った。

アライはやはり心配そうに、視線をミュージズの左手へ向けていたが、すぐに精一杯と思われる朗らかな表情に戻し、からかうように言った。

「その壺は返してくださいね」

「えっ？ く、くれるんじゃないの？」

言ってから、しまった図々しいな、と自戒の念に苛まれるも、次のアライのひとことですぐにそれも吹き飛んだ。

「無事半島から戻ったら……おねがいしますよ」

「……分かった。返却期限は、来月くらいね」

二人して笑顔を向き合わせ、直後どちらからともなく嘖き出してしまった。

家へ出ると、腕を組み肩眉をつりあげる1号がいた。

「わっ、びっくりした」

「やれやれ、待ちくたびれたぜ。さっそく行こう。……あ、そくだ」

ピュッと鋭い口笛を鳴らしたかと思うと、次の瞬間、1号の肩付近にピヨピヨが舞い降りていた。

「賢いわね」

「ああ。ねーちゃんよりはな」

殴ってやるうかしら。

「行けッ！」

ピン、と指でピヨピヨの尻を弾くと、クァーと高らかに鳴き、直後にピヨピヨは森の広がる方向へと飛び去っていった。

「ちよっと、いなくなったじゃない。飼い主に愛想つかしたんじゃないの？」

「いいんだよ、これでアイツの後を追ってくれるしな。俺たちも速く行こう」

言うなり、名無しは急に走り出した。慌てて足に内力を込め、疾風千変の構えを取ると、ミュージズもまた疾走を開始した。

すぐに名無しの隣に追いつく。どうやら走り方を見る限り、彼の走法はやや自分と異なるものようだった。

「あなた、半島に入った経験はあるの？」

「あるぜ、二度ばっかしな」

二回……半島がほとんど死地と同義だと考えているミューズにとって、その言葉は頼もしくも空恐ろしくも思えた。

「どうだった、やっぱり、地獄って感じなんでしょ？」

震えを押さえて問うと、あっさり肩がすくめられた。

「ま、あんまり思い出したくない旅路だったな。二回目はまだマシだった……ああ、いや、そっか。二回目の方がやばかったんだ。やれやれ、俺も老いたねー」

「ん……あのさ、ぶっちゃけ今の私って、足手まとい？」「足手まとい」

ぐさり。気配りとか繊細さとは無縁だとは思っていたが、まさか二度目の言葉を聞かされるとは。

「落ちこむのはまだ早い。そもそもねーちゃんにはもしかしたら、半島に入るために一働きしてもわらなくちゃならない　　かもしれないんだからな」

「どういう意味？」

「半島に入るには」といきなり口調をがらりと変えて、1号は真剣な顔つきになる。「陸経由と海経由のふたつがある。陸はバカでかくて、かつバカ高いほどの長城がそびえていて、こっちからの侵入は物理的に困難。＜高馬鳳欧＞でもできれば、壁越えはできなくはないんだけど……ねーちゃん、覚えてないだろ」

「コーバーホーオー？」

どこかで聞き覚えがあるような？

「壁走りの技術っていつべきかな。六十四般の最奥義のひとつさ。習得は疾風千変より難しいとか言われてっけ。言っておくが、俺もできない」

「名無しはできるの？」

「なんだか知らないけど、一生懸命覚えてたぜ。もつとも、なんとなく理由はわかるけどな。とにかく、キ・サンでもねーし、俺はあんなゲテモノな技、覚えちゃいないんだ。半島にまた行くなんて、二年前は思ってたしな。でもって、行きながらちよこちよこつと練習するなんてことで覚えられる技でもない。もちろん」

「じゃあどうすんのよ」

「海経由で行く　が、こっちもこっちでちょっと厄介なんだ。物理的な障壁はない代わりに、下手したら兵隊さんがいっぱいいるところに突入しかねない。半島は海の民として最高の兵力を有するから、さすがに二人じゃ勝ち目ない」

「じゃあダメじゃない！　なら、いつたい……」

「だからこっち行き方は、ある人の手を借りる必要があるんだ。前回もそれで行った。買いかぶってるようだが、この人の手助けさえ借りられれば、ほとんど間違いない安全に行けるんだが……」
「これがちと厄介なんだよな」

1号が冗談めかしたような笑みを一瞬だけよぎらせた。

「どういう意味？」

「今、この人はアツバースの地下牢にいてな。要は、脱獄をさせなくちゃいけないってわけさ。おわかり？」

「脱獄ねえ。つまりそのお方は犯罪者ってこと？」

「一年半くらい前に、なにかやらかしたって聞いたけど、詳しくは知らないなあ。俺が知るのとは、とにかくその人がケタ違いに強いつてコトと、性格に難があるってこと、それから二つ名が　涙石翠鵬　っていう、やたらとイケてることくらいかな」

「るいせき、るいせき……あつ」

記憶にひっかかりを覚え、次の瞬間うつむきつきかけていた顔を上げた。その名前は確かに聞き覚えがある　紫皇帝が語っていた、大会において警戒すべき人物として挙げていた名前だった。確かに地下牢がどうかと言っていたような気もするが、そのへんは定かではない。

「うーん、そうになると、名無しは陸経由で行った以上、ピヨピヨは「ギルクアツシュ」「……………ギルクアツシュはなんで飛ばしてるの？」

「用心さ、万が一のための。もしかしたら半島とは別の場所に行ってる可能性も、なきにしもあらずだしよ。ま、あいつの行った経由は間違いなく、陸経由で半島入りだろーけど。あの壁走りができれば、危険性はともかく、長城越えは一番効率いいから。ついでに言うけど、長城がなにが危ないっていうとだ、二重だからその間にひしめく兵士やら戦士やらがうじゃうじゃいてな、もうそこが一級の紛争地域に化してるんだ。そこさえ走り抜ければ、あとはどうにでもなる」

「よく分らないけど、海一番危ないのは、その海の民ってやつ？」

「ま、それ。そもそも海上から行くなんて、そもそも慣れてなけりや相当危険だけどな。だからこそ 淚石翠鵬 シャルダン・ファンの力をお借りするわけ、だがな」

ミュージズ(23) (後書き)

次回から三日にいったぺんの投稿になりそうです。。。。

クークス(23)

海経由で、早朝の時間帯を狙ってある人物の力を借り、非常な紆余曲折を経た上に、どちらかというと、波瀾万丈といった方がよさそうな具合だったが、なんとかリエインと二人で、浜辺の一角に上がりついた。……もつとも途中から船が大破したため、泳ぐようになかったところになってしまったのだが。

唯一、『水面を歩く』という途方もないことをしている隣の女が、大口を開けて笑った。

「これじゃ、濡れ鼠じゃないかねえ。うひゃっひゃ、そんな不自由な身体で半島に赴きかい、坊やたちい？」

戯れ言なんて聞いていられないほど、骨の髄まで染み渡るほど全身が凍えている。何度目かのくしゃみやみが炸裂する。

ちくしょう、おかしいだろ。安定的に水を歩くななんてできるんだよ。そんなもん、内力の拡散方向を全部計算しなくちゃいけないだろ。

まるで安定していない水面に力を込めすぎたら水がはじけ飛ばし、力が少しでも不足していたらたちまちのめり込む。

「いったい何者だよ、この女……」

「うっひゃっひゃ、愉快愉快。せいぜい死なないように頑張りなあ」

「……船、壊れてるじゃないか。あんたの權も、片方真っ二つだし」

「カーッ、坊や、坊やだねえ。甘い甘い、歩いて帰るさ。權なんて武器屋に頼めばいくらでも作ってくれる。なあに、まさか君、私の權が二本だけなんて非常識なこと考えて他のかい？ 肉斬連刃あ、あんたのエモノが二本だからって、そんなこと考えたダメだねえ。

ああ、リエイン。お代はあとでいただくよん」

「感謝します、 涙石翠鵬。 帰りもまた、ご足労お願いしてよろしいでしょうか」

「やだねえ、君と私の仲じゃないかい。うっひゃっひゃ、お代は身体でも頂こうかねえ、肉付きのいいオス二人つてことであえ」

「断る」

「なんなりと」

なんなりと、じゃねえよ。

リエインもリエインで、鉄面皮を崩さないのは恐ろしい。こちらもかなりずぶ濡れなのだが、淡々と内力を発散させて温めているようだ。脅威的な内力である。個人的には循環させるほうが得意なので、ここまで器用なことはできないが、まあ気休め程度にはなるだろう、とまねてみる。

と、ぐにゅつと足がなにか踏みつけた。顔を落とすと、案の定、先ほどなき払った半島の兵士である。やれやれ、と足をどけて辺りを見渡すと、同じような兵士の気絶姿が、無数に散らばっている。中には上半身を海に突っ込んでいる戦士までいる。生きているのだろうか。

クークスとリエイン、二人で総数32の守り手を打ち倒した。これでも少ない方だったらしいが、やはり相応に苦戦した。しかしどう考えても、隣の女ひとりで事足りたはずである。にも関わらず自分だけ浜辺の岩の上にすわって、にやつきながら戦闘を眺めていたのである。性格がひん曲がりすぎだ。

「それでは」

会釈し、さつさと兵士を踏みつけながら浜辺を去るリエイン。しぶしぶ雫をしたたらせながら、後に続いた。もう後ろを振り返るか、と固く心に誓いながら。

浜辺を登ったところで、目に入ったのは、まず地面に突き刺さったおびただしい数の矢であった。

「なんだこれは……」

「タンブラー戦地。かつてここは海産資源で栄える軍閥ガルガンチユアの領地でした。それをシュルレンが漁村ものとも殲滅したのが

数月前……」

「あ、ああ。分かった分かった。なるほど、そうなるところで数百人が殺されたんだな」

矢を一本引き抜いて、物憂げに呟く。胸くそ悪い思いが沸騰する前に、苛立ち混じりにそれを思い切り適当な方向へ投げ捨てた。

そこからしばらく歩いたが、とても地獄と称されるような紛争地帯とは思えぬほど、のどかな 少なくとも表向きは ものだった。丘に登り、家が連なる村落へと下る。

確かに貧村だけど、これくらいなら軍海にだって……

海に出た瞬間から張り詰めていた緊張が、すこしほぐれていくような気がした。

だがどうやら、その考えは少し修正せざるをえないようだった。

まず田畑が見るも無惨に荒廃しきっている。土から飛び出したしなびた葉は、クークスがかった村でもよく見かけた植物と類似のものらしかったが、栄養が不足して満身に成長していないのは一目で明らかだ。

「ここらへんはただでさえ、潮風が近いから作物は育ちにくいのです」

リエインの解説に、なるほどな、と顔をしかめる。本来ならこんな耕作に不向きな場所で田畑を作るなどするはずもないのだろうが、戦乱から命からがら逃れてきた住民の手によるものと考えればおかしくはない。家も木造が大半で、しかもそのほとんどが朽ちている。少し足早になっていたようで、気づけばリエインを追い抜いていた。それともあちらが歩速を落としたのだろうか。

「……あ」

道ばたにうづくまる老婆が目に入った。襷褌を身にまとい、顎と手を振るわせながら口をもごもごと動かす。

「……な……なにか……あ、食べ、物を

……お……」

落ちくぼんだ目がこちらを見上げてくる。声はひどくかすれている。瘦けた頬や疲労の混じる老女の顔にどこか母の顔が重なって、思わず手を懐に突っ込み、干し肉を探りかけていた、そのとき。

老婆の額に銀色の閃光が瞬いた　　と思ったときには、鮮血とともに老婆の身体がゆっくりと後ろへ崩れ落ちる。

「……………なに？」

シワの走った前額に、小型の刃物が突き刺さっていた。当然ながら、一瞬で絶命している。

「肉斬連刃」

背後から、暗い、しかしどこか侮蔑するがごとき声が響いた。

「半島では易々と人に近づくな、近づくときは殺害するとき。鉄則です。　　その老婆の右手を見てください」

「右手……………あっ」

歩み寄り、絶句した。物乞いのために突きだしていた左手と逆の指　　鈍く光る暗器が握られていた。

「どう見ても刺客です。以後、ご注意を。いくらあなたでも、至近距離から心臓に打ち込まれては即死でしょう」

「……………」

自分が憤っているのか、驚いているのか、分からなかった。

ただ　　ただ、この老女を一切の躊躇いもなく殺害せしめたこの少年と、どこか相容れないのではという予感が、はっきりとした確信へと変わった。

リエインは無言で老婆に近寄り、剣をひき抜いた。その柄には、黒羽の紋章が描かれていた。

村を抜けたところで、気配を感じた。手近な木に不意打ちをかけた石をく紅獅乱くではじき飛ばすと、ひとりが落下した。それを引き金に数人が躍り出てきたが、この手の襲撃なら慣れている。慣れているが　　やはり随時、戦闘慣れした猛者どもであり、体術だけはどうにかなる相手ではなさそうだった。リエインも細剣レイピアを抜き

放ち、応戦している。殺せばいいのだろうが、なぜかいつもと違い、躊躇する自分がいた。母を捜しに来た身としては 肉斬連刃 に成りきれないのだろうと、柄で最後のひとりを昏倒させつつ、適当に考える。

「こいつらはどこの兵だ？」

ようやくすべてをなぎ払い、膝を払いながら訊くと、

「半島での急襲は常のことです。どこの所属かは、ほとんど意味がない。このゴミ共も、おそらく雇われの傭兵か、もしくはもと村落の住民か……」

「雑闘衆の兵つてことは？」

言葉につまったようだった。しかしすぐに薄い唇が持ち上げられる。

「彼ら本来の役割というのなら、確かに終わっていますから動く理由もないのですが…… 傭兵部隊として、今の彼らはあまりに謎に包まれていますから、なんとも軽率なことは言えません」「終わっている？ 本来の役割つて、やっぱり半島絡みの複雑な話なのか」

「…… 肉斬連刃。あなたは、いえ、あなたなら、ご存じでしょう。バートロア国の存在は」

「ばー、とろあ？」

なんだ？ 一瞬、本当に一瞬だが、なにか引つかかった。だが、これはなんだ？ 言いにくいが、なにか触れてはいけないものに触れて、危険さに気づき、即座に脳が蓋を閉めきってしまったような、この感覚は。

「…… ご存じないのですか？」

「有名な国なのか？ 少なくとも半島に国があったなんて……」

リエインは半島にある国などと言っていない。

口が開け放たれたまま、顔が固まる。

「バートロアの滅亡は、第十八代カーター国王治世。ローウェン本

国の救援を……どうかしましたか？」

「い、いや。続けてく……続けるな！」

なにを混乱しているのか、自分でも分からなかった。顔が発汗するのが分かる。顔を掌で押さえると、たちまち息が荒くなる。

カーター？ 元ローウェン国王の名前だ。何度も聞いた名だ。『声』からも、ヘルガベルトからも。そう、クーデターで失脚して殺害された、ローウェン国王。この文脈でなら、何度も情報として耳にしたことだ。

しかし どうして『この文脈』でその名が出てくる？ ローウェンの支援？ なんだ、それは。バートロア国？ 半島に国？ そんなものあるわけないだろう、成立した国は四大国だけだ。軍閥領は正式な国境もないし、人民も流動的だ。それがさらに活発な半島で、国なんて成立しえるものか。

「大丈夫ですか。相当、お疲れのようですが」

「違う、違う。疲れてはない……悪い」

「……行ってみますか？ どうせそちらの方向ですし」

「どこへ？」

「かつて穢多が住みし国の跡地へ。半日ほどで到着しますよ。もっとも、そこは半島の中心部、最も危険な場所のひとつではありませんが」

ミュージズ(24)

先へ先へと進む飛影を見つめながら、負傷した左手を気遣いながらも一心不乱に足を進めていると、ピュツと短く口笛が鳴った。途端にギルクアツシユ、もといピヨピヨは方向を転換して、1号のそばにやってくる。

「どうしたのよ」

尋ねると、神妙な顔が空を見上げていた。

「一雨来そうだ。ここらへんで少し休もう」

名無しのことを考えれば、とても真顔で承諾できる提案ではなかったが、足を止めると同時に訪れた肺への圧迫感やら脇腹の痛みを感じていたので、素直に頷いた。それに確かに空では太陽が、薄い灰色雲に飲み込まれて姿を消していた。

はたして、手近な巨木の根元に二人が腰掛けたと思ったら、雨が降り始めた。小雨だが、土がみるみる泥へと変わっていくのが分かる。そんななかでピヨピヨは、木になっていた果実をつついたり、くちばしで挟んだりしていた。寒期に入りかけているこの移行期に、たいした木の実などが存在しない中、その茜色の果実は実に魅惑的だった。

「あれ、食べられるかしら」

ケールマンを出発してから、しばらく食事をしていないため、お腹が痛いほど鳴っている。果実と戯れる鳥の姿を見上げながらぼんやりつぶやくと、すぐに隣の少年が頭を横に振った。

「ありやー、ダフユスの実じゃないか。食ったことはないけど、まじいだろーな、たぶん。あいつは味覚が致命的におかしいんだ。基本的に、苦いものと辛いものにしか手を出さない」

つくづくひねくれた鳥だ。飼い主の性格を反映しているとは思えない。いや、反映しているのだろうか。だが、そもそも飼い主である1号のこと自体、よく知らないのだから判断のしようがない。

自分が知る事実といえば、この少年が暗殺者であることくらいだ。
……暗殺者。

「1号。名無しもあんたと同じ、えっと、暗殺者なの？」

「なんだい、藪から棒に」

「ニクギリレンバ、って有名な通り名なんでしょ？」

あー、と考えあぐねるように、1号は上を向いた。ミューズとしても、なぜこのようなことを尋ねたかは分からないが、おそらく1号以上に多くを知らない名無しについて、少しでも知っておきたかったのだろう。

「アイツは特別だからなあ。うーん、ねーちゃん。軍閥って分かるだろ。軍海仕切ってる、迷惑極まり合い領主様たちさ。アイツは元々その兵で、えーと、一応そのときは、暗殺者をやったとか言ってたっけ」

「……じゃあ、やっぱり人を殺してきたんのね」

「おいおいおいーい、ねーちゃん」
相当落ちこんだ声音に聞こえたのだろう、1号の意図的に強調したような叫び声があがった。

「そりゃー禁句だぜ。確かに殺人はよろしくない。ごもつとも。だから俺やアイツは、そうだな、必要悪ってやつさ」

「必要悪って、ま、まあそれは分かるような気もするけど……」

「もつとも俺と違って、純粹に誰彼かまわず依頼を受けるっていう暗殺者をやった俺にやあ、そういう資格もないかもしれんがね。それにアイツの名誉のために言っておくが、アイツがサリヴァの配下に入った理由はだなあ、やむを得ずで……ありゃ、まずいな」

雨足が徐々に強くなり始めているのを見て、1号がうめくように呟いた。言葉が続きが気にかかったものの、聞きたくないという思いもあつたミューズは、1号が言葉を切って立ち上がり空をちよつと見上げるのを、複雑な思いで見つめていた。

「どうしよつかね。まだアツバースまでは遠いしなー、ここから全力疾走して距離を稼ぐべきか、それとも結構進んだし、消耗を防ぐためにここで一晩休むか。さて、ねーちゃんはどちら？」

「休むくらいなら進むわよ。別に濡れても死ぬわけじゃないしね。それよりここ、半島からどれくらいかかるの？」

「そうだな、軍海は大まかに三つの地域に分類される。まず東は都市や村がそれなりに集中している地域で森もあれば畑もある。続いて中央は、黒海原が広がってるんだが、現在俺たちはここだな。分かるかい？」

「ええ」

「黒海原もまたいくつかの危険地域や安全地帯に分けられる。中心部は村も都市もあんまり多くない。そこからはずれたら、商隊が通過する商業都市は南に結構あるんだが、中心部より上は半島に劣らずの魔境だ。ときどき化け物もでる。」

「んで、俺たちは今、アツバースへの最短距離である中心部を通っている。ここまでは分かるかい」

「分からないわよ！？ え、ちょっと？ じゃあまさかその化け物とやらも出てきておかしくないってことじゃない」

「そりゃ、な」

なにを今さらとばかりに細い肩がすくめられる。

「せいぜいひどくてもく碧壁の巨人>が出るとか、その程度だろ。」

ガリアラ国の国境付近よりはましさ。ねーちゃんは左腕もこともあるし、慣れるまでは俺が戦闘も俺がやるから。さすがにそうそう相手にならない化け物が出ないはずだしなー」

「それはいいけど……でも、今は名無しが進んだ経路をたどってるんでしょ？ 私たちはアツバースでそのナントカさんに会いにくわけだから、中央を突っ切るのが最短なのは分かるけど、どうして名無しは南部から行かなかったのかしら」

半島は、アツバースとロニオヘルトの間から海へ突き出た南部地帯だ。どう考えても非効率なはずなのだが。

「ねーちゃん、賢くなったじゃないか。確かに妙だな、気づかなかった。ってことは、少なくともアイツは半島へ、最短で急いで向かったわけではない？ いや、そもそも本当に半島へ行っていない・・・？」

「もしくは、やっぱりアツバースについて、そのナントカさんの手助けを求めるつもりだったとか？」

「絶対とは言い切れないが、それはないと思うぜ。そうだな、こっちの経路じゃアツバースの前に行き当たるのは・・・」

また不自然に声が途切れる。眉をひそめて見やると、1号の整った顔がぴきぴきと引きつっていった。

「ちよつと、なにか思い出したの？」

「・・・俺はとんでもないアホだ」

「へ？ それは同意するけど、なんでよ」

「・・・アイツが『あの場所』に向かったんならさ、常識的に考えて助力をあおぐに決まってる」

「誰の？」

「俺の」

1号の言葉が耳から脳に届き、理解するに及んで、言葉を失った。「アイツは家に戻ったんだ。この経路は、それしか考えられない！ 基本的にどちらか片方が家を離れていたら、普段はもうひとり家がにいるからよ。たぶん、なら・・・」

ぶつぶつとこぼしながら、木から離れて歩き出す。慌ててついていくと、ピヨピヨも後ろからついてくるのが羽音で分かる。

「ねーちゃん、走るぞ。行けっ！」

口笛とともにピヨピヨが飛び出す。即座に加速し、空中を駆ける鳥をなんとか視界に留めようと、ミュージズも左手をかばって再び走り出す。

強い雨風が正面から襲ってくるのも気にならない。視界が徐々にぼやけていくので、その都度、瞳をぬぐわなければならなかったが、右、左、右、右。複雑に鳥が角度を変えて滑空してゆく。

だが途中から、ミューズは既視感に包まれていた。茂みの位置、荒れて破れた樹皮。気づけば、かつて見たことのある光景があたりを覆っていた。

「やっぱりか！」

いつの間にか立ち止まっていた1号の口から、咆哮が迸った。目の前に突如現れた、ごくごく小さな建物に、無意識のうちに足を止めていた。その全貌をはつきりと目にしたことはない。それでもこの手作り感満載のこのレンガ積みの家が、自分が介抱された場所であると直感した。

「おい、いるか！」

気づけば1号が扉に突撃していた。ミューズも急いで続く。家の中は、やはり予想通りの光景だった。奥に二つの寝台とシーツ、その他ほとんど家具らしきものがない閑散とした室内。

そこは無人だった。

虚ろな音すら響いてきそうな家中へ、1号が先に入る。と、寝台になにか紙片を認めて手に取る。

「戻ったら 半島のおそこへ来てくれ 万ーミューズがいれば

必ず追い返せ』……………ハン、よくやるねー」

「見せてっ」

紙を受け取り、字面を眺めると言いようもなく怒りとも焦りともじれたさともいえぬ入り交じった感情がうずまいていく。どうにか表情を糊塗して紙片を返した先に、1号の意外そうな顔があった。

「ねーちゃん、字が読めるのか」

言われて、戸惑う。字などいったいどこで習ったのだろうか。書くことは確かにできないはずだが……………。

いや、霞の向こうに消えた記憶のなかに、その答えがあるのは分かっている。だがどうしても一歩踏み出して、思いだそうとする勇氣がなく、すぐに記憶の蔵に蓋をする。

「そんなことはどうでもいいわよ。これで名無しが半島に行ったことは確定じゃない。急ぎましょう」

「う、うん」

「なによ、まさかあんた、ここにきて私を置いていくなんて言うんじゃないでしょうね」

「い、いやいやいや、そういうわけじゃないんだがー、ちょっとアイツがあの場合に向かったら、さっすがに危険かなー、と思っただけ。まあ、予想してなかったと言やあ、もちろんウソだけど」

「あの場所？ 意味深なこと言っでないで、白状しなさいよ。半島のどこよ」

半ばやけっぱちになってすごんでみせると、大げさに諸手が挙げられた。

「べつに、そう突っかからないでくれよ。散々言ってるとおり、雑闘衆の本拠地のことさ。」

ま、もっとも、ここはその中でも『六稜郭処』のことを言ってるのかもしれないがね」

クークス（24）

「六稜郭処」

森の木々が途切れた場所に屹立している外壁と見やり、あれがそうか、とクークスは大きく嘆息した。同じく森に生い茂る茂みから、姿を隠して遠目に望んでいるだけだが、あまりの巨大さに目がくらみそつだ。

その名の通り正六角形に組まれた城郭が、現在はほとんど見る影もなくあちこちが崩れている。それでもあちこちに蔦が這い回り、無数の木々が壁の周囲に立ち並ぶ光景は、圧巻のひとことだ。

破壊の跡からも相当激しい戦闘がこの場所であったことはうかがい知れるが、それ以上に瓦礫の向こうに垣間見える、なにかの宮殿が半壊したような光景の方がこの場所の異常さを物語っていた。おそらく元王宮だったのであるう建造物は、かつてあそこに存在した‘国’の要人たちが住まう場所であったのだろうが、そのことを示す華麗な装飾がかかるうじて認識できるくらいの壊れっぷりである。

「あの場所が、かつてのバートロア国そのものでもあったわけだな」「国、というにはあまりに規模は小さいですが、確かに当時はローウェン一国の支援により成立した‘国’でした。他の三大国がなにを考えていたのかは不明ですが、すくなくともアツバースやロニオヘルトはいい顔をしなかつたでしょうね」

当然だろう。自国が狙っている領土に、東端の国が支援の末に『建国』を果たすとなれば、その影響力は計り知れない。

リエインが崩れた壁に目をやったまま、ひっそりと呟く。

「あの国は大半の住人が穢多の民により構成されていました。ローウェンにより認められ、ローウェンにより存続し、ローウェンにより滅ぼされました」

穢多の住まう国。そんな楽園とも地獄とも言えぬような場所が、この大陸のどこかにあったと、母の昔語りで聞かされた記憶は、お

ぼろげながら確かにあった。まさかそれが半島にあるとは、予想だにできなかったが。

「ローウェンは支援を打ち切った、ということか？」

「端的には。ただそれは同時に、ローウェンにより五十年以上支えられていた雑闘衆の滅亡にも繋がりました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

数度の襲撃を経ながらの道すがらリエインの行った説明が頭を反芻する。雑闘衆の本来の役割は、あまりに戦乱の絶えないこの地域において、この弱小国を現地支援すること。

彼はそう語った。

「雑闘衆は元来ローウェンの配下兵の中から選りすぐりの人間により構成された戦闘集団だったようです。頂点に立つ頭領は、他の国では元帥にあたる手練れが採用されたと言いますし、その下の七人の幹部である七大公も・・・・・・・・」

「詳しいんだな」

さすがに一度半島へ潜入しただけあって、諸事情に通じていると、思っただけの何気ない一言だったが、なぜかリエインは語りを止め、虚空で視線をさまよせて、

「ある意味、私は当事者ですからね」

言葉の意味がくめず反応に困ったが、そうしているうちに再び唇が持ち上がる。

「現在、あそこに拠点を置くのが、雑闘衆ということですよ。」

最初の繰り返しになります、肉斬連刃。あなたがおっしゃった女性によく似た風貌の方を確認したのは、あの場所へと続く道でのことです。だからといって、あそこにその女性がいるという確証は無いのですが、候補としては有力でしょう」

ああ、と実に情けないことだが、ここへ訪れた本意を今さら思い出し、表情を引き締めた。仮にこの少年が仕入れた情報が正しければ、あの壁の向こうの空間に母さんがいる可能性は高いのだろう。それだけで頭が熱を帯びてくるのが分かる。

「リエイン、あの場所へ潜入が成功する可能性は？」

「ほぼ皆無です。あの壁は事実上、ひとりの七大公によって守られています。彼を打ち倒すことだけでも骨ですし、運よく侵入できても、異変を察した他の大公や配下兵が殺到するでしょう。これだけ崩れ落ちたあの壁や建物が、実際は遠い昔のバートロアへの軍閥侵攻時から変わっていないと言え、どれほどあそこが攻略不可能かはお分かりでしょう」

ぞつとした。リエインは、あそこはこの戦乱の地で十数年一度も攻められることも落とされることもなかった、と告げているのだ。

「あそここの壁を守っている大公というのは？　そもそもその七人の實力は？」

さらに堰を切ったように尋ねるクークスに、相手は怪訝そうない警をくれた。

「……肉斬連刃、まさかとは思いますが、単騎で突入するなど言うつもりではないでしょうね」

もちろん返す言葉などなかった。沈黙を肯定と受け取ったらしく、まことに珍しいことに大仰なため息混じりの声が少年の口から流れ出た。

「あなたがそこまで楽観的な人間だとは思いませんでした。忠告しますが、止めはしませんけどね。」

いいですか、純粹にあそこにいる七大公は『人外』です。そろいもそろって、常識も法則も固定観念も、なにもかもが通用しない、ただの化け物です。あなたの才気と怪物ぶりは耳に及んでおりませんが、それでもあなたは『人間』だ。彼らは人間から外れた存在です。その能力も、精神も、肉体も　なにもかも

「……それこそお前らしくない。『人外』なんてのはサリヴァンの配下にもごまんといたさ。確かにそいつらはある意味、ひどく逸脱していた。だからそんな呼称を得ていたわけだが、それでもあいつらは『人外らしい人間』だったただけだ」

「ですから」

いつそう語調が強まる。気づけば、すぐ隣の茂みから出ていた顔が、こちらを凝視していた。

「そういう固定観念や常識は捨ててください、と言っているのです。サリヴァの配下であるうとも、確かに彼らは種の上では人間に違いありません。軍閥にも、少なくともヒトとしての誇りはある。自らの配下に、まさか黒海原からそろえてきた化け物を取り込むようなことはしないでしよう。しかし、あそこの頭領にそんな誇り思慮はない。彼が望むのは、純粋に『最強の』『一敗地に塗れる』ことすらありえぬ、配下兵です。」

もう一度言います、彼らは文字どおり、生粋の人外なのです」

「そ、そういう、意味かよ……」

さすがに度肝を抜いて息をつまらせる。乾いた声が続く。

「ある者は人間との混血、ある者はただの化け物ですが、まっとうな人間というのはそれこそ彼らを束ねる頭領 盗壊士 だけでしよう」

最悪の集団ですよ、と唾棄するかのごとく、最後にリエインは付け加えた。

一度、自分を雑闘衆へと勧誘した盗つ人の顔が頭に浮かぶ。すなわち自分には、あの集団に入るだけの『人外性』とでも言うべきものがあつたということだろうか。……いや、リエインの言葉を聞くに、自分の力は明らかに七大公とやらに劣るらしい。

ならば何故だ？ 今、ヤツはどこにいる？ 俺たちがこうしていることすら、察知されているというのか？ ベルジャツクはなにを企んでいるんだ？

「ただこの場所は少なくともかなり離れていますし、存在は発覚していないでしょう。ご安心してください。といっても、彼らがまたあらたに呼びこんだ化け物の力によって、察知されている危険がないとは言いませんがね」

不安げにしていたのを悟ったわけでもないだろうが、そんなことを言われた。短く生返事をして、なおも思考を展開していると、不

意にガサガサツと葉擦れの音が聞こえた。

「誰だ」

重なつた声に、思わず顔を見合わせてしまう。その間も背後では木々の葉が揺れる音は途切れることがない。たちまち二人とも真剣な顔になり、緊張をみなぎらせる。

「あつ、まずいな……」

呟いたのは、リエインの方だった。なにが、と口にしかけたとき、音源の物体がすつと彼の肩に舞い降りてきた。

クークスは半島に入りもう何度目か、またも呆気に取られることとなった。

「な……と、鳥……?」

「ギルクアッシュです。任務の邪魔になると思ったので、<馬の牙>の本部に置いてきたのですが、どうやら来てしまった……よう、で……」

鳥の足に括りつけられていた紙片を手に取りながら、淡々と説明していたその表情が紙を開いた瞬間、凍りついた。

「……ハウル、ラウド、クエン、ガイナー、タッカー……」

だがその異変も、独白が終わるまでのことだった。平静の状態に戻ると、彼は紙片を折りたたみ懐に収めた。

「どうかしたのか？」

「いえ、別段なにも」

返事はごく簡潔だった。

名無しが穢多の民であると聞かされたのは、アツバースへ向かう途上のことだった。1号が六稜郭処について注釈を加えている最中その内容も興味深いものだったが、穢多の民に触れたことから派生したことだった。

「じゃあ差別とか、されてたんだ……」

「そうだろうな。あまり過去については話したがらなかったから、よく知らないけど。そっか、ねーちゃん、壺のせいでアイツの目が見えなかったのか」

穢多の識別をする唯一の手がかりが、瞳の色であるから、彼が賤民であることが分からなかったのも無理はない。問題は、確かに自分がそうした賤民と交流を持っていた『よくな気がする』というこの感覚だ。ケールマンの酒場で名無しが語ったことが、頭に立ち現れ、どこか胸がくるまれるような気持ちになる。

「……つまり六稜郭処つてのはそういう場所ってことだー。穢多の国がかつて存在して、しかし今はそれを護衛していたどこぞの傭兵集団の住処となっている」

締めくくり、1号は前に向けた目をギョロリ、と動かした。

「おい、ねーちゃん。本当に体は大丈夫なのか？ いくら一晩休んだからって、朝からずっと走りっぱなしだ。一度休もう」

「いいっ、もうすぐそこなんですよ、関所」

「ん……ま、そうか。でも腹が減ったろ、なにか捕まえよう……って、さっきからなにしてるんだ？」

ときどき跳躍して、高い枝近くに広く壺を伸しているのを奇妙に思っていたのだろう。その動作をたった今終えたミューズは、近づいてきた1号に壺の口をのぞかせた。ちなみに細い花瓶の方は、あまりに持ちにくいいため布袋に収めて、袋の口を縛り腰から吊している。

興味深げに中をのぞいたかと思うと。

「く、蜘蛛オ!？」

「さつきから壺を引っかけて、蜘蛛の巣から取ってたの。ちよつと糸もまきこんだけど、結構たまつたでしょ」

「冗談だろ? なににするんだよこんなもの……だ、だいたいこれって……」

最後のささやきに近い独白が曖昧な語尾に溶ける。小首を傾げて、
「もちろん相手にぶつけてひるませるのよ。ほとんど女郎蜘蛛ばかりだけど、なに、まさかアンタ、蜘蛛苦手なの?」

「いや、昔はときどき食つてた……けど……」
顔を上げ、まじまじとこちらを凝視してくる。

「これ、女郎蜘蛛、だよな」

「ええ。それがどうかした? 毒は弱いけど、これだけいればちよつとした恐怖でしょ」

「女郎、蜘蛛……だぜ?」

ますます分からない。なぜこんなに1号は啞然とした顔をしているだろう。まるでこれまで信じ切っていた常識に裏切られたような顔、とでも言うべきか。

「なによ、そりゃあ私も毒蜘蛛とかがいいと思つたけど、あんまりえり好みもできないじゃない。急ぎましよう、別に蜘蛛を抱えてたからって関所通れないってわけでもないでしょ?」

「ガルシユ級の毒蜘蛛じゃなきゃ、別に調べられても文句は言われないだらうけど……もう一度訊く。この蜘蛛の名前は?」

「じよ、じよろう、ぐも?」

「……分かつた。行こう」

さつと振り向き、それ以上1号は関所を通過して入国するまで無言を貫いていた。

本当に、わけがわからない。

現在、小雨が降って霧もうつすらと出ている。視界が不都合なこ

とこの上ない。アツバースの首都ホラリウスのナントカという広場には雑多な人であふれているが、その大多数がそろそろ薄闇がたれ込めてきた現在、豪華な衣装を着こんだ貴婦人たちだった。金ぴかの四輪馬車が、広場に入ってきては、貴婦人をはき出して去っていく。

そんななかで、いくら人が多いといえど、雨水と跳ねた泥で汚れた乞食のごとき身なりはいかにも目立つため、1号の後に従って広場の隅っこを進んでいた。

「……………で、問題があるとしたら、俺があの子の収容されている地下牢の構造その他にまるで無知なことだな。さて、困ったもんだ。あんまりイイ噂は聞かないけど、まあ少なくとも六稜郭処ほどの防備性があるわけでもないだろー」

「そんなに、六稜郭処って嚴重なの？」

「一見スカスカだけどね。実際はとんでもないぜ。あそこを無傷で突破できるやつなんて紫皇帝、盗壊士、涙石翠鵬くらいじゃないかねー」

あ、やっぱりあのお爺さんって有名人なんだ、と密かに合点をすすめる。

「名無しはどうなの？」

「まず正攻法でいけば無理。前回の侵入時もそうだったけど。そのへんはアイツもそろそろ弁えてると思いたいだかねー……………おっ、見えたぞ。あれがアツバースの牢宮だ。もつとも、あそこに収監されるのは重罪人だけらしいがな」

はっとして立ち止まり、1号が示す指の先、舞踏場のちょうど反対側へ目をやると、やや遠目に闇の向こうに沈む漆黒の建物が飛びこんでくる。

物々しい、という単語が生まれる。

じつと牢宮を見つめるミューズの横顔を見ていた1号は、すぐにしっかしなーと呑気そうだが感歎したような声をしぼり出した。

「正直ねーちゃん、持久力だけならたぶん俺よりも上だぜ。左手も

負傷してゐるつてのによー、よくこれだけ走り続けられたもんだ」

そうではない。むしろ自分の身体が限界にまで達するほど困憊していることは、ミュージズも悟っていた。今にも膝から力が抜けて卒倒しそうなをこうして踏ん張っていられるのは、ひとえに脳裏をちらつく、未だ見ぬ少年の顔だった。

くしゅん、と大きくくしゃみが炸裂する。拍子に全身がぐっしょりと濡れていることに今さら気づいた。慌てて内力を循環させ直す。少し疲れを意識しただけでこのザマだ。さすがにまた休んだ方がいいかもしれない。

「今、名無しはどのへんにいると思う？」

「確実に半島には入ってる。けれどその後、直接に六稜郭処へ向かったのか、俺を待つてどこかで待機しているのかは、分からないね。可能性から行けば、3・7くらいか」

待つて、と誓わずにはいられなかった。絶対にあんたひとりだけで行かせないから。連れ戻すにしろ、一緒に突入するにしろ。単騎で、なんてさせない。

「じゃ、さっそくそのナントカさんのところに行きましょう」

右手の壺をカタカタ鳴らしながら、勢い込んで一歩踏み出した肩をむんずと1号の手がつかむ。

「わあ待て待て！ 似たもの夫婦かい、せつかちだな。熱くなるのはいいけどさ、深く考えずにつっこむのは止めてもらいたいぜ」

すねた顔で振り返ると、1号は精悍な顔を牢宮へ向けていた。

「最低限知っておくべきことはあそこの構造と、涙石翠鵬のいる場所。できれば看守の巡回や有無なんかもな。ま、噂じゃ地下牢って話だから少なくとも今日に見えているところじゃーなーだろうがな」

「噂って、そんないい加減でいいの？」

「きちんと調べた情報だぜ。信憑性はだいじょうぶだ」
ホントかしら、と疑わしげな目つきを試みるが、それをまたも肩をすくめて流し　癖だろうか　1号はお互いの服を指さして言った。

「とりあえず、服を買おうぜ。こんな濡れ鼠じゃ目立つし、さすがに走りにくい」

くしゅ、くしゅん！ と数度目のくしゃみが飛び出して、盛大に唾が1号の顔に降りかかった。

劇団で稼いだ給金で買えるような安物が、首都近辺の店にあるはずもなく、だからといって1号からお金を借りるのもためらわれる。結局、あちこちを見て回った末に、二人とも灰色がかった麻布の服を買った。動きやすさを重視した衣服にしたつもりだが、やっぱり少し重い。給金はすっからかんだが、袋が軽くなっただけからいいでしょう、と涙を呑む。

「このくらいのモンが見つかっただけでもいいとすつか」

もそもそと店の裏手で着替えを済まし、またざわめきと談笑のさざめく広場へ戻っていると、ぼんと思いついたように手が打たれた。ちなみに左手をくるんでいた巻軸帯は、店でもらった布きれを細く切ってまき直しておく。四本指も固定し直す。

「そーそー、先に言っておくが、ここでねーちゃんがやろうとしていることは、立派な犯罪だ。だから発覚したら、すべての大国にまはじきにされることになるけど、それでもいいかい？」

今度はミュージズの方がなにを今さら、と目を丸くする番だった。

「どうせ女優の夢なんて今はどうでもいいし、軍海で過ごすことに後悔はないわよ」

アイツと一緒にならね 胸の中で、ひとこと付け加えながら応じると、

「その心意気やよし」

ぼん、と両肩に載せてくる手は温かかった。

「んじゃ、今から最初の修羅場だ。頑張ろうぜ」

「ええ！」

「とは言っても、最初に働くのは俺だけだな」

「 ってええ！？ どういうことよ！」

食ってかかろうとするが、軽く制される。さすがに慣れたらしい。「先に偵察してくるんだよ。こういうのはねーちゃんやアイツより、やっぱり俺の領分だからさ。得意なんだぜ、気配殺し。もっともアイツがいりゃあ、侵入なんてせずとも内部構造は把握できるだろうけどね……」

「いつ戻ってくるの？」

「なるべく早く済ませる。全体見て回る……のは無理だよな。とにかく地下に忍び込んで、脱出できる経路がないか探してみるだけさ。危険なことはないぜ」

大国の兵が守る牢宮に対して不遜なことを言う1号。こういうとき、あふれるような自信を頼りに思う一方、やはり不安はぬぐえない。どうかこうにか、頭をひねって妙案をはじき出そうとしたが、そのうちいつたい自分がなにに困惑しているのか分からなくなり、仕方なくこれだけ告げた。

「分かった。信じてるけど、絶対に無茶しないでね」

口上にのせながら、アリーの気持ちがなんとなく察せられた気がした。

「了解。そうそう、ギルクアッシュは連れて行けない。さすがに目立つからな。世話、頼むぜ」

言葉を聞き取ったように、真上にいた鳥は移動しこちらへやってきた。

まだ気遣わしそうな顔をしていたのを見て取ったのだろう、殊の外ひょうきんな笑みが顔面に浮かんだ。

「だいじょーぶ。ホントにこういうのはく馬の牙>時代に何度もやったから。一度なんてガリアラの北界宮殿に忍び込んで、その女王と逢瀬を重ねたことだってあるんだからよー」

あ、それから。男に声かけられてもホイホイついていつちやダメだぜ？ ねーちゃんカワイイ面してるし、なによりこの国の男はかなり強引に女を嫁取るって聞いたからよ。そいじゃー！

「なっ……あ、ちよつと……」

最後の一言、二言に頬がカアと熱くなり、反射的に言い返そうとしたときには、もう1号は遙か前方を進んでいた。さすがに絶技の足運びである。

仕方ない、不満が鬱屈しているが、とにかく今はここはおとなしくしていよう。せいぜい怪しまれぬようミュージズは広場の隅に寄ると、石段に腰を下ろして、目の前を流れていく貴婦人たちに目をやった。

ツヤツヤとしたフープスカートに、青水晶やら緑石などの宝飾品うふふおほほというお上品な会話は、庶民にとって聞き取ることもできない。というか、東と西では言葉がおおきく違っているから当然だが。

彼らの行く先は、どうやら広場の正面にある宮殿らしかった。断片だけを聞き取る限り、どうやらそこでみなで踊って、うふふきやははとじやれ合うらしい。建造物はそこまで大きくないが、今でも無数の人々をのみ込み続けている。おそらく奥に回廊かなにかで別の場所に繋がっているのだろう。とするとこれは玄関にすぎないわけだ。

あまりの巨大さに見とれつつも、こんなことをしている場合ではない、と内力を巡らせて全身の各部位や経脈を調節し、内功を鍛える。内功は閑静な場所で行うのが普通だが、すっと目を閉ざすとたちまちあたりの雑踏はそよ風のごとく気にならなくなった。

そのままの姿勢でどれくらい、時が経っただろうか　少し体の感覚が麻痺に近いものとなったため、一息つけようとしたとき。

突然、ワツとという怒号らしきものが耳をつんざいた。

飛び上がって広場の中央を見ると、二人の男が激しく口論をしている最中だった。どちらも負けじと顔を赤くして、噛みつかんばかりの勢いで分かるような分らないような言葉を並び立てている。

それぞれの連れの女が当惑したように、男　おそらく夫か

の肩に手を置いて諫めているが、聞く耳を持たないとはこのことだ。広場の男女の群れも、何事もないかのように去る者から、立ち止ま

り露骨に見物気分を醸し出している人間までいる

右の、やや若めの男が叫ぶ。

「×××すむ話でしょう××！」

「それは××への反逆×××！」

「そんなものより××××××です！」

「そんなものだ！？ 貴様、今なんと言った！」

「そんなもの！ と言ったのです。××で古めかしい態度で、××
がままなりますか！」

「こ、この……よ、よくも侮辱したな！」

最後の言葉だけは、一際大きな怒声であり、かつ自分の知る言葉にほぼ合致していたため、内容の推測がついた。どうやら左のやや髪が薄い老年の我慢が限界に達したらしく、顔をわなわなと震わせて と思ったときには、こんな言葉が広場に響き渡っていた。

「決闘だ！ 剣を抜け、アルバレノフ！」

……ええーっ？

クークス(25)

六稜郭処を前にした時点で、クークスの脳裏にいくつかが疑問がよぎっていた。

ひとつは母の所在のこと。仮にリエインの目撃情報が真実だとし、では何故母はそのようなところへ連行されたのか。もしくは、考えたくないことだが、自発的に赴いたのか？

ふたつめは、雑闘衆の役割。話では、雑闘衆は当初はローウエンの手駒であつたらしく、その任務はバートロア国の現地における軍事や物資の支援。ならばかつて、雑闘衆の頭領であるキ・サンが穢多狩りを行っていたのは何故か？ 本当に私憤によるものなのか？そして今現在は、表向きは傭兵集団と成っているらしいが、本当にそれだけか？

最後に、ケーティと同じくずっと頭に染みついていた男の所在。ウォルガの居場所だ。また衆撃隊を率いていた男も、あそこにいるのだろうか。

黙考がそこまでおよんだとき。

「肉斬連刃」

「ん………なんだ？」

「いえ、実に未練がましそうな顔をしていたので、突入ことのないよう忠告しようと思っただけです。あくまで我々がここにいるのは、あなたが捜すよう求めた人と、あそこにいるであろう人物とが合致しているか確かめるため。決して自殺するような真似はなさらないように」

「分かってるよ、聞き飽きた」

大仰に肩をすくめてみせる。それでもまだ未練を見せている自分を察してか、先刻から冷静なこの男の文句は止まることがない。ため息をついてみせ、クークスはふと思いついた。

そういえば、ジャルミスは、すべて後のことはリエインに指

示を出していると言っていたが、あれはなんのことだ？

気がかりになり尋ねてみると、ギロリと動いた瞳がこちらを射た。
「任務のことを話せと？」

「言えるところまででいい。俺の頼んだ人捜しをやってくれたのは感謝してるけど、いったいそれ以外にジャルミスに何を依頼されたんだ？」

さしもの鉄面皮も、わずかに迷った素振りを見せた。ちらりと顔がこちらを向く。だがすぐに髪が揺れ、瞳は前方へ戻された。

「後々あなたにも協力してもらうことですから、今話しておきましょう。実を言えば『ある場所』にいる『あるひとりの人物』を殺害するよう」

「お前、まったく教えるつもりないな」
身構えたのがバカみたいじゃないか。

「それにしたって、半島で暗殺依頼か。あの人もいろいろ企んでいるみたいだな」

バリバリと頭を掻いてばやいてみせると、

「半島？ なんのことです？」

「は？」

「え？」

互いに顔を見合わせる。交錯する視線に堪えきれず先に顔をそむけたのは、意外にもリエインの方だった。

「あ……なるほど、先ほどの質問というのは『半島で』頼まれたことでしたか。それなら、特にありませんよ。先ほど申したとおり私が受けた指示というのは、半島から戻った後のことですから。ジャルミス様は、半島に出た後に私やあなたでその暗殺をこなして欲しいと言っているのですよ。そちらの詳細は、すべてが終わってからということだ」

確かに、ジャルミスは『あとのこと』をリエインに指示していると言ったが、『半島で』のこと、とは言っていないかった。

暗殺任務ね……なんだか強引に巻き込まれた感もあ

るけど、そういう約束だったからしょうがないか。

「ですから」と少し強い語調で、「そちらの暗殺で大活躍するであろうあなたをここで死なせることはできないのですよ、肉斬連刃」「つまり俺が無理矢理あそこへ侵入しようとしたら、お前は力尽くで止めるんだな？」

軽い首肯がなされた。

やれやれ、と諦観まじりに頭をふりクークスは建物から視線を剥がして森の方に顔を向けながらその場に腰を下ろした。寒期の初めということ、枝についた葉もほとんど変色しきっており、今も絶えず褐色の葉を一枚一枚落とし続けていた。あそ一月もすれば、大部分の立木は裸となるだろう。

あそこにいる人物が本当に母であるという確証を持ってない現状で、侵入を試みることがどれだけ危険で滑稽かはよく理解できるから、反駁しようがない。さらに周辺情報を集める必要があるだろう。

おおかた俺を任務にまきこんだ理由は、ジャルミスの下にいたということを確認する意味もあるんだろうな。信用を得るためには必要な代償か。なら、コイツはそっちの暗殺任務じゃ見張り役に徹するだけなのかもしれん。せいぜい半島で頑張ってもらおうとするか……

頭になにか引っかけかりを覚えたのは、そのときだった。

待てよ、俺がここへ来た目的というのは、言うまでもなくリエインが捜し当てた人間の本人確認のためだ。それは言われるまでもなかったし、深く考えもしなかった。一方リエインは発見者という理由、それに半島入りの経験があるという理由で……

「お前　半島入りの経験が一回あるって言ったよな。てつきり一度つて、人捜しより前につて意味かと思ってたが、まさか……
・捜しに行ったとき、だけなのか？」

「……」

額に手を当て、六稜郭処の方に視線を合わせたまま、ぶつぶつとリエインは何事かを呟いている。どうやら鼓膜に届いていないらしい

い。姿勢を戻し、強く肩をつかむ。

「おい、お前が半島へ入ったのって……」

「え？ ええ、そのとおりです。その一度です」

「ひとりですか？」

「はい。前も言いませんでしたか？」

こちらが黙りに沈む間、コイツもなにか考え事していたためか、少し焦れたような返事がなされた。それを奇妙に思いながらも、それ以上の疑問が頭を埋め尽くしている。今はそちらの解決だ。

待て待て。仮にコイツが『そう』だとしたら不自然だ。……

……七日と言ったな。まず……俺のいた村のことは伝え
たから、そこまで……いや！ そもそも今回だって、半島
入るだけで二日は要したんだぞ。捜し人のときが初めてだとして、
海経路で入島したと言ったな……コイツひとりなら……

回転する思考は、ひとつの矛盾にたどり着いた。

『あれ』が二日や三日で終わるもんか！

「偵察時から変わっていないければ、ですが」

それまで黙っていたリエインがおもむろに口を開いたので、そこで思考はかき乱されてしまった。

「あそこはひとりの大公によって守られています」

「……その情報はいつたいどうやって知った
？」

「身を以て知りました。一度、干戈を交えて、命からがらに逃げ延びたのですよ。もっとも大公本人は見えていませんが、その愛玩動物たちを相手に四苦八苦ししました」

その返事に、またしても別の疑問符が浮かんだ。

「分からないな。お前みたいな慎重なヤツが飛び出していったのか？」

「……」

バツの悪そうになった顔のまなじりが下がる。

「お恥ずかしながら、少しばかり頭に血が上りまして……
ですから現に、こうして戒めているのですが」

実体験だった、というわけか。感情をほとんどあらわにしない能
面な彼の背中を突き飛ばしたものが、この壁の向こうにあるとい
うのだろうか。

コイツもなにか別の目的があるのか？ さつきから俺が考
えていることはやっぱり……。

重ねて言葉をつなげるべきか、迷いかけたときだった。

強いめまいがした。

一瞬、姿勢が前のめりに崩れる。

隣から怪訝な視線が突き刺さるのが分かった。

「どうかしま……」

リエインが言葉を失ったのは、クークスの眼がこれでもかと思
われていたからだろう。姿勢を保とうと足に力を込めた瞬間、鋭
い痛みが頭を貫いた。

「くっ……」

割れんばかりの激痛に歯を食いしばりながら、なおも壁に貼り
ついてたその視界に、ひとつのありえざる光景が立ち現れ、クー
クスは声を失った。

間違いなく、外壁に遮られて本来なら見ることが叶わぬ光景だ
った。敷地内と思しき映像。寂れた建物が目の前にある。と、建物の
奥へ、さらに視線は突き抜けていた。動く数人の人影。いずれも軽
い甲冑を身につけている。

またか！ くそ、頭が霞んでくる……なんだこれは！
困惑しながらも、さらに眼球を張り出す。建物内に母と思しき姿
はない。

本命は、ならばさらに向こうへそびえる宮殿だろう。そう思い、
しっかりとこめかみに力を込めて、巨大な建造物へと焦点を合わせ
るが、そこから先は視界が開けない。

頭の熱さと痛烈な刺激に眉をしかめながらも、無意識に一步踏み

出していた。茂みが音を立てて揺れる。後ろから小さく制止の声が耳に入るが、すぐに左から抜けた。眼球を張り出し、妨げられ見えざる向こう側を、なんとか目に焼き付けようとする。

だが視えない。さらに一步、一步。宮殿の外壁を通過できない。もつと近づけば、あるいはその思いが、勝手に足を動かした。

「肉斬連刃。そんなに進まれては気取られ・・・」

珍しく動揺の色を帯びた声に、我に返った。気づけば、すっかり体は茂みから飛び出している。状況を把握するや、急いで身を引かざるえをえなかった。

「悪い、ちよつと・・・」

「危ないッ！」

突如の叫び声。リエインの体が飛び出す。とっさに横へ回避した直後、もともと彼がいた空間を細剣が貫いていた。剣先が貫いたのは、まがまがしい緑青色の斑を体に宿した四足動物の肉体だった。

「なにっ・・・」

「気づかれました！ 第五大公です！」

叫びながら、細剣をひき抜きすぐに頭へ突き刺しなおす。クークスも背中から愛刀を持ち、得体の知れないケモノの首へ叩きつけようとし。

背後の音に、腕が別の方向へ動いた。二つの巨剣をひねり直し、後ろへ思い切り振り切った。二重のとどろきが、森へと響き渡った。「第五大公だと？」

すぐに細剣使いの傍らへ跳び、背中合わせになり木々が広がる森の方角を確認する。半ば予想はしていたが、度肝を抜くような光景が目の前に広がっていた。

信じられないほどの数のケモノが、二人の周囲に群れ集っていた。巨大な怪鳥ウアツシャから、なめらかな動きで歩を詰めてくるフォルドラ、果ては全てを押しつぶしてしまいそうな印象を抱かせる鈍重なゴーバスまで、まさに魑魅魍魎のごとき様相である。しかもほとんどの、名前すらも出てこないような珍種珍獣ばかりだ。

幾重もの齒軋りや重いうなり声が、風に乗って聞こえてくる。

「ヤツは簡単に言えば珍獣使い、とでも言いましようか。六 稜郭 処の壁はヤツの隷属下である無数のトリやネズミによって随時見張られて居るのです。だからこそ不用意に近づくべきではなかったのですが……」

明らかに不満げな色のセリフに、悪いと応じる。半島に慣れていないための失態は、これで何回目だろう、と後悔がにじんだ。

「上へは飛べないな。こいつらをすべて殺す必要があるってことか？」

「それだけではすみません。見張りにとって、こんなものは時間稼ぎにすぎない。すぐにでも他の幹部が来ます。そうすれば、少なくとも愉快なことにならないのはおわかりでしょう」

「なら……どうする？」

「一点集中で突破します。この数ならあなたの大剣の方が有利ですから、あなたが主に道を切り開いてください。私がおあなたの背を守る。それでよいでッ！」

上空から恐ろしいほど巨大なくちばしを光らせ、怪鳥がこちら目がけて急降下する。リエインの肩にいたギルクアッシュが応戦するが、名も知らぬ怪鳥の巨大さに比べたらギルクアッシュはヒヨコのようなものだ。

まるでその降下が合図だったかともいうように。

十分に引き絞った弓から放たれた矢のごとく、ケモノたちは全身をおののかせて地に散る枝を踏み折る音とともに駆けだした。

「では、そちらはお任せしました」

言うが早いや、リエインは細剣を振りかざすとケモノの群れの中へ突入した。

クークス(25) (後書き)

二日も遅れて申し訳ありませんでした。

ミューズ(26)

噂だけでなら、どこか遠いところの話として聞いたことがあったが、実際に貴族同士の決闘を見るのは初めてだった。

まず二人は暗黙の合意でもあるかのように、広場の隅へとごく自然に移動した。つまるところ、ミューズのすぐ近くにやってきたのだ。だが冷静な行動とは裏腹に、頭に血が上っていることは確かなようだった。後ろで必死に止めようとするそれぞれの貴婦人たちの声すら入っていない模様。

両者の剣がすらり、と抜かれる。よく分からないが、実用というより装飾目的の剣といったほうがよいのでは、というほどに華麗な装飾が施されている。

二つの憤然とした面持ちが、真剣そのものの表情に変わったのは直後のことだった。息を呑む。この顔が、本気で殺し合いをしようという者の顔である。自分の命が危うくなりうる状況では、たとえどれだけ我を見失っていても、こういう表情になることはなぜかよく分かった。

初老の男性に付き従っていた貴婦人の方が、決死の表情で二人の間に割り込んだ。こちらもやや老境に差しかかっている風の人物だ。大声を上げ、無理にでも落ち着かせようとしていることはよく理解できる。

「××××××！ ××なのですか！」

「どけ！ ××の不遜を××××××なければならぬのだ！」

男が返し、乱暴に女性を脇へどける。もう片方の男の妻らしき人物も、口論の末に退けられている。

「ではアルバレノフよ！ ××ではないか！」

まずい、と今さらに直観した。このまま行けば死人は出なくとも、必ずどちらかが手傷を負ってしまうことは避けられない。さすがにそんなもの、自分の目の前で見せられるのはまっぴらゴメンだ。

しかし二つの剣は既に抜かれている。止めるなら今しかないのか。しかし割ってはいると、先ほどの女性陣のごとく、一蹴されるのが目に見えている。ならば、どうすれば。

「そうだ、剣を、折れば……いや、せめて手から落とすことくらいできれば！」

決断すると、ミューズは右手で丸壺を取った。アライお手製の壺の強度を信じつつも、万が一壺が破損することに備えて、ひとつしか使うべきではあるまい。そうすると、二つの剣がぶつかるその瞬間を狙うほかない。

あたりではいつものまにやら、群衆が出来ていた。紳士風の身なりの男から、豪商らしき人間、果ては舞踏場の方へと向かっていたはずの、金鎖やら宝石まみれの婦人たちまでも足を止めている。ほとんどの者は、おもしろがっていることがありありと伺える表情で、決闘を眺めている。噂話の好きな富裕層からすれば、この手の「見せ物」は日常を彩る一要素でしかないのだろう。いつのまにか立会人、審判役である介添人まで着く始末だ。

喝采を受けて、剣を携えた二人は後ろに六歩下がった。内容不明な発声。と、ビュツと剣が斜め下から体の正面へに切り上げられる。ピンと立った刃が、遠目の宮殿の明かりを受けて鈍く輝く。

いつだ、いつだ　喉を鳴らして、そのときを待つ。目を見開き、極限まで緊張を張り巡らせる。即座に右腕が動かせるように、内力を全開で回す。

踏み切りからの突進が同時に始まったのは、その直後のことだった。距離が縮まる。剣が後ろへ引きつけられ、前へと飛び出す。

「ッヤ　　ッ！」「」

今だッ！

右手から、目にも見えぬ早さで壺が放たれた。

二つの剣先が様子をつかがい絡みあうように、ぶつかりかけた寸前。

ガガンガシャン、ゴンツ、カラカランという複雑な音を立てて、

二本の剣は少し離れたところへとはじき飛ばされていた。当然ながら、壺もほとんど一緒の位置に落ちてしまっている。

よしっ、と拳をにぎってひそかに快哉をあげるミューズだったが、
「ふと、辺りに沈黙と凍った空気がただよい始めたことに
気づき、顔を上げた。」

決闘を台無しにしたことの重大さは、周りにいた人間たちから浴びせられた罵倒やのしりを聞いて、すぐに理解することとなった。内容こそ飲み込めなかったが、あきらかに彼らは自分をなじっていた。

左に立つ決闘者のひとり、初老の男は厳しい顔をこちらに向け、背筋も冷えるような眼で睨めつけたかと思うと。

「おい！」

「ひえああ!？」

凶悪なまでの面差しに、あられもなく悲鳴があがる。逃げよう。

あ、でも壺が……などと逡巡しているうちに、いつしか男の腕が胸ぐらを掴んでいた。

「貴様、××××だな」

威圧するような声に肝が冷える。己の軽率さについては誰よりもよく知っていたが、まさかここまで怒りをあらわにされようとは。

「決闘を××立てするほどの者とは思わぬが、小娘。どうせ××か町人の××××××だろうが……おい、この×××××はどうかけるつもりだ？」

「あ、あの。なんのことで……」

「とぼけるなあ！」

どこにそんな力があるんだ、というような細い腕が、ミューズの体を浮かせる。と、すぐに体は石畳に叩きつけられていた。

受け身も取れず体の下敷きになった左手の五指が、不吉な音とともに意識を吹き飛ばすような痛みを伝えてきた。

ここに来て、ミューズは本当の意味で、事態の深刻さを理解した。男の額に浮かぶ青筋が、彼の怒りと羞恥をはつきりと物語っていた。

貴族の決闘というのは、体面の勝負なのだ。それを戦う前から、このような大勢の人間の前で中断させられれば、憤激すること想像頑なにない。しかもそれが女子どもの手によるものならなおさら。男の肩に、さきほどの年老いた女がすぎる。しかし乱暴に払いのけると、老人は口をカツと開いた。

「恥をかかせおつて！　こおの、ガキめ！」

剣がこちらへ落ちてくる　のを、勝手に動いた右手がつかんでいた。当然指から血が流れるが、それも構わず内力を込めて強く手首を回した。

「お、おおつ！？」

思いがけない反撃に、剣を逆手に持つ右腕が外へと開く。と、体勢が斜めに崩れたところで、急いで右手を剣から離し、老人の脇を駆け抜けて落ちた壺を回収。

男はしばしばかんとした顔つきでミューズと、彼女を貫くはずだった自らの剣を見下ろしていたが、やがて先ほどのまがまがしさはなんだったのか、と問いたくなるほどいっそう悪辣に顔をゆがめ始めた。

「に、二度も、わ、わしをコケにしおつて……も、もう許さぬぞ、こつちへ来い！　剣の×にしてくれようぞ！」

「え、えへへ。すみませんでしたあ……」

薄く笑みながら、一步後ずさる。

「待て！　いいか、その場から動くな、小娘！」

せつかく初めてはつきりとすべて聞き取れた言葉は、物騒極まりないものだった。そんな無茶な、と笑みが引きつり始めたとき。

「……もうそのへんでよいでしょう」

温和な声が、険悪すぎる雰囲気割って入った。と、声の主までが二人の間に介入して、制するように手を広げる。

「この小娘だつて悪気があつたわけではありません。確かに××は××ですが、あなたの××はこの程度で地に×××ほど安っぽくはないはず。そのことは、あなたの××の親友であつた父の

息子である私が、一番よく知っている」

物静かだが、どこか人の弱い部分を弱く刺激するような物言いに、今度は老人が一步退き、顔をそむける。

「ふ、ふん。余計な××だ、アルバレノフ。お前とは常々意見が合わないと思っていたが、ここまでとはな。とんだ×××よ。死んだお前の父が泣くぞ」

「いえ、むしろ喜びましょう。私はあなたの命か、もしくはこの娘の命を救ったのですから」

「なぜワシの命が問題になるッ！死ぬのはその小娘であろうが！」

「ああ、これは失敬。言葉の××です。それはともかく、たかが娘ひとりにそこまでかまっておられては、あなたの××に泥を塗るようなものだ。ここは私の顔に××××、剣を収めていただけないか。決闘というのなら、私が後にまたお相手いたしましょう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
男はじつとこちらを重い視線で射貫いてくる。またなにか余計なことを言わないよう、ギョツと口をつぐんでいると、

「その言葉、忘れるでないぞ。明日、××××の路地で待つぞ、アルバレノフ」

力強く告げると、なおも後ろで当惑する妻らしき女性を残して、男は背を翻し向けて広場を横切っていった。

あたりに群れていた人間たちがまた三々五々と散っていき、男の背中が小さくなりようやくやく広場の向こうの方へ消え始めた頃。

「おけがはありませんか？」

若い方の男が、眉尻を下げていかに困ったというように笑みつつ、こちらへ寄ってきた。

「あ、ありがとうございます。大丈夫です」

通じるのかな、と一瞬思ったが、運よくというべきか、男は理解したようににっこりと微笑んだ。

「それはよかった・・・・・・・・いえ、あまり思わしくなさそうです

ね

「え？」

「左手ですよ。どうやら無事とは言い難い様子」

「どうやら後ろに回して隠していたのがバレたらしい。表情を殺せていなかったのだろうか。今もお、苛烈な痛みが頭を焼いている。よければ、私の家で手当て致しましょうか。今晚のことのお礼もかねて」

「思いがけず接近していた綺麗な容姿にドキンとしながら、気づけばミュージズはコクコクと首を縦に振っていた。」

クークス（26）

いざ猛獣に対処せざるをえなくなれば、胸をかすめていた疑義もすぐ溶け消えた。

久々に全力で二刀を振るい、肉斬連刃としての自分をさらけ出して敵を屠る感覚に没頭しながらも、クークスはときどき後ろに視線を配らせた。

細剣という突衝用のエモノから想像はついていたが、やはり自分のように大鈍振るって鎧袖一触に蹴散らす、というよりも一体一体を丁寧に急所を突きでさばっていくのがリエインの戦型のようにだった。しかも一突きで確実に致命傷を与えている。

一方自分は、一度で裂傷を与えられる数こそ多いものの、入りが甘く致命傷に至らないものの少なからずあり、すぐさま第二撃に転じられる。

この大雑把さは、やはり多数を相手にするときには有効ではあるが、さもすれば予期しないケモノを生きながらえさせ飛びかかる隙を与えてしまう。

「リエイン！」

「分かっています」

殺し損ねた四足動物のうち一体が、クークスの頭上を飛び越え、リエインにアギトを開けて躍りかかる。音で察したのか、ケモノの足裏が地についた瞬間に蹴りが放たれ、いびつに飛び出した赤い眼球をつぶしていた。断末魔を放ちながら後ろへのけぞり伏す。おそらくつま先は脳にまで達しているだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして何事もなかったように、リエインは霞むのほどの速度でゴバスの懐深くに入り、胸部を滅多刺しにして外へと駆け抜ける。

一挙手一投足が洗練されていた。ムダひとつなく、最短で敵を殺し続けている。葬った数も、へたすれば自分よりも多いだろう。

戦闘という一番慣れたはずの場ですら、ここでは自分は足を引っ張っているようだった。

「セイツ！」

嫌な思いが一抹の染みとなって心を侵食するのを払い落とすように、大きく巨剣で瞬時に四体をなぎ払う。しかしムダが多い。ここで振り切ってしまうえば体が硬直を強いられ、上からの鋭いかぎ爪をかわすことができないと　頭では分かっていたのに。

「チイツ！」

転ぶようにして右へ動く、そこに両手を万歳でもするように持ち上げた緑色の巨人がそそり立っている。

又メ又メと全身を這う体液が、ぼてぼてと落ちて地面の草花を枯らしていく。

「おばあ、おばああああああああああああああ！」

理解できぬとどろきをあげたかと思うと、その二本腕がこちらへ迫る。尻餅をついたまま、二剣でかるうじて防ぐも、左手からは別の四つ足が牙をむいてこちらへ　。

「大丈夫ですか？」

淡泊な声とともに、その四つ足の頭から鮮血が吹き荒れていた。リエインの剣が、正確無比に致命傷を射ていたのだ。

「ああ……。なんとか、なッ！」

二刀を素早く動かし、巨人の腕の先端を叩ききると、クークスは急いで身を起こした。意味も分からないが恥ずかしいような腹立たしいような、それでいて気後れしてどこか居心地の悪いような思いが胸に去来するのを、全力で無視する。

「だいぶ数は減りましたが、まもなく他の大公がやってきます。それまでに早く突破口を開きましょう」

互いに返り血を盛大に浴びて、服は赤黒くぐっしりと変色していた。顔につく血をぬぐい、再度クークスが剣を構え直した、そのとき。

ケモノたちに異変が起きた。

それまで見るからに殺気だつてぎらつかせていたケモノの瞳から、ふと光が消えた。ある動物は目を細め、あるものは首を回したり、ウルルルとかクウーンとか、思い思いに吠えなくと。 。 背を向けて、二人への興味を一切失つたとても言うかのように、次々と取り巻きから外れていった。

はからずも脅威は去つていくのをぼかんと見つめていたが、不可解さに素直に喜ぶこともできない。さすがにリエインも予想外だつたらしく、ケモノの背中を口を丸くして見つめていた。

「なんだ、なにが起こつたんだ……?」

「……おそらくこの近くに、つい先ほどまで五大公がいたはずですが」

その言葉に急いで木立へ視線を走らせるも、無論、気配ひとつ掴めない。

「明らかに、退却」の命令が出されたようですね」

「なぜだ? 畏か、あるいは油断させるつもりか……?」

だが彼が確たる答えを持っていないことは明らかだった。かぶりを振って、なおも細剣を握りしめたまま、リエインは言った。

「一旦離れましょう。どちらにしてもこれは好機です」

六稜郭処の鎮座する森は、そう高くない山の麓にある。右手に迂回して、頂上へと続くらしいあぜ道をひとしきり登つたところで二人は足を止めた。顧みると、眼下に巨大な建物がある。やはり高所からの眺めは一定の展望をもたらした。古ぼけた建物群がさきほどより明瞭にうかがえる。

だが肝心の宮殿もどきについては、敷地内を浸食する雑木林にほとんど隠れていた。試しに強くこめかみに力を入れて目を見開いてみたが、その向こう側を垣間見ることはできなかった。

荒い呼吸をどうにか落ち着かせると、戦闘に入る前に頭をかすめていた疑念が再び身をもたげる。だがこちらの勘違いである可能性も同時にちらつき、なかなか切り出せない。俺はコイツを過小評価

していたのかも知れない、と先ほどの鬼神ぶりを思い出してクークスは考え直したくなる。事実、自分はリエインを過小評価していた。コイツともうひとりく馬の牙の部下がいれば、あるいは涙石翠鵬の『試験』は二日、三日で突破できるかもしれない。『ひとりで行った』というのが、『試験』を受けて半島へはひとりだけで、という意味だったら・・・？ いや、そんなことしても無意味だろう。

どうにか確かめて疑いを晴らす方法はないものか、とひそかに懊悩していると、リエインが眼下の景観を眺めながら、

「やはり国としては小さいですが、ひとつの傭兵集団が有するにはおそろしいほどの巨大さですね」

「さすがに東の大国が支援した国家だけあるな・・・おい」「なんででしょう」

「ロニオヘルトやアツバースならともかく、なんだってローウエンは縁もゆかりもないこんな無法地帯に、しかも穢多の国なんかを建設したんだ？ しかも現地の支援として部隊まで用意して」

「バートルアの建国は、推定すると七、八十年ほどさかのぼると思われます。詳細は不明ですが、もしこの建国がローウエンの三賢主時代のことならばそう不自然ではないかと」

「三賢主？」

「ローウエンの最盛期を指す言葉ですよ。今の国力の衰えを見れば信じられないかも知れませんが、当時のローウエンは軍海に乱立する軍閥のうち、南東から南西にかけてほとんどを味方につけていました。ロニオヘルトも半ば従属関係に陥れられていましたから、半島に軍閥経由で手を出すのはそう難しくないのは想像頑なありません。積極的に体外侵略を繰り返していたローウエンが、半島をも掌握しようとして、その前線基地として国を設置しロニオヘルトやアツバースを牽制しようとした、と考えればそれほどおかしくはないでしょう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ローウエンの覇権というのも興味深いが、それ以上に隣に立つ西の暗殺者が東の大国の歴史について得々と語り続けていることのほうが、はるかに驚きだった。

半島だけでなくローウエンのことにも通じてるのか。何者なんだ、いったい。

「先ほどのケモノが見えます。数が少ないですから、五大公の特にお気に入りなのですよ」

口調をやや柔らかくしてリエインが示す方向を見ると、六稜郭処の敷地をぞろぞろと歩く珍獣たちの姿がうかがえた。

幕間 5

マルシエ『なぜ鳥は地に墜ちたか』より抜粋。なお、この書については第二十六代ローウェン国王の時世に出されたものである。

「ときに人々は私にこう問う。歴史上、特筆すべき名君または暴君と呼ばれる者を三人あげるとしたら誰があるか、と。

この問いはある種の困難性をもって私の前にしばしば示されるのだが、それは主に後者に比重が置かれる。というのも、名君はそう多くない。しかし 幾人もの賢人の指摘するところだが 歴史上、ほとんどの王は悪王であることは、ひとつの歴史の真理に他ならない。だから私は、前者の問いについてはすぐに三つの名前ガリアラのサティスターシャ、ロニオヘルトのテストロファネスおよびローウェンのハッシュ に指を屈することができるが、後者の問いについてはいくつもの名前がよぎってしまうのだ。

しかしひとつだけ、確実にその数少ない三柱に名を投じるべき人間がいる ローウェンのカーターは史上まれに見る劣等者、悪王、暴君であることは、私はすでに何度も指摘してきたし、他の著名な歴史家たちも彼の治世を否定こそすれ、数少ない物好きを除き賞美することなどない。

彼は野心家で、常に蓄えた口ひげをいじりながら三賢主時代の名君たちに擬なぞえていた。元々剛力なつで知られた者であったが、青少年時代は敬虔なシャビ教徒としておとなしい生活を送っていた。もじやもじやの髪をなでつけ、いつも疑り深そうに目の真ん中を縮めて、眉間に皺を刻み続けていた。頭脳は明晰だったが、それは書の上のことだけであった。彼は昨今の大学で見られるような、学問秀才でしかなかった。一度持った信念は、いかなる我が儘わがままと強情さを以て貫いたという。彼の偏狭さと強烈な癩癩持ちの性質は、およそ政治向きではなかった。同時に自身の信念を貫くためなら、およそ大胆

な、そして非情な行動すら厭わなかった。それが結果を伴ったか否かは、言うまでもないが。

彼の弟であるフィリップは、対称的にあまり勉学の才はなかったが、穏健な人柄だったという。本来なら次兄である彼が王位につく道理はなかったが、先代のカウンツは彼をかわいがり、表面上には出さずともフィリップに王位を継承させようかと思案する書簡父や日記さえ残しているほどだ。

それは少なくとも、ローウェンにとっては賢明な思案だったと言えよう。なんせカーターは穢多嫌いだったというのだ……」

ミューズ(27)

どうしてこうなったんだっけ。

現在、ミューズは饗宴の最中にいた。巨大なテーブルクロスの上に展開された、いくつかの食事。まぶしいほどの盛り皿には、材料の見当すらおぼつかない豪勢な料理がそれぞれ盛りつけられている。唯一丸皿の白いとろりとした液体が、パンの浸されたスープということくらいしか分からない。これでまだ前菜というのだから恐ろしい。

天井からは、これまた豪壮というか豪奢というか、そんな感じの言葉がぴったりきそうなくらいに複雑かつ精密かつ優美な複数のシヤンデリアが部屋に光を落としている。部屋、というのもこれまたとんでもない広大さを誇っており、端から端まで縦の長さは、自分の身長五十倍はあるように思われた。部屋の四つの隅には、それぞれ給仕がひかえており、人形かと思うくらい微動だにしていない。初めて見る貴族の館というものに、ほとんど圧迫感に近い思いを宿していると、

「さあ、召し上がってください！　××××なお礼ですよ」

彼女の正面の席　　といつても卓の巨大さ故に、彼女から一番離れた席でもあるのだが　　に座る、若い男。確か名前を聞いたが、正直あまりの展開の早さに頭が記憶を放棄していた。相変わらず言葉は一部不明瞭だが、内容はおおよそ察せられる。

「こちらの牛脂と骨髓を刻んで入れたパテでしてな。まっことに絶品ですよ！　これと酒さえあれば、私は××××ます」

パテ、とはたぶんスープの隣にある薄っぺらいクッキー状の料理だろう。隣に三叉に分かれた刃物らしきものがあるため、これで突き刺して食べよ、ということなのだろうが……推測して間違っていれば、赤っ恥である。それが、食欲が人一倍旺盛な彼女が美食を前にしても飛びつけない理由だった。いっそのことピヨピヨ

(ギルクアツシユ)にでも食わせてやりたいところだが、あいにくとあの行儀のよい鳥は、ミューズが邸宅内へと入るとき、瞬時に全てを理解したように屋根の上へと飛翔していったのだ。ときおり、自らの存在を示すように高らかと鳴いているのがここまで耳に入る。

ホントに賢い鳥だわ……じゃなくて！

食べ方が分からない。これまで手掴みか、もしくはせいぜい木製の匙程度しか使ったことのないため、なんとも動きようがない。

「ああ、これは本当に美味い。おや！ これはどうしたことでしょうか！ どうぞどうぞ、遠慮なさらずに。そちらはそら豆の濾し汁。隣は去勢鶏の塩付け肉……最高だ。実はこれらはすべて、我が国の神饌が基になった料理たちでしてな、あなたのような女神に捧げるにはふさわしいものでしょう！」

男が三叉のエモノを突き刺して食べ始めた。まねてみる。

持ち方が分からない。

拳でギュツと握り、力任せにグツツと突き刺してみると、勢いのためぺらぺらの肉が皿からすっ飛んだ。給仕が音もなくやってきて、丁寧に白い布で床に落ちたそれを拾い上げる。

「あ、いいです。自分でします」

席から立ち上り、給仕はもう肉片をくるんだ白い布を持って立ち上がり、一歩退いたところにいた。

「どうぞお食事をお楽しみください」

「ありがとうございます」

1号がいつ戻ってくるのか、考えれば考えるほど気を揉んでしまいが、ややもすれば強引な対応をはっきりと拒否もできず、なし崩し的にミューズはそう言った。

ここまで料理が並べられると、強く拒否する気概もない。かといって、早く食べ終わって振り切ろうとしても、量が並ではないだろう。

こちらの苦悩に委細頓着せず、アルバレノフははっはっはと軽快に笑った。こちらはこの国の者でないと分かっているため、ゆっく

りと言葉を選んで話を進めてくれる。

「しかし見事な××でした。見事ですよ。あなたが本気になれば、私たちの頭に壺をぶつけて×××××ことだつてできたでしょうにいやいや、剣を二つとも飛ばすだけなんて、お気遣い××××。不躰だ、などと先方は怒っていらつしやつたが、なに、なにあれば照れでしょう。××感謝しているはずですよ」

先方というのはおそらくあの物騒な老人だろう。皮肉なのか、素直な謝意なのか判然としないまま、適当にミューズは頷いた。

幸いにも無事だった壺は、長い花瓶を収めたまま卓の隅、ミューズの手元に置かれている。そちらをしげしげと見つめて、決闘の担い手の片割れは薄く笑む。

「え、えっと、どうして決闘なんて………?」
会話のきつかけをさぐるべく、当たり障りのないところから切り出してみる。

「はっはっは、よくある宗教上の××ですよ。あれは私の義父の朋友という方でしてね。奥方共々、××なゴルジエ教徒なのですが、その汗簡の解釈について見解に相違がありました。その口論の末にあそこまで走つたと言つことですよ。いやいや、××××しい」

「は、はあ………でもあんなところで戦わなくてもいいかと………」

「本当にそのとおりです。あの××は昔こそ、ああいう風に決闘の場所に×××つていたようなのですが、さすがに今の時代は×××です」

「はあ、としか言いようがない。
「あの、すみません。事情は分かりました。で、どうやら私がいいことをしちやつたらしいというのも。それで、お食事は非常にありがたいのですが、先ほどから言ってるように、私は連れを待たせていて………」

名無しや1号相手だつたらいくらでも軽口の応酬が出来るが、こ
ういう身分も住む場所も違う人間に対しては、どんな言葉を返すべ

きかいまいち分らない。

案の定というべきか、男は少し険しそうな表情になり、

「ああ、それは残念！ あなたの××というのなら、×××××私
が作らせた料理は無駄になってしまつようです。いいえ！ 別にあ
なたはお気になさる必要など×××××よ。もちろんです！ もち
ろんですとも。あなたに非はないのです」

居心地悪い思いをせざるをえない発言をしておいて、そんな気遣
いもないと思う。

「すみません。それでは前菜？ それだけでもいただきます」

「いいいえ！ もつと美味しいものを用意しましょう。時間は取らせ
ませんよ。あれだけお飲みいただければ、私としては充分に××の
××は果たせるというものですから！」

「あれ？」

「あなたのために『特別に』ご用意したものですよ！ アツバー
スでも、我が一族しか飲むことができないという飲み物です。酒
とは少し違いますが、まつことにいい心地になりますから。これだ
けでも召し上がっていただきたいのですが！」

「はあ。で、ではそれを」

どうやら話はうまく好転したようである。飲み物を一杯飲んでお
しまい、ならじきにあの広場へ戻れるだろう。男のこの邸宅は広場
から通りへ出た、案外近い場所にあることは覚えてるから、ここま
では馬車で来たが、帰りは歩いてでも戻れる。

そのとき、足音もなくこちらへ歩み出た給仕の丸盆から、紅色の
液体の入った杯が差し出された。

「××の実からしぼった果汁です。××の実は、この付近でとれる
もので、舌の肥えぬものは苦いなどと申しますが、なに！ これこ
そがゴルジエの開祖たる聖人が生まれて初めて食した、伝説の果実
と言われているのですよ！ それを我が一族秘宝の調理法により、
搾り取った汁にいくつかの葉を切り刻んだものです。口当たりが×
×××なので。美の女神にふさわしきものと思いませんか！」

「ご賞味あれ」

よく分らないが口に含んでみると、甘酸っぱい味とともにふわりと柔らかい感覚が舌をつつんだ。こくりと飲み下すと、たちまち生暖かさにじみ出て、冷えていた胃が喜ぶように震える。

「お、おいしい！」

思わず叫ぶと、男、綺麗な微笑。

「そうでしょうか？ ご満足いただけましたら、もつと持ってこさせましょう。すぐによい気分になるでしょう　ん？」

いつのまにか、男の後ろに位置していた食堂の扉が開き、見知らぬ男が入っていた。主人に対し、小さく耳打ちをする。

「・・・分かった。xxを怠るな・・・」

かろうじて、それだけが聞き取れた。その人物が音もなく退出すると、男は給仕に合図を送り、さらになみなみと注がれた杯と壺を持ってきた。

「おおっ」

こうなると先ほどの陶酔がたちまち全身に呼び戻され、夢中で壺から杯へ注いではそれを唇へと運んだ。一口ごとに体がポカポカと暖まってくるのが分かる。おいしい、とか甘い、とかもちろんそんな感想もなくはないのだが、些末なことにしか思えないほどその果汁は魅惑的だった。なんだろう、体の芯までとろけそうなこの感覚は。頭がぼつとなつて、目がとろんとしてくるのが分かる。分かるのに、止められない。手が止まらない。顔が火照り、頬が熱くなる。それでも勝手に体が杯に口をつけてしまう。

理性がようやく働き出したのは、壺がほとんど空になってからのことだった。

いけない。もしこれのせいで眠くなったりしたら、いろいろヤバイわ。

「あ、ありがとうございます。とってもおいしかったです。私はこれで　あ、あれ？」

これ以上魔力に取り憑かれる前に立ち去ろうと、椅子から立ち上

がりかけて 視界が傾いだ。

ぐら、と体の軸が揺れる。右に、左に。男は無言で笑んでいる。五感が、おかしい。なにか熱に犯されたように、熱い。暑い。

強烈な眠気に犯されていると分かったときには、もう立ち続けることすら限界に近かった。

「・・・・・・・・のあ」

その一言を最後に、意識の糸がぷつりと絶たれた。

クークス(27)

さすがに腹が減った。干し肉をいくつか適当に口へ放り込む。どの渴きを覚えたが、意志力だけで我慢した。

山の稜線の向こうに消えていく西日を浴びながら六稜郭処の敷地内を進む動物の行進を見終わり、そう時間が経たないうちに、辺りはすっかり濃い闇に包まれていた。

半島の夜がどれほど危険であるか、正直想像もつかない。だが一般的な軍海の警戒では事足りないことは明らかだ。しかも夜盲であれば、その危険度は倍増するだろう。

隣の少年の気配とピヨピヨの羽音しか捉えられなくなり始めると、逆に沈思にはもってこいだと思い、無限に広がる常闇に視線を合わせながらクークスはひそかに頭を抱えた。

『声』により任された宿屋の一件から考えて、雑闘衆とサリヴァ軍閥がつながっていることはほとんど間違いない。渡した手紙に書かれていたのは、キ・サンの行動を思い返せば、自分を殺害するよう『声』ひいてはサリヴァが依頼するという内容。だがそれだけではないはずだ。自分を抹殺するためならそんな回りくどいやり方をする必要はないし、なにより領内で安全に殺しておけばよい。

ならば殺害はあくまでオマケ。本筋は、やはりあの手紙を運搬させることにあつたということだ。運搬役を二人にしたのは、やはり奪われることなどを警戒したためだろう。そして届け先で、運搬役のひとりを消したところで、ヘルガベルトの任務は完了だったはず。

だが実際のコトの運びは、あらずじとは異なった。キ・サンはヘルガベルトに手を貸さず、結局ヘルガベルトの方が殺され、自分は見逃された。キ・サンが手を貸さなかった理由は自ら滔々と語っていたように、肉斬連刃としての自分を勧誘するため。だとしたら、そこでサリヴァ側と雑闘衆側との間に考えの齟齬が生まれている。

ここが分からない。今まで俺がこうして無事なのは、雑闘衆側

に対してサリヴァ側が譲歩しているということなのか？　だが片や鳴く子も黙る東方の大軍閥であり、片や西方の半島に位置する雑闘衆。仮にサリヴァ側にとって、雑闘衆が傭兵の雇い入れなどの業務上の相棒でしかないなら　この両者がつながっている時点でかなり違和感があるが　、キ・サンの気まぐれによる自分の非殺害は明らかな契約違反だ。譲歩などせず、即刻サリヴァ側は自分を殺そうとするはず。商隊に紛れこんでいるときや、村へ戻ったときなどいくらでも隙はあったはずだ　しかし実際に死んだのは、自分ではなく……。

落ちてきた感傷を振り払い、思考の軌道を修正してクークスは尋ねた。

「なあ……サリヴァと雑闘衆がつながるとしたら、どんな利害関係があると思う？」

「サリヴァが東の軍閥であることは存じていますが、それ以上のことが分かりませんし、なにより雑闘衆のことだつてるくに知りませんから、なんとも」

「それにしちゃローウェンについては詳しいじゃないか」

「あちらは大国ですから」

おそらく完全機密の傭兵集団よりも大国の方が知りやすい、という意味だろうが、そもそも知ろうと思わなくては知れないという点では変わらないと思う。

まあ、両者のつながりに関する答えは予想済みだったが、しかし現に自分が運搬した手紙が行っている以上、なんらかの関係があるのは間違いな　手紙？

「お前、さっきなにか手紙が届いてたよな。あれ、なんだ？」

「く馬の牙>絡みですよ。当件とは全く関係在りません、お気になさらず」

こちらからの問いを予期していたがごとき即答が、逆に沈黙していた疑念を再度もたげさせた。

「ハウル、ラウド、クエン、ガイナー、タッカー……これ、

全部人の名前か」

「耳ざといのですね。ええ、馬の牙の同胞ですよ。それがなにか？」

「そいつらがどうかしたのか？」

「そこまで私が話す必要があると？」

今度は険峻さの混じった言葉だ。おそらく睨むように瞳がぎよると動いていることだろう。

「なんでもないよ。ただ気になったただけだ。ただその人たちも人捜しに尽力してくれたんだろ。あとで礼でも言わなくちゃなって思っただけだ。会えるなら島を出てから会わせてほしいんだが」

「……そう、ですね」

堅い返事が、ぎこちなくなされた。さすがにこの変化は聞き逃せず、即座に質問を重ねる。もっとも半ば以上に、疑いを晴らすためのカマをかけたかったただけだが。

「その五人になにかあったのか？」

「なにもない、と申しているでしょう。……肉斬連刃、あなたは鳥目なのでしょう？ ならば夜はあそこを見張るにしても不可能。ならば休眠を取られてはいかがです。さすがのあなたでも半島に入ってから不眠不休ではお疲れでしょう」

疲弊していたのは事実だったが、今この少年から目、というか耳を離す気にもなれなかったクークスは、それを無視して再び話を戻した。

「六稜郭処の人の出入りがないってことはありえないよな」

「……それは、まあ、そうでしょう。キ・サンなどは言うに及ばず、下っ端から大公級まで仕事や使いつ走りで出ることはあるはず」

不承不承、といった様子で応じるリエイン。

「そのうちの誰かを抱き込むことはできないか？」

「寝返らせ、間者として送り込むということですか。外から忍び込ませるよりは内部の人間を味方につけるほうが、危険度は減りますね」

意外に好感触だったらしいが、直後に否定される。

「私は詐術、話術については疎いので、私では少なくとも力不足ですがね。やるのなら肉斬連刃、あなたおひとりどうぞ」

こういう反応を返してくるとはな、と肩でもすくめてみせたくない。

「分かったよ、その方向はやめだ」

ことさらふてくされたように言ってみせると、リエインは露骨に安堵のため息をこぼした。クークスは脱力してへなへなとその場に座り込んだ。

「やれやれ……そうだな、ご忠告に従って眠らせてもらおうよ。少し経ったら起こしてほしい。交代で、俺が寝ずの番するってことで」

「……どのくらい？」

「は？ ま、まあ朝焼けの数刻前かな……お前も寝たいだろうから、まあいい頃合いに頼む」

「了解しました」

こちらもどこか安心したような響きを帯びていると思ったのは、さすがに考えすぎだろうか。ともかくクークスは後頭部に頭を回すと、堅くなった地面を探り当てて横たわった。

もちろん、最後にこう付け加えることを忘れなかった。

「あ、俺はあんまり寝なくても体が持つけど、いったん寝たらなかなか起きなくなるのが難だな。起こすときは、強く頼む」

「了解しました」

細い吐息が眉間にかかった。

うつすらとまぶたを持ち上げる。そこは明かりひとつないらしい暗闇だ。しばらく頭がもやにつつまれたような感覚だったが、徐々に意識がはあざやかに戻ってくる。

どこだろう　あの広場だろうか。いや、それでも明かりや音が微かにもしないことが不自然だ。それに背中にあたる感触は、柔らかいシーツと寝台だ。

そこまで認識したところで、とにかく身を起こそうとして　途端に、首の後ろが刺されたようにチクリと痛んだかと思うと、上がりかけた頸部がまたふかふかとしたものに落下した。

うそ・・・からだが動かない・・・？

昔ならいざ知らず、今の彼女は点穴を突くことで相手の動きを麻痺させることが可能だと知っている。しかし反射的に点穴を開こうと丹田に力を込めて、言葉を　最初から舌も動かないのだが失った。

点穴は閉じてない？　じゃあ、どうして！

そこで口内にまだ漂っていた強烈な甘い香りが鼻孔をくぐり、心臓が止まる心地がした。

あの飲み物！

とつさに叫ぼうと、舌を必死に動かそうと神経を集中させるが、先端が歯の付け根にぶつかったまま、ウンともスンとも言えない。絞り出されるのは、いびつなうなり声だけだ。

「う・・・が・・・」

「おや、もうお目覚めでしたか」

突如響いた柔らかい声に、全身が粟立つのが分かった。

黒眼をずらすこともできない。しかし次第に暗闇になれていった双眸は、目の前にある穏やかな微笑を浮かべた顔面を視界に捉えた。

「あまりお××にならない方がいいですよ。初めてならば、少なからず痛みと出欠を伴いますからね」

ふう、と熱い息が首筋を撫でる。背筋が凍るような感覚に打たれる。

「ぐ、ごご、ぐが……」

懸命に舌を動かし、悲鳴を上げようとするが叶わない。ふう、と穏やかな笑みがこぼれる。

「夜間に声をあげられると、家の者が迷惑しますから……ご安心ください、我々が結ぶ契りは そちらの邪教と異なり、神聖にして絶対の契り、魂の契約ですから」

そちらの邪教というのがシャビ教を指すと分かるのに、そう時間はかからなかった。

異教の国家アツバース。この国の民が信じる宗教は、そう、男も言っていた。

「ゴルジエの神の御声はいつ何時たりとも正しいのですから、不安がることはありません。我々がこうして得る愛というのは絶対のものなのですよ。ほら、今このときも、この部屋はかの清聖なる気に満たされている……西に十一、東に四！ ご覧なさい、おそこにご威光が！」

ゆっくりと、さらに接近する唇。と、顎のあたりにぬれた感触が生まれた。舌が這い、たちまち神経が逆なでされるような嫌悪、不安、恐怖……さまざまな感情が汗となって全身を伝っていく。

しかしどれだけ激しい情動が逆巻こうとも、指一本持ち上げられることができない。

離れた唇が、上へ移動し、今度は唇同士が重ねられる。反射的に歯を閉じようとするも、顎が動かない。するり、と長い舌先が口内をこれでもかとなめ回す。

目の前にあるのは、不気味に輝く双眸。じつと竦むこちらの眼を見つめてくる。逃げたい。目を逸らしたい。たえられない。意味が

あるのかも分からず、ひたすらにミュージズは硬直する全身に内力を巡らし、見えぬ束縛を解こうとした。

1号の言葉に真剣に耳を傾けなかった迂闊さを、遅まきながら呪った。

散々あちこちを愛撫した挙げ句、体から口吻が名残惜しそうに離れる。

ほう、と生暖かい歎息がかかる。

「ああ、なんという心地よさだ。水晶の女神の生まれ変わりか！
パステイシヤの花々もあなたの可憐さには及びますまい！ あなたが私たちのために捧げたその勇氣に、私は無限の敬服を抱き、その慈悲に最大の愛を捧げます」

ニンマリと大きく刻まれた微笑に、もう何度目かの恐怖がわき上がる。

しかしそれはアルバレノフ個人に対する感情というよりも 目の前にある種へと放たれたひとつの殺気を伴った、自分の背筋すらも薄ら寒くなるほどとげとげしい恐怖だった。

オトコはミナ、ケダモノだ。

ワタシたちはタダひたすらに、ケガされる。

脈動が。

再び大きく高鳴った。アグロワを相手にしたときと寸分も違わぬ感覚に、体が言いしれぬ法悦に包まれる。

伸びてくる手が衣服を一枚ずつ、いとおしむように剥がしていく。けどそんなことはどうでもよかった。奥底に眠る記憶が、激しく震えるのをひたすらに感じていた。全身がたちまち熱くなる。

内力を回しすぎたのか、勢いよく汗が首や額から噴き出し始める。

「おや？ これはどうしたました……」

全裸に近い姿になつても、羞恥ひとつ見せずただ睨みつけていた。ミューズに対し、オトコが奇妙そうに呟いた、そのときだった。

二の腕に汗がしたたり始めた右手が、ほとんど勝手にガツと持ち上がった。

驚愕に息を呑む気配がするの構わず、一息にオトコの頸部へと五指を伸ばす。立てた爪を、皮膚にギチギチと食い込ませる。

たちまち眼前の顔から血の気が引いていくのが分かった。それでも容赦なく内力を回す彼女の指から、力が抜けることはない。

ただただひとつ専心に、意識は支配されていた。

死ね！ 死んでしまえ！ お前たちは汚れている。畜生にも劣る外道め！

「グボ、グググ……」

ほとんど白目をむきかけていたオトコは、それでも最後の力を振り絞るように両手をミューズの右手首に添えて、押し返そうとする。しかしまるで力が入っていない。内力すら回せぬ人間に、腕を解きはなつことなどできるものか。

気づけば、自然と口元に残酷な色を帯びた笑みが浮かんでいるのを、彼女は遠いところで自覚していた。たぎる加虐の心に背を押され強めた握力は、窒息させる以前に首の骨を折るほどの強さだった。指の皮が剥けんばかり、いつそうの力を指へと込めた、瞬間。

耳をつんざいたのは、ガラス戸が粉々に碎ける途方もない音だった。

直後、オトコの体が消えていた。五本の指は空をつかんでいた。なにが起きたのかを把握する前に、たちまち全身の熱が引いていくのが感じられた。右腕は糸が切れたように寝台に落ちる。試しに足を持ち上げようとすると、するりと動く。

片手で急いで跳ね起きたその先に、ミューズは信じられないものを見た。

窓から入ってきたと思しき闖入者が左に立ち、右の壁で尻餅をつくアルバレノフを静かに睥睨している。自分を犯そうとした男は、

どうやら気を失っているらしい。左に立つ不審者　フード付きのマントに身を包んでおり、顔もうかがえない　は、ただ動く軽輩もみせず、忍び入る月光を背に浴びたまま屹立し続ける。

「あ、あの……」

唇をわななかせかけると、左に立つ人間は無言で顎を動かして開いた窓を示した。

逃げる、ということか。そう判断すると、行動は早かった。寝台の上に散らばった衣服を右手だけで懸命に着付けるまで、その者は微動だにせずアルバレノフを見下ろし続けていた。

ようやくすべてを身に付け終わり、壁に沈む男から視線を左に立つ人間へともう一度走らせた。まなざしはすぐに奥に設えられた戸棚の上に置かれた、見覚えのあるものへ吸いこまれる。

「ありがとう！」

短く叫び、戸棚へ駆け寄り花瓶と壺を回収。闖入者の脇を駆け抜ける際、揺れた漆黒のマントから覗いた肩口　本来あるべきその位置に、腕はなかった。

吃驚するも急いで窓から身を投げ出し、両足と右手だけで際どく着地。煮えくりかえった身体が、たちまち外界の刺々しい冷気を浴びてブルリと震えた。あたりの端正な造りをした庭の植え込みなどを愛でるひまもなく、一目散にミュージズは駆けだした。

背後から、すうと音もなくピヨピヨが舞い降りてきた。

夜のとばりが払拭されつつある広場に、ほとんど人の気配もなかった。ただ幾人かの男女が、なおも備え付けの長いすなどに腰かけ密やかに談笑していた。

だから広場の植え込みに座り、やきもきした顔で顎に手を当てて辺りを見回す1号の姿を見つけるにはそう苦労しなかった。

「た、ただいま」

つとめてにこやかに近づくと、ほっと安堵の表情が見え隠れしたのもつかの間、すぐに真剣な怒りをあらわにした顔になった。

「どこでなにしてたんだ！　ねーちゃん、いくらなんでも軽率すぎるっての！」

突っかかるような言いぐさにムツとするが、よくよく考えればその言葉はまるで間違っていないため、ややすねかける心を抑えて素直に頭を下げた。

「ごめん、ちよつとさつき……」

全てを語るべきだろうか　　気迷った末に、ミューズはただ一言こう述べた。

「出歩いてたら、道に迷っちゃって。なかなか戻れなかったのよ」「ったく」

予想通りだ、とでも言いたげに頭を抱える1号。しかし上げた顔はもう、いつものニヤけ色を帯びていたのでほつと安堵する。

「頼むから侵入するときには勝手なこと謹んでくれよ。ま、無事でないよりだけどなー。それより聞いて驚くぜ、地下牢へちよいと侵入して経路を探ってみたんだが……」

そこでいっそう呆れたように、1号が両手を広げた。

「っつて、ねーちゃん」

「え？」

「そんなところに突っ立つてないで、もっとこっちに寄れよ。一応、極秘の話なんだからさ。話せないじゃん」

意味がつかめず、足下へ目を落としたところで遅まきながらミューズは悟った。自分があまりに不自然なほど、植え込みに腰かける少年と距離を置いていることを。

「う、うん。ごめん」

もごもごと返し、足に力を込めかけ　　られなかった。

地に根付いてしまったかのように、右足が持ち上げられない。

「ねーちゃん？　どうしたぼつとして。まさか力ゼでも引いたかい？」

軽く笑いながら、1号が立ち上がる。

額に向けて伸びてくるその手が、闇から伸びる青白いそれと二重

写しのごとく目の前に立ち現れ。

ほとんど反射的に、舌が鋭い悲鳴を投げていた。

「やめて！」

キョトンと、1号の目が丸くなる。

「はあ？ おい、ホントにだいじょーぶかい」

「お願い、近づかないで。お願い……」

胸に宿るのがまぎれもない恐怖、嫌悪、怖気であることに当惑しつつも、少年から離れることを望むように足が自然と後ずさっていく。

短い悲鳴は止まらない。

「……ああ、いやあ……」

なに、どうして！ あのエセ紳士なんかじゃない、1号だつていうのに！ どうして逃げてるのよわたし！

「おい。いったいどうしたんだ。なにかあつたのか？」

「なにもないなにもない！ だからお願いだから近づかないで！ そこから話して！」

これ以上近づかれれば、体ほとんど勝手に動いて彼を縊殺しようとしてしまう、と本能が告げていた。いや、縊殺に限らない。アゲロワを相手にしたときのように、壺で殴り続けるかもしれない。

どうして、どうしてと頭で疑問がまたたく。きつかけはまぎれもなく、先ほど身に降りかかった事態だ。だが、恐怖の源はもっと深く、心の奥底に根づいているとしか思えなかった。

「だめ。止まって、お願い、お願いします」

両手を必死で突き出して哀願する。1号の眉がギュツと寄せられ、足がぴたりと停止した。

「……とりあえず座ろうぜ」

軽い言葉に、胸が少しだけ軽くなる。1号は先ほど自らが座していた場所に戻った。ミュージズも植え込みの脇の石積みへと腰を下ろす。無論、二人の距離は大きく離れていた。

クークス(28) (前書き)

遅れてすみませんでした！

クークス(28)

むろん、おちおち眠るつもりはなかった。大きな隙を見せて、リエインがこちらの予想外の行動を取るか否かを見極めようとしたのだ。

正直、あまり期待なかった。仮にリエインの腹に一物あるとしたら、クークスの狸寝入りを疑わないはずがない。だから動くにしても、相当時間が経過してからだろうと踏んでいたクークスの耳に、ほとんど間を置かず薄い布がこすれるような音が届いたのに、ひそかに目を見開いた。

精一杯、後ろで立つ音に耳を傾ける。視界が塗りつぶされたことで、逆に聴覚は異様なほど研ぎ澄まされているようで、微かな息づかいさえ耳に入っていく。

浅く、しかし早い呼吸。
昂奮している？

葉と地面がこすれ合う音や、薄い紙を広げるような音の合間で、荒い呼吸音が続いている。収まるどころか、ますます押し出される吐息は深く、大きくなっていく。

と、それらの音が一気にかき消された。

片手を地につき、リエインが立ち上がる。ひときわ大きく土と葉靴をこすれる音。

いよいよどこかへ行く気が、と身構えたのもつかの間。続いて、殺したしかし確かに土を踏みしめる足音がこちらに近づいていくのを聞き止め、愕然とした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

氣息と足音を突如、耳が痛いほどの沈黙がくるみこんだ。

この気配を自分は知っている。戦闘を控えた暗殺者が自分の発する感傷、躊躇をすべて封じ込め、己をただ目の前の獲物を狩るためだけの殺戮者へと昇華させたときに満ちる、異様な雰囲気。

だから考えるひまなど不要だった。頭の下に敷いていた手で地面を突き、それを軸に体を半回転。踏み出したリエインのすねを蹴りつけ、つんのめったところで左手も思い切り下へ突きだし、エビぞりの要領で下半身を跳ね上げる。

強烈な二本足の蹴撃がリエインの手首に炸裂し、細剣が顔の横に落下し地面に突き立つ。

「……………」

ぐるん、と姿勢を戻して剣を奪い取り、固まるリエインから数歩退いたところで、クークスは自らのエモノが逆使用されぬよう、もちろん自分の元へと蹴り飛ばした。

ガササツという音を拾うと、油断なくクークスは細剣をリエインの方へと突きつけた。

「…………… 獣と戦っていたとき俺が見ていた未熟な腕は、まさか油断させるためだったのですか？ 失礼ながらあなたを舐めていましたよ、肉斬連刃」

「褒めてくれてうれしいけど、ここまでお前がしてくるなんて考えてなかった。俺がお前に比べて腕が洗練されてなかったのは、油断させるためでもなんでもない。純粹に俺の限界だ」

「あなたは体術だけのほうがお強そうですね」
言うなり、リエインの声の位置が下がった。どうやら座ったようだ。

「残念ながら、私もここまでのようです。どうぞ首を刎ねてください」

「そうさせてもらう。お前がその暗器で近づいてきた俺を殺そうとしていないければな」

「…………… その耳、反則ですよ」

初めてどこか忌々しそうに吐き捨て、ガシヤガシヤと暗器を落とされる気配。はったりだったが、音だけ聞く限りおそろしい量だ。これだけ抱えていてあの動きとは空恐ろしい。

「いつから俺を疑っていたのです?」

「引つかかったのは、お前らが人捜しをしていた期間だ。七日弱と聞いていたが　お前、俺の母親を捜しに行ったとき、初めてひとりで半島に来たって言ったよな」

母親、という言葉にかすかにリエインが息を呑んだような気がした。どうせ殺す相手だ、言い惜しむ必要もあるまい。

「しかも海経路。つまりあの泣石翠鵬の『素潜り試験』を受けたのも初つてことだろう。なら独りでアレを三日や四日で突破することは不可能だ。あのオバサンがバテるのをずっと待つしか手がなからな」

七日弱で六稜郭処まで向かうには、六日ほどであれを合格する必要がある。これはなにを意味するか。お前は、考えられる限り最短で半島に向かったつてことだ。もし俺が知らせた村や東の方へ向かっていれば、とても六日以内で半島入りする余裕なんてないだろうからな」

「試験を突破することだけで七日近くかかるはず、と……しかし二人で挑んだのかもしれないよ。三人、四人かもしれない」
「それでも別の疑問が残るよ。どうしてそいつらを切り捨てて半島で行ったんだ。どっちにしても、そこだけは答えられない」

お前が半島に『単独で』赴いたのは、なぜだ？」
「……」

「馬の牙の仲間をまきこみなくなかったから。これが答えだろう。半島での貴重な戦力を削つてまでここに来る理由は他に考えられない」

「ま、すべてお前からもらったヒントだがな　とあえておどけてみせる。」

「母さんを見つけたのが六稜郭処のそばであること、これまた五大公のときの発言を借りることになるが、我を忘れてまであそこへ飛び出したことを考えれば、たぶん　あそこにお前の……」

空気を切り裂く音に、反射的に頭が右へと動いた。後ろの幹を暗器がえぐる音がしたかと思うと、ふつと風が顔を叩いた。

「しゃべりすぎですよ」

打って変わっての酷薄な声。言いぶりから、回転蹴りが飛んだと理解はできた。しかし防御が間に合わない。かろうじて頭突きで勢いを殺すと、微かに相手はよろけたようだ。

間髪入れず、右拳を腹部へめり込ませる。殴打を続けようとしたこぶしは、だがかがちり握られていた。押し返されたたらを踏んだ隙に、強烈な二本の手刀が首根っこを強かに打っていた。

詰まる呼吸。

「これは返してもらいます」

もちろん不覚を見逃すはずもなく、悠々とリエインが細剣を拾い上げる気配がする。とっさに足技を用い離れた大剣をつかみ取ると、空で一回転しクークスは距離を取ってリエインと向かい合った。

が、相手の方が一歩早かった。散らばっていた暗器が飛ぶ気配。

かろうじて右手の剣ではじこうとするが、思い直し屈んで回避。と、その上を強い勢いはらんだ剣が突き抜けていくのが感ぜられた。必死で回避行動を取りながら反撃の機会をうかがいつつ、それでもクークスの頭には、依然として頭にひとつの疑問がひっかかっていた。

それはどうして自分が現在殺されそうになっているのか、というものだ。六稜郭処にはコイツに関わるなにか大切な物、あるいは者が存在する。それは分かる。だがそれと現在の殺害行為は結びつくものなのか？ 一番可能性があるのは、言うまでもなくコイツとどこか『声』が繋がっており、その指示を受けている可能性であるが……。

悶々としながら下から剣を振り上げると、防がれたようだ。小さく舌打ちをして、微かに湿り気を帯びた地面を横に回り、ともかくもう一度間合いを取ろうとする。

しかし、途方もなく巨大な剣がここで裏目に出た。動きが鈍くなるのだ。つかの間を逃すはずもなく、防御の硬直が解け攻めに転じたりエインが、剣を打ち下ろしてくる。

寸前。

ガウイイン、と鈍い音があたりに響いた。

体には傷ひとつついてない。なにが起きたのかつかめず、ともかく姿勢を戻して剣を油断なく構えた、自分の前に。

まごう事なく、こちらに背を向けた人の気配があった。

クークスクークスの注意を引いたのは、だが人物の存在を察したからではない。その人物の姿を正面から見ているであろうリエインの口から、激しくあえぐような吐息がこぼれていることを鋭敏に聞き取ったからだ。

「大公アルファリシュ」

風に乗って静かな女声による名乗りがあがった。

大公タイコウ。確かにそう言った。つまり目の前の女は、雑闘衆の幹部。

なぜその人物がここにいるのか、予期し得ぬ出来事に当惑していると、続いて鉄のような男とも思えるような堅い声が耳を突いた。

「賓客を襲う不埒者には、義の名の下に鉄槌を」

だが流れるようなその口上も、また不自然なところで途切れた。

あとはただ二人の人間のあえぐ音と、後ろで呆然とそれらを見守る自分だけが取り残されることとなった。

と、とにかく　と1号は裏返った声を出した。

「腹ごしらえしよう。説明はそこだな」

「食べるどころあるの?」

「そりゃ、探せば。金の持ち合わせが少々不安だが……」

四大国の通貨事情について、ミューズはつたない知識しか持ち合わせない。各国だけで流通する硬貨と、商業用にすべての国で通じる特殊貨メルクマールが存在するということくらいだ。おそらく1号の言う持ち合わせとやらも後者だろうと、どうでもいい方向へ思考を逸らしていると、気まずそうな仕草で1号が腰を上げた。

1号の肩へと、自分の隣に滞空していたピヨピヨがぴよんと飛び乗る。

「コイツもねーちゃんになついたらみたいだし、ハハ、よかつたよかつた」

広場の外へと歩き出すその背の、数歩後ろをなぞるようにミューズも足を進め始める。ときおり寂しそうに細められた眼がこちらに向けられたが、瞳の奥にありえざる好色を陰を見てしまうような気がして、そのたびにビクンと肩を縮めてしまう。

重症じゃない。あのエセ紳士……。

小さく心の中で毒づき、やけっぱちな気持ちになる。確かにあれは身も凍るような恐怖の体験だったが、それがここまでの忌避にながるとは、さすがに理不尽以外のなにものでもないように思う。

街路を照らす明かりは、うつすらと空の端っこに顔をのぞかせた太陽だけだが、その朝光が差す道を歩く通行人にすら体が勝手に萎縮するほどだ。先の見えない真つ暗闇のほろがよっぼどいい。

太陽の明かりが、目に見えてはつきりとしてきた頃。

「ねーちゃん」

「……え? な、なに?」

「ここ。居酒屋だけど、別にいいだろ」

言うや、待たず扉を開け入ってしまう。その無愛想ともとれる態度に少々驚きながらも、こちらのことを慮りつつも今の自分との距離を測りかねているのだと分かり、急いで後を追った。

見ると、奥まで一直線に伸びる長椅子の一番手前に名無しはいた。理由はすぐに分かった。少し離れた奥の席では、屈強なオトコたちが大笑しながら、杯を抱えて浴びるように酒を飲んでいるのだ。

たちまち体の筋肉が凍り付く。なのに肩だけはおこりでも起こったように、痙攣し始める。

びくびくと肩をすくめながら、1号の斜め前に腰を下ろした。壁にかかった酒や料理表を眺めて、1号はいくつか食べ物中心に叫ぶと、直後に不自然なほど饒舌な語りが始まった。

「ホラリウスはここ数十年、大規模な建築が増えててさ。こちらへんも街路が拡張されたって話だぜ。向こうが王宮の隣にあった丸い建物が尊兵院って言って、先の大戦で死んだ兵士が

「1号」

それを遮り、じっと固い卓へ顔をうつむかせたまま、ぽつりぽつりと言葉を発した。

「ごめん、こんな風になっちゃって……あの、それで……
……名無しのところには、あんたひとりで行って欲しいの」

如実に衝撃が走ったのが、卓上の指の動きから分かった。見なかった振りをして、途切れがちに言葉をつなぐ。

「このままじゃどう見ても足手まといだし……今もホントは怖い……あんたや、あっちで騒いでる人が……」

すぐにもそれらを消したいと思いつけている自分が、むせ返るほどに。

「きつとアイツに会っても怯えちゃう。もしかしたら……
その先の密かな予覚については、とても口に出すことができなかった。

「そっか」

なにがあつたか、言うべきなのかも知れないと一瞬思った。だが吐露したことで取り返しのつかないことになるかもしれない、という恐れがのどをつまらせた。

「でも、その……一緒に行けなくても、な、なにか手伝えることがあつたら……」

なんて図々しいと自分でも思う。しかしこれ以外に手助けできることがあるとも思えなかつた。

「なにかある？」

「あるよー」

意外にも明るい返事がなされたので、ミューズは目を上げた。そこにあつた1号の顔は、まるで暗然とした空気など意にも介さないように朗らかだつた。

「それって？」

「まあまあ。まず飯を……その前に手紙を書こう」

手紙？　と思う間もなく、1号は肩に乗つたままのピヨピヨの方を見てコイツさ、と指で示す。

「半島にはどうにか行けそうなんで、あっちにいる誰かさんに手紙を書いておこーと思って。ホントは家についたとき書いてもよかつたが、すっかり忘れてたよ。ちよつと待っててくれ。紙とインクはあっちでくすねてきたから、あとはペンは……ああ、あつた」

自分の腰につけていたらしい袋をさぐつて、貧相な入れ物にそぐわぬ立派な羽ペンと取り出され、ミューズは怖気も少し忘れて見入つてしまった。

漆黒の羽である。どこまでも黒光りしていて、ある種の高貴さを発散しているようにさえ思われた。

今さらだけど、いったい何者なんだろう　少なくとも没落貴族とかじゃないと、こんな立派な羽ペンなんて……。

貴族。

ビクリ、と肩が跳ね上がったのを、卓に向かつていた1号に見ら

れなかったのは僥倖だった。震えを起こす右腕をなだめながら、やってきたいくつかの皿にぼんやりと目を落としていると。

「『すぐ行く、昔あそこを張り込んだ山で待つてるこの朴念仁。お望み通り、ねーちゃんは置いてくる』……………こんなもんか」
「……………」

仕方ないとは言え、やはり実際にこうはつきりと書き起こされると、胸がキユウと痛むのが分かった。1号が表に一度出て、ピヨピヨを飛ばしてからまた身軽な体で戻ってくると、すぐにうつむいたままぼそぼそと、

「じゃあ私は半島に行けないけど、その、手伝える何かつてのをするから、なんでも言つて」

「は？」

素っ頓狂な声があがった。

「なに言つてるんだ、ねーちゃん。できることならなんでもするんだろ。行くぜ、一緒に。さっきアイツに出したのはウソに決まってるだろー？ はは、ねーちゃんがそうだった理由については知ったこっちゃねーけど、これからもうひと頑張りはしてもらわなくちゃ困る」

「もうひと頑張りつて？」

「まずは食おう」

がつつく、という言葉が一番びったり来そうな勢いで、1号は次々と木皿を空にしていった。対照的に、これから自分がなにをすることになるのか判然としていないミューズは、不安や相変わらぬ怯えで満足に手を動かすことすら出来ない。

固まったまま、一口も運べずにいると、けらけらとおかしそうに1号が笑った。

「パンだけでも食つた方がいいぜー。ほれ、ほうれん草とケルシユの煮物。なんちゅう組み合わせだ、趣味悪いねー、と思うだろうがどっこい。見た目の悪さに反して味はなかなか」

「……………ねえ」

「こつちはなんだ？ 魚か、いやベーコンだな、辛子ソースかけてやがるんだ。うん、これは微妙だ。食わない方がいい。うん、味付けも薄い」

「ねえ、ちよっと」

「あ、そつちは牛肉だな。いいタレだ、甘辛くてうまい。ほれ、ねーちゃんも」

「ねえつてば！」

料理が来てからというものの、どこか吹っ切れたように口へと食べ物運んでいくクークスに、少々の苛立ちすら覚えながら、それでも顔をずっと下へ向けたまま、ミュージスは小さく怒鳴った。

「早く言つて、わたしができること。お願い、さつきから本当に気が狂いそうなの」

あんたを絞め殺してしまいそう。今にも右腕が飛び出して、あのときアグロワを相手にしたときのように、我を忘れてあんたを傷つけそう。

そのとき、1号の軽々とした語調にまとう空気が、それまでにないほど重たいものへと転じたのに、ミュージスは思わず瞠目した。

「……ねーちゃん、男に襲われたな？」

縮こまっていた肩が、いつそう萎縮するように狭まる。

「言い出しにくいのは分かる。俺も反省してる、もうすこしちゃんと忠告しておけばよかったって」

「……」

「ゴルジエ教特有の教えとかなんだとからしいんで……要は、男が女を好きにとつかえひつかえできるとだそう」

ふう、と大きく息をこぼす。匙を置く音が聞こえた。

「悪かった、許してくれ。なんてとても言えないけど、せめて謝罪くらい聞いてやってくれ。すまない」

いきなり、ほとんど卓にぶつけんばかりに頭を折って、囁き声でゆっくりとそう言った。あまりの急な展開についていけず、目を白黒させているミュージズに向かって、ほとんど聞き取れないほどにか

すれた声で、

「最初から……どう接すればいいのか分からなかった……
……昔の俺なら顔色ひとつ変えず受け流せたんだろうけど……
……」

強い歯軋りとともに、いっそう、悔しさのようなものを滲ませた
声が絞り出される。

「俺はもう、アイツと『似る』のは、嫌なんだよ……」

「ど、どういう意味」

当惑して問い返すも、同じように顔を伏せて目を見交わすことを
避けた1号は無言のままだった。

微かに、卓に垂れる髪の毛が揺れているのが見える。

泣いているのか？ ミューズはわずかの間、恐れも忘れて唾然と
した。目だけを上向かせると、顔を隠す頭髪のすきまから、小さく
嗚咽が漏れているのが、否応なく耳に届く。

「でも、勘違いしないでくれ」

すすり泣くような音の切れ間から発せられた強い声音に、なぜか
胸がつららで串刺しにされたような感覚が立ち上った。

「今思い出しているその恐怖は……もともと体に染みつい
ていたものなんかじゃない。だってねーちゃんのそばには、ずっと
アイツがいたんだから」

『思い出している』。

確かに目の前の少年はそう言った。頭の奥に眠り、今も封じ込め
続けたいと思っている私の記憶を、この人は知っている？

よく考えれば名無しと友人であり、名無しが知っている節のある
ことを1号が知っていても、なんら不思議なことはない。だが思わ
ぬ言葉に、凍てついていた心が抑えていた言いようのない怒りに近
い激情が胸にともった。

「……アイツって……名無しのこと？」

「ああ。昔、ずっとアイツはいつしよにいたんだ。」

だから、あくまですり込まれたのは一時的なもので……」

「名無しといっしょにいたときのことなんて、わたしは覚えてない！」

激情に背を押され、混乱にまみれた頭が生み出した言葉は、あまりに安直で稚拙な　しかし、どこまでの悲痛な咆哮だった。

気づけば強い剣幕とともに、拳が卓を打ち叩いていた。

思い出せない記憶を抱えたまま、思い出すまいと努力しながら、それでも思い出したいと願わずにはいられなかったこの四年間とりについてきた煩悶が、今爆発する。

四年前、わたしは生まれた。それより昔のわたしは、少なくとも今のわたしじゃない。だから捨ててきたのだ。だから霞の向こうに置いてきたんだ。

「体に染みついていてるって！　もともと持っていたものなんかじゃないって！　あんたが知ってることなんて、わたしは一から十までなにも知らないのよ！　これがどんなにつらいのか分かるっていうの！？　ひ、人の・・・人の記憶を勝手に話さないでよ！」

緩慢な動作で1号の頭が持ち上げられる。目から伝った涙の跡を見て、一瞬ひるみかけた心がたちまちオトコに対する根源的な恐怖に支配され、負けるものかと叫び返した。

「お、思い出させないで！　放っておいて！」
違う、1号はなにも悪くない　分かっているも体が止まりそうになかった。

顔を上げたその先に、光の薄くなったうつろな目がふたつ並んでいた。

あのオトコと同じ目だ。生気がこっそり抜け落ちたような瞳。堪えきれず強く下唇をかみしめると、つうと血が一筋おとがいに伝った。

羞恥と悔しさ、そしてそれを上回る情けなさにその場にへなへなと腰が抜けた。

「ごめんなさい」

どうにか絞り出すように、それだけを言った。

「分かったでしょ……今の私は普通じゃない。このままい
ったら、あんたも傷つけちゃうかもしれない……今度は言
葉じゃなくて……は、早く手伝えることだけ教えて。そ
れだけでも、頑張るから」

「分かった。じゃあ無理強いはしないよ」

返事は、やはり憂いにぬれていた。しかしきっぱりとした口調で
1号はつなげる。

「ちょっと出てくる。あっちの方でたまってる男共を外に追っ払う
から、ひとりで食べててくれ。他に店にいるのは女だから大丈夫だ
ろー?」

なんのことを言っているのか、理解したときには1号の姿は目の
前の席から消えていた。耳だけで足音たどると、どうやら奥の男ど
もの方へ向かったようだ。なにかどつと弾けるような笑い声を含ん
だ会話が聞こえたかと思うと、数人の男たちが酔った勢いで飛び出
した大笑とともに、1号に背を押されて店から出ていくのが見えた。
本当に、それだけで胸にとりまいていた圧迫が霧散した。気づけ
ば安堵の吐息が漏れていた。

あまり腹は減っていなかったが、適当なものをつまんだ。栄養を
つけておけ、ということなのだろう。いくつかジャガイモをつぶし
たものなどを、手づかみで口に運ぶと、口内でポロポロと崩れてい
く感触が味覚を包んだ。

1号が再び姿を現したとき、声はまたいつもの朗々としたものへ
と戻っていた。だから、というわけでもないだろうが、不思議とさ
きほどほどの不快感はもうなかった。

「いやー、たまげたね。ちょいと近くの賭場に誘いに行ったんだが、
酒に酔って店で暴れ出したから、早々に引き上げた。やれやれ、醜
いことだな。って、お、結構食べたな。栄養はつけとかなくちゃ
な。これから相当しんどいことになるし」
「しんどい、こと?」

「おうよ。いよいよかの涙石翠鵬に謁見ってわけさ。あそこへの侵入自体は難しくないけどね、その後がタイヘンなのさー」
ひひ、と小さい忍び笑いがその口からこぼれたのが聞こえた。

ミュージズ(29) (後書き)

ミュージズの過去話と思わせておいて1号の話というオチです。って
こんなこと書いていいのかな・・・。

クークス(29)

大公アルファリシュ。

リエインが言うところの、生粋の人外のうちのひとり　と言われる「人間」が、今日の前にいるのだ。当然ながら、相応に武者震いは起こるし、なにより敵の幹部なのである　今この場で不意打ちをしてもおかしくないはずなのに、クークスは一步もその場から動けなかった。

「お母さん……?」

一瞬、それだ誰による発声なのか分からなかった。声質からようやくリエインのものと分かったときには、続けて舌鋒が飛んでいた。「おい！　俺だ、どこ見てやがる！　目をそらすな！　俺を見るお母さん！」

お母さん？

姿形は暗闇に沈んでまるで捉えられないが、彼が必死な形相で叫んでいることは容易に想像がついた。対してアルファリシュは。

「肉斬連刃殿。お怪我は」

絶叫など耳に入っていないがごとく、鋼のような口調で自分にそう尋ねてきたのだ。

「お母さん！」

「大丈夫だ。それより、あんた……」

「それは良きこと。急ぎ、この場を離れよう。あなたの命がこのままでは危うい。こちらで貴男を保護する」

「こちらって……まさか、六稜郭処……?」

呆然とし刀を持ち上げることも忘れて質すと、はい、というきりやかな女声で堅い返答。

「あなたの安全は全て我々が保証する。ご安心を」

二の句が継げずにいると、会話に取り残されていたリエインが悲鳴にも似た言が空を裂いた。

「む、無視するな！ 俺がどれだけお前を捜し続けてきたと思っ

て」
「行こう。母様もお待ちだ」

全身を落雷がめぐったかのような衝撃に見舞われた。本当に、母はあそこにいるのだ。ならば……。

「母さんに、会えるのか？」

答えるつもりはないらしかった。圧倒的な力で腕を捕まされると、軽々と片手だけで引きずられ始める。呆然としながらも、半ば協力的に駆け足を始める。屍のように放心したとおぼしきリエインの傍らを、アルファリシュと共に高速で駆け抜ける。

と。

「ごく密やかで素早い囁きが、微かに耳朶を打った。だが強力な風の音で、内容は把握できなかった。だがそれは、アルファリシュからリエインの耳元へと向けられたものだけのことではかるうじて声で分かった。」

まるで足場が分からない闇を疾風千変で走るといふ苦労も、疑問符がうずまく頭にはほとんど意識されることなかった。リエインの襲撃、大公の登場、そしてどうにかして潜入したいと切に願っていた六稜郭処へ『招待』されるという事態。

なにが起きている？

もう脳内はこればかりである。突破口を開こうと、ひとまず知りたいことを列挙してみた。

「キ・サンはいるのか？」

「いる」

「ウォルガは？」

「不在だ」

「お前は何番目の大公なんだ？」

「七の数を与えられている」

「第五大公っていうのは何者なんだ？」

「半獣の少年だ」

どうやら雑闘衆の幹部であることは間違いないようだった。打てば響くように返答が飛ぶ。

「母さんはどこにいる」

「六稜郭処の森の奥。柱天塔の最上階」

「生きているんだな？」

「健常だ」

「……よかった」

無意識に漏れた安堵の言葉が聞こえたのだろう、強く歯がみする音が併走する彼女の口からこぼれた。

「あくまでもお体は、だが」

もちろんこの女が歯がみしたことも、クークスの頭に疑問符を増やすのに十分な事実だったが、それ以上にその言いぶりの方が遙かに重大事だった。

「どういう意味だ！」

「到着した。五大公の見張りは現在、解かれている」

一発ではねのけられてしまった。意志の固さがうかがえるこの人物から、これ以上聞き出すのも難しいだろう。

両足を地に着いた場所は、やはりまったく見通せなかった。が、アルファリシユが手を引いて導いてくれる。

あ、と思った。

なにか特別な境界を跨いだかのごとく、空気が変わったのを、肌が敏感に感じ取ったのだ。

ここは異界だ。そして、まごう事なき敵地なのだ。ここには少なくともウォルガがいて、キ・サンがいる場所なのだ。

「こつちだ」

相変わらず、強い声音で先導するアルファリシユ。こつなるとほとんど五感が機能していないため、空間が把握できない。

「どこへ行くつもりだ？」

「頭領と面会だ。お話がある」

簡潔な答えに、息を詰めた。頭領、というのはつまりキ・サンだ。と、目の前を行く足音がぴたりと止んだ。慌てて停止すると同時に、扉の退かれる音が。

数歩、つれられて進んだところで、しっかりとした発声がなされた。

「お連れしました」

その声にかぶさるように もう一生聞きたくない時まで感じていた大笑まじりの声が、鼓膜をつらぬいた。

「がははは、来たか！ レーヨンに説教を食らわしていたら、すっかり忘れていたぞ！ こりゃあ歳だなあ、我が輩も！」

圧倒的な大音声に体が竦む。今ここにきて、引き返しようなもない現実というものを露骨に示されたような気がした。

「奥へ」

ひっそりと落とした声に、足が自然と動く。

室内は明かりに満ちていた。部屋の左右に、左右の巨大な蠟に燈火が灯されている。視界がゆっくりと色を取り戻す。

くつきりと、卓の向こうに鎮座する人間の輪郭が浮かび上がった。いや、明かりがなくとも気取らずにはいられなかつたろう。非常識なほどに存在感が漂っているのだ。体自体は細身だ。なのに、まといっている雰囲気尋常でないほど巨大なのだ。理屈などぬきに、とにかくそれは巨漢のまとうべき空気をまとっていたのだ。

「おおお！ ぬし、久々ではないか！ ローウエンで劇的な出会いを果たして以来だな！ 久闊を除す！ む、顔が硬いな！ がはははははははははは！」

「お前……ヘルガベルト、のままか」

「なあにを言っているんだおぬし！ 我が輩はキ・サンだと言っておるだろうが！ ぬしもしやバカか！ 残念だ！」

「い、いや……用件は、なんだ？」

すでに気圧されている。心理的にも、肉体的にも、立場的にも、かるうじてそう返したが、すぐに豪笑にかきけされた。

「がはははははははははは！　そうか、説明していなかったのかアルファリシュ！　口数が少ないのはできの悪い弟だけで充分だ！　うんざりだ！」

「あ、そうだ、ウォルガは……」

「一指系！？　ヤツはとうの昔にクビにしたぞ！？　知らなかったのか！？　がはは、残念か！　仇がいなくて悔しいか！　ん！？　どうだ！」

クビ？　不在というのは永久追放ということか？　おいおい、そりやまたなんで……という疑問もお構いなしに、次々と言葉がつけられていく。

「そんなことは」

「あるだろ！　がははは！　そこに気をつける、つまづくぞ！　アルファリシュ！　床のゴミを掃除してくれ！」

「分かりました」

ゴミ？　と目を下ろした先に　胴から体が分かれ、血の海に沈む少年が横たわっていた。むごたらしいというより、ここまで力任せに引き裂いたかのように思える屍体は、ほとんど非現実的なものと思えなかった。

少年の頭から獣の耳が突き出ているのを見て取り、クークスは思わず「第五大公？」と呟いていた。

「うん！？　そうだレーヨンだ！　こちらの命令を聞かんでぬしを襲ったんでな！　ちよいと折檻したんだが、まるで手応えがないな！　最近の若人はとかくもろい！　がはは、ちよいと力を込めたらこのザマだ！　アルファリシュ、兄の方はもうダメだ！　弟をすぐに出してやれ！」

「命令つて……」

「失礼」

アルファリシュが慣れたような仕草ってその綺麗に真つ二つとなつた屍を抱えて、退室する。

「話が逸れたな！ で、話はなんだ！」

「よ、呼び出したのはあんただろう」

「む！？ がははははは、そうだったそうだった！」

ひとしきり笑い尽くし、ふとキ・サンは天井へと向けていた顔を正面に戻した。目から愉快そうな色が、少し抜け落ちたようだ。

「ぬし、ご母堂がここにおられることは承知しているだろう！？」

唐突な切り出しに、眉根を寄せて、

「ああ」

「その探索には馬の牙を使った、と！ だがその頭領にはベルジャツクとつながっており、共に裏の山に潜伏しているとき襲われたな！」

「よく……分かるな」

「裏山なんぞ我が輩たちの庭だ！ まあ、それは災難だったなというお話だ！ アルファリシュを送ってなければぬしは今頃首チョンパだぞ！？」

またすぐにおかしそうな口調になるが、目は真剣だ。

「とまあ、ここまで少し弾けてみせたが！」

少し？

「真面目な話をすると、だ！ ぬしには死なれては困るのだ！ 死んでもかまわぬのならあのまま放っておく！ 知ってるだろうがあの馬の牙の若造、ぬしより剣の扱いは巧いぞ！」

「それは分かるよ。でも、どうして俺を助けたんだ」

「死なれては困るからと言つたろうに！ そのままの意味だ、だから三度も助けた！ ぬし、まさか我が輩が宿屋で勧誘したことを忘れたか！ そのあとゴタゴタがあつてすっかり忘却の彼方にだったか、ぬしがこの近辺に潜んでいると、まあこれは癪だがレーヨンの勝手な行動で発覚してだ！ 我が輩はぬしが襲われると聞いたから、急いでそつちの男みたいな女を助けに向かわせたのだ！ そう

「だろっアルファリシュ！」

「はっ」

振り返ると、いつの間にかまたそこに甲冑姿の第七大公が立っていた。正面からようやくよく見ることが叶ったが、顔全体を覆った兜のせいで表情は何えなかった。扉の開閉音などは、目の前の男の高らかな声にかき消されただろう。

いや。

そんなことはどうでもいい。問題は、この男の言だ。自分を助けてようとした？ 感情としては、三度も。一度目は宿屋によるヘルガベルトの襲撃を、間接的にはあるが失敗に導いて。二度目は、「命令を聞か」なかった第五大公を止め、挙げ句折檻までして。三度目はリエインの襲撃から。そしてキ・サンによると、後者の行動はこちらの想像通り『声』の指示によるもの。

すると穢多の襲撃をやっていたウォルガが、殺す対象からずれていた自分を殺そうとしていたから、折檻代わりに追放したのか？
……待て、結論を急ぐな。

「お前、『声』、ベルジャックとはどういう関係なんだ？」

「友だちだ！ あるときは敵だがな！ 実に軍海らしい間柄だろう！」

「今は友か？ 敵か？」

「敵だ！」

自分を『声』の魔の手から救ったと言う以上、確かにそういうことになるだろう。

「じゃ、じゃあ」

「我が輩とベルジャックひいてはサリヴァとご母堂の三角関係だな！ ちゃんとぬしの顔に書いてあるぞ！？」

機先を制され、仕方なく頷くと、うむうむともったいぶったように細い顎が上下する。

机へ足を投げ出した姿勢で上半身を起こすと、卓上をバンバンとたたき、

「まあ気持ちは分かる！　しかしそのことの説明について、今我が輩はできない！　不信感もあるだろうが、まだその時期ではないとしか言えんのだ！」

疑惑より困惑が勝る。その三者の思惑については当然知っておきたいが、そ

「残念だが今は無理だ！　こちらも時機を見てすぐに会えるように計らえるが！」

半ば予想していた科白だったが、やはり落胆した表情は隠せなかった。

「そう消沈するな！　心身共に無事であることは我が輩が保証する！　伝言も今は勘弁してくれ！」

当分は入島の疲れもあるだろうし、ゆっくりしていくがいけ！　いろいろと機密のこともあるからうろろされても困るが、問題ないところならアルファリシユにでも案内させるぞ！？　望みなら、他の大公に会わせてやってもいい！」

そこで、キ・サンはいつそう厚みの増した声を張り上げ、なにかを強調するようにもう一度卓を叩いた。

「ともかくだ！　ぬしはここにいる限り安心安全ということを中心に留めておいてほしい！　ベルジャックもここまでは手出しできまいし、軍閥の方の仕事で大わらわだろうからな！　落ち着き次第、また会おうぞ！　そして返事を聞かせてくれ！」

「返事って………なんの？」

「む！？　決まっておろう、ぬしが雑闘衆の第三位　第二大公の座に収まるかどうかという提案への返事だ！　言うてなかったか！？」

聞いてねえよ。

クークス(29) (後書き)

近況報告にも書いたとおり、クライズポットは一時中断させていただきます(理由らしきこともそちらに書いています)。十月の半ば頃からリエイン主人公の番外編<一幕の雪夜 North Princes and East Crown>を連載します。なお、クライズポットはそちらの番外編が一旦落ちついたところでまた再開します。

「一旦、そこで止まってくれ」

冷やかな石造りの廊下に1号の声が響いた。

アツバーズ牢宮内の地下三階である。建物自体への侵入は、大國の牢と思えぬほどあっさりと達成してしまっただが、1号曰く、内通者の手助けもあったそうだし、なかの回廊がかなり入り組んだ造りをしており、小さな炬火以外に光源もなかったため、なかなか進みがたかった。それでもどうにか下へ下へと伸びる階段を発見して目的の階にたどりついたのだ。

ミューズにとってこの暗さは「男」である1号の姿が見えにくくなるぶんありがたかったが、視界の悪さからつまずいたりもした。ただ目が慣れてくるにつれ、左右の壁に規則的に鉄扉があるのはとらえられるようになった。

「牢屋つてどこもこんなものなの？ ジメジメしてていやな空気だけど」

「ここは重要な犯罪人つかまえてるからなあ。牢というより掃きだめって感じだし、ろくな待遇じゃないのは確かだぜ」

1号はよった系の先についた炎をちよつと先に突きだして、

「見えるか？ 地下の一階、二階にあった扉がなくなって、突き当たりだけになってるだろ？ あそこさ、俺らの目的の人が住まう部屋は」

よく見えなかったが歩み寄ると、ようやく巨大な扉があるのが視認できた。扉の上半分に鉄格子が取り付けられ、内部からわずか灯がこぼれている。

「涙石翠鵬」

鉄格子つきの窓から中をのぞき込む1号が、少し緊張をみなぎらせた囁きを発した。

「俺です。分かりますか？」

身振りだけで返事はなされたらしい、なにかを了解したように首肯した1号が後ろへ飛び退き、床に火のついた糸を吹き消したと思ふと。

次の瞬間、その右手が細剣に触れ、扉の脇にいくつかついていた鍵穴が一斉に吹き飛んでいた。凄愴な速度で繰り出された突き技だ、と分かったときには、既に少年は扉を引き開けていた。

ここまで楽に入れるなら、わたし要らないじゃない　と八つ当たりのごとく胸がささくれ立つ。ひとまず足を動かして、扉の向こうに広がる穴蔵へと首をつっこむ。蝋燭を回収した1号の背中が前方に見える。と、ふつという音とともに明かりは吹き消されたようだった。

真つ暗でよく分からないが、どうやら牢にしてはかなり広めのようだ。半壊した扉を閉める。

だがたちまち辺りが色を取り戻す。壁にかかる炬火のひとつに、炎が点されたのだ。1号ではない、あれは……女性？

ミュージズの考えを裏打ちするように、ごく柔らかな女声が発せられた。

「なんだい、荒っぽいにい。鍵見つけてくるんじゃないのかい？」

「あいにくそんな暇ありませんでしたよ。いいでしょ、どうせ脱獄するんだし」

「ふひひ、それもそうだねえ」

地下牢の中が見渡せる段になって、再び軽い衝撃が体を襲った。

なに、ここ？

地下牢。そんな陰険な響きなどどこ吹く風、室内にあったのは、どこの貴族の部屋かと言わんばかりの寝台やら暖炉などである。地べたも、回廊の割れた硬質材などではなくきちんと整えられている。本当にどこかの貴族の館にでも迷いこんだような思いだった。

その感傷は、一定以上の痛みと苦しさをミュージズにもたらすことになった。もちろんあの男の部屋が思い描かれたのだ。しかし万力

でそれを抑え込んだとき、酒場で発されたのと寸分違わぬ抑揚のない声が響き渡った。

「涙石翠鵬、昨夜お話ししたとおりです。二年前のように、半島へのご同行を願えますか？」

と、思いきや会話のほうはさっそく本題に入ったらしい。一番近い松明の炎をながめる横顔の主こそ、声をかけた相手　　涙石翠鵬
だろう。

彫りの深い美貌が、ちろちろと瞬く火明かりの手前に浮かび上がっていた。

すつと通った鼻梁。太めの凜々しい眉の下で、切れ長の目が儂げに細められている。あでやかに笑みを描く唇が、自分にはない艶冶の色香が匂い立たせている。

うわっ、綺麗。本当にこれ、人間の顔？

あまりにできすぎた見目に、そんな感想を抱いていた、そのとき。

ほっそりとした首が、こちらへゆったりとした仕草で回った。

真つ正面から注視されるのに、ドギマギしながら、なにか言おうと口を開きかけたとき。

「うっひゃっひゃっひゃあ！　女の子じゃないかねえ！」

耳をつんざくほどの一声とともに、びゅんと風が吹き、目前にはいつの間にか涙石翠鵬の顔があった。首に手を回しめられた、と意識したときにはぎゅうと豊満な胸に自分の体が埋められていた後のことだった。

「涙石翠鵬、そちらが肉斬連刃と俺の友人です」

「かわいいねえ、かわいいねえ！　二本でくくってるんだ、へーん。似合ってる似合ってる。あ、でも一本でもかわいいかも知れないに
い」

ぬつと後ろへ回った彼女により、紐が解かれ長い銀髪がすべり落ちる。手早くまとめて、今度は宣言通り紐で一本結びにされる。

「おお、じゃ三つ編み行ってみようかねえ！　うっひゃっひゃー！」

「あ、あのう……」

なにがなにやら、なんとかそれだけ言葉を絞り出すも、涙石翠鵬の暴走は止まらない。

「三つ編みは少し野暮ったいかい？　じゃ、やっぱに二本で。でも少し尾っぽを長くしておこうかねえ」

「涙石翠鵬……それ終わったら、話聞いてくださいよ」

「一ヶ月くらい待つことになるけどいいかねえ？」

「よくないです」

「ええー。ま、仕方ない。おお、カワイカワイ」

にゅつとまた顔が鼻先に戻ってくる。

「少し肌が汚れてるのが惜しいねえ。あっちの綺麗な水で洗っておいでえ！」

「は、はあ……」

「それもそっか、ねーちゃん。いい機会だ。少し沐浴でもしたらいい」

1号までそんなことを言う始末だった。確かにありがたい申し出ではあったが……。ちらちらと1号の方へ目をやっていたのに気づいたのだろう、再び大声で、

「大丈夫だねえ、かわいこちゃん。あなたが沐浴している間に私とあっちのお兄さんは、あっちでいいことしてるから。絶対に覗かせやしないねえ」

愉快そうに顎で示されたさきにあるのは、これまた目を見張るほど絢爛とした天蓋つきの寝台。

「涙石翠鵬、止めてください。その手の冗談は今はないです」

急いで険しげな声が割って入ったが、言い振りのおかしさにミューズは軽く手を振った。

「大丈夫。それじゃ、お言葉に甘えて」

数刻後。沐浴中からいくつか会話が飛び交っているのもあんまり気にならず、全身をくまなく清めたミューズは、久々にさっぱりと

した表情で、壁に仕切られた沐浴場から出てきた。ちなみにこの壁は、涙石翠鵬が急ごしらえで作った木造のできあいのものだ。

ミュージズが衣服を着直して、外に出ると部屋の隅っこにあぐらを掻いていたらしい1号の姿が、一瞬だけ視界に収まった。慣れたかと思っていたが、反射的ににうつむいてしまう。

「涙石翠鵬。繰り返しますが、半島への随行をお願いしたいと」

「あ、お菓子あるねえ。食べる？」

「こらあ、聞けえ！」

硬い声もどこへやら、1号はほとんど剣を抜かんばかりの勢いになる。その様子を見て、ケタケタとまた笑う涙石翠鵬。半笑い、半泣き顔のような顔になるミュージズ。

「あ、あの。質問してもいいですか？」

「はいどうぞお、カワイ子ちゃん？」

「ここって、本当に地下牢なんですか？」

看過できぬ疑問を口に出すと、にへへへつと笑む涙石翠鵬の隣で、困り切ったように1号が代わりに答えた。

「この人の異常さがよく分かるだろー？ この人はさ、この牢宮に閉じ込められているんじゃない。最高の待遇と引き替えに、『閉じ込めさせてやってる』んだよー」

「……意味分からないんだけど」

「だよな。ま、いずれ分かる。で、三度目です。いや四度目か。涙石翠鵬、半島へ」

「君とそっちのカワイ子ちゃん。二人で試験するのかわいい？」

言い草こそ剽げたものだったが、続く1号の声色が難しいものになったのを見て、ミュージズは緊張を張り巡らせた。

「俺と、というよりはコイツが主役になりますよ。少なくとも、俺は二年経つてもあなたが与えてくれた『教訓』を忘れたことはありませんから」

「りょうかい。そうと決まれば、さっさとこんな辛気くさいところ出ようかねえ。いんやあ、まったくそろそろ外の空気を吸いたい

「思ってたところだからねえ」

「言うや、1号とミューズの手を握り、ずいずいと扉へ向けて歩き出す。半ば引きずられながらあんぐりと呆けていると、」

「涙石翠鵬。あなたの權は？」

「それだけは取られたねえ。仕方ないけど、すぐに取り戻すよん」

「場所は分かりますか？ お手伝いしますよ」

「うっひゃっひゃ、心配してくれるのぉ？ 君はさっさとあそこへ行っつてな」

「分かりました」

「なにを分かったのだらう。」

来た回廊を、やはり1号が先頭で戻ることになる。当初よりオトコへの衝動に近い忌避感はずっと静まっていたが、根本的な恐怖感はずいぶん減っていたので、帰りもずいぶん距離を取って歩き続けた。

「………帰り、大丈夫なの？」

「えーっ？ 大丈夫じゃねーの？ っていうか、涙石翠鵬が出るって言うてるから何人か兵が来たくらいじゃ、止められねえだろうな。なんせあの人は、いるだけでこの国の脅威になるってことで、寡頭制取り仕切るやんごとなきお方が頭を下げまくって、こんなところに幽閉というカタチで身を置いてもらった女性だからな」

「強いなの？」

「桁違いに。あの人はな、寶業六十四般のうちの六十三を会得する猛者だぜ？」

あと一個くらい頑張ればいいのに。

「言っておくが、まともに戦っても単体じゃまず俺でも勝てねー。」

「前回俺とアイツ 肉斬連刃が半島行くときも『試験』に付き合わされたが、まあいろいろと手玉に取られたよ」

「ふうん………勝てなかったの？」

「勝つ勝たないっていうのとはちよつと違うんだがなー。合格、不合格っていうか。ま、普通に戦闘すりゃ勝ち目はないだろーね」

「そんなに強いのに……じゃあ、涙石翠鵬とムラサキさんって、どっちが強い？」

「ムラサキさん？ 誰だよそれ」

「えーと、紫皇帝だっけ、本名？ 言っただけ、わたしあの人に稽古してもらったのよ、名無しが半島に行った後だけ」

呑気そうに頭に手を回していた1号の声が、肝を潰されたように引きつったものへと変じていったのを、聞き逃すことはなかった。驚いて口に手を当てる。

「まさか悪い人だったの？ 別になにもされてないけど？」

「なにもされてない？ 嘘だろ？ 紫皇帝だつて？ なんだつてねーちゃん、あんな怪物と会って」

「会って？」

「……い、いやー、うらやましーな」

明らかかな作り笑みとともに、1号は話題を流してみせた。

「滅多に会えないんだぜー？ 生きてるかどうかすら最近聞かないしよー、年齢もたぶん九十行ってるって話だし」

「九十!？」

「そうそう。あの人くらいだろ、六十四般を全部攻略してる人間なんて。今、人類限定で大陸の三傑選ぶなら、まず最初に指を屈するべき人だろうよー。次に盗壊士、そして……」

涙石翠鵬ってところか。って、ねーちゃんどっちも会ってるじゃん。すげーな、うらやましー」

「そ、そう？」

怯えも忘れてぼつと胸が温かくなり、ちよつと嬉しい気分になる。このあたりは我ながら単純な性格だと思った。

だが一方で、1号が慌てて話題を流した理由がつかめない。さっき盗壊士 誰だろう？ と涙石翠鵬の間に幾分間があったが、なにかそれと関係あるのだろうか。

クークス(30)

初めの願い通り、こうして母のいる場所にたどり着いたといっても、当然ながらクークスの気持ちはいっこうに晴れなかった。

あてがわれた部屋は、宮殿のような部屋の中の一角にあるものらしかった。よく整った寝台の上で、消沈した心を引きずりながら短い仮眠を取り、目が覚めたときには幾分か疲労も抜け落ちているようだった。鎧戸を開けていると、背後で扉が開く音がした。

「私が世話役となる。第七大公アルフアリシュだ」

振り返ると、相変わらず可憐な女声に似つかわしくない、男のようなしゃべり方だった。しかも全身の鎧もそのまま、顔を見ることができない。……もしかして男か？

アルフアリシュの手には、水のたまった桶が握られていた。それを床に置くのを眺めつつ、

「よろしく……なにか用か？」

「朝餉だ。今朝は頭領の提案で、大公級は全員そろって食す、という事になった。どうするか」

どうもなにも、断れる話ではなさそうだ。無言で頷くと、アルフアリシュは案内するから顔だけ洗ってくれ、と頼んだ。

指示通り冷水に手を突っ込んで、顔をぬらす。そこで、ずいぶん泥がこびりついていることに気づいた。苦笑しつつ、再度顔をぬぐって立ち上がると、渡された手ぬぐいでしずくをすべて払い落とした。

部屋を出ると、次第に体に緊張に近いものが生じているのに気がついた。頭では分かっていたが、すなわち七人の雑闘衆の幹部、頭領たちの集う場に、自分は向かっているのだ。

だが一方で、少なくともそこで殺されることもないだろう、とクークスは踏んでいた。昨夜のキ・サンの言葉通り、殺すつもりならリエインに襲われるのを助けることもないだろうし、昨晚の部屋で瞬殺されてもおかしくないし、今こうして歩いている間に暗殺でもなんでもすればいい。

「いろいろと頭を巡ってはおられるだろうが、気を落ちつかせることを勧める」

前に行くアルファリシュが、思いついたように声を発した。足を止めると、上半身だけをこちらへ反転させた。

「あなたに、危険はない」

張り詰めたような声調が、かなり和らいだ言い振りに呆気に取られつつ、バイザーの奥から注視してくる緑眼を見返した。

「そのことをよく胸に留めていてほしい」

釈然としないままに頷くと、アルファリシュは歩みを再開した。

薄暗い造りの、冷やかな廊下が途切れ、わっと外の光が目を刺した。

「中庭？」

「この渡り廊下を通るのが、食堂には一番近い」

宮殿という割には、ずいぶん小さな造りだと思った。外壁のあちこちがひび割れ、ツタが這い回っている。

廊下を渡り終え、また建物の中へ。そこから左に折れた突き当たりに、鉄扉があった。

アルファリシュが歩を止める。自然とクークスの喉がうめくような音を発した。

カッ、カッ、カッ。

叩かれたノッカーがいびつな音を立てた。続いて鉄のきしむ音に連動して、鉄灰色の扉にゆっくりと切れ間が生まれていった。

意識と目は、すぐさま長卓の前に座すジンガイたちに引き寄せられた。

左から手前へ視線を落としていく。

全身が黒い肌に覆われ、くちばしのような口吻を持つ男、一つ席が空いて、鮮やかな黄金の巻き毛をした女。ぶ厚い体毛に覆われた老年者。卓の右側には、獣のごとき耳が突き出た少年、しっぽを垂らして額から角を二本生やした幼女。その隣に空席があり、もつとも手前に座るのが、キ・サンであった。

「がははは！ 待ちかねたぞ、空腹ここに極まれり！ ぬしのそっちの鳥人間と黄金女の間だ！」

気づけばアルファリシユは右に回り込んで、キ・サンの隣の空席に身を置いていた。慌てて言われた座席についた。

誰も動かない。キ・サン以外は、まるでクークスのことなど存在しないかのごとく、眉ひとつ動かす気配がなかった。

なんとというか 異様に重苦しい空気がただよっている。

そんなことを意に介していないのか、空気そのものをぶちこわすようにキ・サンがいつそう大声をあげた。

「すまんかったなあ！ ぬしを一度、これから仲間になる奴らと引き合わせて置く必要があったのだ！ どうだ！ ここで仲良く飯を食いつつ自己紹介といこうではないか！ そう思うだろう、ぬしたち！」

不動。

「……いや、誰か反応しろよ。」

「よし、異議はないな！ では鳥人間、ぬしからだ！ 名前以外に好きな食べ物とか、好きな言葉とか、尊敬する人間とか！ じゃんじゃん言っただけ交流を深めようではないか！ ささっ！」

へらへらとさされた指は、左に座る長身の男に向けられていた。

「私はケツペルヌルボ」

嘴形の口が小さく開き、よく通る声をはき出した。

「神に仕える第一の仕者だ」

「神？」

「我が輩のことだ！ そうだろう、鳥！」

そんなわけないだろ、と突っ込みたくもなったが、
「下賤なる私があなたの事について述べることをお許し下さい、神よ。」

如何にも、神はそこにおられる、神々しきお方だ」

「……はあ」

それで終わりらしかった。また重い空気につつまれる場を切り裂いたのは、右から響いた高い女声だった。

「次はわたくしの番ですね」

「そうだ、باشつと言え！」

「わたくしはペルペリア。あなたがペペと呼びたいのなら、そう呼ぶことに吝かではありませんよ」

こちらも前を向いたまま、そんなことを言う。誰に紹介しているのかまるで分からない。

などと言っていると、三人目。クマのような毛をびっしりと蓄えた男だった。第一大公と並び、この場でもっともヒトの形から離れている。

「余はフォレーシオエン・ウラ・レメオツウパウアゼ・カルエド・バアアスレゲヘラ・ミシユティツウパンガ」

「は？」

「グンツの長だ」

牙のぞく口が閉ざされ、地のそこから沸き立つような低い声は止まった。

「クリヤ。五」

左斜め前。少年がふてくされたがとき口調で、それだけ言った。「次はあっしか。ミレっていつの。よっろしくう。六番ね」

クークスより頭ふたつ分は小さいであろう少女が、向かいから親指を立てて笑った。

「アルファリシュ。第七の座だ」

「そして我が輩がキ・サンだあ！ よし、最後はباشつと決めるよ肉斬連刃！」

幾分逡巡をしてから、クークス言った。

「肉斬連刃　クークスだ。第二位ってことでいいの？」

キ・サンが大声で賛同する他、大公連中は口を開こうともしなかった。

部屋を満たした硬直した空気は、食事が終わるまで溶け落ちそうになかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1914s/>

クラインズポット -NEPTUNE-

2012年1月12日00時56分発行